明治学院歴史資料館資料集

第8集

—朝鮮半島出身留学生から見た
日本と明治学院—

明治学院歴史資料館

文　一平

李　光洙

白　南薰

朱　耀翰

金　東仁

明治学院歴史資料館資料集　第八集

明治学院歴史資料館

まえがき

明治学院歴史資料館館長　辻　泰一郎

本書は、佐藤飛文（たかふみ）氏の翻訳・解説になる『朝鮮半島出身留学生から見た日本と明治学院』（歴史資料館資料集第八集）である。

本書巻末の岡村淑美氏の「東アジア圏留学生数の推移（普通学部・中学部）【グラフ】」によれば、明治学院普通学部（後に中学部となる）に在籍した朝鮮人留学生は、一九〇五年に初出し、留学生グループのなかの中心を占めて一九二〇年にピークを迎え、その後は入れ替わって台湾からの留学生が主流を占め一九三七年にピークを迎えていることが分かる（「東アジア圏留学生名簿（表）」では一八八六年に初出）。

本書で取り上げられた人物は全部で五人である。それぞれにつき佐藤飛文氏による解説が付されており、私のまえがきもそれによるところが大きい。すなわち、一九〇五年に来日し一九〇七年に明治学院普通学部三年生に編入した文一平（ムンイルピョン）（一八八八～一九三九）。一九〇五年に来日し同じく一九〇七年普通学部三年生に編入した李光洙（イグァンス）（一八九二～一九五〇？）は、同学年生として学院で過ごし一九一〇年に卒業。帰国して両名とも教師となり、ともに後に再渡日して早稲田大学に学び、後年それぞれ、朝鮮日報の編集ないし経営にも携わった。文は教育者・歴史学者として、また、李は、一九一七年早稲田大学在学中「無情」によって朝鮮最初の本格的近代小説を書き、朝鮮近代文学の父として知られる人物である。

白南薫（ペクナムン）（一八八五～一九六七）は、一九〇九年二四歳のとき渡日、普通学部二年生に編入し、一三年に卒業。更に早稲田大学政経学部を一七年に卒業し、二三年に帰国して幾つかの学校の校長を務めて、植民地支配からの解放後は政治家として活躍した人物である。

朱耀翰（チュヨハン）（一九〇〇～一九七九）と金東仁（キムゼンイン）（一九〇〇～一九五一）とは、共にピョンヤンの小学校の同窓で、朱が

一九一二年に宣教師の父と渡日し一三年に普通学部に入学、金は一四年に渡日して翌一五年に中学部二年生に編入し、朱は一八年に卒業して一高に進み、金は中学部を中退し美術学校に転じた。一九一九年に朱と金はその他三名の仲間とともに朝鮮語の文芸誌『創造』を発刊し（後に李光洙も加わる）、朱は「観燈会」という詩を、金は「弱き者の哀しみ」を書き、それぞれ近代自由詩の詩人として、また、小説家として名をなすことになる（韓国における権威ある文学賞「東仁文学賞」は彼に因んで死後に設けられた）。

彼らが東京にやってきた時代、日本と韓国との関係は大きな曲がり角に立っていた。一九〇四年に日韓議定書が調印された後、一九〇七年までの間に三回の日韓協約が締結され、最終的に一九一〇年に日本は韓国を併合し、朝鮮半島は日本の植民地支配の下に置かれることになった。しかし祖国の独立を求める機運は米大統領ウィルソンの民族自決の提唱にも促されて一九一九年二月八日の在東京留学生たちによる独立宣言書の発表や三・一独立運動が引き起こされ、上海では李承晩らによる大韓民国臨時政府が樹立されるなど、独立への決定的な一歩が踏み切られた。

本資料集では、まず文一平について「私の東京留学時代」（資料1）と「私の半生」（資料2）が収められ、留学生の全般的な状況と氏の交遊関係、および、明治学院時代と帰国後の教員時代と再渡日して早稲田で学んだ日々がユーモラスなエピソードも加えて懐かしげに描かれている。

文と四歳年下の同学年生であった李光洙については、「私の少年時代―十八歳の少年が東京で書いた日記」（資料3）、十一歳で両親を失った孤独な少年文吉の同じく孤独な少年操への恋慕の気持ちを描いた処女作の短編「愛か」（資料4）、普通学部五年時の「『富の日本』掲載作文」（資料5）の三つの資料が収められており、日々の出来事と並んで率直に心中が語られた日記のなかで、日欧の様々な小説を読破していく様子、観劇や作品作成が綴られて、明治学院を舞台に異国に学ぶ多感で懊悩するひとりの若者の精神世界が記録され、李の精神形成を知る上でも意義深い。

朝鮮人留学生の回覧雑誌である『新韓自由鐘』（大韓少年会発行・韓国内部警務局訳）第一巻第三号が（資料6）として挙げられているのは、李が第二号までの編集に関わっていたことと李の「旅の雑感」や送別会記録が掲載されていることと関係しているが、茎がリボンで結ばれて輪状にされた二本の花枝のなかに水兵が縁の欠けた鐘を撥で打ち鳴らそうとしている図柄の表紙からも日韓併合という政治的に緊迫した時期（表紙には印影とも見える極秘の表示も読み取れる）の少年留学生たちの希求するものが浮かび上がってくる。

白南薫については、「私の一生」（資料7）が収められ、クリスチャンで教師をしていた白が向学の志を持って経済

的援助を得て二四歳で東京留学を果たし、日本語もわからぬまま明治学院普通学部二年次に編入し、多大な努力で優秀な成績を挙げ続けたこと、学費の支援断絶に際し宣教師ホフソンマー（英語担当）とさらにオルトマンス博士（神学部教授）の援助にも助けられ、この関係が早稲田大学進学後も継続したこと、および、韓国人留学生のための長監連合教会の創立（一九一二年）、親睦団体である学友会の結成（一九一二年）、在日本東京朝鮮基督教青年会幹事就任（一九一六年）、米大統領ウィルソンの十四カ条に掲げられた民族自決の原則に刺激を受けて一九一九年二月八日基督教青年会館ホールで開催された学友会総会の席上、独立宣言書（その起草には李光洙が関わった）の朗読に至った経緯とそれに関する出版法違反事件の裁判準備、特別に許可された服役者たち仲間との日本語でのクリスマス典礼の様子などが印象深く語られている。

朱耀翰については、自伝「二十世紀元年生まれ」（資料8）、「五十年の今」（資料9）、「朱耀翰日本語作品集」（資料10）の三編が収められており、上記自伝のなかで、東京留学から普通学部入学（一九一三年）、普通学部時代の生活、純文芸誌『創造』の創刊事情、一高入学と寮生活、三・一運動の挫折のなかでの上海行、上海での活動が回想されている一方、「日本語作品集」には一九一三年の普通学部一年生の作文から主に一九一六年から一九一九年までの透明感と明るさとある種の憂愁を帯びた多くの自由詩が収められている。

金東仁については、自伝「文壇三十年の足跡」（資料11）と中学部二年生時の白金台の下宿生活における片思いの光景を題材とする自伝的小説「女人」（資料12）の二編が収められている。一九一八年一二月二五日の青年会館でのクリスマス祝賀集会―「三・一独立運動の種がその晩胚胎した」―のあとで金と朱の間で同人誌の発刊が語り合われ『創造』が創刊された経緯のところから再録されている上記自伝において、小説用語に関し純口語体化と過去形の採択、三人称単数形の表現やその他の表現様式の工夫における苦労が語られ、三・一運動のさなかの檄文作成の廉で逮捕、有罪判決を受けた話を挟んで、小説家への道程が中学生時代の回想のなかで生き生きと説明されている。

朱耀翰と金東仁はともに朝鮮の近代文学にひとつの新しい時代を切り開いていった人物と言って差し支えないと思われるが、その出発点の一つは、朱の場合は、中学部時代に受けた川路柳虹による作詩の指導のほか、自身が指摘しているように、「世界文学全集をはじめ、文学書籍を手当たり次第に買い入れ」たとされる金の蔵書（もちろんそれだけではないだろうが）を読みふけり、ロシア人作家を耽読し、イプセン、モーパッサン、ゾラを読み、バイロン詩集、永井荷風や、上田敏、与謝野鉄幹の翻訳詩集を通じて、ベルレーヌ、マラルメ、バレリーやベル・アーレンを愛唱し

たという経験にあったように思われるし、金の場合は、自身の説明によれば、浅草通いの映画の探偵劇から探偵小説を経て、「少年文学文庫」七巻の読破、朱との交遊の復活と文学への情熱の高まり、島崎藤村を生んだ明治学院の伝統のなかでの回覧雑誌への小説の投稿、トルストイへの人格的な敬慕が文芸への道の里程標になっている。

これらのことから湧き上がってくる疑問は、こうした若い朝鮮人留学生にとって明治学院とは何であったのかということである。本資料集から、明治学院が朝鮮人留学生にも広く門戸を開きゆったりとした雰囲気のなかでキリスト教にもとづく自由でコスモポリタンな人格教育を行って彼らの人格形成に大きな影響を与えたのではないか、という想像が私には浮かび上がってくる。一九六七年、明治学院同窓会の韓国支部長として、九〇周年式典に参加した朱耀翰が、五〇年ぶりの母校のなかに、変わらざる学院の精神を見出し、先人の韓国人留学生たち、今なお国作りに身をささげている韓国人同窓の身構えには「謙虚と真剣を兼ねた、明治学院だけが持って居る伝統」がある、と指摘している（「五十年の今」）のは、明治学院の自己確認の意味でもとても示唆的である。

「朝鮮半島出身留学生から見た日本と明治学院」と題する本資料集が、日本と韓国・朝鮮の歴史の相互理解に役立つものとされ、これを機縁にさらに新たな研究が生まれてくるとするならば、そしてまた、人的交流の輪が広がるとすれば、これに優る悦びはない。

本資料集のために、転載の許可を与えて下さった関係各位に対してこの場を借りて深甚なる感謝の意を表したい。転載の許可なくして本資料集の意義ある出版も叶わなかったからである。

最後に、本資料集の翻訳・編集と人物や作品の解説を行った明治学院中学校・明治学院東村山高等学校教諭の佐藤飛文氏、および、留学生名簿の作成と解説をして下さった明治学院高等学校教諭の岡村淑美氏、ならびに、資料集の発行のために事務や校正の労をとって下さった歴史資料館の小杉義信氏と稲垣昌芳氏に、館長として感謝とお礼を申し上げたい。

目次

まえがき
目次・凡例
朝鮮半島関連地図
資料1　文一平著『私の東京留学時代』……佐藤　飛文（たかふみ）訳　1
資料2　文一平著『私の半生』……佐藤　飛文　訳　6
解　説　文一平について……佐藤　飛文　11
資料3　李光洙著　私の少年時代―十八歳の少年が東京で書いた日記……佐藤　飛文　訳　13
資料4　愛か……李　光洙（李　宝鏡）著　24
資料5　『富の日本』掲載作文……李　光洙（李　宝鏡）著　30
解　説　李光洙について……佐藤　飛文　31
資料6　『新韓自由鐘』第壱巻第三号……大韓少年会発行・韓国内部警務局　訳　33
解　説　『新韓自由鐘』について……佐藤　飛文　77
資料7　白南薫著『私の一生』……佐藤　飛文　訳　79

解　説　白南薫について……佐藤　飛文　113
資料8　朱耀翰著『二十世紀元年生まれ』……115
資料9　朱耀翰著『五十年の今』……129
資料10　朱耀翰日本語作品集……130
解　説　朱耀翰について……佐藤　飛文　160
資料11　金東仁著『文壇三十年の足跡』……佐藤　飛文　訳　163
資料12　金東仁著『女人』……佐藤　飛文　訳　177
解　説　金東仁について……佐藤　飛文　187
解　説　東アジア圏留学生名簿……岡村　淑美　(13)
資　料　明治学院普通学部・中学部・神学部　東アジア圏留学生名簿……(1)

凡　例

1. 原文になく翻訳上補足した箇所については〔　〕で記した。
2. 原文で著者が挿入した箇所については（　）で記した。
3. 翻訳にあたっては、なるべく原意に近い日本語を心懸けたが、一部日本語の表現になじまない部分がある事をご了承いただきたい。
4. 「資料」に出てくる言葉の中には、現在から見ると不穏当と思われる表現があるが、その時代には朝鮮で使用されていた言葉であること、また、訳出にあっては原意の改変に当たるため、あえてそのまま残すことにした。
5. 「資料10」について、一部の漢字を旧字体から新字体にあらためた。また、ルビは読み方に注意を要するもののみとした。
6. 明らかに誤りと思われる箇所はママを付した。

朝鮮半島関連地図

咸鏡北道
清津
恵山
両江道
江界
慈江道
鎮州
新義州
亀岩浦
平安北道
定州
咸鏡南道
咸興
平安南道
平城
平壌
元山
鎮南浦
殷栗
安岳
黄海北道
黄海南道
江原道(北)
軍事境界線
開城
春川
ソウル
仁川
水原
江原道(南)
京畿道
忠清北道
天安
清州
忠清南道
大田
慶尚北道
全州
全羅北道
大邱
慶州
光州
慶尚南道
全羅南道
晋州
釜山
済州道

（資料1）

私の東京留学時代

文一平（ムン イルピョン）

朝鮮人最初の留学生

このような題目には私以外にも適任者が多くいると思うのだが、なぜ編集者が私に依頼したのだろうか。首をかしげながらも、一つ書いてみようと思う。

私が一介の留学生として東京に渡って行ったのは、ちょうど日露戦争が終わった明治三十八年（一九〇五年）の春だった。

ところで、ここで私が自分の話をする前に、まず朝鮮人留学生として最初に東京へ渡ったのは誰なのかを考察してみたい。

高宗十八年（辛酉・一八八一年）に朴定陽、魚允中ら〔紳士遊覧団〕の随行員として日本に渡った人びとの中で、のちに東京に留まり勉強することになった者たちが朝鮮人留学生の嚆矢と言えなくもないが、愈吉濬[1]氏、尹致昊[2]氏がまさにそうである。

尹致昊氏は当時十八歳で、中村敬宇〔正直〕氏が建てたある学校[3]で英語を学び、愈吉濬氏は慶應義塾で学びアメリカにも渡ったとのことである。

ところで、これよりも先に梁山の通度寺の李東仁という僧侶と、また卓聖能という僧侶が金玉均らの後援を受けて東京に渡り、岩倉具視と会見した事があった。しかし彼らは留学生と見るよりも一つの使節として見るほうがふさわしく、朝鮮人留学生問題とはその視角を異にしなければならないだろう。

私の交友

さて、私は最初、アメリカの文化に憧れて米国留学を夢見たこともあったのだが、それは水泡に帰した。次に日本留学を決心した私は、故郷の近くの竜岩浦で七百トンの輸送船に乗り、仁川港に上陸したのが十八歳（明治三十八年）の春だった。

私は初めて京仁汽車に乗りソウルまで来た。当時ソウルにはコブランというアメリカ人の私設電車が東大門から行十里間を結んでいたのだが、窓などというものは一つもない、いわゆる無窓電車であり、風雨をしのぐことも出来ずに板張りの椅子に座って外の景色を眺めた光景は、実に今になって思い出してみると今昔の感に堪えない。

当時、関釜連絡船は勿論なく、私は釜山から不定期船に乗り、神戸で下船し、東京へ向かった。

最初は青山学院中学部で聴講生をしていたが、もともと日本語がひと言もわからなかったので、神田の正則学校で日本語を学び、その次に明治学院中学部へ転校した

のだが、私はそこで、現在も朝鮮の文化事業のために粘り強く努力している諸氏と出会った。

まず洪命憙[4]氏と出会った。しかし洪氏は明治学院中学部ではなく大成中学だった。

李光洙、鄭世胤、そして崇実中学[5]校長の鄭斗鉉、平安南道の道評議員である李寅彰、戴寧明新学校[6]校長の金洛泳などの諸氏である。

その中で最年少だった李光洙氏は十六歳で、最高年齢者だった李寅彰氏は三十歳だった。

以上が明治学院中学部三年生の時の交友で、一級上の四年生には、黄海道の安岳高普の設立者である金鴻亮[7]氏と、朝鮮で陸軍歩兵少尉だったのを辞めて来日して学んでいた劉泰魯氏がいた。

当時の社会的情勢、政治的環境は、朝鮮人留学生をして法科か政治科を選択せしめたものだったが、中には次のように他の学科を専攻した人もいないわけではなかった。

東大工科造船部には尚灝氏がいて、高師数物科に張膺震[8]氏が、孫秉熙[9]氏の婿養子である鄭廣朝[10]氏が第一高等学校に在籍していた。

留学生気質

当時の韓国人留学生の数は、全国ではわからないが、東京だけでも数百余名に達し、語学準備のための専門学校に入学するものが多く、中学校に入学する人は稀だった。官費生は第一中学校に多く集まっており、私費生は明治学院中学部に特に集中していたのだが、留学生に対する一般の態度はわりと慎重で、「韓国留学生のお方達」と必ず尊敬語が使われ、卒業証書にも必ず「韓国の某某」と記入されていた。

学費は二十円あれば十分で、四畳半賄い付きで六、七円だったが、今では三十円ほどの下宿費に相当する。

その頃の朝鮮人留学生の意気はどうであったか？……当時の社会的情勢と政治的環境は朝鮮人留学生をして政治科か法科を選択せしめたが、芸術方面だとか自然科学方面を専攻する学生達のことを無気力な存在だと軽視する反面、自分達を一種の英雄主義の権化のように錯覚させ、下宿に座して豪語放談し、天下国家を論じ、民族と人類について議論しながら日々を送っていたのだが、今こうして当時の光景を回顧してみると、往往にして一笑を禁じ得ないものだ。

そのような中、明治三十八年の冬に趙民熙氏を最後の公使として麹町に高くそびえていた韓国公使館の門が永遠に閉鎖されることになると、様々な事情により私はその年の春に再び朝鮮へ帰って来た[11]。

大成学校に就任

帰国したその年に私は当時安昌浩[12]氏が校長をしていた

平壌の大成学校の教員として就任することになったが、それは私が二十三歳の時のことだった。

中学を卒業し中学校教員になるということは、今考えてみると奇妙なことのように思えるが、当時はそんなに不思議なことではなく、李光洙氏もその年の春に帰国して、定州の五山学校[13]の教師に就任していた。

大成学校の教務主任が高師出身の張膺震氏だったことも偶然であったが、それよりももっと驚いたことは、生徒たちの中に三、四十歳の壮年者が多くいたことで、その中には呉東振[14]、玉観彬[15]といった人物も見られた。

それはそうと私はそこで一年近くの間教員生活をしたが、再び東京へ渡ってゆき、早大予科を一年半で終え、政治科へ入学した。

同じ政治科の一年には金性洙[16]氏、慶尚北道評議員の韓翼東氏、平安南道評議員の李寅彰氏がいて、すこし後に張徳秀[17]氏、尹弘燮[18]氏等が入って来た。

私は特に歴史に興味を持ち、浮田和民の西洋史講義を多く聴き、その他には坪内〔逍遥〕博士の文学講義などを楽しんで聴いた。

留学生の機関

日露戦争後には東京の朝鮮人留学生の数が少しずつ増えて七、八百名に達した。清国の留学生の数はもっと多く、一時その数は一万名以上に達したとのことだ。

ところで、当時の朝鮮人留学生の機関としては、麹町区の留学生監督部で韓至愈氏が監督をしていたのだが、そこには「韓国留学生倶楽部」があり、その他に平安道出身者たちだけで組織した「太極学会」というものがあり、その学会の会長が張膺震氏だった。

この「太極学会」はその後「留学生倶楽部」などと合流し、明治三十九年に「大韓留学生興学会」が生まれた。会長が尚灝氏、副会長が崔麟氏だったが、設立当初は崔南善[19]氏（当時十七歳）が機関雑誌を編集していて、その後「大韓興学報」と改題され文尚宇氏が編集をした。

当時、早大に「擬国会」というものがあったのだが、田淵豊吉という者がある侮辱的失言をし、それを契機に朝鮮人留学生たちが極度に憤慨し全員退学したことがあった[20]。

私はその後神経衰弱により学校を中退し、中国革命時代の上海へ行き、錢芥燼が社長をつとめる「大共和報」という新聞社に見習いで入社した。

とにかく当時の東京留学生の生活と今のそれとは霄壌の差があった。当時の早稲田大学は田圃と田圃の間に孤然と建っていた。電車も江戸川の「大曲[21]」までしか敷設されておらず、今は繁雑な学生街となった鶴巻町、早稲田町、戸塚、高田馬場などは一眇茫茫たる原野の連続であった。（文責在記者）

訳注

(1) 尹致昊（一八六五～一九四五）政治家。独立協会の会長や万民協同会の会長、大成学校の校長、大韓自強会の会長などをつとめ、新民会の主要メンバーとして愛国啓蒙運動を主導した。

(2) 愈吉濬（一八五六～一九一四）開化思想家・政治家。朝鮮最初の日本留学生であり、最初のアメリカ留学生にもなった。一八九五年、内部大臣に就任。

(3) ある学校　同人社。

(4) 洪命憙（一八八八～一九六七）独立運動家・政治家。東亜日報主筆、五山学校校長、新幹会副会長などをつとめ、朝鮮民主主義人民共和国の副首相にもなった。

(5) 崇実中学　平壌にある長老派の学校。一八九七年設立。

(6) 明新学校　黄海道戴寧にある長老派の学校。一八九六年設立。

(7) 金鴻亮については**資料7**の注6（111ページ）を参照のこと。

(8) 張膺震（一八九〇～一九五〇）大成学校で教務主任を務めるが新民会事件で逮捕・入獄。一九二〇年朝鮮教育会設立に携わる。**資料7**の81ページ参照。

(9) 孫秉熙（一八六一～一九二二）朝鮮の天道教創始者であり、三・一独立運動の民族代表をつとめた。

(10) 鄭廣朝（一八八三～一九五一）孫秉熙の側近として三・一運動に関わり、大同団事件で入獄。

(11) 一九〇五年、第二次日韓協約により外交権を奪われたため、駐日公使館が閉鎖された。しかし実際に文一平が帰国したのはその五年後の一九一〇年のことである。

(12) 安昌浩（一八七八～一九三八）啓蒙活動家・独立運動家。新民会を結成し、平壌に大成学校を設立。**資料8**の125～128ページ参照。

(13) 五山学校　新民会会員の李昇薫が一九〇七年に平安北道定州に設立。

(14) 呉東振（一八八九～?）独立運動家。一九二〇年に光復軍総営、一九二二年に大韓統義府、一九二五年に正義府、一九二六年に高麗革命党を結成。

(15) 玉観彬　朝鮮人実業家。新民会事件で逮捕される。

(16) 金性洙（一八九一～一九五五）政治家・独立運動家。一九二〇年に東亜日報を創刊。普成専門学校校長。一九五〇年、大韓民国第二代副統領に就任。

(17) 張徳秀（一八九五～一九四七）独立運動家・政治家。一九二〇年に東亜日報初代主筆となる。

(18) 尹弘燮　独立運動家・政治家。

(19) 崔南善（一八九〇～一九五七）文学者・歴史家。三・一独立宣言書の起草者。

(20) 擬国会事件　一九〇七年、早稲田大学の学生討論会（模擬国会）にて田淵豊吉が韓国皇帝を日本の華族に列する件について提案したことに対し、韓国人留学生たちが抗議して退学届を提出。早大学長が陳謝した。

(21) 大曲　江戸川橋―飯田橋間にある白鳥橋周辺。

（資料2）

私の半生

文一平（ムン イルピョン）

不忍池畔の過去の夢

私が東京へ渡ったのは十八歳の時だったが、ちょうど日露戦争の風雲が半島を通って満州の傘下を覆った一九〇五年の春だった。

この頃はまだ東京にいる留学生はそんなに多くなかったし、麹町区には韓国公使館があり、趙民熙氏が公使で、韓至愈氏が参事官であった。

私はあるイギリス人宣教師の紹介でメソジスト教会が建てた青山学院中学部一年に聴講生として入った。ところがいくら努力して聴講しても日本語がひと言もわからない私にはほとんど「馬の耳に念仏」であった。当時の私は日本語が全くわからなかったが、怖い物知らずな性格で、礼拝堂にまで通った。日曜日だったろうか、青山の礼拝堂に行くとその教会の牧師中村某[1]が私を見て、「韓国の兄弟！」と言って大歓迎して、握手をしながら英語で話しかけてきた。しかし私が英語を理解できなかったので、今度は日本語で話しかけてきたが、それも理解できなかったので、彼は非常にもどかしい様子だった。

言葉がわからないと何も出来ないので、まず先に日本語を学ぼうと決心し、青山学院の聴講生をやめ、言葉を習う所を探して、本郷区の日勝館[2]という下宿に移った。その日勝館で私は崔光玉[3]氏と同じ部屋で下宿しながら教えを受けた。隣りの部屋には張膺震氏が寄宿していた。崔氏は正則学校で英語と数理を専攻していて、張氏は東京物理学校でやはり数理を専攻していた。

この二人の先輩に出会ってからは、心配や憂いが少なくなった。日勝館の近くには新しくやって来た学生のために、語学とそれ以外の簡易な学科を教える講習所[4]があったが、そこに集まって勉強する者が七、八人いて、私もその中に入って学んだ。そこで同じように学んでいた学生達のうちで今も記憶に残っている人は、金洛泳[5]・呉錫裕・李潤柱・孫榮國・申相浩などの諸氏であり、講師は当時東大で唯一の在学生であった尚瀬氏をはじめ、張膺震氏、順天中学生の朴容喜氏と外国語学校生の藤井某氏などであった。

私はこの講義所で少し学んで、その年の新学期からは正則学校に入学した。その時に日勝館を出て、そこからそう遠くない下宿の玉津館で初めて碧超・洪命憙氏と出会い、春園・李光洙氏と出会った。春園はその当時の名前は宝鏡であり、年はまだ十五歳の少年であった。その後、碧超は大成中学に入り、春園は明治学院中学部に入ったが、私も同じ年の秋に明治学院に入り、春園と同

級生となり、毎日机を並べて座り、一緒に勉強した。ところで、同級生の中で最年長者として有名だったのが三十歳の老学生・李寅彰氏だったが、年齢は春園のほぼ倍になるので、同級生達は李氏に「おじさん」というあだ名をつけて呼んでいた。李氏より一年上に劉泰魯氏という老学生がいたが、年齢は李氏と同じ三十歳だったが、彼は朝鮮で少尉にまでなったが、軍服を脱いで東京に渡り、明治学院中学部に入学して、十五、六歳の少年達の間に混ざって勉強した篤志家だった。

また、私達の同級には名物男・鄭世胤氏がいたが、彼は年相当に面相がひどい痘痕になっていたので、「あばたさん」として人気があった。鄭氏が春園と一緒に寄宿舎にいた時のことだ。ある日新聞記者が寄宿舎を訪問し取材をしていったが、その翌日の朝刊には二段長の一号活字の大きな題名をつけて、「痘痕満面の怪丈夫」とあり、その隣りには大きく「紅顔の美少年」と書いてあった。前者は言うまでもなく鄭氏であり、後者は春園のことである。それから寮生の間で怪丈夫・美少年の話題がのぼるようになった。

明治学院中学時代も知らぬ間に夢のように過ぎ去ってしまった。入学した当初は卒業がとても美しく見えたが、いざ卒業してみると、途方もないものだった。

私は卒業証書を受け取る前に本国に戻り、平壌の大成学校で教えることになり、春園はちょっと後に戻って、定州の五山学校で教えることになった。この二校は当時、平安道教育界の二大中心であり、平安道の青年はもちろん各道の青年達が雲集していた。特に大成学校はその創立者である島山・安昌浩氏の隆隆たる声望により、最盛期には学生数が千名にのぼった。私が行った時は島山氏がおられなくて学生数が減少し、その数は八百名近くになっていた。私は大成学校で一学期を過ごして、再び義州の養實学校[6]へ行ったが、そこでも長くいることができず、ソウルの儆新学校[7]へ移った。この時、儆新学校の校長はアンダーウッド[8]（元杜尤）博士であり、教監は金奎植[9]博士だったが、私はこの儆新学校にいる間は比較的自由で愉快な生活をした。学校の帰りにはしばしば黄金町の崔南善氏の光文会[10]へ遊びに行った。この時、尚洞青年会[11]の中に土曜講習会が新しく出来ることになり、崔氏はそこで歴史科目を教えるようになり、私は地理科目を引き受けた。

就職難がない〝寅がタバコを吸っていたころ〟[12]のことだ。やっと中学を終えたのに、平壌、義州そしてソウルの学校で教えながら、思いのままに各学校を見物している間に、無為に一年以上の貴重な歳月を浪費してしまった。しかし当時の私の思いは、学校教育よりもアメリカに行くことだったので、渡米実現のために努めたのだが、旅行券を手に入れることが難しく、渡米を断念した。渡米を断念した私が再び東京に渡ったのは、日韓併

合の翌年、一九一一年だった。

再び東京の土を踏んだ時、私の精神はいくぶんかの緊張味を帯びるようになり、人生生活に必須な知識を磨いてみようとする一大決心を持っていた。そうして政治学を習う目的で早稲田大学高等予科に入った。政治学の基礎は歴史にあると聞いた私は、歴史を最も一生懸命学んだ。歴史の時間には固唾を呑んで教授の話すことを一言一句のがさず書き込んでいたが、今考えればあきれるほどだ。この時の同級生には鄭奎鉉氏がいたが、彼は明治学院時代から仲の良かった友人で、ちょうど予科に来てからも影形相隋するように聴講も一緒で復習も一緒にした。彼は筆記をし私は話を聞いて、放課後に集まって私が耳で聞いたことと彼が筆で書いたことを対照しながら校正するのが通例であった。当時の稲門には実に済済多士の風采があり、安在鴻[13]・金性洙氏のような人物達もいた。どうにかこうにか一年半すごして予科は卒業した。そして学部に進学したが、勉強は約一学期しか続けることができなかった。

こうして見ると私が学校の正規学科を修めたのは採長補短といっても五年以上にはならなかった。明治学院中学部三年に入学して、ちょうど予科で一年半を過ごし、学部の一学期に至るまで、合計してみれば五年にならないことは確かである。この間に何も習得することができず、ただ健康を損ねてしまったことはとても残念だった。分別のない私は、稲門在学中に学業がだめなら雑誌でも作ってみようかと機会をうかがっていたところ、留学生懇親会で『学界報』を発刊することになり、しばらくそれを引き受けて編集するようになったが、それも創刊号だけで終わってしまった。その頃、ソウルにある光文会でこれから東京に出版部をおいて雑誌を発行するという計画があって、私がそれを引き受けて編集することになった。これも私が上海へ行くため結局流産となってしまったのだが、このように私はしばらくの間、雑誌の編集に熱中していたのだ。

私に言わせれば、東京留学は青春の最も貴重な一部分を割いたのだ。人生の春を歌った花のつぼみが、ちょうど開花しようとする美しい季節を無為に学窓の中で消磨してしまった。たとえ得たものがあったとしても、失ってしまったものと比べて相償することができないのならば、まして得たものが一つもないのだから失ったものしかないのだ。東京留学は青春の最も貴重な一部分を割いたと言ったのはこういうわけだ。しかし修養上の所得は別問題として、生涯の中で最も情熱と希望に燃え上がった奔放で溌剌とした活気あふれる時期であるから、振り返ってみるとこの時期が最も愛らしく、最も懐かしい。

私はこの愛らしく懐かしかった過去の影を追って、また十数年前に鞭打ちながら歩んだ学生生活を再びしてみようと考え、一九二五年の春に再び東京に渡って行っ

た。たとえ昔の私と今の私を重ね合わせてみても、すでに春は過ぎ夏となり、春を懐かしんでも再び春になることは出来なかった。昔の私は人生と事物に対し全てが美しく見えたが、この時の私はこれと正反対に人生と事物を皆美しくは見ることができなかった。それくらい私の感情は不純になってしまったのだろう。昔の私は抒情詩のようだったが、その時の私は宣伝チラシのようだった。無理に昔の学生生活の美しさを懐かしみ、それを再び追体験しようとしても、そんなにたやすくできるはずもない。こうして一年もしないで私は失望し、朝鮮に戻ってしまったが、昔の私の学生時代のエピソードというか、私の頭の中に深く残って消えない可笑しな話がいくつかある。それは、一つは赤面した恥ずかしい話で、もう一つは逃亡した可笑しな話である。

私が最初に東京に渡り、青山学院にいた時だった。ある日、青山女子校の音楽教師である三浦夫人に晩餐会の招待を受けた。私は日本語がひと言もわからなかったが、他の人について晩餐会に参加した。食卓を共にしたのは青山教会牧師の中村氏をはじめ、私も入れて二、三人だった。時間になり三浦夫人は手ずから調理した料理を自ら持ってきて、客人の前に順番に置いてゆくのだが、最初はスープとプレートを持ってきて、次にフライを持ってきて、次にビーフステーキを……といった風に、食べるとすぐ次のものを持ってくる。しかし私はスープは飲んだのだが、他の食べ物は食べ方がわからずぼんやりと座っていた。三浦夫人が大変親切に「召し上がれ」と勧めるので、私はナイフでビーフステーキを切ると、手際が悪くそのまま地面に落としてしまった。これを見た三浦夫人は自分の手で切ってくれた。私はとても恥ずかしくて、ついに食べる事が出来なくなってしまった。今思い出しても汗が出る。

もう一つはポーツマス講和条約の時のことだ。日本の国民が講和条件に不満を抱いて、日比谷で国民大会を開いて反対運動を起こしたところ、これが一転して暴動になって、大臣官邸に火をつけ国民新聞社を破壊した[14]。警官がやむをえず刀を抜き、それを振り回しながら暴動を制止したのだが、この危険な時に私は何も知らずに群集の中に飲み込まれてしまった。霜雪のような白刃が光ったことに驚き、群集の間からやっと抜け出して逃げた。しばらく走っていると足が痛むので見てみると、足の指から血がしたたり落ち、下駄が片方なくなり、頭をなでてみると帽子もどこかに行っていた。間違いなく狂人のような様子であった。先ほどの晩餐会の失礼を可笑しいけど恥ずかしいことだとすると、今回の逃亡話は恥ずかしいけど可笑しいことだと言えるだろう。

揚子江辺の春光

〔省略〕

訳注

(1) 中村某　中村忠蔵牧師か？

(2) 日勝館　『太極学報』によると、張膺震が会長をつとめた太極学会の事務所は「本郷区元町二丁目六十六番地」となっている。日勝館または(4)の講習所があったのがこの住所だと思われる。

(3) 崔光玉（一八七九～一九一〇）新文化啓蒙運動家・教育者。正則学校・東京高等司法学校・明治大学で学ぶ。帰国後、皇城ＹＭＣＡの宗教部幹事となり、新民会に加入。金鴻亮らと安岳勉学会を組織。養實学校や大成学校の校長もつとめた。

(4) 講習所　平安道出身の留学生達が開設した太極学校。

(5) 金洛泳は張膺震の後を引き継いで太極学会の会長をつとめるが、その時の住所は「芝区白金三光町二七三番地」で、白南薫も同住所に住んでいた。

(6) 養實学校　一九一〇年に平安北道の義州に設立された長老派の学校。牧師の劉如大が設立。

(7) 儆新学校　一八八六年にソウルに設立された長老派の学校。現在の延世大学。

(8) アンダーウッド（一八五九～一九一六）朝鮮で活動した長老派の宣教師・言語学者・教育者。漢字名は元杜尤。

(9) 金奎植（一八八一～一九五〇）独立運動家・政治家・教育者。ＹＭＣＡ幹事をつとめながら儆新学校で教える。大韓民国臨時政府で要職を歴任。

(10) 朝鮮光文会　崔南善が一九一一年に設立。古典の整理・刊行や国語辞典の編纂事業などをおこなった。

(11) 尚洞青年会　ソウルの尚洞教会の青年会。この教会内に中等教育機関である尚洞青年学院が開設された。

(12) 寅がタバコを吸っていたころ　おとぎ話の冒頭で使われる表現。昔々大昔、の意。

(13) 安在鴻（一八九二～一九六五）独立運動家・政治家。朝鮮日報の副社長、新幹会の総務幹事、朝鮮建国準備委員会副委員長などをつとめる。

(14) 日比谷焼き打ち事件のこと。

解説　文一平（ムン イルピョン）について

佐藤　飛文

文一平（一八八八～一九三九）は歴史学者・報道人・教育家。号は湖巖。

一八八八年、平安北道の義州で生まれる。一九〇五年に渡日。青山学院で聴講生をした後、太極学校と正則学校で日本語を学び、一九〇七年に明治学院普通学部三年に編入した。一九一〇年に明治学院を卒業後、帰国して平壌の大成学校の教師となり、その後義州の養實学校、ソウルの儆新学校でも教えるが、一九一一年に再渡日して早稲田大学予科に入学し、翌年政治学部に進学。浮田和民の西洋史講義と坪内逍遥の文学講義を熱心に聴く。一九一二年に大学を中退し、上海に渡って大共和報社に勤めた。一九一四年に帰国。一九一九年に三・一独立運動が起こると、「哀願書」を書いて普信閣で朗読。逮捕され、懲役八ヶ月となった。

その後、中東学校・松都高普・培材高普などで教鞭を取りながら、『朝鮮日報』『中外日報』『開闢』などに文章を発表。一九三三年には朝鮮日報編集顧問に就任し、六年間論説委員として筆を執る一方、歴史の研究を深めて民族主義的な立場で多くの論文を発表した。主な著書に『朝鮮史話』『韓米関係五十年史』『湖巖史話集』などがある。彼の死後、遺稿を集めて一九三九年に『湖巖全集』全三巻が出版された。

資料1の「私の東京留学時代」は、雑誌『朝光』の一九三八年三月号に掲載されたものである。文一平が留学していた一九一〇年前後は、大韓帝国からの「私費生が明治学院中学部に特に集中していた」（2ページ）時期であり、その当時の留学生達の生活や明治学院同窓生の卒業後の動向を知る上で貴重な資料である。

資料2の「私の半生」は、新聞『朝鮮日報』の一九三五年三月十四日から二十一日まで、計六回にわたって連載されたものである。前半は日本留学時代について、後半は上海時代についてまとめたものであり、本資料集には前半部分を訳載した。

文一平は李光洙と同級生であり、一時期同じ下宿（玉津館）に住んでいたことがあった。李光洙は文一平のことを次のように回想している。

「東京にいる時に付き合っていた勉強友達に湖巖・文一平君がいた。彼は偶然私の留宿していた下宿の玉津館に来たのだが、私よりも四歳年上だった。その時彼は平面幾何学という本を読んでいて、私はそのような本を初めて見た。先輩として私よりも非常に知識が高いことがわかり、また毛筆の上手な字で×（ママ）憂慨歎する日記を純漢文で書き、詩を作っていた。」（李光洙「多難な半生の途程」『朝光』一九三六年四月号）

「私の同級、同窓だった文一平君は私より四歳ほど年上で、漢文の力があり、歴史の知識も豊富で、私の知らない言葉をたくさん話した。彼はナポレオンを賞賛し、ビスマルクを尊敬していた。彼は時勢が英雄を作るのか、英雄が時勢を作るのかという問題を論じるのを好んでいた。彼は語学と数学を私に習ったが、私は彼から歴史と政治に関する話をたくさん聞いた。韓国併合後に彼は早稲田大学を飛び出し上海へ向かった。彼は康有為・梁啓超・章炳麟など当時の中国の新思想家達を欽慕していたようだった。（中略）文君は私にとって政治と歴史の先輩だった。」（李光洙「私の告白」一九四八年）

明治学院で机を並べて学び、共に教え合い、影響し合った二人は、卒業後すぐに中学校教師となる。その後、李光洙は小説家となり、文一平は歴史家となって、数十年後、朝鮮日報で同僚になった。

一九九五年、文一平の独立運動家としての功労が認定され、建国勲章独立賞が追叙された。二〇〇三年五月には国家報勲処が選定する「今月の独立運動家」に選ばれ、二〇〇五年六月には独立記念館に彼の語録碑が建立された（下の写真）。ソウル郊外の忘憂里合同墓地にある文一平の墓地も整備され、「独立運動家の墓地散策コース」の一つになっていて、墓の入口にも彼の語録碑が建立されている。

湖巖 文一平　先生
（1888 ～ 1939）　独立運動家　民族史学者

朝鮮独立は民族が要求する
正しい道として　大勢必然の
公理であり　鉄則である
哀願書中より

（佐藤飛文 訳）

忠清南道天安市の独立記念館にある文一平語録碑

（資料3）

私の少年時代

――十八歳の少年が東京で書いた日記

李光洙（イ グァンス）

隆熙三年（一九〇九年）十一月七日（日曜）陰、晴、寒。

釜山駅で半年間の悲劇を記録した日記を紛失してしまい、日記をつけなくなってからすでに三ケ月にもなった。その間に起きた事件も多い。今、僕の生涯がより一層おもしろくなってきたので、また日記を始めてみようと思う。

僕が日記を書くときに主眼とするのは、僕の心中に起きた、または僕を深く感動させたいろいろな事件を最も確実に、最も率直に記入することだ。僕は日記を書く目的を知らない。ただ書くだけだ。またこの世で有為な青年達がする風に改過遷善を目的で書くのではない。これからどんな変化が僕の胸中に起きるのか。ひょっとしたらこの日記が将来世の人の愛読物になるかも知れないし、または永久に箱の中で朽ちてゆくのかも知れない。

昨夜はH兄にバイロンの伝記を読んで差し上げ、遅くなって床についたが、明け方一時頃に寒気がして、激しい性慾がわいて苦労をした。ああ、僕は悪魔化したのだろうか。このように性慾の衝動を受けるのは悪魔の捕虜になったのだろうか。僕は分からない。僕は分からない。

まだ明るくなっていなかったが、僕は『奴隷』の続きを書き始めた。これは二週間前から始めたもので、僕の処女作だ。

僕はバイロンから学んだことが多い。[1] しかし僕は彼を見習おうとは思わない。

僕はある少女を愛している。彼女を愛するようになってからずいぶんとたつ。これが僕の片想いであることはよくわかっている。しかしひょっとしたら彼女も僕のことを想っているかもしれない。人生とはそういうものだから。僕は彼女に手紙を送ろうと思う。社会は必ず攻撃するだろう。これは冒険だ。僕は社会の攻撃を恐れない。でもやっぱり怖い。どうしようか。

僕の今日までの日記はキリスト教的な真面目な日記だったが、今日からの日記は悪魔的な荒々しい日記になりそうだ。

十一月八日（月曜）雨、寒。

午後に演伎座で「不加帰（ママ）」を見た。新旧道徳の衝突、軍人の義気、小児の天真、互いに騙し騙されるのが人の道なのか。

青山墓地にみすぼらしい戦死大尉の墓を見た。未亡人がその幼い息子を連れて省墓へ来たが、その幼児に「お父さんは名誉の戦死をとげられたのだから、お前も大きくなったらお父さんの後に続きなさい」と訓戒する。

父親が名誉だというのか。彼が弾丸を受けて鮮血を流しながら呻吟する瞬間、彼は果して何を思っただろうか。きっと自分の息子が軍人になることを恐れたのではないだろうか。

僕は勉強が嫌いになった。やめてしまおうか。いや、五ヶ月だけ辛抱しよう。

お金が必要だ。でもお金はないな。僕はなんとかしてお金を稼がなければならない。

僕は旅が好きだ。全地球上を踏破したい。そう思うようになったのは三年生の地理の時間だが[2]、それ以降だんだんその思いが強くなっていった。

実に朝鮮人は心配だ。大人物がいないな。

昨日から寒気がする。不快だ。寝つきが悪い。

H君は多少朝鮮人っぽくなくなった。でも疎遠になった。

十一月九日（火曜）陰、小温。

今日は本当に単調だ。読みかけの『湖上之美人』〔スコット著〕を読む。

午後にC君がきた。何か考えている表情だ。沈着な彼の黒い顔には一種の煩悶の光が浮動しているが、その中にも将来現れようとする、ある力にふけっているようだ。彼は僕たちの年輩の中で最も高尚な青年だ。僕は彼がとても好きだ。しかし彼は本来沈黙が好きなので、僕も多く話さなくても、ある力によって彼と僕は心を通じているようだ。

僕は彼と心を共にするが、何をするかはわからない。『失楽園』〔ミルトン著〕を読む。良い。魔王の不屈な勇気は僕の最も愛するところだ。残念なのは、どうして一挙に上帝の宝座を衝かずに、ぐずぐずとエデンの女なんかを騙していたのか。

僕は天才なのだろうか。僕はわからない。ただ言ってみただけだ。

東洋の偉人は皆奴隷だ！

十一月十日（水曜）風、微雨、陰、寒。

茄子が腐ったような汚い雲が空を覆って、悪魔の入獄のような風が暴れ狂い、金色に熟した銀杏の葉がひらひらと舞い落ちる。人の足に踏まれて裂けて土にまみれて、土に埋められてしまう。これが造物主の業だ。作っては砕いて、砕いてはまた作り、ああ、造物主のなし得る力はかくも多いのか。

十一月十一日（木曜）晴、寒。

昨夜の夢が面白かった。僕は朝鮮人を扇動した罪で死刑の宣告を受けた。時は午前なのに、刑の執行は午後だという。僕は考えていた。死ぬのは恐ろしくないけれど、ただ心の中で描いていた力を使ってみることも出来ずに、この世を離れるのが悲しいと。このために僕は苦しみ悩んだ。執行当時の模様を想像しているうちに吉報が来た――死刑は中止すると。

十一月十二日（金曜）温、寒。

校庭の銀杏の樹は骨だけ残って、路傍の丹楓は血の色に染まった。夜にC君がくる。彼は剛勇な男である。彼は主義のために父親から学費を拒絶して、父子の縁を切ったのだそうだ。これは朝鮮人の中では稀有なことだ。喜ばしいなあ。彼は世界無銭旅行をするとのこと。すごいなあ。朝鮮よ、お前は幸福だな。このような男児を産んだのだな。僕も世界旅行を思い焦がれるようになってから長いが、一緒について行きたいという意志が燃えるようだ。明春〔の卒業〕を期して実行してみるか?。

十一月十三日（土曜）晴、寒、陰、寒。

二時間目に妹の手紙を受けとる。たぶん彼女の最初の手紙であるはずだ。僕はその天真爛漫な愛情がうれしかった。彼女は天才だ。外国で生まれていたら詩人になっていただろう。ああ、惜しいなあ。

『湖上之美人』を終わらせる。

十一月十四日（日曜）晴、風。

R君を見る。それほど感じるところがない。忙しいわけだ。

十一月十五日（月曜）陰、寒。

礼拝時間は本当に嫌いだ。その祈祷会はすべて神様を恥ずかしめるだけだ。「大日本帝国を愛護して下さい。伊藤〔博文〕公[3]のような人物を送って下さい。」滑稽！滑稽！　それでも彼らはキリスト教信者だというのだ。舌は勝手に回るのだ。

夜にM君を探した。いない。入って待っていても来なかった。管弦の音にあわせて女声の歌が聞こえる。どんな人が演奏しているのだろう?。気持ちが高まる。しかしすぐに静まった。

帰路に『奴隷』について考える。これは長篇にするには不適当だ。今まで書いてきたのを中断して、短篇をいくつか作ろう。

ああ、僕も怠け者だ。

十一月十六日（火曜）晴、寒。

野球で四時間もすごす。夜に『戀か[4]』を書く。美しい

少女を愛して、彼女を抱きしめてキスする夢を見る。ハハ…。

十一月十七日（水曜）晴、寒。
心緒極めて散乱。
夜、『戀か[4]』を継続して書く。僕はこれを『白金学報』に載せよう思う。でも載せてもらえるだろうか。

十一月十八日（木曜）晴、曜[ママ]。
夜に『戀か[4]』を完結する。日本語で書いた短篇小説。僕が作品を完結したのはこれが初めてだ。

十一月十九日（金曜）晴、寒、陰。
近ごろめずらしい寒さだ。皆首を縮めて白い息をはいている。女工たちの唇が青黒く震える。
島崎藤村の『破戒』を読む。平凡だ。
この頃は空想が少なくなるようだ。

十一月二十日（土曜）晴、寒。
品川海に浮かんでいるロセッタ・ホテル（註：日露戦争時にロシアから奪った破軍艦を海に出しておいて料理店兼旅館を作った）で五年生の親睦会が開かれる。壮観だった。自分も「偶感」という題で演説をする。
僕はやはり言論は拙い。
僕はホテルの鏡に映る自分の顔の美しさに暫し恍惚となった。僕の顔は遠くからながめるべきで、近くから見てはいけない。

十一月二十一日（日曜）晴、温。
まさに春の日のようだった。乾いた百草も今まさに生えるようだ。どうして朝は晴れなかったのだろう。
P君がくる。彼は僕の愛する友。彼を見るたびに僕はうれしくなる。彼は僕の涙をぬぐってくれる友だ。
漢城楼で酒を飲む。本当に酒は甘いなあ。僕は前日の自分の文章を見て懐かしかった。ああ、いつのまに追憶となってしまったのか。
二本〇[ママ]町で刀で五人を惨殺する事件が起きた。即死だったというから彼らは幸福だったろう。一瞬にして人生のすべての苦悩を忘れることができたのだから。
なぜ生きるのか？　何をするために？　生きる楽しみがないわけではない。あれこれ見たり聞いたり話したりもするので、楽しみがないとは言えないだろうか？。僕はこの楽しみのために病になったら薬を飲もう。僕は他人から親愛を受ける卦だと易者は話していた。
寝るのが惜しい気がする。想像でもして横になろう。

十一月二十二日（月曜）晴、温。
たけさんの送別会が開かれる。彼女は僕たちの女中

だった田舎の老姿だ。本当に彼女は貴賓だ。国家の大使大君よりも彼女は貴賓だと僕は熱誠に話した。

十時をすぎて酒を飲む。頭がぐるぐると回って神経は鈍くなる。実に酸観醒観は違うのだな。

同席した友達がペチャクチャと早口でしゃべり続けるので、僕はひと言も聞き取れなかった。

十一月二十四日（水曜）陰、温、雨、寒。

早朝に〇慾（マヽ）で苦労する。

三時間目の後、体調が悪く、授業は嫌いなので、家に帰って寝る。

『虎』を完成する。これが第二の完成だ。僕はこれを完成した時に大きな抱負と喜悦と満足を感じた。

十一月二十五日（木曜）陰、温。

昨夜K君を見た。僕は彼を見る時に無限にうれしかった。彼も同じようだ。互いに手を握りながら微笑があふれるようだ。Kは大人物だ。深い人物だ。親しくても狎れることのできない人物だ。彼は歎喜戯謔中にも一種の威厳をそなえている。僕も彼を敬愛する。彼が火傷したという噂を聞いた時には僕は悲しいなんてもんじゃなかった。

十一月二十八日（日曜）晴、温。

早稲田で東・稲の野球戦を見る。帰途、洪君[5]を探す。彼は僕と同じ臭いがする。僕は彼を好む。

崔君[6]の文と詩を読む。確かに彼は天才だ。現代の僕たちの文壇の第一人者だと言えるだろう。

十二月一日（水曜）

十二月二日（木曜）

青く澄んだ空には雲一つない。満月は水と同じ光をまどろむ万物に投げる。生命なき道端の「くるま」は終日言いなりになるのに疲れて、顔をしかめたようだ。これを見てその持ち主のことを考えると人生は苦しいものだ。でも生きている間にすべてのものを皆味わってみるのは一つの楽しみだ。栄枯盛衰は僕の知るところでなく、ただ力がある限り、やりたいことをみなやって、寿命がきたら死んでしまおう。

十二月三日（金曜）

「獄中豪傑」という詩を『興学報』に送る。[7]

十二月四日（土曜）

十二月五日（日曜）晴、寒、陰。

すでに今年も数日しか残っていないのだなあ。ああ、

歳月はかくもはやく過ぎ去る。考えれば目が丸くなる。
ところで僕は去る一年に何をしたのだろう。色々なやりくりもあった。人生で初めて味わったこともあった。しかし、ああ、皆後悔することばかりじゃないか。
なぜ人というのはこんなに弱いのだろうか？　神さまはなぜ僕たちを作っておいて、四方に毒草を置くのだろう？　こっちに行っても罪、あっちにいっても罪、足を踏み出せば罪なので、どうしろと言うのだろう。

十二月六日（月曜）晴、不寒。
物理学の先生は本当に嫌いだ。鈍くてその上、品格が悪くて。ところが彼が我慢できないように生徒たちが〔無礼に〕ふるまうのを見る時にはかわいそうに思う。僕はなぜかある人に向き合えばかわいそうな考えがよくおこる。今日もチャペルで物理の先生を見た時にも、なぜか悲しく胸が苦しくなり、そのそばで一番堂々と座っていた数学の先生、英語の先生、こういう人達が皆憎かった。
山崎君[8]は本当に親切だ。日記に彼のことを一言でも書かなければ申し訳ないくらいだ。
午後に洪君に会う。称賛を受けた。
李君を探した。本当に偽善者だ！
電車の中でアンドレエフの『深淵』を読む。ウーン、頭が働かない。働こうとしない。

十二月七日（火曜）
夜にあの人と一緒に青山へ行く。一緒に行きたかったからだ。
帰り道で文君[9]を見つける。僕は彼が好きだ。彼は誠実な人であるようだ。僕はどれだけ誠実な人を求めるのだろう。

十二月十四日（火曜）
昨日とは一変して今日は明らかに冬だ。道を通る人々は皆猫のように丸くなっている。
今日から試験だ。試験の時になるととても安心はできない。悪い成績は取りたくない[10]。これが人の常だろう。
夜十時だ。ガンガン鐘の音がする。寺から鳴らしている音なので、〔火事を知らせる〕半鐘だ。
「おやまあ。これはどうしよう！」と、女中が自分の家に燃えうつるかのように大騒ぎをする。二階に上がってみると、果たして黒い煙が空に届き、恐ろしい火が夜を映して、家々の屋根に燃えうつりそうだ。
「ああ、壮快だ。シベリアの大森林に火がつけばどれほど良いだろうか！」と僕は叫んだ。
ネロ王がローマに火をつけたのもこの壮観を見ようとしたのだ。僕はバイロンのことを思った。

十二月十六日（木曜）

夜に面白くて恐ろしい夢を見た。父さんの墓が開かれて、その下に確かに横になっていた父さんがむくっと起きながら、母さんと僕を捉えようとする。僕は鄭君と共にひどい目にあいながら逃げた。夢でも僕は考えた。

「ウーン、まだ死ぬのは恐ろしいなあ」と。

十二月二十一日（火曜）陰、寒。

試験が終わった。皆、獄中から出てきたように「やったー！」と言う。――僕も嬉しい。

僕の処女作といえる『愛か』が「〇〇学報」（ママ）に出た。[11] うれしい。わけもなくうれしい。しがない喜びだ。僕はみんなが僕をほめてくれないのが不満だ。――ああ、僕の短所だ。

夜に色々な人に「ハムレット」の話をしたところ、皆好きなようだ。僕もなぜか人々に文芸の話をすることが好きだ。

十二月二十二日（水曜）

李完用が死んだ！[12]

十二月二十三日（木曜）晴、寒。

今日は風邪でとても不快だ。どこにも行かずに「情育論」[13]を書いた。

李寅〇（ママ）[14]がいらっしゃったので情肉の話をした。多分目障りだと思っただろう。しかしそれが僕の本性だということをどうするだろうか。

夜に韓君が僕に驕慢だと忠告した。なるほど僕は驕慢だ。誰にでも自分の才能を自慢したくて、人が僕をほめてくれなければ不快だ。このために他の人々は僕を嫌がるだろう。しかし僕は自慢するのではなく、僕が心の中で考えた通りに正直に言うのだ。正直が僕の短所だ。嘘で言い繕ったことはないだろう。嘘で言い繕えば彼らは僕を驕慢とは言わず称賛だけをするだろう。

ではどうしようか。僕はわざわざ謙虚なふりをして、世の人の歓心を買うだろうか。これは本当に苦痛だ。――僕にはできない苦痛だ。とても気がかりだ。

十二月三十一日（金曜）晴、陰、雨。

隆熙三年も今日が最後だ。過ぎ去った一年を振り返ってみれば…。

この年に読んだ本でも書いてみようか。（文芸だけ）

『虞美人草』〔夏目漱石著〕、『海賊』〔バイロン著〕、『バイロン』、『プーシキン』、『ゴルキイ』、『ゴルキイ短編集』、『春』〔島崎藤村著〕、『思い出の記』〔徳富蘆花著〕、『復活』〔トルストイ著〕、『アンナカレニナ』〔トルストイ著〕、『イカモノ』〔モーパッサン著〕、『蘇生の日』〔イプセン著〕、『建築師』〔イプセン著〕、『自然主義』〔長谷川天渓著〕、『天魔の怨』〔バイロン著〕、『破戒』

〔島崎藤村著〕、『沙翁物語集』〔ラム著〕、『湖上之美人』〔スコット著〕、『野の花』〔ハーディ夫人著〕、『ナポレオン言行録』、『詩人と戀』〔關露香著〕、『病間録』〔綱島梁川著〕、『藤村詩集』、『霊か肉か』〔木下尚江著〕[15]。

隆熙四年（一九一〇年）一月一日（土曜）雨、晴、温。

今日から隆熙四年だ。僕が日本に来てから六年目だ。その間、僕に起きた変遷はどれほどだろうか。実に生理的にも心理的にも、経験を沢山積んだし、変遷も沢山した。単純だった僕は今ではちょっと複雑になった。これからどんな風になるのだろう？　胸中にある理想（本当はまだそんなに一つに定まったものでもないけれど、それでも理想は理想だ）は達成されるだろうか。行こう、行こう、ただ行けるだけ行こう。

山崎君がきた。

一月二日（日曜）晴、微雨、晴、温。

本郷座でオセロ劇を見る。休憩時間には『三四郎』〔夏目漱石著〕を読んだ。

文君を訪問した。彼と僕とで胸を割って通じ合うことを求めた。僕も快く許諾した。

彼は僕を「破格の男」と称した。このまま行けば必ず世の中を驚かせるだろうと。一度は僕の名前が君のために高まるだろうと。人々はみな君を驕慢だと言って好きじゃないと言うけれども、それは当然のことだ。嘘をつかない者は世の中で歓迎されにくいものだ。でも君は嘘が嫌いだ。だから彼らは君を嫌うのだ。でも僕は君を信じる。大人物はよく世の中で排斥を受けるのだ。――このように話した。彼は会うたびに僕をほめる。しかしそのことは皆真実であるようだ。聞くのは嫌ではなかった。実際のところ僕も今までそう考えてきたことだけど、自分以外の人がそのように言ってくれると、一層心強くなるのか、満足させてくれ、また勇気をくれた。

僕はどこまでも裸体生活をしよう。いや、僕はまだ裸体になっていなかった。もっともっと裸体になるよう努めよう。世の中がお前にとって何の権威か。世の中を治める者はお前ではないのか。

一月四日（火曜）

年賀状がきた。

「熱沙漠々のサハラを旅する人も節々は甘き泉湧き涼き木蔭青きオーシスに出遭ひて死ぬ計りなる疲を休すむる由あれど人生れ落ちて死の墓に至るまでの旅路には唯一度戀てふ眞清水を掬み得て暫時は永久の天を夢むと雖も忽ち醒めて又其寂しき行程に上らざるを得ず斯くて墓の暗き内に達するまで第二のオーシスに出遭ふことなく、たゞ空しく地平線下に沈み了せぬる彼の眞清水を懐ふのみ、果敢なきものならずや。」（國木田獨歩）[16]

一月六日（木曜）晴、寒。

洪君を訪ね、話をして一緒に寝る。彼もオアシスを求めているようだ。しかし彼はオアシスに帰ることができない人だ。かわいそうに。明け方早く起きて、『青い子猫』『私の一夜』〔ゴーリキー著〕などを読む。おもしろい。

五時に洪君の家を出て、家に帰るが、まだ暗かった。下弦の月が冷たく中空にかかって、市街の家々の半分は暗さの中に溶けてしまった。

武内君と長く話した。僕に対して「自然主義化した」と言っていた。

一月十一日（火曜）雪、寒。

初雪だ。よく降る。あっという間に万物が白くなった。僕は雪を見るとシベリアのことを考える。シベリアの一望無限の広野に立って雪景をながめればどんなに愉快だろうか。[17] こういう都会に降る雪はあたかもその荘厳な趣を失ってしまうようだった。

はやく明日が来れば……明日はあの人が来ると約束した日だ。僕はまた熱い情況に入ってゆくようだ。

一月十二日（水曜）寒、晴。

朝起きてみると世界のすべてが白かった。

学校に行くとその広いグラウンドに雪が敷かれていて、まだuntrodden〔人跡未踏〕だ。少し経てば人の足に踏まれて汚くなることを考えれば悲しかった。

授業は嫌いだ。かといってやめることもできない。

昼には雪が溶け始める。子どもたちは雪合戦をして、木の枝に座っていた雪たちもザザーッと音を出しながら落ちる。

夜に洪君を訪ねた。電車の中で僕は文学者になるか、なるとすればどうやってなろうか、朝鮮にはまだ文芸というものがないから、日本文壇で一旗揚げて世に出るか——そんなことを考えた。

一月十三日（木曜）雨、寒。

明け方から雨が降る。冷たい風が吹いて横なぐりの雨になり、古い洋服が寒い。積もった雪は氷になる。そして溶ける。あの人は来ない。雨は止まない。あの人は来ない。来れないという葉書がきた。

一月十四日（金曜）。

『花袋集』を読んでその勇気に感服した。でも僕には批評の才能がないらしく、花袋のものはそれほど良いとは思わない。

二月五日（土曜）陰、雨、寒。

朝起きてみると雪が積もっていない所がなかった。教

室の窓から外を見ると、雪片がびゅうびゅうと舞い降りてくる。木々が重たそうに雪を支え、それが落ちる間はそっと首を振る。犬達は生まれて初めて雪に会ったように楽しそうに駆け回る。美しい景色だ。おもしろい景色だ。でも外に出ると寒いので自然の美も身体の苦痛にはかなわないと思った。僕は自然の美に狂ってしまう人にはなれないと思った。

山口君から葉書が来た。藤井氏が懐かしい。

ずいぶんと今日は読んだ。『人形の家』〔イプセン著〕『蒲団』〔田山花袋著〕以下数十篇を読破した。

僕はいよいよ深く文芸に入りこんでいるようだ。

訳注

(1) 李光洙はバイロンとの出会いを次のように回想している。「この時に私の清教徒的生活を覆したのが自然主義の文芸とバイロンの詩だった。Kという友人に薦められたバイロンの詩『カイン』『海賊』『ドンファン』等が、いかに清教徒的生活が浅はかであり、悪魔主義の力と深さを私に教えたことか。私はまるで不自由な監獄や修道院から限りなく広く明るい自由の新天地に出てきたかのように思えた。」(李光洙「彼の自叙伝」一九三六年)

(2) 李光洙は一九〇七年九月に明治学院普通学部三年二学期に編入した。三年の地理歴史では東洋史と地理の授業を受けた。

(3) 初代韓国統監だった伊藤博文は同年十月二十六日にハルビン駅頭で独立運動家の安重根の手で射殺されている。明治学院では十一月二日に追悼会が開かれた。

(4) 実際に発表された作品名は『愛か』。**(資料4)**

(5) 「洪君」は李光洙の大成中学時代の先輩、洪命憙(ホンミョンヒ)のこと。洪命憙の号は假人(カイン)であったことから、日記中の「H兄」、「K君」は洪命憙をさしていると思われる。李光洙は洪命憙の勧めでバイロンや夏目漱石を読むようになった。注(1)参照。

(6) 「崔君」は崔南善(チェナムソン)のこと。東京府立第一中学校と早稲田大学で学び、雑誌『少年』や『青春』を発行。李光洙とともに「文壇二人時代」を築いた。日記中の「C君」は崔南善をさしていると思われる。

(7) 「獄中豪傑」は孤舟の号名で『大韓興学報』第九号(一九一〇年一月発行)に掲載された。大韓興学会は朝鮮人留学生の全国組織で、一九〇九年一月の設立時には明治学院の金鴻亮が総務、金洛泳が書記員、李寅彰が評議員に選出されている。また(5)の洪命憙は編纂部員だった。

(8) 「山崎君」は山崎俊夫（一八九一～一九七八）のこと。のちに三田派作家として耽美的小説を書き、帝劇の役者や松竹歌劇団の演出家としても活躍。李光洙は「我が交友録」の中で、「私がトルストイの作品に接したのは実に山崎君を通してであって、加藤直士訳のトルストイの本など片端から読んだものでした。」と回想している（『モダン日本』一九四〇年八月号）。

(9) 「文君」とは文一平（ムンイルピョン）のこと。日記中の「M君」は文一平をさしていると思われる。**資料1・資料2**と解説を参照のこと。

(10) 大村益夫氏によると、李光洙の明治学院五年二学期の成績は、平均七十九・五点。学年順位は五十人中九位だった。（大村益夫「日本留学時代の李光洙」『朝鮮文学』第五号、一九七一年）

(11) 「愛か」は明治学院の同窓会誌『白金学報』第十九号（一九〇九年十二月十五日発行）に掲載された。**（資料4）**

(12) 大韓帝国の内閣総理大臣の李完用はこの日ソウルの明洞聖堂前で李在明に襲われ重傷を負う。かろうじて一命を取りとめたのだが、彼が死んだという誤報が東京に伝わったのであろう。

(13) 「今日我韓青年斗情育」は『大韓興学報』第十号（一九一〇年二月発行）に掲載された。

(14) 明治学院の同級生で十四歳年上の李寅彰のことか？

(15) 李光洙の明治学院時代の読書歴については、波田野節子「獄中豪傑の世界―李光洙の中学時代の読書歴と日本文学」（『朝鮮学報』第一四三輯、一九九二年四月）参照。

(16) 國木田獨歩は一九〇八年に他界しているので一九一〇年に獨歩からの年賀状が届くはずはない。この文章は國木田獨歩の遺稿「一句一節一章録」の一節で、一九〇八年八月一日発行の『趣味』第三巻第八號（拡大號「文豪國木田獨歩」）に収載されている。李光洙はそれを読み、韓国語に翻訳したものと思われる。ここでは現代日本語訳（再訳）はせず、『定本 國木田獨歩全集 第九巻』（学習研究社、一九六六年）一二一ページより引用した。

(17) 李光洙は一九一〇年の春に明治学院普通学部を卒業後、平安北道定州にある五山学校の学監となる。三年後の一九一三年、その職を辞して中国・シベリア放浪の旅に出る。

（資料4）

愛か

韓國留學生　李寶鏡

文吉は操を澁谷に訪ふた。無限の喜と樂と望とは彼の胸に漲るのであつた。途中一二人の友人を訪問したのは只此が口實を作る爲である。夜は更け途は濘んで居るが其にも頓着せず文吉は操を訪問したのである。彼が表門に着いた時の心持と云つたら實に何とも云へなかつた。嬉しいのだか悲しいのだか恥しいのだか心臟は早鐘を打つ如く息は荒かつた。何んでも其の時の狀態は三分間も彼の記憶に止まらなかつたのである。

彼は門を入つて格子戸の方へ進んだが動悸は愈早まり身体はブル〳〵と顫へた。雨戸は閉つて四方は死の如く靜かである。もう寐るのだらうか、イヤ然ではない、今ヤット九時を少過ぎた計である。其に試驗中だから未だ寐ないのには定つて居る。多分淋しい處だから早くから戸締をしたのだらう。戸を叩かうか、叩いたら屹度開けて呉れるには相違ない。併彼は此の事をなすことが出來なかつた。彼は木像の樣に息を凝らして突立つ居る。何故だらう？何故彼は遙々友を訪問して戸を叩くことが出來ないのだらう？叩いたからと云つて咎められるのでもなければ彼が叩かうとする手を止めるのでもない、只彼は叩く勇氣がないのである。あゝ彼は今明日の試驗準備に餘念ないのであらう。彼は吾が今此處に立て居ると云ふことは夢想しないのであらう。彼と吾と唯二重の壁に隔たれて萬里の外の思をするのである。あゝ何しよう、折角の望も喜も春の雪と消え失せて了つた。あゝ此の儘此處を辭せねばならぬのか。彼の胸には失望と苦痛とが沸き立つた。仕方なく彼は踵を返して忍足で此處を退つた。

井戸端に出ると汗はダラ〳〵と全身に流れて小倉の上服はさも氷に浸した樣である。彼はホット溜息を洩らすと夏の夜風は輕く赤熱せる彼が顏を嘗めた。彼の足は進まなかつた。彼は今度は裏から廻つて見たが、矢張雨戸は閉つて、ランプの光が微かに闇を漏れるのみであつた。モウ最後である。彼の手賴は盡きたのである。彼は決

心したらしく傍目も振らずにズン〳〵と歩き出した。彼は表門を出て坂を下りかけて見たが、先刻は何の苦もなくスラ〳〵と登つて來た坂が今度は大分下り難い。彼は二三度躊めいた。半許下りかけたが、彼は何と思つてかハタと立つ止つた。行き度ないからである。何か好い方法を考へたからである。前なる通の電柱の先に淋しく瞬いて居る赤い電燈は、夏の夜の靜けさを增すのであつた。

彼は此處に立つて考へて居るのである。吾は明日歸るではないか、明日歸れば來學期にならないと彼の顏を見ることが出來ないのである。あゝ何しよう？何！此んな處へまで來て逢はずに歸る奴があるものか。吾は弱い、弱いけれども此んな事が出來なくて何する？是から少强くならう。よし今度は是非戸を叩かう。勿論這入つた處で面白い話をするでもなければ用があるのでもない、唯彼の顏を見る計りだ。其で彼は再蹠を返した。今度は勇氣天を衝く樣で足は輕くて早い。餘早過ぎたものだら遂門を通り越した。滑稽と云はゞ云はれよう。三四步戻つて彼は表門を這入つた。今度は態と飛石を踏んでバタ〳〵と靴音をさせた。此は手段なのである、自分では手段でありながらも人には知られぬ手段である。彼は此手段には成功を期したが格子戸の處まで達しても何等の便もない。モウ幾何靴音をさせようと思つても場所がないのである、眞逆体操の時の樣に足踏をする譯にも行かず。あゝ又もや失敗した。今度こそは本當に歸らざるを得ないのだ。彼は第二の溜息を突いた。併窮すれば策はあるもので、彼は又一策を案出したのである、其は歸りに一層高く靴音をさせることである。そうすれば或は室內の人が其と氣が付いて開けて呉れるかも知れない。實に窮策である。彼は實行して見た、すると果して內から下女の寐ぼけた聲が聞えた「操樣」と云ふ樣である、彼は聊成功を期したが無益であつた。彼は暫時息を殺して立ち止つて居た。若巡査にでも見られた日には盜賊の名を負はれたかも知れない。彼は最後の冒險を試みた—然り冒險である。今度は忍足ではない、彼は堂々と裏へ廻つたが果して光は大きかつた、是實に暗黑洞中の一道の光明！渴虎の清泉！。

「何方ですか」と誰かゞ椽側で問ふ。

「僕です」と答へた彼の調子は慄へるのであつた。彼は彼なることを知らせんが爲に態と顏を光りの方へ向けつ

「モウ御休みになるのかと思ひまして……」。

「や！貴公でしたか、暗いのにまあ、さあ、御上りなさい」。

主人が勧むるに任せて彼は靴を脱いで上つた。主人は座蒲團を勧めたが彼は難有いとも思はない様である。

「試驗は御濟みになりましたか」と主人は讀んで居た雜誌を本立に立てながら聞いた。

「ハイ、今朝までに濟みました。で貴公方は？」此は上部の挨拶に過ぎぬのである。斯様な會話は固より彼の好む處ではない、寧厭ふ方である。彼は單刀直入「操君は居りますか」と聞き度かつた、而も彼は此が出來ない、力めて己の胸中を相手に知らせまいとする、併し顏は心の聞者で如何に平氣を裝はうとしても必ず現はれるのである。主人は訝しさうに彼の横顏を見詰め居た。

「私共は未だ〳〵。今週の土曜日まで〳〵なくちや。何も厭になつちまひますよ」と一寸顏を顰める。蚊群は襲うて來る、汗は流れる。

「何うも今年は格別蒸暑う御座いますね」と、文吉は「操に僕の來たことを知らせ度い、併知られるのは恥しい」と思ひ乍ら答へた。直接知らせないで知つて貰ふのが彼の希望なのである。操は襖を一枚隔てた室に居る、文吉は頭の中で操の像を畫きつ〳〵「モウ知りさうなものだ、彼が來て居ることを知りながらも出て來ないのであらうか」と思つた。

やがて彼と同室の生徒が入つて來た、文吉は何となく喜んで態と聲を高くして「御勉强ですか」と問ふた。彼は「ハイ」と答へて自分の室へ歸つた、多分僕が來たと云ふことを知らせる爲だらうと文吉は思つた、而して喜んだ、が何等の便もない、彼は居ないのであらうかと疑つて見た、併確かに居る、今何か囁いて居るのを聽いた。彼は確かに居るのだ。而も彼は知らん顏して澄まして居るのであらうか、何したのだらう、人間にして何して此んな殘酷なことが出來るのだらう實に殘酷である。

彼はブル〳〵と慄へた。彼の身體は熱湯を浴びせかけられた樣で息は益々荒く眼は凄みを帶びて來た。主人は愈訝かしげに彼の顏を見詰めて居た。彼はモウ居た〳〵まらなくなつた。あ〳〵、胸よ裂けよ、血よほとばしれ、

身体よ冷えよ、吾は爾の爲に血を流した、爾は吾に顏をも見せたのか。

彼が主人の止めるのも聞かないで此處を出たのは、十時を少過ぎた頃であつた

彼は失望、悲哀、憤怒の爲に夢中になり、狂氣になつて歸途に就いた。薄暗い町の中はヒッソリと寂靜まつて、憐れな按摩の不調子な笛の音のみ、濕つぽい夏の夜の空氣を搖るのであつた。

文吉は十一の時に父母に死なれて、隻身世の中の辛酸を嘗めた。彼は親戚を有せぬでもなかつたが、彼の家の富裕であつた時こそ親戚ではあつたけれど、一旦彼が零落の身になつてから、誰一人彼を省みるものはなかつた。彼の身に付き添ひたる貧困の神は、彼をして早く浮世を味はしめたのである。彼が十四頃には已に大人びて來て、紅なす彼の顏から無邪氣の色は褪めて了つた。

彼は聰明の方で、彼の父は彼に小學等敎へては其の覺の好いことを無上の喜樂として、時々は貧困の苦痛をも忘れて居た。彼が父母に死なれて、後二三年間と云ふものは、東漂西流實に憐なものであつた、併其の中にも彼は友人より書籍を借りて讀み、順序ある學校敎育は受けることが出來なかつた。けれども彼の年齡は少年に負は取らなかつた。彼は家庭の影響と貧苦の影響とで至つて柔和な少年であつた、――寧弱い少年であつた。にも拘はらず彼は非常な野心を抱いて居た。何とかして一度世間を驚かし度い、萬世後の人をして吾が名を慕はしめ度いと云ふのは、恒に彼の胸に深く潛んで離れない所であつた、此が爲に彼は一層苦んだのである。彼は何の爲す所なく死することを恐れた。此に一道の光明は彼に見はれた、其は或高官の世話で東京に留學することになつたことである。實に彼の喜は一通でなかつた、彼は理想に達するの門を見付けた樣に雀躍したのである。

彼は早速東京へ出て芝なる或中學の三年に入學した。成績も好い方で皆にも有望の青年視せられた、云はゞ彼は暗黑より光明に出た樣なものである。併其の實彼は幸福ではなかつた、彼は漸く寂寞孤獨の念を萠して來た、日々何十人何百人と云ふ人に逢ふけれども一人も彼に友たる人は無かつた、それがために彼は歎いた。泣いた。悲哀の種類多しと雖、友を有せぬ程の悲哀はないとは彼の悲哀觀であつた。

彼は夢中になつて友を探した、けれども彼に來るものは一人もなかつた。往々無いでもなかつたが一人も彼に

滿足を與へる者はなかつた、即彼の胸中を聽いて呉れる人はなかつた。彼の渇は益激しく、苦は益々其の度を高めるのみである。十六億あまりの人類の中吾が胸を聽いて呉れる人はなきかと彼は歎聲を吐いた。斯くて彼は益々弱くなり、益々沈鬱になつて、話好の彼も漸く口をきかない様になり、人と交はることさへ厭ふ様になつて來たのである。彼は日記帳に彼の胸中を說いて、やつと自慰めた位である。彼は斷念めようと思つた、而し此は彼のなし得る所ではなかつた。其處に無限の苦は存するのだ。斯くて二歲は流れた。

今年の一月彼は或運動會で一少年を見た、其の時の其の少年の顏には愛の色漲り、眼には天使の笑浮んで居た、彼は恍惚として暫く吾を忘れ、彼の胸中に燃ゆる焰に油を注いだのである。此の少年は即ち操である。彼は此こそと思つた。

彼は書面もて己の胸中を操に語り、且愛を求めた、すると操も己の孤獨なること、彼の愛を悟りたること、自分彼もを愛するとのことを書いて送つた。文吉が此の書を受けた時の心持は如何であつたらうか。文吉は喜んだ、非常に喜んだ、併胸中の煩悶は消えない、消える所か新しい煩悶は加はつたのである。操は至つて無口の方である。此を文吉は無上の苦痛として居つた。文吉は操が自分を愛して呉れない様に感じた、如何にも彼には冷淡である様に感じた、彼は操を疑つても見たが、疑ひたくはないので、無理に彼は自分を愛して居るものと定めて居た。其處に苦痛は存するのである。彼は操を命とまで思つて居た。日夜操を思はん時はない、授業中すらも思はざるを得なかつた。

彼は思つた、彼は苦んだ、思つては苦み苦んでは思ふ、是彼の操に逢ひし以外の狀態である。一月以後の彼の日記には操のことを除くの外は何もなかつた。又操の顏を見れば喜ぶのである。此何が故だらう、何の爲だらう、彼自身すらも解らなかつた。「我は何故彼を愛するのだらう、何故彼に愛せられたのだらう、我は何等の彼に要求すべきものはないのに」とは彼の日記の一節である。彼は操に逢へば、帝王の席にでも出された樣に顏も上げられぬ、口も利けぬ、極めて冷淡の風を裝ふのが常である、彼は又此の理由をも知らぬ、唯本能的なのである、其で彼は筆を口に代へた。三日前に彼は指を切つて血書を送つた。

一學期の試驗も濟み、明日歸國もするので、必死の勇を奮うて今晩彼は操を訪問したのである。

彼は無感覺に歩を移しつゝ考へて居るのである。あゝ死に度なつた、モウ此の世に居度ない、王川電車の線路か、早十　時――、モウ電車は通ふまい、ヨシ瀛車がある、轟々たる音一度轟けば我は已に此の世に居ないのだ。我も自殺を卑んだ一人である、自殺の記事を見ては何時も唾し罵つた一人である。然るに今になつては、我自身が自殺しようとする、妙ではないか。我は大いなる理想を抱いて居た、此を遂げることが出來ずに死ぬのは實に殘念だ、我れ死んだら老いたる祖父や幼ない妹は如何に歎くであらう、併此の瞬間に於いて我が死を止めて呉れる者がないから仕方がないのだ。今や、死すると生きるとは全く我が力以外にあるのである。

彼は澁谷の踏切さして急いだ。闇の中からピューと瀛笛が聞える、此奴旨いと騙けて來ると黑い人が出て來てガラガラと通行止めた、馬鹿〳〵しい、死ぬ時迄も邪魔の神は付纏ふ。瀛車は無心にゴロ〳〵と唸りながら過ぎ去つた。彼は線路に付いて三間許往つて、東の方のレールを枕に仰向けになつて次の瀛車の來るのを今か〳〵と待ちつゝ、雲間を漏れる星の光を見詰めて居た。あゝ十八年間の我が命は此が終焉なのである、何卒死んで後は消えて了へ、さもなくば無感覺なものとなれ、あゝ此が我が最後である少き腦に抱いて居た理想は今何處ぞ、あゝ此が我が最後である、あゝ淋しい、一度でも好いから誰かに抱かれて見度い、あゝたつた一度でも好いから。星は無情だ。瀛車は何故來ないのだらう、何故早く來て我が此の頭を碎いて呉れないのだらう。熱き涙は止めどなく流れるのであつた。

（資料5）

特別寄贈作文

明治學院普通部第五年（秀才）

韓國留學生　李　寶　鏡

「前略」一體此んな不了見なことをする氣になつたのは『人は萬物の靈長なり』なんと云ふ誤つた己惚心が動機なので。『人は萬物の靈長なり』と云ふかわりには、萬物に異る點がなくてはならぬ。そこで道德なるものを拵へる。法律なるものを拵へる。家屋なるものを拵へる。機械なるものを拵へる。其れで文明だの野蠻だのと騒ぐ。其處から神聖だの、卑劣だの、善だの、惡だのと勝手なものを拵へ、勝手な名前を付け、勝手な意味を附して、滑稽なまねを遣り出す。其れで貧者を生ずる。富者を生ずる。性慾の滿足を節減する。人生の生命なる快樂を減ずる。して遂に苦み、泣き、呻く。所謂自業自得である。何を以て善惡の標準を立てたのだらう。神聖卑劣の標準を立てたのだらう。實に可笑しいではないか。若し神の旨を行ふのが　生の本務であるとせば。彼等は益ゝ罪惡を作つて居るのだ。而して神よ〳〵を呼ぶ其神に背向けて走りながら神を呼ぶ滑稽である。余は決して本能に從へば全く苦痛といふものが無く幸福ばかりがあるといふのではない。只此れ吾人の自然であつて、而して思ふ存分時間は短からうが長からうが快樂を味ふことが出來るのだと云ふだけのことさ。快樂は吾人生存中の最大否全體の目的であるからである。然るに人間は動物でありながら、動物たらざらんとする。其處により多き苦痛が有るのだ。克己――果して何の價値かある。恰も蛙が人のまねをして兩足で歩く樣なものさ。

『自然に歸れ！』此處は吾人の處るべき所ではない。此處は吾人の自由を束縛する所である。天賦の性を傷くる所である。自然に歸れ！（下略）

李寶鏡君

解説　李光洙（イグアンス）について

佐藤　飛文

李光洙（一八九二～一九五〇？）は朝鮮最初の本格的な近代小説を書いた作家であり、「朝鮮近代文学の祖」「韓国のトルストイ」「韓国のシェイクスピア」「韓国の夏目漱石」「韓国の島崎藤村」などと評価されている。幼名は李宝鏡。号は春園・孤舟・長白山人などがある。

一八九二年、平安南道定州に生まれる。一九〇五年に渡日。一九〇七年に大成中学から白山学舎を経て明治学院普通学部三年に編入した。この頃、友人たちと大韓少年会を結成し、回覧雑誌を発行しはじめる（**資料6**）。一九〇九年に日本語で書いた処女小説「愛か」が明治学院同窓会誌『白金学報』に掲載される（**資料4**）。一九一〇年卒業後、帰国して五山学校の教員となるが、一九一五年再渡日して、早稲田大学で哲学を学ぶ。一九一七年に朝鮮近代文学最初の長編小説「無情」を『毎日申報』に発表。一九一九年に東京で「二・八独立宣言」（**資料7**の106ページ～109ページに掲載）を起草して上海に亡命。李承晩・呂運亨・金九・安昌浩・朱耀翰らと共に上海の大韓民国臨時政府の樹立に参加し、機関紙『独立』（のちの『独立新聞』）の編集局長、社長をつとめた。一九二一年に帰国し、東亜日報編集局長・朝鮮日報副社長などを歴任。一九三七年、修養同友会事件で検挙され半年間服役。一九三九年、朝鮮文人協会会長に就任。一九四〇年、香山光郎と創氏改名し皇民化政策に協力。朝鮮人学徒出陣の勧誘演説なども行った。植民地支配からの解放後の一九四九年に反民族行為処罰法により拘束されたが、病のため半年で釈放。朝鮮戦争中に拉北され、一九五〇年に病死したとされている。

資料3は、李光洙の「나의 少年時代―十八歳 少年이 東京에서 한 日記」の日本語訳である。この日記は純文芸誌『朝鮮文壇』第六号と第七号（一九二五年）に掲載されたものである。一九〇九年～一九一〇年（数え年で十八歳）の頃の日記を一九二五年（三十四歳）になって発表したものであるため、手を加えられている部分も少なくないと思われる。しかし、大韓帝国が保護国化され、さらに植民地化（併合）されようとしていた時期に、李光洙が明治学院でどのような留学生活を送り、どのような本を読み、どのようなことを考え、どのようなことで苦悩していたのかを知る上で貴重な資料である。

李光洙は明治学院に入学して初めて聖書を読み、キリスト教と出会った。彼の代表作である「無情」の主人公・李亨植と「有情」の主人公・崔哲は、ともに東京のキリスト教学校での留学を経験したクリスチャンの教師という設定になっている。明治学院でのキリスト教との出会いは、彼の文学作品に大きな影響を与えたと言える

だろう。なお『無情』は波田野節子訳で二〇〇五年に平凡社より、『有情』は池明観監訳で一九八三年に高麗書林より日本語訳が出版されている。

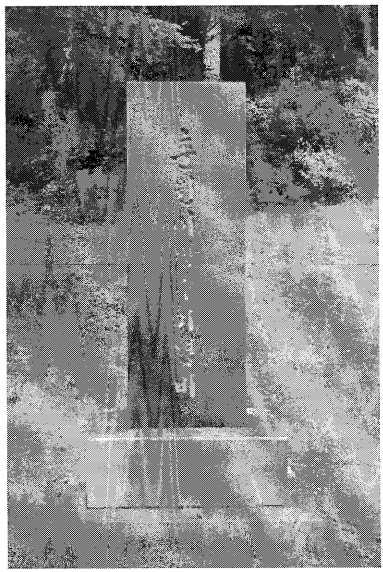
李光洙は自伝的小説「金鏡」（一九一五年）の中で、「自分には『火の柱』と『我宗教』と『海賊』を読んだ東京白金」と振り返っている。李光洙は中学時代前半に木下尚江の『火の柱』に衝撃を受け、さらに山崎俊夫の紹介でトルストイの『我宗教』と出会った。そして中学時代後半（この日記の書かれた時期）には、洪命憙の影響でバイロンに心を奪われてゆく。さらに夏目漱石やゴーリキーを読み、当時流行していた島崎藤村や田山花袋らの自然主義文学とも出会っている。そのような文学との出会いの中で、李光洙自身も筆を執り、創作活動を開始したのである。

李光洙はこの日記の他にも、「金鏡」（一九一五年）や、「多難な半生の途程」（一九三六年）、「彼の自叙伝」（一九三六年）、「私」（一九四八年）、「私の告白」（一九四八年）などの自伝的小説や告白録の中で、明治学院留学時代のことを書いており、翻訳が待たれる。

資料4は李光洙の処女作「愛か」である。この作品がハングルではなく日本語で書かれたものであり、その掲載誌が『白金学報』だったという点に注目したい。李光洙の作品を初めて世に出すという、朝鮮近代文学史の中で重要な役割を、明治学院の同窓会誌『白金学報』が果たしたのである。なお「愛か」は、一九七一年に大村益夫氏により発見され、金允植氏の手で韓国語訳もされている。

資料5は雑誌『富の日本』に掲載された李光洙の作文と写真である。大村益夫・布袋敏博編『近代朝鮮文学日本語作品集（一九〇一～一九三八）創作篇Ⅰ』に収録されており、本資料集に転載の許可を戴いた。緑蔭書房代表の南里氏に感謝する。

李光洙は一九四五年八月の植民地支配からの解放後、京畿道南楊州市の奉先寺に蟄居していた。そのことを記念して一九七五年に建立されたのが春園李光洙記念碑（左の写真）である。碑文は朱耀翰が作成した。



春園李光洙記念碑

（資料6）

兵「将軍殿カカカ敵襲ニ檢船カ見ヘセス
李「将軍殿如何致レタモノテセウカ
銃ヲ出シテ打タナイ内、トウレテ火薬庫ニカヤク
兵「然シ将軍殿銃丸カ届距離ニ達スル位テモウ
李「ソレテハ二発ヲ一度ニ放テ

圖解 李舜臣ト亀船

新韓少年ノ運命

記者

一年振リニ出タル新韓少年カ三ヶ月ニシテ又ノ國數ニ遭遇セリ此ハ他ニアラス編輯ノ任當リシ李宝鏡氏カ學資ノ不足ト家事上ノ都ト相因リ親愛ニル新韓少年ヲ置イテ歸國セラルヲ以テ新韓少年ヲ培養スヘキ人ヲ失ヒタル為ニシテ恰モ幼兒カ母ヲ失ヒテ乳ニ離レタカ如シ李君有リシカ為メニ実ニ我新韓少年錦衣ヲ着テ肥鴨ヲ食ツ肥鴨ヲ食ツ君ノ間ニ轉々シタルニケラサルカ

其後少年會ニ於テ候補者ヲ選シタルニ適當ル後任者ヲ得サルヨリ此重大ナル責任ヲ余

愛ハセラレ四月ヨリ之ヲ擔任スルニトナレ
リ諸君ハ如何ナレハ余ニ此任ヲ負ハシメタル
カ余ハ決シテ之ニ勝ユヘカラス然レトモ大韓
男子ト生レナカラ此程ノ任ニ勝ヘストハ或ハ
大韓國民ノ恥辱トモナルヘク無資格ヲ顧ミス
許諾シタル所以ナリ而シテ余ハ少年ニシテ本
國ヲ出テ國語スラ充分ナラス況ンヤ作文ニ於
テヤ其未達ナルハ言ヲ待タスシテ知ルヘシ故
ニ記事ハ總テ國語体ヲ以テセヘク諸君ハ讀書
ニ不便ナル点ハ容赦セヨ又授書等モ概ネ本文
ノママ記載スヘケレハ授書家ハ前ニ比シ一層
文法ト用字ト修辞等ニ注意セラレンコトヲ望

ム

編輯者タルノ才格ヲ有セサレハ以前ニハ及フヘクモ有ラサレトモ新韓少年ヲ責リ又ハ粗衣ヲ着ケシムルコトハ無カルヘシ諸君ハ若シ缺点ヲ見出サハ其所思ヲ記者ニ寄セテ後日ヲ戒メ以テ新韓少年ヲ培養セラレンコトヲ希望ス終リニ臨ンテ金瓚永、金一両氏ヨリカノ及ハン限リ助力セシコトヲ誓ハレシヲ謝シ併セテ少年會員諸氏カ両氏ノ如ク企業心ニ富ミ後日大韓國ノ社會ニ起ツ日ニ當リテ皆一心協力シテ実業、宗教、政治等各方面ノ発展ヲ圖リ以テ光ヲ趣カサンコトヲ望ム

ム

現時吾人ノ責任重大ナルハ　海風

造物主ハ天地ト萬物トヲ造リテ萬物ノ霊主タル人間ヲ之ニ居ラシメ此等ヲ統察セシム故ニ人ハ任意ニ之ヲ用ヒ此ヲ食シテ生活ノ保ツルナリ昔時ニ在リテハ人類稀少、智識浅薄ナルヲ以テ耕作セス家屋衣服無キモ岩穴又ハ樹上ニ居處シ木葉木皮等ヲ衣服ヲ作リ自然ニ成熟セル菓実ト自然ニ生長セル禽獣ノ肉トヲ以テ飲食ヲ為シ生活ヲ營ミタルモ（現今ニ於テモ熱帯赤間ノ地ハ尚ホ然リ）人種漸ク繁榮シ智識発達スルニ至リテハ強者ハ弱者ヲ害シ利ヲ取ラントシ弱者ハ之ニ害セラレス奪ハレサラン

トス是ニ於テカ競爭ヲ生シ今日ニ至リテハ其益々激烈ヲ極ム

他ノ動植物ニモ亦競爭有ルコトハ容易ニ見ルヲ得ヘシ長閑ナル春日ニ散歩ヲ試ミヨ樹木青々トシテ草花萬開ス蝶ハ花ヨリ花ヲ辿リテ喜ハシケニ舞ヒ小鳥ハ枝ヨリ枝ニ移リテ樂シケニ歌フニアラスヤ詩人ハ此ヲ詩ト作シ画家ハ此ヲ花ト作シテ賞讃スルモ其実状ヲ考フレハ此世上ハ決シテ無事平穏ノ時ニアラサルナリ樂シケニ舞フトコロノ蝶ヲ見ヨ、此カ幼虫タリシ時ハ幾何ノ幼葉ヲ食ヒタル結果ナルカ又歌フ処ノ鳥ヲ見ヨ彼ハ幾何ノ昆虫ヲ食ヒタル結

三

果ナルカ、又夫ノミニアラス今モ尚ホ常餌ヲ求メン為メ舞ヒ耳ツ歌フニアラサルカ小鳥ハ蝶ヲ食ハントシ樹上ニハ鷹アリテ小鳥ヲ食ハント狙フ、蝶ノ命、鳥ノ命ハ風前ニ於ケル燈火ノ如シ誰カ此ヲ無事平穏ニ樂シムモノト謂フヘキ動植物ハ皆食ハントシテ競爭シ食ハレサラントシテ競爭スルノ実態ナリ

右論スルカ如ク競爭ハ吾人モ亦免ルルコト能ハス而シテ吾人ノ競爭ハ古人ノ競爭又ハ動植物ノ競爭ト其理ハ同シキモ其勢ハ同シカラス是即チ二十世紀ノ生存競爭ニシテ此競爭ニ勝ツモノハ誰ソヤ即チ智識優勝ナルモノ即チ是

ロニ東洋平和ヲ唱フルモ我韓民ノ為ニハ不倶戴天ノ讐敵タル倭國ノ所業ナルコトハ諸君ノ既ニ知ル所タリ

彼ノ毒手ノ酷刑ヲ懼レス二千萬民族ノ代表者トナリテ腰ニ短銃ヲ帶ヒ彼ノ五千万人民ヲ代表シテ酷政ヲ擅行シタル伊藤ヲ一聲砲発ノ下ニ斃シタル安重根氏カ斷頭台ニ歩ムノ日ハ即チ今日ナリ、我韓人ハ此ヲ何ノ日ト知レリヤ五尺ニ過キサル一個人カ一尺ニ充タサル短銃ヲ以テ一個ノ倭漢ヲ斃シタリ然レトモ氏ノ志タルヤ亡國ヲ復興シ塗炭ノ民族ヲ救ヒ出サンカ為ニ自己ヲ犧牲ニ供シタルモノニアラサラン

ヤ。然リ氏カ斷頭台ニ進ムノ時、快々トシテ進ミタルカ、然ラス、然ラハ憂慮ノ心ヲ以テ進ミタルカ、然リ氏カ臨終ノ憂慮ハ死ヲ憂フルカ為メニアラス愛妻愛子ヲ慮ルカ為メニアラス即チ氏ノ憂慮スル所ハ氏ノ後ヲ継ク者ノ有無ニアリ

然ラハ吾儕カ唯タ氏ハ偉人ナリ、烈士ナリ、義士ナリトテ言語ヲ以テノミ氏ヲ喜ハシメナハ氏カ我國家民族ニ対スル熱心ノ万分一ニ報スルコトヲ得サルヘシ即チ吾儕カ真心ヲ以テ氏ヲ賞讃シ真心ヲ以テ氏ノ熱心ニ服セントヲ欲セハ其後ヲ継カサルハ當然ノ理ナリ其後ヲ継カント欲セハ吾儕ハ獨立軍ヲ起シテ無道ナル敵軍

五

ヲ一聲放砲ノ下ニ尽滅セシ我國家民族ヲ救ヒ出サザル可ラス故ニ吾人ハ隆熙三年十一月二十六日ヲ以テ大韓獨立軍第一回ノ敵軍攻撃日トシ同年三月廿六日ヲ以テ第二回獨立軍叫合日ト認ムルモノナリ茲ニ氏ノ詩ヲ紹介スヘシ

獄中ニ在ル安重根氏

ナリ、智識ヲ優勝ナラシメントセハ何方面ニ進ムヘキカ、即チ學ナリ

嗚呼故郷ヲ離レ親戚ヲ棄テテ海外ニ來レル我少年諸君ヨ！如何ナル目的ヲ懷ヒテ來レルカ學ンテ優勝者タランカ為ニアラサルカ、更ニ云フ寸陰ヲ惜レ競フテ現時吾人ノ責任ヲ全フセヨ、少年諸君!!!

大韓民族ニ対スル隆熙四年三月廿六日

所感生

目ヲ開イテ韓半島ヲ見ヨ國既ニ亡ヒ人族塗炭ニ陷リテ悲鳴ノ聲、天上ニ達シ悲憤ノ歎、地下ニ及ヘリ蓋シ此所業ヲ為シタル者ハ誰ソヤ是レ

大丈夫處世兮　其志大矣
時造英雄兮　英雄造時
雄視天下兮　何日成業
東風漸寒兮　必成目的
鼠窺々々兮　其肯此命
豈度至此兮　時勢固然
同胞々々兮　速成大業
萬歲々々兮　大韓獨立
萬歲々々兮　大韓同胞

困苦　T.H.生

夫レ水ハ霜雪ヲ經タル後大材ヲ成シ鐵ハ鍛鍊ヲ經タル後良器ヲ成ス、吾人ノ材器ノ成就モ亦

困難ノ経歴ヲ経タル後ナラサルヘナシ誰人ト
雖モ春日ノ温和ナル天候ヲ顧ミサル者無キモ
身体ノ健康ヲ害スルハ此時ニ越ス時無ク小大
寒節膚ヲ刺スノ寒風ヲ悦フ者無キモ身体ヲ康
強ナラシムルハ此時ニ越スハ無シ蓋シ安樂ハ
人情ノ樂ム所困苦ハ人情ノ悪ム所ナルモ安逸
ノ習ハ人ノ心志ヲ懈怠ナラシメ体質ヲ軟弱ナ
ラシメ困苦ノ習ハ人ノ心志ヲ勤勉ナラシメ人
ノ身体ヲ堅固ナラシム故ニ安逸ハ人ヲ害スル
ノ悪器ニシテ困苦ハ人ヲ利スルノ良器ト謂フ
ヘシ

古人言アリ若ハ樂ノ種ニシテ富貴ハ懈ノ好

ナリト聖ナル哉此言、吾人カ銘心佩服スヘキ者ナリ、人此世ニ處シテハ富貴、安逸、困難、貧賤各々同シカラス懈惰勤勉ノ志心、剛勁柔軟ノ体質亦異レリ、試ニ觀ヨ、富貴家ノ子弟ハ幼ヨリ長スルニ至ル迄美衣美食、財產ヲ恃ミテ驕傲自ラ居リ心志懈惰ニシテ躰質柔軟ナリ、一事ヲ成サスシテ一生ヲ虛送ス何ソ人ノ天職ヲ盡スモノナランヤ然レトモ貧賤ニシテ困苦ノ中ニ生長シタル者ハ躰質剛勁ニシテ歳寒ノ松柏、百錬ノ金鐵ニ等シク百折不屈、萬折不回以テ完全ナル人格ヲ成シテ非常ノ事業ヲ成ス故ニ困難ハ吾ノ良師ト謂フヘシ孟子曰ク天、大任ヲ人ニ授ケント欲

スル時ハ先ツ其心志ヲ困難ナラシメ其筋骨ヲ困疲セシメ其事業ヲ沸乱セシメ其志ヲ動カサシメタル後之ヲ授ケト故ニ學者ノ賢哲功名家ノ英雄ハ皆困難ヲ経タル後ニ其名ヲ為シタルモノナリ

新韓少年ヲ讀ム

遠風生

日暖ニ風和ラク春三月ノ好時節ナリキ三四日降リ續キタル梅雨ハ今朝始メテ晴レヌ外出セントスルモ道路濘悪ニシテ遊戯タモ為スヲ得サル程ナレハ室ニ閉籠リテ徒然ナルママ新韓少年発刊日ノ差迫レルヲ思出シ書棚ヨリ少年第二号ヲ取出シテ先ツ論壇ヨリハ説ニ至ル迄

讀ミ続ケ行クニ総テ獨立自由ノ意味ヲ含マサルハナシ

喜フヘキハ我少年ナルソ其精神ヤ喜フヘシ賀スヘキハ我少年ナルソ其熱誠ヤ賀スヘシ美シキハ我月報ナルソ其文句ノ美シキ

我少年諸君ハ遠ク世界ノ各國ヲ望ミ見ヨ吾等ノ如キ少年ハ何処ニアルカ此ノ如キ月報ハ他ニ又有ラサルヘシ

我少年諸君ハ深ク將來ヲ思ヒ終始一貫シテ重大ナル我月報ヲ保全セヨ我少年ハ各自獨立軍ノ鉄拳ヲ帶ヒ我月報ハ吾獨立戰勝ヲ記録スヘキ任務有リ願クハ勉勵奮発セヨ。「白頭山石磨ヘ

刀尽、頭満江波飲馬無、東見二十未平国、後世誰称大丈夫」ノ詩ハ実ニ真実痛快ニシテ勇敢ナル我少年ノ氣像ヲ現ハシタルモノナリ

君は伊處へ　孤峯

（原文日本文）

金剛石も磨かざれは玉の光を放たず。日用の鈦さへ鍛錬せざれは不要物たらんのみ、これ真理ニなりて天地開闢と同時に空氣に含まれて世の中を満し居るのか苟くも空氣を呼吸して命をつなくもの一人たりとも此の真理に脱する能はざるか如し、試に思を凝らして人生を顧みよ、何人か苦痛を感せすして一生を送るものそ、

小供の世に生まるるや、赤手を胸に懐き、ごか〳〵と叫ふ既に苦痛を覚（たるにあらずや、されば苦痛を免るる能はざるは、言を待たざるなり、金剛石の磨かれて玉の光を放ち、鉄の鍛錬せられて日用物となるか如く苦を能く忍ふものは偉人となり苦を能く忍はざるものは凡人となるなり、古の聖賢偉人は苦痛を免れんため、道徳法律風俗等を作りたりとは余の意見なれとも、この道徳法律等の作り物は苦痛を減ずるにあらず返って苦痛を増したり窮屈を増したり、されと世の生活は年を経ると共に益る苦痛を増すなるへし

九

聞けは君は幼時に父母を失へりと、これ既に君の生涯は苦痛なるを証せしものにして第一の苦痛なりき、片親を失ふさへ小供に取りてハ無上の悲哀とゐふにあらずや、況や両親悉く失ひて曠野に路を失ひて歩く羊となりしその身は思ふもの誰か袖を濡さざる、其受くる苦痛たるや甚酷にして成長するに従ひて減ることなく日々重なれは苦痛も君の身に重なりぬ、余は君の幼時の景況を知らすと云へと、現時の君の悲境を見るに幼時の遭遇は見さりしも心に写り自然に可憐の念胸に集り鼓動を増さしむ、君十二歳になるや、なつかしき故郷を離れて京城に

趣き東窩西食の有様目にありくと見て其哀なる言葉を知らすと云へと君の天才は早より顯はれたれは住京二年ならすして或る士官に注目せられ十四歳に日本に留學すを得たりと耶蘇の庇に生まれ貧家に育てられたるにも拘はらす十二歳の時聖殿の中にて學士と神を論して天才を顯はせしと相比へて考ふる時は何人か君を羨慕せさる

日本に渡り學ぶも一年ならすしてモハヤ日本語に通し大成中學校へ入り到着地の知れさる生涯の海を乗り出て人としたるに邪魔の神に妨害せられて退學し悲涙を流せりと、世の中は

丸て斯樣のものなりとは余の深く感し居りしに此を聞きて益々感に打たれぬ

幸なるかな、無情なる彼の政府も時には情ある仕事をするかな、君を補助として三年の學費を與へりとは、噫！悲慘とも幸福とも云ふへき志れ能はさる白金のライフはここにて始まりぬ、白金のライフは君の天才をして、益々進ましめ益々堅固ならしめたり明治學院三年級へ入るや心も稍落着きたれは無趣味なる寄宿舎の汚き房にて読書を以て日を暮らせり又友を愛する情多くして君には一人の最も親友ありきと聞きたり寄宿舎生活を忌むに至り貸間に身を安め

飯屋に腹を充すと云ふ生活をしたり、苦を重ぬると同時に天才も発起せりと思はるなり、貧家に住むに堪りてはドルスドイの人物を崇拝し耶蘇を信し朝夕に祈禱を怠らず真暗き夜の中に死の様に静なる林樹の中に伏して驚くほと吹く風の音を聞きつつ祈りしことありきされと如何にせ人君の天才あらさるを、暫らくしてバイロンの詩を手にするや心全く易りて不信者となり喜んて小説を読み愛情も深くなり昨春には操を愛し此か為め文を作り詩を作り等しく先つ名を白金學報に高め次きて中學世界富の日本等の雑誌に君の聲名を耀かしぬ

噫君の技量は世に紹介するにあたつて悲痛の波は寄せ來り君をして學の海より去君の前途は何処へ……何處へ……思へは……我少年會は君の如き天才を出すを誇とす願はくは虎の勢を以て思ふまま進み〳〵て早く到着地を見付けられよ噫！孤舟たる君は何処へ……何處……思へは……

汝ヲ醒サン　　玉守

霜雪変ラサル我少年　　錦繡江山三千里
長夜乾坤醒メスレテ　　華堂春睡遲々タリシ
我同胞ノ生活ヲ　　耳ヲ傾ケ聞ケヨカシ
錦繡江山ニ古人等ハ　　容貌ハ樵々トシテ

髻ヲ束ネテ
二十世紀ヲ夢ト見テ
竹ヲ杖ツキ草鞋着ケ
四海ノ客トナリ
文明ノ攻撃ヲコトトナシ
村夫子ニ面會シ
杯ヲ傾ケツツ
憐ムヘキモノナラスヤ
遷々タル春睡醒マセカシ。
耳ヲ掩フテ文明ヲ聞カス
子弟ニハ孔孟ヲ學ハシメ
二十歳ニシテ業ヲ成シ

獨リ東方ノ禮儀ヲ唱ヘ
旅風呂敷ヲ肩ニ掛ケ
天カ下ヲハ家トシテ
行先知レス逍遥ヒテ
孔孟ノ書齋ヲ尋ネツヽ
詩會ヲ開イテ
大聲ニ吟スル樣ハ
自由鐘ヲ一度鳴ラシ
錦繡江山ノ中流輩ハ
獨リ古人ヲ慕フテ
十歳ニシテ增セシメ
守錢奴トナリテ

二

頑固汚習ヲ以テ導キ、同模型ノ人物ヲ造ラント
暫シノ暇モ無ク奔走ス憐ムヘシ彼ノ中流輩
吾等少年一心モテ彼ノ苦ヲ救ヒナン。
錦繡江山ニ青年輩ハ故生家ノ出入ヲ第一トシ
音律ノ集團ヲ事トナシ人生七十古來稀ナリ
春一度去リテ再ヒ來ラス遊ハスシテ何カセント
故生ノ手ヲ把リナカラ春來レハ花ヲ眺メ
夏トナレハ山水ニ遊ヒ秋トナレハ紅葉ヲ狩リ
冬トナレハ梅花ヲ賞ス幾年ナラスシテ失敗シ
鉄鎖ニ傳セラレテ苦役ニ從フ彼ノ樣ヨ
憐ムヘシ彼ノ青年輩ヲ吾等少年一心モテ
救ヒ明ノ道ニ導カン

檀箕羅廉四千載
忠孝眞節ハ天性ニシテ
少年半島二千萬
　　野球部ヲ祝ス
嗚呼吾等少年ノ
吾等ハ先ニ
今日團合ノ二字
隆熙三年ノ頃ニハ
吾モ思ハス
勇氣有ル我少年
我等ハ堅キ心ヲ以テ
五月六月ノ其内ニ

檀花世界三千里
禮儀廉恥ハ人道ヤリ
汝カ民族ヲ一度醒サン
　　フ、六。ロ生
團合何ソ遲カリシ。
相一致セサリシカ
此ノ如ク成立シタルカ。
此ノ如ク成立セントハ
諸君モ期セサリシナラン。
今我言ヲ聞ケ
之上ニ同盟ヲ結ヒ
此ノ如ク華國ニ爲リタリ。

遊ハン哉我少年
我一度ノ遊ハ
陽春德ヲ延ヘ
飛ヒ去リ飛ヒ來ルボールハ
一度バットヲ執リテ立チ
天ヲ衝クカト疑ハレ
我趣味ヲ傳フルカ如シ
吾等ノ快樂
バットヲ抛ケテ走ル時
幼キ顏ニ勇猛ヲ表ハシ
獨立軍ノ資格有リ
喜ハサルヲ得ンヤ

舞ハン哉少年等ヨ
後日ノ教訓トナルヘシ。
萬物光ヲ出スノ時
我等ノ團合ヲ喜フカ如シ
勇マシク一度打テハ
空中ニ飛ヒ去リテ
友ノ手ニ落ツル時
何ニカ譬ヘン。
其風采ヲ望メハ
彗星ノ如ク前進ス
禽獸ト虫モ之ヲ見ハ
勇氣アル大韓少年

分ルレハ必ス敗ルルノ理ヲ忘レス、後日事業ヲ成ス時
分擊合迎為シテ見ン　嗚呼好ニ哉我少年

秋波生

余ノ歎息

悲哉我身ハ　何ヲ為サント生レシカ
呱々ノ聲ヲ擧ケテ　赤手ヲ握リテ生レシ時
何ノ考モ無カリシカ　成長スルニ從ツテ
生レシ所以ヲ考ヘナハ　暗々トシテ知リ難シ。
無邪氣ナル孩兒ヲ見ハ　誰カ之ヲ羨マサラン
何ノ貪リモ無ク　何ノ雜念モ起ラス
只タ父母ニ依托シテ　空腹ナレハ泣キ
滿腹シテ眠ル　然ラハ是レ世ニ生レタル所以カ
老トモフ不快物ト　金錢トモフ方害物カ

生レサヘセサリセハ
成長スルニ從ッテ
父母恭敬ノ念薄ラヤ
愛情去リテ
怨望猜疑起リテ
金錢ハ素ト
之ヨリ色々ノ苦勞ヲ生ス
好物ヲ見テ之ヲ得ントシ
此心ナントスルモ
食ハントセハ金無カル(カラス)
爭ヒハ即チ生存競爭

或ハ是レ所以トモナラン
父母ニ依托スルヲ厭ヒ
父子ノ愛情去リ
怨望猜疑起リ
殺人ノ背倫ヲ犯ス。
潔白ナルモノナルモ
之ヲ貪ラントスルモ侭ナラス
美味ヲ見テ之ヲ喰ハントス
食セサレハ生キサル世ノ中
金ノ必要生シテ爭ヒ起リ
生存競爭ハ苦痛ヲ生ム

二

悲哉我身ハ
倭奴ノ國ニ來レルカ
何等ノ考モ無ク
其煩累ニ堪ヘサルヨリ
其壯美ヲ見ンカ為メ
平和ヲ得ンカ為ナリシモ
心ノ愁ヒ絶ユル時ナク
塗炭ニ苦シミ
是亦余ノ愁ナリ
口ニ言フモ実行無キ
教育無ク怠惰ニシテ
死途ニ入リツツアル

何ヲ為サント家ヲ出テ
只タ國ヲ出ル時ハ
第一ニハ學校ニテ
第二ニハ外國ニ往キ
第三ニハ勉強シテ
嗚呼四年ノ教育ハ
二千万ノ同胞ハ
壓制下ニ立テリ

大韓民族中ニ
何ノ慮ハカル所無ク
彼ノ民族ヲ救フヘキ人物

一五

何時ヵ世ニ出ルコトアリヤ

救ハントスルモ術無ク　故任セハ不忠トナラン

如何セハ可ナランカ

國家ハ偖テ置キ　先ツ我家族ヲ見ルモ

家業日ニ衰頽シテ　貧弱ニ入ラントス

救ハントスルモ業無ク　故任セハ不孝トナラン

進退ヲ知ラスシテ　只タ因窮スルノミ

三

悲哉我身ハ　何ヲ為サント生レシカ

何レノ學科ニテモ　深奥ニ入ラントセハ

前途暗々トシテ　學ヒ難シ

耶蘇ノ教育　我ヲ培養シ來リシモ

我ヲ包メル此吾ハ　吾ヲ疑フテ
耶蘇教ニ遠サカラシメ　牧師タルノ望絶エ
幼ニシテ父母ニ別レ　交際禮儀ニ注意セス
何心ナク送リシカ　今日ニ至リテ我身ハ
何處ニ往クモ排斥セラレ　偉大ナル政治家トナリテ
我大韓ヲ救濟スルハ　夢ニタモ期シ難シ
解ス可カラサル學校ノ標準　漫文、國文、作文等ハ
不成績ヲ通知シ來レリ　世界ニ於ケル屈指ノ
文豪トナリテ　一度筆ヲ把レハ
誰人ヲモ服從セシメ　苦シミツヽアル我國民ヲ
文明ニ進メシメ　平安ヲ得セシムルハ
不可能ナルカ如シ

一五

手ニ技能無ク　圖畫ニハ落第点ノミ
何ソ工業家トナリ　大砲鉄艦ヲ製造シテ
國家ニ納メ　彼ノ倭奴ヲ撃退スル時ノ
用器ト為スヲ得ン
一々言ヘハ　只胸ヲ痛ムルノミ
何ノ効カ有ラン　遂ニハ致シ方無キママ
盗賊ヲ為サントスルモ　勇氣無ク
自殺セントスルモ　死ハ恐ロシ
憐ムヘシ我身　如何ニセンカ

旅行の雑感（原文日本文）　孤舟

◎三月二十三日午後三時車中にて

此を書くのは海田市と廣島との間た空はカ

ラット晴れ渡りて熱い日は夏の様に車窓にカンカンと迫り付ける、一日中の天氣の変易としては呆れるほとてはないか

僕は朝の中には餘程元氣付いて居たけれともモーウンザリしてろつた、何うして西比利亜の旅行か出來たらうと思つた、一体僕は、東京に居る時分から大層身体を悪しくしたせいたろう此人なちや愛相か盡きてろふた

名にし負ふ瀬戸内海の景氣も餘り僕の興を索かなかつたねーァいも廣島へ着くまたから止さう

今晩搭船する積た

一七

◎三月二十三日午后八時半下の関に於て

餘り度々なのてさそやかましく思はれるてしよ然しこれは僕に取つて最も紀念すへき旅行たから

ソラ海か見えた、濃き緑の海たよ、真青くて黒い程た寝ほけて居つた人の顔か又々南へ向ふた、宮嶋たと口にしやへつたお可笑しくて仕様かない何たか、馬鹿々々しいよふな、氣かする

はひと云ふステイシヨンかある人た、ソコへ来かゝると、小供等か萬歳を唱へてくれた、ふゝをラブと解すると面白ひ、なるほと田舎の

中には小屋か澤山あつて戀するに適して居
そーた、アーハー馬鹿なことを云つたねー
下関阜頭月色蒼（アー何時又此を見るたらう）

◎廿四日釜山驛にて
朗らかな朝だ、空は何處までも眞蒼に晴れ渡
つて鮮い日の光線は天地に滿ち溢れて居る、
遥かにボウット霞んだ韓山か目に入つた時の
我心持は何うてあつたらう、何だか、韓山には
大陽の光線も宇宙に充ち溢れる大陽の光線
も此韓山には照らない樣だ

◎同二十四日京釜線中にて
本日は釜山鎮の市日とかて多くの白衣の國

人の牛を索きて集るを目撃致候
白衣は着したれとも心は白からさる様見受
けられ候且亦特に感し候は牛と國人とに就
いてに候他にあらす牛は能くも國人の状態
性質（皆今日の）を表するものと存し候換言す
れは牛は國人のシムボルと思はれ情なき次
第に候嗚呼牛のシムボルを棄てて虎のシム
ボルを得るは何時かるへきか、起て！我少年
諸君！
韓山は老いたるにて候青色黄毛に変し黄毛
さへも又禿けかゝりて幾何ならすして、数千
の韓山は全く赤沙に成り果つへきや疑なく

候

斯くして結局韓土ハ熱沙漠々たる沙漠になり青邱は空しき歴史的名称となりて後人の好奇心をのみ動かすに過ぎざるに至り候へし朝鮮民族の生命は韓山の草木と其生死興亡を共にすへきに候早々

◎少年諸君よ、此を聞いて如何なる感を呼起したるか、天帝、人生を造る時皆等しく二目二手二脚を賜はりたるにあらずや何の不足する所有りて彼の倭國の為に壓制を受くるか、耳目口鼻を俱有する新韓少年諸子は之を思ひ歳月を徒費せずして自己の目的と自己の天

一九

力を発揮して彼の目的地に急げ、新韓を肩に負へる大韓少年等よ

少年會天地　　倦々生

◎李氏義捐　今回明治學院普通部ヲ好成績ヲ以テ卒業セラレタル李寅彰氏ヨリ本會ニ賛成シ財政ノ窮乏ヲ惜マレ金五円ヲ送付セラレタルニ対シ謝禮ノ意ヲ表ス

◎野球聯合　昨年十月我少年會野球部ニ一大凶事起リテ八九名ハ野球部ヲ退イテ別ニ大極倶樂部ヲ組織シタリシカ今春ニ至リ金瓚永徐元淡、金一三氏ノ尽力ニ依リ又聯合シテ少年會野球部カ盛旺トナリ本會ノ親密倍々

其度ヲ加ヘタルハ三氏ノ勞苦ヲ謝スル処ナリ

◎李寶鏡氏の送別會、　三月二十日（日曜）

午後二時頃開會、參席員十二人ナリ金瓚永氏席長トナリ開會辭、歴史、祝辭及答辭有リタル後演說有リタリ演士ハ李圭延、金一氏外數人ナリシカ終リニ李寶鏡氏ハ立テ大要下ノ如ク述ヘタリ「我國留學生カ日本ニ留學シテヨリ三十年ヲ經タルモ人材出テサルハ其理想狹小ニシテ一身ノ平安ヲノミ主トナシ又其理想稍々高キ者ハ自惚ニ陷リ或ハ學校ニ滿足スルカ故ナリ願クハ諸君ハ此弊ヲ破リ思

想力ト讀書力トヲ培養シテ自ラ高フラス以テ其人格ヲ高メ學校ニ滿足セスシテ其天才ヲ發達セシメ以テ國家ノ良材タランコトヲ望ムト式終リテ餘興ニ移リヲトギバナシ又演劇等有リ其演劇ノ大要ハ「一學生學校ヲ卒業シ故郷ニ歸リテ愛妻ニ會スルノ情ヲ仕組タルモノナリ

會員消息　信々生

◎柳公繹氏ハ二月父喪ニ遭ヒ歸國シタリシカ葬礼ヲ畢リテ再次渡來シタリ

◎正月ニ歸國シタル金鉉載氏ハ歸國後好成績ヲ以テ平壤大成中學校一年ニ入學シタリ

編輯餘言

◎日氣溫和ニシテ試驗モ漸ク濟ミ我編輯室ハ之ヨリ倍々面白味ヲ加ヘントスサレト孤舟君ノ歸國ハ遺憾トスルトコロナリ◎原稿ノ集マラサリシ為メ非常ニ心配シタリシカ幸ニ金一金瓚永両氏ノ尽力ニ依リ非常ノ便ヲ得タルハ感謝スル次第ニシテ今後ハ假令一枚宛ニテモ寄稿アランコトヲ希望ス◎本令事務所ヲ芝区白金今里町七十九番地學海舍ニ移シタレハ暇ニ乘シテ来遊アレ又毎週日ノ會集モ此事務所ニ為ス筈

◎本号ニハ少年言海、世界名士等ハ記録セサリ

レモ容赦セラレタシ

◎次号ヨリハ問答倶楽部ト野球記事ヲ置ク筈ナレハ校書アリタシ問答ハ編輯室ヨリ出ス処ノ問題ニ答ヘラレタシ而シテ今回ノ問題ハ左ノ二題トス

一、日本ニ渡來ル時ノ心如何又目下ノ心如何（理想、思想、目的等ニ対シテ）

二、現今何學校ニ通ヒ且ツ毎日勉學ノ方針如何及其理由

隆熙四年四月一日

大韓少年會発行

（非賣品）

解説　『新韓自由鐘』について

佐藤　飛文

資料6は、大韓少年会発行の『新韓自由鐘』第一巻第三号（一九一〇年四月一日発行）を韓国内部警務局が日本語訳したものである。一九〇七年から一九一〇年まで韓国内部警務局長をつとめていた松井茂（一八六六～一九四五）が作成・収集した警察関係資料『松井茂博士記念文庫』の一つであり、現在この原資料は国立公文書館に移管されている。松田俊彦氏の監修のもと、『松井茂博士記念文庫旧蔵　韓国「併合」期警察資料』（ゆまに書房、二〇〇五年）として出版もされており、本資料は第一巻（五八七ページ～六三二ページ）に収録されている。

『新韓自由鐘』は、朝鮮人留学生たちの回覧雑誌であり、明治学院普通学部に在籍していた留学生たちが積極的に関わっていたものと思われる。第三号の巻頭文に、「一年振りに出たる新韓少年が三カ月にして又の困難に遭遇せり」とあるので、第二号は一九一〇年一月前後、第一号は一九〇九年一月前後に発行されたと考えられる。第二号までは弧舟・李宝鏡（李光洙）が編集を担当していたのだが、彼が明治学院普通学部を卒業し帰国したため、「困難に遭遇」したのである。編集を誰が引き継いだのかは不明だが、金瓚永と金一がアシスタントをつとめたことが記されている。大韓少年会の新事務所となった「芝区白金今里町七十九番地学海舎」は、朝鮮人留学生が多く下宿していた所のようで、白南薫が早稲田大学在学中に住んでいたことが確認されている。

本資料の内容は以下の通りである。

表紙

中扉　李舜臣と亀艦

「新韓少年ノ運命」　記者

「現時吾人ノ責任重大ナルハ」　海風

「大韓民族ニ対スル隆熙四年三月廿六日」　所感生

「困苦」　T. H. 生

「新韓少年ヲ読ム」　邊鳳現

「君は伊処（ママ）へ」　孤峯

「汝ヲ醒サン」　玉宇

「野球部ヲ祝ス」　「ス○生（金瓚永？）

「余ノ嘆息」　秋波生

「旅行の雑感」　孤舟（李光洙）

「少年会天地」　倦々生

・李氏義捐

・野球連合

・李宝鏡（李光洙）氏の送別会

「会員消息」　倦々生

「編集余言」

なお、「野球部ヲ祝ス」の作者「ス○生は金瓚永（김장영）だと思われる。金瓚永は明治学院普通学部を中退後、東京美術学校西洋画科に進み、後に雑誌『創造』の同人として表紙を担当している（**資料11**の173ページ～176ページ参照）。本資料の表紙や李舜臣と亀艦のイラスト、安重根のイラストなどを担当したのも金瓚永であろう。

『韓国野球史』（大韓野球会発行、一九九九年）によると、一九〇九年七月に第一次東京留学生野球団が母国を訪問し、ソウルの皇城ＹＭＣＡ野球団や平壌の大成学校、定州の五山学校、安岳の楊山学校などで交流試合を行った。東京留学生野球団二十五名のうち、明治学院出身の金一、李圭延、金瓚永、金観鎬らが参加。金瓚永と金観鎬は「そのまま東京に戻らず、平壌の大成学校でコーチをつとめ、朝鮮西北部の野球普及に貢献した。」との記述もある。また、この野球団に李光洙も同行し、安岳勉学会で講義を行ったという記録もある（『安岳郡誌』、『白凡逸志』など）。本資料に登場する「少年会野球部」のメンバーの多くが「東京留学生野球団」にも参加していたようである。

李光洙の自伝には、少年会と回覧雑誌について、次のような記述がある。

「〔一九〇七年頃〕国内では各地で義兵闘争が起こり、日本軍と戦っていた。私も義兵になろうかと考えた。誰かから指示されたわけではないが、何か秘密結社を作らねばならないと思い、私は同年代の七、八人で『少年会』というものを組織して、回覧雑誌を作った。会員は二十数名になった。みな十七、八歳の少年たちだった。雑誌も謄写版で刷った。その内容は悲憤慷慨した愛国的な詩・小説・論文・感想文などだった。ところが、第三号だったか第四号の時に日本官憲の目にとまり、私たちは警視庁に呼ばれて叱られた。説諭を聞くだけで済んだが、それから私たちは要注意人物になった。」（李光洙「私の告白」、一九四八年）

このようにして警察の説諭を受けていったんは発行禁止となった回覧雑誌を、名前を変えて復刊したものが、この『新韓自由鐘』であったと思われる。

第三次日韓協約後、松井茂が局長をつとめていた韓国内部警務局では、安重根の伊藤博文暗殺事件（一九〇九年十月）についての民心調査を行っていた。その時に押収され、日本語訳されたものが本資料である。「極秘資料」として保管されていたものが公開され、こうして日の目を見ることになった。「旅行の雑感」は李光洙の新発見資料であり、送別会での李光洙の演説大意も掲載されている。また「韓国併合」期の留学生たちの祖国への思いや日本観を知る上でも貴重な資料であるといえるだろう。本資料集への転載を許可してくださった、ゆまに書房編集部の上條氏・吉田氏に感謝する。

（資料7）

私の一生

白（ペク） 南薫（ナムン）

第三章　青年時代

（1）光進学校

金洛現氏は咸鏡南道出身で、朴泳孝氏を崇拝していた。甲申政変の失敗により朴氏をはじめその一党が日本、ほか各地へ亡命すると、金氏は開化党として目をつけられ、各地を点々とする中、長連のイエス教会が隆盛であることを聞き、熱心な信者である彼は長連に来て教会青年たちと接触し、「我々が将来独立国民になるためには実力がなければならない。実力養成は教育によるのだから、児童を教えねばならず、教える時には他国の文章である漢文を放逐し、我々の文章である国文を教えなければならない」と力説した。青年たちもこれに共感し、熱烈に支持した。

教育への思いは切実だったが、建物もなく維持する基金もなく、毎日のように集まっては空論のような議論を重ねた結果、礼拝堂（呉〔舜炯〕氏[1]の舎廊[2]）を校舎にして信者の子女だけでも教えてみよう、そのために教会で献金を集めようと決定した。四月のある主日礼拝後、これに関する説明と同時に維持献金を募ったところ、三百両近く集まり、一同は勇気を得たのだった。

一九〇五年九月一日に長連イエス教会が設立した光進学校は、礼拝堂で開校式を盛大に挙行した。当日に集まった子どもは十余名に過ぎず、大変少ない気がしたが、これは初めから予想されたことだったので、時の経過を待つことにした。教科書はこの当時はほとんどない状況だったので、国文を教えることを主として尋常小学、幼年必読、東国歴史、聖書、算術等を使用した。金洛現氏が校長で私が教員格だった。

長連教会が設立されて数年経ち、教会員も増加したが、礼拝堂を用意するにはまだ経済力が軟弱だった。そうは言ってもいつまでも呉氏の舎廊で礼拝を続けることはできないだろうと、志のある人たちは気にかけていたのだが、解決策は見つからない。教会役員たちが数回会合を開いて十分討議した結果、目標金額に達するまで献金を何度もしていこうと決定した。一九〇六年九月のある主日礼拝の後、献金への協力を要請したところ、千両という驚くべき数字に達し、場内は喜びで満たされ、互いに手をつないで感激したのだった。ちょうどこの頃、養士業洞に適当な家があり、すぐ買い入れ契約をした。居間が三間、舎廊が三間、これを「字でつなげれば礼拝堂に適しており、向かいの部屋二間は管理人が居住するのに十分だった。前庭（養士業洞の脱穀広場）も広く、

ここに学校を移しても運動場として使うのに支障がなかった。この家を修理して移ろうという時に、一軒家なので適当な人に管理を頼みたいが、それにふさわしい人が他にいないので、私に管理してくれないかと役員たちが頼みに来た。これを断ることは難しく、家族と話し合って、承諾することにした。そして引っ越す時に家屋は売り払い、借金を返したのだった。

このようにして、礼拝堂が別に出来たので、学校も新しい礼拝堂に移された。どうしたことかその後は児童が増え、五十余名に達した上に、教会員でない家族も子どもを送るようになり、一種の伝道機関の役割も果たすようになった。当時百余名の児童を教えていた公立学校と比べても少しも遜色ない教育機関だった。

長連は白氏が多かったが、近親は多くなかった。ただ一人の従弟が約十里離れた今卜町に住んでいて、病床にあったので時々慰問していたのだが、ある日亡くなったという報せがあった。その日はちょうど主日〔日曜日〕だったので、主日には外出しないという信念で行かず、次の日も学校を終えてから行った。叔母が大変腹を立てられ、涙を流して叱責された。この時は自分が熱心な信者だと自負していたが、あとで考えれば考えるほど無知な信仰、狂的な信仰、人情の無い信仰だったということを痛感した。今は英霊となられた叔母に、また従弟に対し申し訳ないという思いを禁じえない。

最初はイエス教会に対する認識不足で一般の人には怪しい宗教だと思われていたが、優秀な青年たちが熱心に伝道し、また学校を経営し良い成果を収め、一般の人が次第に適当な認識を持つようになっただけでなく、欽慕するまでになった。そのような中、教会で金益斗[3]牧師を招き聖書研究会を実施し大伝道会を開いたところ、長連有志の老少三十余名が来聴し、信仰を決心し、大気焔があがったのだった。その後、礼拝堂を管理するのにふさわしい人が見つかったので、礼拝堂は彼に委託して、私は西部里一七六番地にある小さな草家（四間）を購入して移転し、長連を離れるまでそこに住んだ。

国事が日増しに悪くなり、憂国志士たちが太いため息を禁じえなかった頃、各地でイエス教会が旺盛になり、愛国思想を抱く人々はたいがい教会に投身するようになった。それに伴い世論の教育熱が沸騰し、教会のある所には必ず学校が設立されるようになった。文弱に苦しむ尚武的憧憬のためなのか、その原因ははっきりしないが、当時の学校には鐵皷とラッパに合わせて兵式体操をすることが流行していて、学校対抗運動会が盛んに開かれていた。

殷栗村イエス教会が経営する光宣学校は光進学校より数年前に設立された学校だが、先生は呉斗鉉氏だった。両校と両教会の親睦をはかるために殷栗村で連合運動会を開催しようという連絡が来た。光進学校でも賛同し、

一九〇六年四月二十五日の開催が決定された。そのことを知らせると児童たちは「嬉しい！」と喜び、その日がくるのを指折り数えて待った。四月二十四日午後一時に長連を出発した。児童三十五人、先生二人、保護者十五人、合計約五十人が徒歩で殷栗村へ向かった。午後四時頃に目的地に到着し、旅館で一泊し、翌日午前八時に運動会の会場に到着すると、運動会を見学しようと郡内の老若男女が雲集し両校児童たちの興奮を高めてくれた。プログラムにしたがって体操、遊戯、演説などが大盛況裡に終わった。兵式体操が大人気だったことはもちろん、崔ヨソプ（崔泰永博士が十歳の時）くんと、李宝賢（昌根くんの父親、十二歳の時）くんの演説が拍手喝采を受けたことは嬉しく、子ども達もまた喜び、興奮していた。「疲れた」と弱音を吐くこともなく、その日の夕方に帰宅したのだった。

一九〇七年五月だったと記憶しているが、安岳イエス教学校主催で黄海道にあるイエス教学校連合大運動会が開催された。十数校が参加し盛況を博したのだが、光進学校の兵式体操が異彩を放ち（軍隊解散当時に現役下士だった李某先生が本格的に指導した）、その日の晩、李宗濂くんと李宝賢くん（江南歯科の李縞坤くんの伯氏、十三歳の時）の演説が満場の拍手を受けたことは、今思い出しても爽快なことだった。

崔光玉[4]先生が本大会の会長をつとめ、アメリカから帰国した金聖武先生が来賓として参席したことは大衆の絶大な人気を博した。その翌日、各郡代表が集まり、黄海道内の教育事業をますます発展させるために、中学校設立の必要性を力説し、その実現を促進させるために崔先生を中心に海西教育総会準備会を結成することを決定したのだが、長連郡学務委員は金亀[5]、荘元瑢、白南薫の三人だった。

このようにして黄海道中学校設立を考えるようになったのは、長連郡一道面長陽里に居住する張膺震氏（長連の先進・黄海道の先進と称される張義沢氏の長男。官費生として日本の東京にある順天中学校を卒業後、帰国しようと日本商船が仁川港に接岸する時に、我が政府が渡日留学生を捕まえて殺そうとしているという日本領事からの連絡があり、日本へ戻りアメリカに渡ったが、約二年後東京高等師範学校に入学）が東京高師へ在学中で、二年後に卒業する予定だったので、彼を中心に据える予定だった。しかし、島山・安昌浩先生も平壌に中学校を設立することを計画しており、彼もまた張氏を嘱望していた。そのため我々の計画は遅遅不振であり、安氏の計画は実現性が確実だということで張氏が平壌に行くように勧誘された。こうして、大成学校が設立され、張膺震先生が初代校長に就任したのだった。

(2) ソウル留学

学校の業務で過労になったのか、私の体がだんだん弱って行った。学校の仕事を辞退しようとしたのだが、許してもらえずに働き続けていると、どんな症勢か喉頭が丸く痩せ、そのため話をしようとするとつばが乾いて談話に困難を感じるようになった。結局は辞任して戴寧村の済衆院へ行き診察を受け治療をした結果、少しずつ快復していった。

イエスを信じ、教会の仕事を手伝いながら学校の業務をおこなう間、もっと勉強しなければと思っていたのだが、家計が許さなかったので実践をすることができなかった。勉強への思いはますます切実になり、どんな方法があるか千思万慮したが、良い方法は見つからず、煩悶していた時、故郷で治療中に平壌、ソウルまた日本へ留学するものがおり、特に呉舜炯[1]、呉夏炯、朴宗濂、白賢準などの友人たちの日本留学は極度に私を刺激した。

船村から村に移住してきた鄭在鉉氏（斗陽くんの父親）は交流があるだけでなく、共に教会に通いながら、私の留学に対する強い思いをよく理解し、貸金業をしながら、当時私が所有していた畑四斗落と田六斗五升落を自分に任せれば、当時日本留学にかかる最小限の費用月十六円のうち半額は送金してあげようと言ってくれた。そこで残り半額の周旋を考えていると、安岳の日本留学生である金鴻亮[6]氏が夏休みで帰国しており、長連にやってきた。もともと親しい仲だったので事情を話し、学費半額の援助を頼んだのだが、良い返事をすることは難しいとのことだった。

学費半額を周旋することは容易ではなく、不可能な状況なので、毎日勉強するためには苦学するしかないということがわかった。当時、ソウルで英国人が発刊している「大韓毎日申報」という新聞があり、独立思想を鼓吹していたのだが、梁基鐸、林蚩正のような志士たちがいることを知り、ソウルに行き新聞配達をしながら学ぼうという決心をした。しかし、そうするためにはソウルに行かねばならず、またソウルに行ってもすぐ仕事があるわけではないので、少なくとも数十円の費用が必要だったが、当時の私にはこれもまた容易な問題ではなかった。学ぶことへの意欲が強かったので、結局は恥を忍んで平素から私をいたわって下さっていた崔桂俊氏（崔商崙氏の父親）のところへ行き、事情を話して二十円の援助を請うと、「君がどうしてもと言うなら私が二十円を出そう」と言って下さった。その言葉を聞いた私は感激し、体が震え、表現できないくらい嬉しかった。

その日の午後、家族が集まった席でそれまでの経緯を話し、母親の許可と妻の同意を求めた。母は妻の顔色を伺い、妻は多少難色を示したが、普段から話していたことであり、私の願いをよく理解していたので、同意してくれたのだった。

私は早婚だったので父親になったのも早く、十七歳で長男、十九歳で長女、二十一歳で次男、二十三歳で三男が出生した。しかし長男が四歳、そして他の子どもたちは二、三歳で亡くなった。長男は人物や性格が祖父に似ていると周囲の評判も良かったのだが、急に亡くなった。その時、私は二十歳で、申し訳なくて〔死に顔を〕よく見ることができなかった。一人身で育った私は特にその子をかわいがっていた。私は人がいない所に行って泣いたことを記憶している。夏になり、三男が下痢をした。子どもたちに驚いた母が洪主簿〔漢方薬局の主人〕を探して事由を話し、薬をもらってきて服用させた。しかし、「薬を吐いてしまったのだろうか、下痢が全然止まらないのだ」と洪に話すと、（許可が無くとも誰でも洋薬を売る時代だった）「花札で徹夜をして来たのだが、薬を間違えてやってしまったようだ」と言うので急いで解毒剤を服用させた。信じられないことだ。しかし数日後、子どもは死んでしまった。こうして一年の間に二人が逝ってしまった。当時、妻の年が二十九歳、若かったがすでに四人の子どもを出産した。勉強しに行けば何年かかるのか、期間も決まっていないし、いつ帰ってくるかもわからない。留学する青年たちは勉強を終えてから本妻を冷遇するだけでなく、妻を棄て妾妻のもとに行くことも日常茶飯事だという風説もあり、私が家を離れることに妻が難色を示したのも無理のないことだった。

こうして整理するものを整理して、寝具その他を準備して、二十四歳になった年の九月五日に出発することにした。当日、今下町には多くの親戚と友人たちが集まり、彼らの見送りを受けて渡し舟に乗り、鎮南浦、兼二浦を経由して翌六日朝、〔ソウルの〕南大門駅で下車すると、同郷の親友たちが出迎えてくれた。彼らについてゆき、弘文署部落（現三角洞）にある、族叔の白鎮善氏（徳教くんの父親）が寄宿している家にその日から同居した。

学校に入学することよりもまず仕事を見つけなければならず、「大韓毎日申報」を訪ねてみたが、当時の新聞発行部数は多くないので配達員の数も少なく、求人の予定もないので、すぐには就職できない状況だった。他の新聞社も同じような状況で、新聞社関係の仕事を得ることは到底不可能な状況だった。それなら夜にできる仕事を探してみようとして一ヶ月余かけて四方八方探したのだが、得るものは何も無かった。

今は仕事もなく学費もないので正規生として入学することは出来そうもない。自分としては大きな志を抱いてソウルに来たが、二ヶ月も経たずに窮地に陥ってしまった。しかし、ソウルにいる間だけでも学習しようと考えていた時、儆新学校の学生青年会長である李相晋氏（安岳出身の学生で日本の東京に留学したが、事情があり継続することができずに帰国し、儆新学校に在学中であ

り、最上級生だった）の要請で青年会の月例会で講演したのが契機となり、李氏の斡旋と、当時校長の蜜義斗氏（アメリカ宣教師）、学監の閔濬鎬氏の好意で数理科の聴講を許可してもらい、その授業に出席するようになった。また、普成学校の日本語夜学講習所にも通うようになった。

月日が流れ十二月になり、二学期試験が終了すると学校ごとに冬休みとなり、地方から来た学生は帰省するのに忙しかった。長連から来た四十数名の学生たちも皆帰郷したが、私は苦学するといって故郷を離れた時に二十円を持っていたが、交通費二円各数、月三円の会費、四か月分の他の雑費を差し引くと数銭しか今手元になかった。勉強を継続するかが問題であり、たとえ旅費があったとしても恥ずかしくて帰郷することはできない状況だった。崔商崙、黄晟弼、黄衡穆の三人の親友は私の心情をよく理解してくれて、「帰郷した時に我々が援助してくれる人を探すから、来年の夏休みまではソウルにいよう」と言うので、別の方法もないのでそうすることにした。一月初旬に三人が上京し、「先輩と何人かの知り合いが援助することになった」と言って四十五円をくれたので、心から感謝し、申し訳なく目頭が熱くなった。

長連という田舎からソウルに来てみると、南大門から東大門までの道が（現在は狭窄だが）当時は大変広く、北側から南側に鍾路を横断しようとすると、しばらく時間がかかり、往来する人も稀だった。ジンコゲ（今の忠武路）は道幅が狭く、日本人商街の両側に商品が陳列され、物品を買うというよりは見学する人が多く、非常に繁華してソウルの人が皆ここに集まっているような気がするほど、田舎の人がソウルに来ると必ずこの通りを数時間うろついていた。

当時の交通手段はほとんど全て歩行であり、たまに人力車があり、電車は東大門と西大門の間を往復するだけだった。その電車も屋根と足場に柱があるだけで窓と壁はなかった。停車場もなく、どこでも手を挙げれば停車して乗車でき、降りるときは「降ります」と言えばどこでも停車して下車できたので、東大門から出発した電車が西大門まで行くのに相当な時間がかかったのだが、単線だったのでさらに時間がかかった。

大韓医院（現ソウル大学病院）に勤務する韓民済氏（弼済くんの伯兄）は、黄平地方の学生を好んで暖かく接してくれたのだが、崔商崙、黄晟弼の二人の親友が彼の宅に下宿していた関係で、私もまた親交を深めるようになった。私の喉頭が乾く症状があることを話したところ、「大韓医院で学生たちを無料で治療してくれる日があるので来なさい」と言うので、行って診察を受けた結果、鼻の手術をしなければならないとのことだった。その時私は入院することが出来ず、近くにある儆新学校の寄宿舎（ちょうど長期休暇中）の一室を借りて、通院し

ながら治療を受けることにした。手術をして約一時間後、宿舎へ帰ったのだが、両方の鼻を同時に手術した関係で口から呼吸をしなければならなかった。血が出てきて服を汚してしまい、着替える衣服もなかったので、本当に困った。その服が白い服だったのでますます困った。

〔中略〕

四月初旬のことだった。用があって通りに出たら、意外にも金鴻亮氏と会った。新学期が近いのになぜ帰国したのか尋ねると「白先輩と相談したいことがあり、また他の用事もあって帰国したのですが、用がなければ一緒に行って話をしましょう」と言うので南大門の東側にある漢城旅館に行って話した。金氏が言うには「先輩が数年前に東京留学の学費の半額援助を頼んだ時は叶えることができませんでした。その後も何とか出来ないか、考えていたのですが、今やっと可能になったので、十分とは言えませんが全学費を負担しますので、今からでも東京に行くことは出来ませんか」とのことだった。この話を聞いた私は自分の耳を疑うほど意外で、同時に感激して、「出来ることなら今すぐにでも」と答えた。「それなら先輩も準備があるでしょう。私も別の用事があるので、今月十五日に、この旅館で会いましょう」と約束して別れたのだった。

(3) 東京留学

以上の顛末をソウルにいる郷友に話すと、みな自分のことのように喜んでくれて、崔商崙、崔衡穆の二人の友人はぜひそうするようにと勧めた。準備が整い次第帰郷しようと決めると、儆信学校に在学中の全錫泳（全忠植君の父親）くんが自分も東京に行きたいと言って共に帰郷することになった。家に帰るのは突然のことだった。最初はそのわけを知らず多少心配の種もないわけではなかったが、この間の経過を話すと母と妻の喜びは言うまでもなく、この話を伝えた先輩と友人達もみな喜んでくれた。特に全到龍氏（全錫泳君の父親）は私に向けて「錫泳が東京に行くことを許可するつもりはなかったが、君が一緒に行くなら許すことにした。指導をよろしく頼んだ」という丁寧な依頼を受けた。荘元璐氏も一緒に行くことになり、三人は十四日に親戚と親友達の見送りを受けて長連を発ち、十五日の朝に南大門駅に到着し、漢城旅館に入った。金鴻亮氏はその前日に到着しており、四人は十七日の朝に出発しようと約束し、各々自分の用事を済ませに行った。

一九〇九年（隆熙三年）四月十七日の朝、私達の一行は多くの友人達の見送りを受けながら京釜線の列車に乗り込み、夜八時過ぎに釜山に到着、すぐ連絡船に乗り換えた。連絡船に乗るのは初めてで、少し揺れていたので深く眠ることは出来なかった。そうは言っても少し眠

り、覚めて起きると下関に到着した。東京行き列車の出発までは三、四時間の余裕があったので旅館に行って休憩した。簡単な食事を済ませて寝具を頼むと、布団が短く足まで覆うことが出来なかった。寝たり起きたりしているうちに汽車の時間になり、荷物をまとめて東京行きの列車に乗り込んだ。それからは私たちの白い〔民族〕衣装は見かけなくなり、斑点模様や縞模様の服に下駄を履いた日本人ばかりとなった。左右の山河には草木が生い茂り、視界にうつる草葺家屋もその造りは私達のものとは異なっていた。汽車が停車場に着くたびに「お茶ー」「弁当ー」の声が聞こえたかと思うと「くれ！」という大声に耳が痛くなった。完全に異国の風景だった。汽車は休みなく走り、翌日午後四時半、下関を出発して三十六時間後、新橋駅に着いた。駅には張膺震、呉舜炯[1]、金洛泳[2]等の故郷の先輩が迎えてくれた。張先輩は私の手を握り、「長い間の願いが達成できて良かったね」とこの間の私の心情を慰労してくれた。金先輩の案内で芝区三光町三七五番地の韓国人方に行った。そこは韓国人学生達が日本人の賄い婦をおいて自炊する家だった。そこでその日から共に暮らすことになった。

①明治学院入学

次の日、金鴻亮（卒業生）、李寅彰、金洛泳（二人は五年生）の三氏が私を入学させるために明治学院に一緒に行き、二年生に編入させてくれと要請した。その時私は日本語も未熟なだけでなく英語は問題にもならなかった。しかし先生は「試験をしよう」と言い、英語読本ステップ二巻を開き、「読んでみなさい」と言われた。私は勿論読むことができず、ただ飛ばしながら「this, that, is, yes, no」等の語を読んだだけであった。次に「作文をしなさい」とのことだった。しかし日本語があまり出来ないので、全て漢文で書いた。その時の試験官は熊野雄七[8]先生と宮地謙吉[9]先生だった。「入学を許可するから明日から登校しなさい」とのことだった。後で知ったことだが、試験ではとても入学できないのだが、先輩が「人格も良く漢文の素養もあり、また才幹があるので入学さえすれば付いてゆけます」と話し、「私たちが責任を持ちます」と念を押してくれたとのことだ。

翌日、二十五歳の中学校二年生が制服制帽をきちんとした姿勢で学校に行くと、二年生はAYの二クラスがあり、私はY組だった。噂を聞いていたのか、Y組にいる林炳日、咸錫殷、金某君が暖かく迎えてくれた。私が日本語が下手で、また初対面なので礼儀正しく接しようと考えたのか、歓迎の挨拶をしてくれたので、頼もしく思った。教室に入ってみると、みな十五～十六歳に見え、少し年をとっている学生でも自分よりは下なので、先生を除けばこの教室ではいつも私が最年長者だった。しかし先生の説明は聞き取ることが出来ず、その日から

同級生達に質問をしていた。

その日、学校から帰って色々なことを考えた。留学の夢は達成したが、どうすれば先輩としての体面を保ち、また自身も満足を得ることが出来るのか。考えた結果、次のような方針を決めた。まずその日に学んだことを必ずその日に復習する。英語は音読二十回と訳読五回、次回学ぶ内容はレッスンごとに単語を調べ、ノートに記入し、その下に熟語を記入する。数学は復習後に予習、演算してノートに清書する。その他の科目は一回読むということをした。四年生になると時間が足りなくなり英語を音読五回と訳読二回、五年生では音読各一回に修正したが、卒業するまで継続して実行した。

学期試験はどの学校でもその学期に学んだことの全範囲、学年試験ではその学年で学んだことの全範囲だったので、どの科目でも教科書一冊全範囲だった。そのため、試験の時期になると、前もって各科目の教科書を一読し、試験前日に該当科目を再読して試験場に向かうのだが、わからない問題がないだけでなく、教科書を目の前に開いているように苦労せずに答案を書くことができた。そして一学期試験で十七番になり、「言葉がわからないのに試験は良く出来た」と言われた。ひとつ可笑しかったことは、臨時試験の時になると同級生にたずねて、どの科目の試験がどの日にあるのかをメモして準備するのだが、その人が間違えて教えてはいないだろうかと試験当日まで心配し、試験後に安心したものだ。

この学校はアメリカ長老教宣教会が設立・経営しており、中学部、高等学部、神学部などを通じ、宣教師が教員を兼ねている方も相当数いた。その中でワイコフ博士[10]は円満な人格者として嘱望がある方で、開化党の領首だった朴泳孝侯と親交が深く、ある時期、朴侯を自宅に留宿させていたとのことだ。このような関係からなのか朴侯は明治学院同窓会の名誉会員だった[11]。宗教学校ではあるがこのような経緯もあり、韓国学生に特別な便宜をはかってくれ、私が入学した当時には、韓国人学生が四十名ほどにもなっていた。

②安重根先生義挙

東洋平和という美名のもと乙巳保護条約を締結したことで日本の韓国に対する野望が暴露され、その元凶である伊藤博文がロシアのウィッテと会い、東洋問題とくに韓国問題を協議するために北満視察行脚をするという事が新聞に報道されると、安重根義士は禹徳淳氏ほかの同志と共に、この好機を逃すなと虎視眈々とその到着を待っていた。しかしそのことを知らない伊藤は予告した通りに一九〇九年十月二十六日、ハルビン駅に到着し、出迎えた人士たちと挨拶を交わしている時、安義士の発射した銃声は天地を震わせ、数発の弾丸が命中した伊藤はその場で倒れ、駅内外は大騒乱となった。わが民族は

国の内外を問わず口には出さなかったが、心の中で快哉を叫んでいた。

この事実が東京で報道されると、日本人達の驚愕と狼狽は憤怒へ変わって行った。当時日本にいた韓国人学生達はどんな事態がおこるか予測することが出来ず、大きく呼吸することも出来なかった。私が通う明治学院三年生の教室で日本人学生が韓国人学生四名を殴打する事件があった。この報告を受けた明治学院総理の井深梶之助博士は全校生徒を講堂に集め、「この事件はまことに痛憤なことだ。しかしこれは政治的な問題であり、日本政府と韓国政府が解決することだ。学生が関与する性質のものではない。学生達は興奮せず冷静な態度で学業に専念しなさい。」という一場の訓示があった。[12]

その後は何事も起こらなかったが、しばらくは実に気まずい日々をすごした。

安重根先生は黄海道海州の安泰勲進士の長男として生まれ、幼い頃から雄弁で矢を射るのが好きで、父上が募集した義兵と共に東学を口実とする武装乱徒を鎮圧する勇敢さがあった。十七歳で結婚と同時にカトリックに帰依し、乙巳保護条約が締結されると中国の上海に渡ったが、父親の訃報に接し帰国後、鎮南浦に移り、一九〇七年ウラジオストックへ亡命、国権回復運動に専念していたところ、前記の義挙を実行し、一九一〇年三月二十六日、旅順監獄で殉国された。

同胞に訣告する安重根義士の獄中最後の書簡

余が韓国独立を回復し東洋平和を維持するため三年間海外で風餐露宿したがついにその目的を到達することが出来ずこの地で死ぬこととなった。我が二千万の兄弟姉妹は各自奮発し学問に励み実業を振興し私の遺志を継ぎ自由独立を回復すれば、死者無憾である。

隆熙四年三月二十五日（大韓毎日申報所載）

聞安重根先生義挙

中華民国大総統　袁世凱

平生営事只今畢　死地圖生非丈夫

身在三韓名萬國　生色百年死千秋

③学費断絶

一学期の試験が終わり、牛込区鶴巻町公武館に留宿する金鴻亮氏（早稲田大学政治経済科予科に在学中）を訪ねたのだが、「今度の夏休みに帰国したら、平素から考えていたこと（我々が独立するためには実力を養成しなければならず、それをするには国内では出来ないのでロシア領方面に行き軍官養成機関をつくること）を実践するために東京には戻ってこないつもりです。学費の援助は継続するので心配せず勉強に励んでください。そして機会があればまた会いましょう」とのことだった。私は彼の意図を諒解し、すべての事に慎重を期することを頼

んで別れた。

その年の十二月は月末になっても学費が届かず、自炊生活をする関係でとても難儀した。三十日の夕食後、同宿の学生達と散歩をしたが、帰ってくる時に「書留が届いていると良いのだが」と話しながら家に帰ると、思ったとおり書留が届いていた。喜んで開封すると、「十二月分は送金するが時勢状況のため今後は送金できなくなった。申し訳ないが帰国してはどうか」という内容だった。私は呆然とした。同時に何か困ったことが起きたのではないかという不吉な予感がした。後で知ったことだが、いわゆる寺内統監暗殺嫌疑で金鴻亮氏が捕らえられたのだった[13]。すぐに返事を書いた。「帰国しようと思うが一月分の食費と旅費の他、冬服もないので合わせて三十円を送ってくれないか」と頼むと、約一週間後に送金されて来た。

帰国するという結論は出したが、苦学するとのことで旅費を出してもらったこと、多くの先輩方や親友達が援助してくれたこと、「勉強しに行く」と言って長連を発つ時に賑やかに歓送してもらったことを考えると、ソウルを経由して東京まで来たものの一年も経たずに帰国するということは、故郷に帰って先輩や親友に対し、面目次第もない。しかし何か良い方法はないだろうかと考えたが、母国のソウルでも得ることができかったものを万里異国の東京で得ることができるとは思えなかった。そこで、普段から好意を持って接してくれた英語の先生に帰国の挨拶をしようと思い、実は何か方法はないかという期待もしながら、赤坂区霊南坂町に住んでいる、E・W・ホフソンマー[14]先生を訪問した。帰国の挨拶をすると、先生はいぶかしい語調で「君は韓国人なのに勉強も出来る良い学生だと思っていたのに、どうして帰国してしまうのかね」と尋ねられた。そこで自己事情の大略を話した。「ワイコフ博士には会ったかね」と言うので「まだお会いしていませんので明日行こうと思います」と答えると「そうしなさい」と言われた。翌日、ワイコフ先生を訪問して事情を話すと、「ホフソンマー先生にもう一度会いに行きなさい」とのことだった。そこで、ホフソンマー先生を訪問すると、「君は今帰国しても数ヶ月後に帰国しても変わりないだろう。二学期でやめるよりも三学期つまり学年を修了することが今後の助けにこそなれ邪魔にはならないだろう。学年を修了しようというのなら、それまでは私が助けになろう」とのことだった。考えて見ると、あと三ヶ月いて学年を修了しても困ることはないので、「今帰国しても仕方ないので、ぜひ学年を修了したいです」と答えた。そこで先生は二つの条件を出した。一つは、教師として生徒を無償で助けることはできないので、何か仕事をしてもらいたいということで、毎週土曜日の午後に来てガラス窓を拭くことと、もう一つはその頃先生は学校が遠いので寄宿舎の

ひと部屋を借りて使っていたのだが、その部屋で寄宿すれば毎月食費十二円を援助するとのことだった。

④寄宿舎

こうして自炊生活をしていた宿所から寄宿舎に移ることになった。その時に、これまでの経緯を記録して、「帰国しないことを諒解してほしい」との手紙を送った。そして土曜日の午後に霊南坂町のホフソンマー先生宅へ行き、窓拭きをはじめた。その家にいる女中から方法を教わったのだが、いくら拭いても拭いても綺麗にならない。汗をかいて苦戦している姿が可笑しかったのか、それともその格好が哀れだったのか、女中が出てきて教えながら一緒に拭いてくれて、約三時間後に仕事を終えて寄宿舎に戻った。

一月十日だと記憶しているが、当地の警察署の高等係刑事が私を探しに来たと言うので出て行くと、今日から私を尾行することになったとのことだった。その理由を尋ねると、自分も解らないが命令なのだと言う。それならばここは寄宿舎であり、私一人の部屋ではないので、必要な時に私を訪ねればいつでも応対するので、決して部屋には入らないでくれと頼んだ。その後は教会に行ったりどこかに行くときは尾行された。尾行は私が十五年間の東京生活を終えて帰国する時まで一日も絶やさず継続されたが、独立運動前後には一人から二人に増員されたのだった。

歳月が過ぎ、三月末になって学年試験を受けた結果、平均八十九点を取って優等賞をもらった。日本の学生はたいてい十五歳なのだが私は二十六歳で、たとえ良いことには違いないにしても恥ずかしさを禁じえなかった。

こうして学年が終わり、ホフソンマー先生と約束した期間も過ぎたのだった。そこでホフソンマー先生を訪問し、「先生に助けていただいたおかげで学年を終え、帰国する時期になりました」と言うと、先生は「確かにその時が来たけれども、もう一学期やって夏休みに帰国しても遅くないのではないか」とおっしゃった。このようにして再び期限が三ヶ月だけ伸びたことは多少残念ではあったが、そう長い付き合いではない外国人学生を無期限で援助すると言うのも難しいのではないのかと考え、「ありがとうございます。もう一学期努力します」と答えた。

明治学院には韓国人留学生が多かったので、韓国人同窓会を組織して親睦を図り、勧学の意味で学年成績が平均八十五点以上の学生には新学年の教科書を全部贈与することになっていた。今回成績がこの規定に達したので三学年の教科書全てを贈与された。そして私は卒業するまでずっと同窓会の教科書贈与を受けることができた。

新学期になった。ホフソンマー先生の住宅が学校から遠いということで、四月から学校の近所の今里町に日本

式住宅を譲り受けて引っ越しをされた。そのため窓拭きの仕事がなくなったので、毎日朝六時ごろに板戸を開けて家族全員の靴をみがき、夜十時頃に板戸を閉め、土曜日の午後は庭園の除草や掃除や洗濯をした。そうしているうちに七月二十日の一学期終業の日となった。約束した期間になったので、ある日の午後、仕事を終えて先生の所へ行き「今約束した期間になりました。七ヶ月の間先生の側にいて私がどんな人間なのかお分かりになったことでしょう。卒業まで援助の約束をしていただけませんか」と言うと、先生は私を見て、にっこりと笑い、「そうしよう」とおっしゃった。私は心から感謝して退席した。

⑤夏期休学

一学期が終わり夏休みとなり、大部分の学生が帰国したが、明治学院に通う四、五名の学生は帰国せず東京に残り、英語講習をしようということになった。明治学院を卒業し早稲田大学経済科予科に在学している李寅彰氏が、「帰国しないで予科の団体で千葉県房州に海水浴をしに行くのだが、諒解をもらったので一緒に行こう」と誘ってくれた。我々中学生が予科の学生と混ざって、また日本人学生団体と一緒に行くというのは少し照れくさかったが、観光と経験も兼ねて行くことにした。房州に到着してみると、海岸の空気も清新で風景も良く、東京市内で混雑した生活をしていた私たちには、やはり爽快であり、水泳のコーチも選手もいて、貴重な機会だった。水泳を習うことも面白かったが、多くの人達が素っ裸で砂場にうつぶせになり、水泳練習をすると言って足を折り曲げたり開いたりする格好はとても一大壮観であった。それよりもこの海岸でしか見ることの出来ない珍景だったのは、地引網といってイワシやサンマなどの魚を捕まえるものだ。

これは網を船に載せ、一端を砂場に設置した後、海面の相当の距離と範囲に網を沈め、もう一端を砂場に設置するのだが、両端の距離は約五十から六十mだ。適当な時間が経過した後、網を引き出すのだが、その方法がとても面白い。砂場にある網の両端に固く長い縄があるのだが、その縄に添って適当な感覚をとって十五、六名の男女が一列に並び（どちらの網も同じように）、その網を引いて網を引き上げる。どんな意味なのかはわからないが「チャンドコチャンドコ」と数十名が合唱をするのだが、その声は静かだったこの海岸一帯を激しく揺さぶるのだ。ある時は勇ましく、またある時は凄涼に聞こえる。網を引くたびに前にいた人が後ろへ、後ろにいた人が前へ、こうする間に網が見えてくると魚が飛ぶ。網の後ろに来た船から人々が降りて来て、ひさごのようなもので魚をすくって船に移すのだが、多いときは船三隻か四隻でいっぱいになるのだ。この時間になると見物に来

る人、魚をもらおうとする子ども達が集まって来て、この海岸も人魚の世界のように盛況となるのだった。

⑥韓日合併

東京にある我々〔朝鮮人留学生〕の学生親睦機関として大韓興学会があり、六月中旬に総会が開かれた。この席上で日本が韓国を合併するという問題について論議した後、これに反対するという決議をおこない、「我々がたとえ学生の身分だとしても晏然と座視していることは出来ないので、代表二人をソウルに派遣して政府要人に反対意見を建議して国民に訴えよう」と決断した。そこで代表二人を選出したのだが、一人が固辞したので別の人に交代し、数日後に帰国しようとしたが、新橋駅で日本警察に制止されて、志を成すことができなかった。それに加えて大韓興学会自体が解散の悲運に見舞われてしまった。

韓日合併問題が新聞雑誌に頻繁に報道され、早稲田大学教授の浮田和民氏をはじめとする所謂七博士の反対声明があったぐらいで、他はほとんどが賛成する状況だった。庚戌年（一九一〇年）八月三十日の号外は韓日合併を報道し、翌日の各新聞は日本天皇の諭示と共に大字特筆で報道された。これを読んだ私は涙が目を遮り読むことができなかった。旅館にいた我々留学生数名は一箇所に集まった。言葉もなく互いに見つめ合い泣いた。

新学期が近づいたので数日後東京に帰ってきた。同窓会を開く予定はなかったのだが、集まって色々なことを議論した。つまり、勉強を続けるか、それとも帰国するか。勉強をしたいという気には全然ならなかった。意見交換をした結果、「今勉強する気がないからといって帰国したとしても何をどうするのか。勉強はもう永遠にしなくても良いのか。違う。今日韓国と共に死ぬことが出来ないのなら未来に向けて準備するのが我々の義務だ。未来に向けて準備するのなら勉強を継続しなければならない。」というのが支配的意見だった。おそらくこれが東京に留学している学生大多数の意見だったろう。それで我々は一斉に登校することにした。しかし以前は道に出れば「朝鮮人」「朝鮮人」と言われていたのに、今では「新日本人」「新日本人」と言われるようになった事は本当に不快であり、痛憤なことだった。

⑦長監連合教会の創立

ホフソンマー先生が下さった援助で寄宿舎の食費はなんとかなったが、授業料や雑費は出所がなく難儀した。ところで、明治学院には苦学生を助ける意味で講堂掃除をさせて授業料を免除してくれる規定があった。そこで私は学校当局に事由を話して講堂掃除を願い出たのだが、「君は外国人だが勉強もよく出来、誠実な学生なので特別に許可しよう」とのことでその日から講堂を掃除

して授業料二円八十銭が免除されることとなった。

ソウル出身の金錫晋君が東京に来て明治学院一学年に入学したのだが、彼の伯兄である金錫泰氏が私に「錫晋はまだ幼いが部屋を借りて自炊生活をさせたいので一緒に住んで色々と指導してほしい」と頼まれた。「寄宿舎生活より費用がもっとかかるだろうが、それは自分が補助する」とのことだった。その頃にはホフソンマー先生が学校の近所に引越して寄宿舎の部屋を使わなくなり、私も寄宿舎を出ようと考えていたので、同居することを約束したが、「費用についてはこれ以上出さないでほしい。もし助けてくれる意向ならば、私が中学を終えて大学に進む時に援助してくれるとありがたい」と辞退した。しかし「その時はその時で今は今だ」と言い、月五円ないし十円ずつ送金されてきた。

私がはじめて東京に来たときにはまだ韓国人教会がなく、日曜日になるとキリスト者学生たちが青年会館に集まり礼拝をしていた。在日本東京朝鮮基督教青年会は神田区西小川町二丁目五番地にあったのだが、礼拝に通ううちに当時基督教青年会総務だった金貞植[15]氏と挨拶を交わすようになり、青年会に入会した。会員になると接待部員を経て議事部員となり、それからは青年会幹部の一員として青年会の集まりには欠かさず出るようになった。

その頃、平壌にいた鄭益魯長老が国漢文玉編を編纂するために東京に来て青年会館に留宿した。ある日の礼拝後、鄭長老と金総務をはじめとして学生十数名が集まった。その席で「東京にいる韓国学生は日本に永住するのではないが、留学は継続し、その数も増加こそすれ減少することはない状況であり、青年会の外に教会が別になければならない」という点について意見が一致した。そこで教会が設立されるなら長老教会として設立するのが良いか監理〔メソジスト〕教会として設立するのが良いかという問題を検討した結果、学生たちが勉強している間は東京で礼拝をし、帰国後は各自自分の教会に戻るのだから、ここで彼此の別を論じるのではなく、本国の教会と相談してどちらか指定するということは出来ない関係なので、東京にいる全韓国学生の所属教派を調査した後に再び議論することになった。そして調査した結果、監理教信者はただ一人だけだった。そこで長老教会に相談することに決定し、長老教総会にこれまでの経緯を報告し牧師の派遣を招請した。

翌年三月に韓錫晋牧師（韓弼済君の父親）が東京に来て教会を組織し、金貞植、曺晩植[16]、呉舜炯の三氏を領袖[17]として金顕洙、荘元瑢、白南薫、張惠淳の四氏を執事に定めた。約一ヵ月後に韓牧師が帰国され、九月には林鍾純長老、その後は朴永一長老、翌年六月には林鍾純牧師が再び東京に来たが、この時も礼拝堂を別に用意することが出来ず青年会館で礼拝をした。

その年の夏休みに私はホフソンマー先生と共に鎌倉海岸に行っていたのだが、曺晩植氏から来信があった。その内容は、盧正一、金永燮ら六、七人の学生が礼拝しに来たが、この教会が長老教会であることを知り留学生監督部（元来、韓国政府が日本に留学している学生たちを保護監督するために設置したのだが、その頃は日本人が管理していた）で別個に礼拝をしたのだが、日本人が見ているところでは面白くなく、適当な措置を取らねばならないので速やかに東京に戻って来て欲しいとのことだった。七月初旬、教会役員が集まり議論した結果、我々は当時の状況により長老教会となったが、東京にいる間は韓国教会〔として合同〕で礼拝しても帰国すればそれまでで、固執する理由もないのだから、長老教総会と監理会年会にこの意思を報告し適当な処理をしてもらえるよう要請し、我々は合同して礼拝しようと決定した。

長老教総会と監理会年会の両当局者が協議した結果、東京教会は長監連合教会として両教団が二年交代で牧師を派遣することとなった。第一回は長老会が派遣することになり、朱孔三牧師（朱耀翰君の父親）が初代牧師として派遣され、礼拝堂も別に用意して青年会館から出てゆくことになった。第二代牧師が呉基善牧師、第三代が李汝漢牧師、第四代が呉基善牧師、第五代が林鍾純牧師、第六代が呉基善牧師の順で東京連合教会で執務した（一九二三年に私が東京を離れるまで）。

⑧卒業

五年生になってからは何を専攻するか様々な進路を考えた。もともと故郷の公立小学校で勉強したときに教科書がないことに慨嘆していたので、もし私が勉強する道が開けて東京に行くことになったら高等師範学校を出て教科書編纂に専念しようと考えていたので高師に進もうかと考えていた。しかし東京に来て学ぶうちにその考えが揺れ動き、政治学を学ぼうという考えが徐々に強くなり早稲田大学政治経済学科に入学しようと決めた。しかしこれよりも先立つものは学費問題であった。そして一緒に住んでいる金錫晋くんの伯氏に相談するのが有力であろうと考え、その意向を尋ねてもらうと、月十五円は援助しようとのことだった。また現在私を支援して下さっているホフソンマー先生の意向を尋ねようと、ある日の午後仕事を終えホフソンマー先生に会い「私はこの学校を卒えた後大学に行こうと思うのですが先生は現在と同じように援助していただけますか」とその可否を打診してみたところ、彼は私に神学を学ぶことを勧め、そうすれば現在と同じ支援をしようということだった。そのため、私は政治科を専攻するなら援助はしてもらえないだろうと思った。金君の話が実現したとしても、それだけでは足りない。そこで親しくしていた李雲（李英圭

くんの父親）、申錫雨の両氏にこのことを相談したところ、極力手助けをすると言ってくれた。

学年試験が終わって数日後が卒業式だった。優等賞をもらい、英語演説をした。この学校の卒業式には優等生に英語演説をさせるのが慣例となっていた。ホフソンマー先生と、同居するオルトマンス[18]博士一家が英語の名著小説五冊を卒業記念品として下さり、感謝して受け取った。この栄誉を私に下さったのは、この学校がミッションスクールであるという点と、宣教師の援助を受けたということも考慮されたのか分からないが、私としては感激しないわけにはいかなかった。

⑨帰国

家に帰ると母が危篤だという電報が来ていた。私は驚いたが、色々と考える余裕はなかった。親友数人から旅費を周旋して帰国することにした。四月二日鎮南浦駅に下車して一泊し、その翌朝、億両機で渡し舟に乗り今下町に到着した。我が家はまだ約十五里外だが、ここはもう長連の地だ。荷役を前にして、私はその後ろを家に向かって歩いた。満四年ぶりだが山河も田野も昔のままだ。城峴を超え郷校洞に到着すると長連村が目の前に展開される。左の方に鳳凰山、右側に南山が毅然と立ち私を迎えてくれた。足が地につかない状態で四間の草家である私が家の柴の戸から入ると、妻が喜んで迎えてくれた。すぐ部屋に入り、横になっている母親に会うと、それまでの重態はいくらか変化があり、一人息子の帰りを大変喜んでくれた。その後も継続して療養した結果、母は徐々に快復した。

家を離れて満四年、夏休みになって東京にいる学生のほとんどみなが帰国する時に、私もやはり帰国したいという気持ちもあったのだが、ホフソンマー先生が避暑に行っている間の家の番を頼まれて帰国できなかった。私が四年生になった時に二十四歳になったのだが、家を出て満二年も経ったのでそろそろ帰国したいという思いが切実だったのだが、制服しか着る服がなかった。どうにかして一着支度できないかと考えていると、金錫晋君が藍黒色のセル（当時流行していた）洋服を一着仕立ててくれた。そこで帰国しようという思いがますます強くなったのだが、ホフソンマー先生の避暑のために願いどおりにはならず残念な思いをした。雨が降る晩、大きな邸宅の門番室で一人座り、家のことを思い浮かべると、思わず涙がこぼれたのだった。

やっと帰郷できたので、私は親友たちに会いに行きたかった。彼らもやはり同じ思いだったらしく、出かける度に親友と会い、毎日を忙しく過ごした。久しぶりに帰郷して余暇を得て、墓参りと親戚宅訪問で一学期を送ったのだった。

⑩再度東京へ渡る

八月になり東京に行く準備をはじめると、何よりもまず頭に浮かぶのは学費問題だった。金錫晋くんに依頼した月十五円は確実なのか、また李、申両氏に頼んだ事もどの程度になったのか、帰郷後に一度手紙の往来があったので確実だろうと信じながらも一抹の不安を感じずにはいられなかった。しかし今の私としてはこれを全面的に信じるしかなかった。妻は妻で私が東京に行くことを嬉しく思ってはいなかったが、「せっかく始めたことを今もし中止したら、最初から始めなかったのと同じようにはならないだけでなく、先輩方や親友たちに心配をかけて何の結果も出せなかったらどうするのか。専門学校を卒えることだけが、これまでの恩に報いることだ」と話した結果、妻も同じ認識を持つようになり、私の東京出発に同意してくれた。

二十五日、母に別れの挨拶をして家を出発して、翌朝〔ソウルの〕南大門駅に到着した。下車してすぐ金錫晋くんを訪ねると、以前話したとおりに月十五円を援助するとの答えで、謝意を表し金くんの伯父を訪問し、感謝の言葉と別れの挨拶を申し上げて帰ってきた。金くんにいつごろ発つのかを聞くと数日後だと言うので、「私は入学試験準備で先に行かなければならないので東京で会おう」と約束して別れた。

二十六日の朝、南大門駅に行くと、親友七、八人が見送りに来て、意外にも金くんの伯父の金錫泰氏が駅までいらっしゃった。感激して挨拶し親友たちと別れた後、汽車に乗ると金氏が「今後は援助を継続することができなくなった。すまないが諒解してくれ」と言うのだった。一瞬慌てたが、すぐに「今まで援助して下さりありがとうございました」とお礼をして席につくと汽車はすぐに出発した。体は席に平然と座っていたものの、頭はそうではなかった。なぜ昨日会ったときには何も言葉がなかったのに、今日汽車に乗った後に話したのだろう？東京に行ってどうにかなるのだろうか、色々な考えが浮かんだ。しかしどうしようもなかった。すでに東京までの切符を買ってしまったので、もう考えるのはよそうと決心した。釜山から連絡船に乗り換え下関に到着し、再び東京行き列車に乗り二十八日午後に新橋駅で下車し、芝区三田町の養老館に入ると、意外にも高志英くんが歓迎してくれた。高くんは咸興出身で、東京に来て明治学院に入学して以来、私が帰国するまで宿所を共にしていたのみならず、年は私よりも下だったが、気心が相通じて共に心を許す間だった。自分がいる部屋で共にすごし、その日の晩はそれまでにたまっていた感慨を話しながら十二時強に就寝した。

⑪早稲田大学入学

早稲田大学政治経済科予科の入学試験は九月一日から

であり、願書締め切りは八月三十日だった。次の日、青山・戸塚方面へ行き親友の李くん・申くんの二人が東京に戻っているかどうかをたずねてみると、まだ東京に戻っていないことがわかり、次に明治学院へ行きホフソンマー先生が避暑地から戻っているかをたずねてみると、先生もまだ戻っていないことが確認できた。養老館へ帰って夕食をとった後、翌日が出願締め切りなのだがどうしたら良いか実に迷った。この時、事情を知っている高くんは「今の僕には経済的余裕がありますから、あれこれ考えずに明日は願書を提出して、試験を受けてから方法を考えても遅くないでしょうから、そうしてください」と言うので、高くんの好意に感謝して次の日願書を提出した。試験を受けた結果、幸い合格することができた。高くんが私以上に喜んでくれた。「良い方法が見つかるまで自分と一緒に暮らしましょう」と言ってくれ、心から感謝した。

授業が始まり、通学をする中、九月中旬に親友の李くん・申くんが東京に戻って再会したところ、月五円ないし七円の援助が可能だと言うので謝意を表した。明治学院に行くとホフソンマー先生も帰京されていた。挨拶をした後で大胆にもこうお願いした。「先生は神学を学ぶことを勧めて下さいましたが、色々考えた結果、他の科すなわち早稲田の政治経済科を専攻することにして試験を受けて予科に入学しました。大変恐縮ですが今後も継続して助けていただきたいのです」と言うと、ホフソンマー先生は微笑んで「そもそも君を援助してきたのは君の人間性によるのであり、専攻する学科によるのではない。私の希望は神学だったけれども学科が違うからといって君の人間性は変わらないのだから、これからも支援を続けよう」と仰って下さり、心から感謝した。急ぎ足で下宿に帰り高くんに話すと、高くんもまた非常に喜んでくれた。

このようにして学費が用意できたので安心して学校に通学できることは円満多幸なことだった。この時、ホフソンマー先生は明治学院構内に新築された洋風建築に引越しをしたので、日本家屋のような板戸はなく、また学校時間の関係で朝は行かずに夜十時頃に行って靴みがきをし、土曜日の午後は室内外や庭園の掃除をした。学校は早稲田だったが、早稲田の近くに引っ越すことはできなかった。明治学院に通学していた頃のように学院の近所にずっといるわけにはいかず、しかも一方の端である芝区から別の端である早稲田へ通学するので毎日東京市内を横断することになった。時間もかかる上に電車を利用しないわけにはいかないので、仮に壮年時代だったとしても疲労を感じたのは一、二回ではなかった。

月の収入が十七円ないし十九円だが、授業料が四円五十銭、交通費が三円だから十二円ほどで下宿生活をすることは難しく、親友たちからの援助も、その月その月

で確実にもらえることを期待することも難しかった。どうすればこの困窮を免れるか色々と考えているうちに、食費を節約することにした。つまり朝食と昼食はパン（十銭）、夕食はご飯（労働者たちの食堂があり一食十銭だった）、一日二十銭の予算で暮らし、夜は高くんの部屋ですごすという生活を数ヶ月したのだが、身体に影響が出て来たようなのでこれを中止して、朝食はご飯（六銭）、昼食はパン、夕食はご飯（十銭）にした。しかし栄養を考えて週に一回ほど少し良い食事をすると、ふだん貯蓄したものを一度に浪費してしまうという具合で、良い結果を得ることが出来なかった。高くんは最初から「家賃は自分が払うから食費九円だけ出して下宿で一緒に食事しましょう」と言っていたのだが、恐縮してこのように遣り繰りして来たのだが逆効果だったようだ。高くんが再三助言した通りに下宿生活をすることにした。

その頃、苦学生の中で人参商をしている者がいたのだが、利益が相当だと言っていた。私もこれをやってみようかと考えていると、この経験を持つ学生が強く勧誘し、「人参〔の販売〕を引き受けてくれ」と言って〔人参〕二斤を託されたので、下校して家に帰る途中にこれを持って薬屋に行って、「これを買ってくれないか」と頼んだが、最初は売れなかった。他人に出来ることが自分に出来ないはずはないと、行商を続けて約二週間後に売れたのだが、約十円の所得となった。しかしこれ以上継続する勇気が出なかった。疲労もたまり時間も非常に多く消耗したからだった。

その後も非常に悩み千思万慮の末、牛乳配達を考えた。それは学院の構内にアメリカ人宣教師が五人いたが、全部合わせると四、五十合になり分量も相当あるだけでなく、配達に時間もそんなにかからず、私が頼めば可能性もあるのではないかと考えたのだ。宣教師たちが使っている牛乳店と約束をとりつけ、ホフソンマー先生にこの考えを伝え、他の宣教師にも勧めてくれないかと頼んだところ、「相談してみよう」との答えだった。翌日、オルトマンス博士の長男（ホフソンマー宅に同居）が私に、「西洋人が牛乳を飲むのは東洋人が米を食べるのと似ているが、むしろそれ以上に綿密な検査が必要なものなので、一度契約した牛乳は変えたくない。私がオートバイを持っているので、土曜日ごとにこれを磨いてくれれば月二円五十銭を出すので、牛乳配達は断念してくれないか。」と言うのだった。そこで彼の言うとおりにすることにした。

予科に入学して始業式に出席すると、一学期に入学した政経科に申翼熙、金良洙、李顕奎の三人がいて、英文科に崔斗善くんがいた。李くんは明治学院の同窓で他の三人は初めて挨拶をしたがこれが所謂「千里他郷　逢故人格」で、一度会っただけで親友のように親しくなった。この時早稲田にいる韓国人学生が三十余名おり、

「ウリ〔私たちの〕同窓会」[19]が組織されており、明治大学にもウリ同窓会があり、他の大学にもウリ同窓会があり、どの大学にも例外なくウリ同窓会があった。早大ウリ同窓会と明大ウリ同窓会の間で時々討論大会・雄弁大会が開かれたが、その年の十月初旬と記憶しているが、両同窓会主催の雄弁大会があり、明治から李景俊くん、早稲田から白南薫が演士として出演した。閉会後、慰労会が開かれたのだが、その時に挨拶を交わした人の中に、古下・宋鎮禹[20]くん（明治）、仁村・金性洙[21]くん（早稲田）の二人と知り合い、その後度々会う中で互いに信じ合える仲となった。そして翌年七月に予科を修了し本科に入学した。

⑫学友会

大韓興学会が解散され、東京にある韓国人学生全体の親睦機関がなくなった後、各学校別にウリ学生同窓会はあったものの、鬱憤と寂寞感を抑えるのに辛い思いをしていた。広範囲の親睦機関の組織を何度か考えてみたのだが、いつも日本当局に許可してもらえず、実現することができなかった。範囲を縮小して考えたのは、各道単位の親睦機関だった。湖南茶話会（全羅南北道）、洛東親睦会（慶尚南北道）、鐵北親睦会（咸鏡南北道）、湏西親睦会（平安南北道）、海西親睦会（黄海道）、三漢倶楽部（京畿・忠清南北道）、嶺友倶楽部（江原道）などがまさにそれだった。

このような道単位の親睦機関はあったのだが、学生全体の機関がなかったのは残念で、しかも亡国の悲しみを重ねて考えると、不満と言うよりも悲痛さに耐え難かった。各自がこのような心情だったので、皆が同じ思いで議論は簡単にまとまり、一九一二年春四月に七親睦会の連合親睦会が開催され、この席でこの会を継続して開催することを決意した。この時に七親睦機関の幹事を本会の幹事とすることも決定されたのだが、金炳魯氏が幹事長に選ばれた。この年の秋に開催された会議の席上で、我々の連合会が実は学生全体の会議であり「連合会」というのではなく、別個の名称を持って名実共に学生全体の親睦機関にするのが良いという意見が提議され、満場一致でこれを可決した。これがすなわち学友会である。大韓興学会が解散されてから満三年後に朝鮮留学生総会が再建されたのだ。

学友会は初めは七つの親睦機関を分会として会費を収納していたのだが、しばらくしてからこの制度を廃止して財務部が直接収納するようになり、形式的にも内容的にも完全な学生総会となった。初代会長が鄭世胤[22]氏であり、その後は朴海暾、盧實根、申翼熙、白南薫、白南奎氏の順であった。翌年の春期総会時に、我々が学校生活をしながら各々専門していること・研究していることを発表する機会を持つと同時に、この経験を積んでゆき互

いに奨励し参考になるように、諸事情もあり月刊は出来ないので年二回程度の雑誌を発刊するのが良いだろうという提議が出された。色々な質疑応答があったが満場一致で可決された。これがすなわち『学之光』だ。評判もよく読者も非常に多かった。その編集に関係した学生は少なくないが、記憶にある人たちを紹介すると、金炳魯、申翼熙、李光洙、崔斗善、張徳秀、玄相允、秦學文、崔承萬などの諸氏であり、かの有名な李光洙氏の「民族改造論」と「寡婦改嫁論」は、東京学生界のみならず本国でも大きな話題となった。

⑬学友会大運動会と忘年会

東京にある我々の社会の構成人員は学生であり、老年も壮年もおらず、また幼年もいなかったので、何か会合があると少数の女学生がいるだけで、大部分が青少年だった。たいへん雄々しく見えるが温和な部分が小さく、殺伐とした雰囲気もないわけではなかった。全盛時代の学生数は七、八百名に達したのだが、東京市内外に散在していて、通信による会合の案内だけでは、住所移動が頻繁で円滑に連絡するのは困難だった。また学校に行って学んでもそこが母校だという意識が薄く、学校に対する愛着がわかなかった。五、六人ずつまたは十数人が季節ごとに海や山に遠足や探勝に行ったり海水浴に行ったりすることはあったが、多数の学生が一つの場で愉快に面白く時間をすごすことはめったになかった。そのような中で、学友会や青年会が主催して春と秋に開く大運動会は全留学生の関心を非常に集め、互いの邂逅を楽しみ、清新な空気を吸いながら、一日を愉快にすごす、無限の行楽だった。一九一三年五月七日、青山練兵場で開催された学友会主催の大運動会は早くから学生約五百余名が集まり大盛況だった。競技が始まる時から全学生の関心が総て集中され緊張状態となり、競技種目が進行するにつれ、惜しまない拍手や声援が送られた。当日の最終競技である各大学同窓会対抗八百メートル四人リレーが始まる時には拍手、声援、応援歌で運動場全体が賑やかになった。各選手がスタートラインで待機姿勢をとり、号砲と共に出走する。拍手声援は時間の経過につれてその熱が次第に高調し、ゴールインする瞬間にはその熱狂が最高潮に達した。選手を助言しに出てくる人もいれば、踊っている人もいた。やはりこの日のこの会の絶頂なのだ。閉会した後は三々五々愉快な様子で帰ってゆくのだが、この日はまるで、我々留学生の祝祭日のように感じられたのだった。

我々学生たちは年末年始には忘年会や新年会をしていたことがあり、しばらく開いていなかったのだが、一九一六年秋の学友会総会の時にこの問題が提起され、賛否両論で討議されたが、採決の結果、忘年会を開くことに可決された。十二月三十日晩、南明倶楽部で開会さ

れたのだが、場内外があふれる大盛況だった。白南薫が登壇し開会の辞を述べ、

「一九一六既為暮　独坐旅館不已思
　遠望西天若有失　其人心事果如何」

という詩のようなものを詠むと、賞賛なのか嘲弄なのか満場が拍手をして、照れくさい思いをしたことがあった。この晩に簡単な劇が上演された。旧約聖書の出エジプト記の出来事で、イスラエルがエジプトに征服されて多くの民が捕虜となり、エジプトに住みながら虐待を受け、故郷に帰ることを念願していたところ、偉大な預言者モーセが出現し、神の啓示を受け、イスラエルの民をエジプトから救出し、紅海を渡り、荒野を経て、カナンの地すなわちイスラエル本国に帰ってゆく、という話を演出したものだったが、自分が置かれている境遇が似ている我等学生たちには大きな感激を与えたのだった。

⑭聖誕祝賀会

在日本東京朝鮮基督教青年会が毎年十二月二十五日に開催する聖誕祝賀会は、時期的には不便な時だが、前記の運動会に負けず劣らず学生たちの関心を引く行事だった。この会合には各大学同窓会の対抗競技のようなものはなかったが、男女学生数十名によるコーラスが人気であり、時には寸劇などもあった。私が明治学院四年生の時に、聖誕祝賀会で、新約聖書「ルカによる福音書」にある放蕩息子の悔い改めの喩え話を脚本化した。①ある富豪の次男が財産を貰い受けて他郷に行く場面、②そこで不良の友達と付き合い放蕩を尽くし財産を使い果たしてしまう場面、③困窮し、養豚家の作男になる場面、④悔い改めて父親のもとへ帰る場面、の四場面を演出したのだが、大きな拍手をもらった。

当時、我々の青年会と趣旨を同じくする中国基督教青年会が東京にあったのだが、その翌年に中国の安徽省一帯で大飢饉があり、中国青年会で寄付金を集めるため簡単な音楽会を開くことになった。前年に我々の聖誕祝賀会に中国青年会幹事の馬伯援氏が同席して興味を持たれたのか、その会で放蕩息子の劇の再演をしてほしいと強く要請された。青年会同士の友誼もあり、また彼らの不幸に同情する意味でも出演することにした。

神田区美土代町にある日本基督教青年会講堂は西洋人と中国人で大盛況だった。朝鮮学生の劇だからという儀礼的な挨拶なのか、本当に可笑しかったのか、とにかく拍手喝采を受けた。放蕩息子を演じた私は西洋人たちの間で放蕩息子として広く知られるようになった。

⑮青年会幹事

在日本東京朝鮮基督教青年会は一九〇六年八月に設立されたのだが、総務は金貞植氏で幹事は張惠淳氏だった。会館は神田区美土代町にある日本基督教青年会館の

一室を借用していたが、翌年八月に神田区西小川町二丁目七番地にある日本人家屋を貰い受け移転した。留学生が日増しに増加し、事業拡大と体制強化のために、会館の必要性が切実となり、努力した結果、一九一四年九月に神田区西小川町二丁目五番地に二階建て洋屋の新会館を建築した。青年会の当局者はもちろんのこと、学生達の喜びも大きかった。異国の日本、東京だからなおさらそうだった。総工事費三万円中、我々学生の義捐金が七百円、スコットランド基督教青年会の寄贈金が一千円で、その他の金額は米国ニューヨークにある世界基督教青年会が負担してくれた。一九一五年五月に初代総務として多くの功績を残した金貞植氏が家庭の事情により辞任し帰国することになると、青年会会員はもちろん一般学生たちも惜別の情に耐えがたかった。その後、白南七氏が幹事に選ばれたが、張惠淳氏が数年前にアメリカ留学に行った際、その後任を保留中であったため、同時にこれを補充する意味で、全羅南道康津出身で早稲田大学専門部政治経済科に在学中の金榮洙氏を幹事に選任し、九月から執務するようになった。しかし一月に幹事の白南七氏が個人的な事情で辞任し帰国することになり、早稲田大学大学部政治経済科に在学する白南薫を幹事として選任し、新年から執務をするようになった。

私が青年会幹事に選ばれた後、ホフソンマー先生とオルトマンス博士を訪問し、このことを報告すると、両先生は大変喜んで、「今日の君があるのは君が神様の助けを信じているからだ。今後も主にあって多くの成功があることを祈っているよ」とおっしゃった。私は長い間援助して下さったことを感謝し、別れの挨拶をすると、両先生は満足した様子で握手を交わした。十二月三十日に荷物をまとめ、青年会館の二階の北東側の一室に移った。東京に来てから今まで居留してきた芝区今里町を離れることになり、他郷だとしても感慨無量であった。

青年会では、長期休暇期間を利用して春令会や夏令会を開催し、宗教的修養や親睦を企図することが宗教部の事業の一つだった。昨年以来総務、幹事の異動があってこのような集会も無かったのだが、今は内部も安定したので、春休みを利用して春令会を開催する必要があった。そこで宗教部主催で三月二十日から一週間、箱根山湯河原で春令会を開催した。李汝漢牧師を中心に、日本人学者の安部磯雄、吉野作造の両氏の特別講演もあり、予定していた三十名の学生が参集し、互いの親睦は勿論、たいへん有益で愉快な機会を持ち、芦ノ湖遊覧は特に愉快だった。

⑯家族を東京に

私は学校を終えたらすぐ帰国しなければならないという家庭内事情だったが、青年会幹事の職を受諾したので、そうせずとも良くなった。青年会という一宗教団体

の無力な機関のようだが、東京にいる我ら留学生界にあっては非常に重要な機関であり、全力を傾注する必要があり、またその意欲もあった。そのため、今や家族を東京に連れてくることしか他の道はなくなった。そこでこの件を青年会幹部で議論し、賛成してもらった。こうして春令会を終えてからすぐ帰国することになった。

四月三日に故郷の長連に帰り家に入ると、母も妻も喜んだ。東京へ移住することは東京を出る前に二度ほど手紙で伝えて来たが、家に帰り家族が集まった席で再び詳しく話した。長い間別れていた家族が一緒になることは賛成だが、東京まで行くことはなかなか理解してもらえないようだった。数日かけて何度も話し合った結果、同意してもらい、準備に着手した。永遠に離れるのではないが長く住んで来た故郷への情が生じ、住み慣れた故郷と別れるのだから、親戚は勿論村内外の知り合いたちも、親しい親しくないを問わず非常に名残惜しそうにするので、私たちも名残惜しかった。しかし決心したことであるし、青年会の仕事に加えて卒業の時期が近づいている私としては、一日も早く出発せねばならない事情もあった。多少いらいらしながらも、一方であれこれ事情を斟酌しながら、もう一方で準備を進め、五月初旬に出発することにした。一九一九年五月十日、男女数十名の涙の送別を受け、親しい故郷である長連を発ち、翌朝南大門駅に到着、信行旅館に投宿した。多少不備だったものを準備して、十三日朝、母と我々夫婦は南大門駅を発ち、十五日午後東京に到着した。青年会幹部と多くの学生達が迎えてくれた。その中には故郷の学生である孫斗煥、呉基権、崔泰永の三人がおり、母と姉を喜ばせてくれた。麹町区飯田町にある私達の教会堂へ行って何日かすごし、同じ飯田町にある日本人家屋を貰い受けそこに引っ越した。

⑰早稲田大学卒業

今まで学校を欠席したことはなかったが、今回引越しのために二ヶ月近く欠席したのみならず、卒業期であったのでよりいっそう困難に直面することになった。他の学生にノートを借りて欠席した部分の筆記を書き写しながら、同時に試験の準備もしなければならなかったのだ。東京生活には多少の経験があったが、新しい生活を始めてみると、主婦である妻の環境が全く変わったのみならず、日本語もわからないので、その困難は並大抵のものではなかった。しかし幸いなことに各業種の商店の人が毎朝注文を聞きに来てくれるのだ。必要なものを言えばすぐに持って来てくれるだけでなく、これを帳簿に記入しておいて月末に会計するのだ。そこで御用聞きが来れば、その日に必要なものが何かを妻に聞き、私が通訳をした。実に忙しかった。しかし全力で試験を受けて、七月五日に卒業式があった。この時に一緒に卒業し

た学生は、大学部政治経済学科が申翼熙、金良洙、李顕奎、白南薫の四人であり、大学部英文科が崔斗善、専門部政治経済科が金榮洙、専門部法科が盧炳瑞の各一人、合計七人だった。

⑱総務・幹事の異動

基督教青年会は伝道機関であり、広義の修養と親睦を目的とする団体だ。特に東京にある青年会は、故郷を離れ遠く海外に来て修学を目的としている学生、すなわち自国政府の保護がない学生達を対象として仕事をする機関であるので、青年会本来の目的以外で名状しがたい部分がある。またこの学生達は十三道各地から来ており、本国の縮図といった感があり、名前は学生青年会だが実はそれ以上の意義を持っていた。したがってこの事業は大変重要であり、また広範なのだが、財政がきわめて微弱であり、辛うじてその存在を維持することができる程度で、満足な成果を収めることができず大変遺憾だった。しかし学生達の便宜を助けることには全力を尽くした。

今、その大略を記録すると、次のようになる。会館は総工事費三万円の建物であり、応接室、食堂、娯楽室、以上三室をつなげてホールとして使用したのだが、約百余名を収容でき、その他に事務室、浴室、炊婦室、下人室があり、二階は寄宿舎として七室、ベッドを使用していた。事業は年に一度の予算総会、月に一度の月例会を開催し、その間の経過を報告した。また全会員の親睦を図るために宗教・学術講演会を一学期に数回開いて伝道と修養に貢献し、春季には卒業生祝賀会、秋季には新人歓迎会、春季または秋季に大運動会、春令会または秋令会（東京近くの名勝地へ行き約一週間聖書研究と名士の講演を通じて修養と親睦に力をそそぐ会）、英語聖書研究班、週刊八ページの『基督青年』の発刊（以前にはなかったのだが会員と一般学生の希望で一九一九年九月に創刊）、聖誕祝賀会、その他の小会合などが定められた年中行事だった。

幹事の金榮洙氏が辞任して帰国し、後任を検討し議事部で議論した結果、張徳俊氏を選定し、同時に欠員であった総務は幹事の白南薫を昇格させることに決定し、本国にある基督教青年会連合会の同意を得た。ところが、張徳俊氏（張徳秀氏の伯父）が『東亜日報』の創刊に関わることになり幹事を辞任し帰国すると、再びその後任を探さなければならなくなった。そこで各方面から検討したところ、明治学院を卒業して帰国した金洛泳氏を後任幹事とすることを決定した。

⑲民族自決の原則

ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世は野心に満ちた一代の英雄として世界制覇の雄志を抱き虎視眈々とその機会をう

かがっていたが、一九一四年七月、セルビアのサラエボでスラブ族の一青年がオーストリアの皇太子フェルディナンドを狙撃した事件がおきた。以前から独・墺・伊の三国同盟と英・仏・露の三国協商がヨーロッパの勢力均衡を保ってきたが、当時ドイツはオーストリアを合併する意志を持っており、好機を失うなかれと思い、オーストリアをして宣戦布告をさせると共に、同盟国であるという口実でドイツが即時に出兵し、東ではポーランドを通ってロシアに侵入して乗勝長駆し、西ではフランスに侵入する途中に中立国であるベルギーを経由しようとしたのだが、予想外にアントワープで莫大な損害を受け、さらに出兵しないだろうと確信していたイギリスが出兵し、一層苦戦を強いられた。しかしベルダンを通りパリへ向かおうとしていた時に、アメリカ合衆国が出兵してヨーロッパに上陸したのは、実に青天の霹靂だった。ヴィルヘルム二世の夢は消えて終幕を告げた。これが第一次世界大戦だった。

数年かけて世界の耳目を集めた大戦争が終わり、一九一八年七月国際連盟がパリのベルサイユ宮殿で講和会議を開催した。[23] 米国の歴代大統領がヨーロッパに旅行したことのないその前例を打破し、当時の米国大統領ウィルソン氏が自ら講和会議に出席し、有名な十四か条の原則を発表し、全世界を驚かせたことは今さら言うまでもないが、特に我々が非常に大きな関心を持ったことは、言うまでもなく民族自決の原則であった。

⑳二・八独立宣言

この原則が報道されると韓国人は老若男女を問わず五条約〔第二次日韓協約〕七条約〔第三次日韓協約〕をはじめとした統監政治ないし総督政治の下で、口があっても言えず、耳があっても聞けず、筆があっても書けない状況で、我々には民族自決の原則が実現できないのか。どうすればこの原則が我々にも適用され、独立国家の自由民族として、これまで受けてきた蔑視から免れることができるのか。互いに信頼できる人が静かな席で会えばため息混じりにひそひそと話した。東京にいる学生達は学ぶために外国に来ているので比較的自由な立場で密偵を避けながら討論もし、また方法論も話し合っていた。

その年の十二月のある日、白寛洙氏が来訪し、談話の最後に「独立運動を起こすために学生の間で実践にうつすことを決定し、今準備中なのだが、その後の収拾のために、君は知らないことにして青年会の謄写版を使わせて欲しい」と頼んだので、これを許可して別れた。私の思い込みかもしれないが、時が経つにつれて学生達が一般的に緊張し、沈鬱になっているようだった。あとで聞いたことだが、宋継白くんを本国に送り、宋鎮禹、元相允の両氏を訪問した際、「東京にいる学生達が二月八日に独立宣言をすることを決定し準備が整ったのだが、本

国でも同じ時期に動くことは出来ないか」と尋ねると、「色々な準備があり、同じ時期に始めることは出来ないが、実行することにはしているので、学生達が先にするのも良いだろう」と答え、財政的援助があったとのことだ。

一九一九年二月八日、学友会総会が東京市神田区西小川町二丁目五番地にある在日本朝鮮基督教青年会ホールで開催された。場内は立錐の余地もなくかつてない盛況だった。会長の白南奎氏が開会を宣言した後、議事の順序を変更するために徐椿、李琮根の両氏の演説があった後、会長が司会を辞退して尹昌錫氏が登壇し祈祷した後、白寛洙氏の独立宣言書と決議文朗読が終わり、力強い万歳の声が場内を震わせた時、監視に来ていた警察の検束が始まり、あちこちで椅子が飛び交い格闘が起きた。その中でも目についたのは、「こいつをつかまえろ、そいつを検束しろ」とあちこち動き回る密偵・鮮干甲の姿だった。白い雪がこんこんと降る夜だった。多くの学生と私も靴も履かせてもらえず裸足のまま西神田警察署に連行されると、二十余名が来ていた。これが東京の朝鮮留学生による二・八独立宣言だった。

独立宣言書

朝鮮青年独立団はわが二千万の民族を代表し、正義と自由の勝利を得た世界万国の前にわが独立を期成せんことを宣言する。わが民族は四千三百年の長い歴史を有し、世界最古の民族の一つである。時には中国の正朔を奉じたことはあったが、これは両国皇室の形式的な外交関係に過ぎなかった。朝鮮は常にわが民族の朝鮮であり、いまだかつて一度として統一国家であることを失い、異民族の実質的支配を受けたことはなかった。

日本は朝鮮が日本と唇歯の関係にあることを自覚していると称して、一八九五年清日戦争の結果率先して韓国の独立を承認した。イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、ロシアなどの諸国もまたみな独立を承認しただけでなく、これを保全することを約束した。韓国もまたその恩義に感じ鋭意諸般の改革をおこない、国力の充実を図ったのである。

当時ロシアの勢力が南下し東洋の平和と韓国の安寧を脅かしたので、日本は韓国と攻守同盟を結び、露日戦争をはじめたが、東洋の平和と韓国の独立はこの同盟の主旨であった。ここにおいて韓国はいよいよその好意に感じ、陸海軍の作戦上の援助はできなかったが、わが主権の威厳までも犠牲にしておよそ可能な限りの義務をつくし、東洋の平和と韓国独立の二大目的を追求した。

しかしその戦争が終結するにおよんで、当時のアメリカ大統領ルーズベルトの仲裁によって講和会議が開かれたが、日本は同盟国である韓国の参加を許さず、露日両

国の代表は日本の韓国に対する宗主権を任意に議定した。日本はその優越した兵力を恃み、韓国の独立を保全するという旧約に違反し、韓国皇帝および政府を脅かし、韓国の国力充実によって独立が得られる時期までという条件をおしつけて欺き、韓国の外交権を奪って、日本の保護国となし、韓国をして世界列国にたいし直接交渉する道を断たしめた。さらに相当の時期までという条件で司法・警察権を奪い、徴兵令実施までという条件で軍隊を解散し、民間の武器を押収して日本の軍隊と憲兵警察とを各地に配置した。甚だしきは皇宮の警備までも日本人の警察を使用するに至った。このようにして遂に韓国を無抵抗なものにしながら、わが明晳な光武皇帝を放逐し、精神の発達が充分でない皇太子を擁立して利用し、日本の走狗をもっていわゆる内閣を組織し、ついに秘密と武力とをもって合併条約を締結した。ここにわが民族は建国以来半万年にして自己を指導し援助すると約束した日本軍閥の野心的政策の犠牲となった。実に日本の韓国にたいする行為は詐欺、暴力から出たものにして、このような詐欺による大きな成功は、まことに世界興亡史上特筆すべき人類の大恥辱といわねばならない。

かの保護条約を締結するとき皇帝と賊臣を除く数人の大臣はあらゆる反抗手段をつくし、その発表の後もわが全国民はみな素手でもって可能な限り反抗した。司法・警察権が奪われ軍隊が解散されたときもまた同じく反抗した。こうして合併の際には、手中に寸鉄の武器をもたず、可能な限りの反抗運動を試みたが、精鋭な日本の武器により犠牲となったものは数知れない。以後十年間、独立を回復するための運動で生命を犠牲にしたもの、また数十万に達した。かの惨酷な憲兵政治のもとで、手足と口舌の自由を奪われながらも、独立運動は間断なくつづけられた。これらによってみても、韓日合併は朝鮮民族の意思ではないことを知らねばならない。このようにして、わが民族は日本軍国主義の野心家の詐欺、暴力のもとに民族の意思に反する運命におかれた。それ故に正義、人道をもって世界を改造するこの時にあたり、その匡正を求むることは当然の権利であり、また世界改造の主人公であるアメリカ、イギリスは保護と合併にたいし率先して承認をしたという理由によって、今日その旧悪を贖う義務がある。

また合併以来の日本の統治政策をみると、かの合併当時の宣言に反し、わが民族の幸福と利益を無視し、征服者が被征服者にたいするような古代の非人道的な政策を襲用し、わが民族にたいし参政権、集会・結社の自由、言論・出版の自由などを一切許さず、甚だしきは信教の自由、企業の自由に至るまでも拘束している。行政、司法、警察などの諸機関で朝鮮民族の私権さえも侵害しないものはない。公的にも私的にもわが民族と日本人との間に優劣の差別を設け、わが民族には劣等の教育を施

し、永くわが民族を日本人の使役者にしようとしている。歴史を書き改め、わが民族の神聖な歴史的、民族的伝統と威厳を破壊し、さらに凌辱を加えている。少数の官吏を除くほかは、政府の諸機関、交通、通信、兵備などの諸機関の全部あるいは大部分には日本人を使用し、わが民族に永遠に国家生活の智能と経験を得る機会を与えないようにしている。わが民族は、このような武断専制の不正、不平等の政治のもとでは、決してその生存と発展を享受することができない。それだけではない。人口過剰の朝鮮に無制限の移民を奨励し、土着のわが民族が海外に流離するのやむなきにいたらしめた。また政府の各機関はもちろん私設の諸機関にまでもことごとく日本人を使用し、一方ではわが国民に職業を失わしめ、また他方ではわが国の富源を日本に流出せしめた。また商工業においても日本人に対してのみ特殊な便益を与え、わが民族にはその産業発展の機会を失わせている。このようにあらゆる方面でわが民族と日本人の間の諸般の利害は互いに相反し、その害を受くるものはわが民族である。故にわが民族は生存の権利のために独立を主張するのである。

最後に東洋平和の見地からみても、かの最大の脅威であったロシアはすでにその軍事的野心を放棄し、正義と自由にもとづき新国家の建設に従事している。中華民国もまた同様である。さらに今後国際連盟が実現すれば、再び軍国主義的侵略を敢行する強国はなくなるであろう。とすれば韓国併合の最大の理由はすでに消滅している。これより、もし朝鮮民族が無数の革命の乱をおこすとすれば、日本に合併された韓国は却って東洋平和を乱す禍根となるであろう。わが民族はただ一つの正当な方法によってわが民族の自由を追求する。もしこれが成功しなければ、わが民族は生存の権利のために自由な行動をとり、最後の一人に至るまで必ずや自由のために熱血をそそぐであろう。これがどうして東洋平和の禍根とならないであろうか。わが民族は一兵ももっていない。わが民族は兵力をもって日本に抵抗する実力はない。しかしながら、日本がもしわが民族の正当な要求に応じなければ、わが民族は日本にたいし永遠の血戦を宣布せざるを得ない。

わが民族は高度の文化をもってからすでに久しい。そしてまた半万年にわたる国家生活の経験をもっている。たとえ多年の専制政治の害毒と境遇の不幸がわが民族の今日を招いたものであるにせよ、今日より正義と自由とにもとづく民主主義的先進国の範に従い、新国家を建設するならば、わが建国以来の文化と正義と平和を愛好するわが民族は必ずや世界の平和と人類の文化にたいし貢献するであろう。ここにわが民族は日本および世界各国にたいして自決の機会を与えることを要求する。もしその要求が入れられなければ、わが民族はその生存のため

に自由な行動をとり、わが民族の独立を期成せんことをここに宣言する。

一九一九年二月八日

朝鮮青年独立団代表

崔八鏞　尹昌錫　金度演　李琮根　李光洙　宋継白

金喆寿　崔謹愚　白寛洙　金尚徳　徐椿

決議文

一、韓日合併はわが民族の意思によるものでなく、わが民族の生存と発展を脅かし、また東洋の平和を乱す原因となっている。それ故に本団は、わが民族の独立を主張する。

二、本団は、日本の議会と政府にたいし朝鮮民族大会を召集し、その大会の決議をもってわが民族の運命を決定する機会を与えられんことを要求する。

三、本団は、万国平和会議における民族自決主義をわが民族にも適用せんことを請求する。またその目的を達するために、日本に駐在する各国大使、公使にたいし、本団の意思を各自の政府に伝達することを要求する。同時に委員二人を万国平和会議に派遣し、わが民族全体の派遣委員と一致した行動をとる。

四、以上の諸項の要求が不幸にも失敗すれば、わが民族はただ日本にたいし永遠の血戦をなすのみである。これによって生ずる惨禍についてわが民族はその責任を負わない。

㉑出版法違反

西神田警察署に拘束された学生のうち、四、五名と私はその晩に釈放されたが、残り約二十名は日比谷警察署へ移されて行った。数日後、署名した九人（李光洙、崔謹愚の両人は二月初旬に上海へ行った）を市谷監獄へ移し、他の学生達は全員釈放された。私は寝具と差し入れを持って行こうと青年会館を本部としてその基金募集に全力を尽くした。学生達は各々自分の募金を持参したのだが、この時本国から所謂自治運動をするという七人団が東京に来た。ある日その代表である朴、李の二人が私を訪ね二百円を寄付すると申し出たが、私は「あなた方の厚意に感謝するが、その九人は独立運動をして収監中なので、あなた方の寄付を喜ばないと思います。大変申し訳ないですが、私としてはこれを受け取ることは出来ません」と言って謝絶した。一方、本国からは金周演氏（金度演博士の伯兄）が三十円を、宋継殷氏（宋継白君の伯兄）が二十円を寄贈して下さったことに対しては実に申し訳なく、また感謝であった。

先に記録したように九人が収監されて裁判があったので、弁護人を斡旋しなければならなかった。当時、青年会理事をしていた日本人のうち法学博士・農学博士の新渡戸稲造氏がいたので、多少の便宜をはかってもらえるだろうと思い訪問したのだが、面会を断られた。その時は憤りを感じた。彼もまた日本人であるから仕方がないと思いつつも、やはり偏狭な人物だと思った。私たちは故郷ではない東京の学生社会にあって、青年会も財政が逼迫していて適当な決断をすることができずにいた。我々の活動に理解のない人士には依頼することが難しいので、平素からよく知っている東京帝国大学学生青年会幹事の藤田進男氏を訪問し相談すると、今井嘉幸[24]、作間耕造の両氏を紹介してもらい、訪ねたところ、両氏に弁護を快諾していただき、感謝して帰ってきた。しかし、この二人の他にもう少し権威のある者はいないかと考えて、数年前の百五人事件[25]で名声がある花井卓蔵博士[26]を訪問した。我々の事情を話して弁護を請うと、その場ですぐに快諾し、百五人事件で弁護したことを概説した後、壁にかかっている四律一首を指し示し「これは百五人の中の一人、呉熙源氏が出獄後に有難うと言って送ってきた自作自筆の詩なんだ」と自慢げに話した。これに勇気を得た私は謝意を表して別れた後、すぐに法曹界の権威である鵜澤總明博士[27]を訪ね、来意を話すと、彼もまたその場ですぐに快諾して下さり、実に感激した。布施辰治[28]弁護士が自ら進んで弁護をしようと申し出て来たのだが、氏は社会主義の色彩を持つ人だというので多少躊躇したのだが、我々のために弁護してくれるという好意に感謝して受諾した。

裁判は二月二十日頃に始まり、署名した九人は勿論、数十名の学生の証人審問があったのだが、私もその中の一人だった。五月になり検事の論告があったのだが、出版法違反で禁錮二年の求刑であり、弁護人達の無罪弁論があった後、六月十日頃に禁錮九ヶ月の言い渡しがあった。控訴するか服役するか話し合われ、控訴することも一つの抗争なので提訴しようという意見もあったが、結局無罪となる可能性はないので一日でも早く出獄する方が良いという意見を採用し、服役することを決定した。[29]

㉒出獄

裁判が終結した後、九人のために無報酬で弁護をしてくれた方々に謝意を表するために上野精養軒に五氏を招待したところ、多忙な中時間を捻出して全員出席し、学生側も十余名出席し、これまでの厚意に感謝すると共に、一夕懇談する機会を持てたことは本当に有意義なことだった。

裁判が確定し、今までのように食事の差し入れが出来なくなった。面会も極めて制限され、特別な事情がない限り月一回程度だったのだが、これは私が担当して毎月

一回九人と面会することにした。それだけではなく、書籍や衣類の差し入れ、その他九人に関することはほとんど私が担当することになった。そうして監獄へ行く機会が多くなり、看守とも面識ができ、私に会うと「ここがお前の客間か?」という冗談まで出るようになった。

十二月になり、面会に行った時に野口典獄を訪問した。「十二月二十五日はクリスマスなのだが、九人はみな信者なので、彼らと一箇所で祈祷をしたいのだが許可をしてくれないか」と要請したのだが、「祈祷は日本語でして他の言語では話さないことと、看守部長一人を同席させれば、許可してもよい」とのことで、そのように合議した。二十五日になり監獄へ行くと、看守部長が私を案内し教誨室へ入った。しばらくして一人ずつ九人が来室し、目視で挨拶を交わした後、私が来意を説明した。すなわち、今日はクリスマスだが私たちがみな信者なので、一箇所で祈祷をすることを要請したところ、野口典獄が特別に許諾して、この機会を与えてくださったことを感謝するということ、また日本語で祈祷し他の言語では話さないことを約束したことなどを話した。皆で頭を垂れ日本語で祈祷すると、九人も私も皆泣いた。終了後、涙にぬれた目で挨拶を交わして別れた。

翌年三月九日は九人が出獄する日だった。この日の早朝に二、三人の学生と共に市谷監獄へ行き典獄と会い、これまでの厚情を感謝した。門前で出獄する九人と会い、青年会館へ帰ると、多くの学生が来会し互いに再会を喜んだ。しばらくの間互いに涙をにじませ挨拶を交わし、その後各宿所へと帰って行った。

〔以下略〕

訳注

(1) 呉氏　呉舜炯。白南薫の従兄。崇実学校卒業後、長連で熱心に伝道し、日本に留学。

(2) 舎廊　客間を兼ねた主人の書斎。

(3) 金益斗（一八九四～一九五〇）長老派牧師。全国各地でリバイバル集会を開いた。

(4) 崔光玉については**資料2**の注（3）（10ページ）参照のこと。

(5) 金亀は金九（一八七六～一九四九）の別名。政治家・独立運動家。金鴻亮と共に楊山学校を設立。大韓民国臨時政府主席をつとめる。

(6) 金鴻亮（一八八五～一九五〇）教育家・独立運動家。黄海道安岳出身。一九〇六年明治学院普通学部に編入し、一九〇九年卒業。帰国後、金九らと共に楊山学校を設立し、新民会にも加入、独立運動に投身した。

(7) 金洛泳　明治学院普通学部在学中に太極学会の会長をつとめ、卒業後、東京朝鮮基督教青年会

幹事や戴寧明新学校の校長などをつとめる。

(8) 熊野雄七　横浜バンドの一人。明治学院中学部長をつとめた。

(9) 宮地謙吉　明治学院中学部庶務主任で、一九〇六年に『白金学報』を創刊した。

(10) ワイコフ（一八五〇～一九一一）改革教会宣教師。明治学院普通学部教授。

(11) 朴泳孝（一八六一～一九三九）政治家。一八八四年に金玉均らと甲申政変を起こし、日本に亡命。その後、山崎永春と名前を変えた後、明治学院に入学。日清戦争が勃発すると、帰国し内部大臣に入閣。朝鮮銀行理事、東亜日報社初代社長、朝鮮総督府中枢院議長などを歴任した。

(12) 井深梶之助の一九〇九年の日記には、「十月二十七日、水曜日　授業例ノ如シ。礼拝ノ時生徒一同ニ此ノ際静粛ヲ守リ弔意ヲ表スベキコトヲ注意ス。」とある。（明治学院史資料集より）

(13) 安岳事件。安明根（安重根の従弟）の黄海道での反日蜂起の企てに協力した疑いで金鴻亮も逮捕された。

(14) ホフソンマー　明治学院宣教師。一九〇七年より明治学院普通学部で英語を教える。一九一九年には中学部長代理をつとめた。

(15) 金貞植（一八八二～一九三七）独立運動家。東京朝鮮基督教青年会初代総務をつとめる。

(16) 曺晩植（一八八三～一九五〇）「朝鮮のガンジー」と呼ばれる独立運動家・教育者・政治家。朝鮮日報社長、朝鮮民主党委員長などをつとめる。

(17) 領袖は長老の前段階の役員職で、執事よりも上の役職。

(18) オルトマンス（一八五四～一九三九）明治学院神学部教授、理事長、総理事務取扱などを歴任。

(19) ウリ同窓会については早稲田大学ウリ同窓会編『韓国留学生運動史―早稲田大学ウリ同窓会七〇年史』（一九七六年）参照。

(20) 宋鎮禹（一八九〇～一九四五）独立運動家・政治家。東亜日報社長をつとめる。

(21) 金性洙（一八九一～一九五五）独立運動家・政治家。一九二〇年東亜日報を創刊。一九五〇年に大韓民国第二代副統領となる。

(22) 鄭世胤については**資料2**の7ページ参照のこと。

(23) 正しくは一九一八年一月に「平和のための十四か条」発表、一九一九年一月からパリ講和会議開催、同年六月ヴェルサイユ条約締結、一九二二年国際連盟設立の順番である。

(24) 今井嘉幸（一八七八～一九五一）弁護士、衆議

院議員、普通選挙運動家。

(25) 花井卓蔵（一八六八～一九三一）人権派弁護士として足尾銅山鉱毒事件や大逆事件など多くの重大事件の弁護を担当。

(26) 百五人事件は韓国併合期の寺内総督暗殺未遂容疑事件。百二十二人が起訴され、百五人に懲役刑を言い渡したが、控訴審では九十九名が無罪となった。

(27) 鵜澤總明（一八七二～一九五五）弁護士・政治家。第一東京弁護士会会長、明治大学総長などを歴任。

(28) 布施辰治（一八八〇～一九五三）弁護士・社会運動家。『布施辰治と朝鮮』（総和社、二〇〇八年）参照のこと。

(29) 二・八独立宣言に対する実際の裁判日程は、二月十日起訴、二月十五日第一審判決、三月二十一日控訴審判決、六月二十六日上告審判決だった。（内務省警保局保安課『朝鮮人概況』より）

解説　白南薫（ペクナムン）について

佐藤　飛文

白南薫（一八八五～一九六七）は明治学院出身の教育家・政治家である。

一八八五年に黄海道の長連で生まれる。従兄の呉舜炯の影響で信仰を持つようになり、一九〇四年にキリスト教に入信。金洛現と共に長連教会に光進学校を設立した。

一九〇九年に日本に渡り、明治学院普通学部二年に編入。一九一三年に明治学院普通学部を、一九一七年に早稲田大学政治経済学部を卒業した。

留学中に学生運動を指導し、一九一七年からは東京朝鮮基督教青年会の総務をしながら、一九一九年の二・八独立運動では裏方の実務を担当した。

一九二三年に帰国後、晋州一進学校（慶尚南道）、東莱日進学校（釜山）、協成実業学校（ソウル）、光新産業学校（ソウル）などの校長として民族教育に力をそそぎ、創氏改名を最後まで拒否した教育者として知られている。

植民地支配からの解放後は韓民党の創党幹部となり、一九五五年民主党最高委員、一九六三年新民党全党大会議長、一九六三年民政党最高委員などを歴任した。

資料7は白南薫の自叙伝『私の一生』（解慍・白南薫先生紀念事業会発行、一九六八年）の抜粋である。この自伝の編集には、金洛泳や金相敦（ソウル市長）など、明治学院出身者も参加している。第一章の「幼年時代」から第五章の「老年時代」まで、付録なども含めると三百五十ページ以上の大作であるが、このうち、第三章の「青年時代」を訳載した（ページ数の関係で一部省略した部分あり）。

白南薫は来日当初、日本語も英語もほとんど出来なかったようだが、明治学院の編入試験には合格した。その頃の外国人留学生の試験は特別試験だったようである。試験の時には、卒業生の金鴻亮と五年生の李寅彰・金洛泳が同行し、彼を入学させてくれと学校側と交渉したことが書かれている。明治学院に通う朝鮮人留学生が増加し、それも黄海道や平安道出身の者が多いのは、この白南薫の場合のような、生徒や卒業生による紹介があったからではないかと思われる。それで「入学した当時は、『韓国』人学生が四十名ほどになっていた」（87ページ）のであろう。白南薫自身も、明治学院に入学する朝鮮人学生達の保証人を数多く引き受けている。

白南薫は金鴻亮（黄海道での愛国啓蒙運動の同志であり、安岳地方の富豪の息子だった）の援助で明治学院へ通っていたが、金鴻亮が安岳事件で逮捕され学費が断絶してからは、ホフソンマー宣教師やオルトマンス博士の支援を受けながら苦学して通う。その援助は彼が明治学院を卒業してからも続けられた。

白南薫について、吉野作造は次のように紹介している。

「今日朝鮮人青年会の幹事として指導の任に当たって居る白南薫君は、予輩の親友であって、実に立派な温厚の紳士である。これをしも不都合の人物と認むるならば、まじめの朝鮮人の間には一人も適任者を見出すことはできないということになろう。青年会が朝鮮人青年学生の鬱勃たる元気に対する安全弁であるといったと同じ意味において、白君のごとき温厚なる紳士が幹事の位置に居るということは、また青年学生の元気を過度に奔放ならしめざるゆえんの息抜きであるともいえる。白君を青年会指導者の地位より失うは、ただに朝鮮人青年会にとっての損失であるばかりでなく、われわれ内地人の立場からみても、非常の損失といわなければならない」（吉野作造「朝鮮青年会問題　朝鮮統治策の覚醒を促す」『新人』一九二〇年九月号より）

なお、東京都千代田区猿楽町にある在日本韓国ＹＭＣＡの十階には「二・八独立宣言記念資料室」があり、総務だった白南薫や、宣言文起草者の李光洙の展示がある。また、韓国の忠清南道天安市にある独立記念館には白南薫の早稲田大学在学中のノートが展示されている。

（資料8）
私の履歴書①

二十世紀元年生まれ

朱（チュ） 耀翰（ヨハン）

腕白のころ

〔省略〕

小学生のころ

〔省略〕

東京留学

小学校では、作家の金東仁が私の一級上であった。金東仁の家は城内、私の家は城外だったが、距離のうえでは三、四百メートルしか離れていなかった。おたがいに「ボクの方が東京留学に行く」と言い張った。それは、私の方に勝ち目のある競争だったと思う。というのは、六年生の終わりごろ、東京の朝鮮人教会に赴任する父[1]に伴われて、卒業もしないで東京に行ったからである。父の東京行きの話は、おそらく一年ほど前から予定されていたはずである。

「お父さん、ボクも連れて行って」「ウン、よいとも。連れて行ってやるよ」―こういうやり取りがあり、それを自慢したのを聞いた平壌で指折りの金持ちの息子である金東仁が、「きみが行くんだったら、ボクの方が先に行くよ」と言い張ったのである。

日本に渡ってから、私は日本の尋常小学校一年の教科書を手に、「サイタ、サイタ、サクラがサイタ」と大声で読みながら勉強した。しかし、いくら自称孔子・朱子と肩を並べる人物の、他称神童息子も、一年生用の教科書を暗記する程度の日本語力では、日本の中学に入ることはできなかった。無試験で入れる中学は多かったが…。

合邦前のわが国の東京公使館が留学生監督府になっていて、そこに日本語教習所があった。そこで一年間日本語を勉強したのち、一九一三年に明治学院中等部（ママ）に入った。アメリカ人宣教師の建てた学校で、明治大学とは関係がない。無試験であった。

「きみより先に行く」と言っていた金東仁もすぐ追いかけて来て、明治学院中等部（ママ）に一緒に通った。なにしろ金東仁は大金持ちの息子なので、世界文学全集をはじめ、文学書籍を手当たり次第に買い入れ、私はそれを借りて読みふけったものである。私は今でもひどい近視であるが、そのときに目が悪くなったのである。トルストイ、ドストエフスキー、チェーホフ、ツルゲーネフ、ゴーリキーら、十九世紀から二十世紀初にかけたロシア作家の作品を特に耽読し、中でもチェーホフの作品を熱心に読んだ。イプセン、モーパッサン、それに少しばかり退屈だったがゾラなどといった西欧の作品も読み、詩

は、いちばん最初に読んだのがバイロン詩集であった。詩集の扉のページにバイロンの写真があったが、バイロンの美男子ぶりにまずぞっこん参ってしまった。ついで、永井荷風の訳になる「珊瑚礁」、上田敏の「海潮音」、与謝野鉄幹の「ライラックの花」などの翻訳詩集を通じて、ベルレーヌ、マラルメ、バレリーら象徴主義詩人に心酔し、象徴主義からは少し外れるが、ベル・アーレンも愛誦した。

中学時代

父の東京勤務の任期が切れたので、二年生の時からは寄宿舎生活をした。韓国人学生は合わせて七、八人いたが、アメリカ人宣教師が設立したミッション・スクールで西洋人教師も多かったし、それに自由主義的な校風だったから、「朝鮮人」だということで、特にいじめられた憶えはない。ただ、ある年の天長節の式に朝鮮人学生全員が欠席したことから予備役少尉だった体操の先生にしかられたことはある。太平洋戦争の時には苦境に立たされた自由主義的な校風であったが、当時の日本人の天皇観は絶対的なものがあった。井深という校長が週に一時間ずつ倫理を教えたが、五年生の時に「民主主義がよいか、それとも軍国主義がよいか」という試験の問題に、「民主主義がよい」と答案に書いて落第点をもらったことがある。

向こうっ気の強い金東仁が日本人学生と匕首（あいくち）を振り回しかけたこともあった。だれかが「チョウセンジン」と言ったことから、金東仁が怒って「このやろう、出て来い」と学校の裏手にあった海軍基地[2]に連れ出して、あわや匕首で渡り合う直前、ようやく引き留めた。金東仁は何ヵ月か通ったのち、美術学校に移って行った。

学生数は少なかったけれども、韓国人学生が優秀であるということを、私は明治学院中等（ママ）部と上海の滬江大学での生活を通じて体験した。わずかな数の韓国人学生が学校を牛耳ったのである。

大韓体育会長をやった玄正柱が蹴球部の主将、一級下の韓弼済（元韓一銀行長）と呉漢泳（元保健部長官）は庭球選手として活躍した。私は校誌「白金学報」の編集委員で、学生会にも参画し、雄弁大会に出て二等をやったこともある。作家の李光洙は五年ほど先輩だったから、私が入学する前にすでに卒業して早稲田に進学していた。

今、ソウルには明治学院同窓会があって、私が会長をやっているが、同窓会名簿に載っているのは、中等（ママ）部、高等学部、神学部を合わせておよそ五十人ほどである。民主党政府の時にソウル市長をやった金相敦が神学部出身で、自由党政府の時に国会議員と全羅南道知事をやった黄聖秀も一時神学部に通ったことがある。

そのほかに中等（ママ）部や高等学部出身としては、民主党最

高委員をやった白南薫、若い層ではソウル経済新聞編集局長をやった安正模、国土統一院企画室長をやった金而鉉らがいる。ときおり、日本人後輩たちからも手紙が来るし、韓国に来た時は飯をおごってやったりしている。

美術学校に転校して行った金東仁には日本娘とのロマンスもあったが、私はそういう経験はない。土曜日に友人たちと外出して、一金五銭也の蕎麦を食べるのが、しいていえば、リクリエーションといえた。あるときなど、蕎麦食い競べをやって腹をこわしたこともある。

あるとき、銀座にカフェーというのができたというので、友人たちの間で一度見物に行こうという話が持ち上がった。「中学生は入れないそうだ」と言ったけれども、「ともかく行ってみようじゃないか」ということになり、中学生服のままで出かけたのに、どういうわけか中に入れた。二十銭のコーヒーを注文したところ、ロング・ドレス姿のウェートレスが運んで来た。キラキラするスピンコールで刺繍をしたドレスを目にしたとたん、どこかの貴族のお嬢さんみたいな気がして、早々に退散したものである。

東京から横浜へ行く途中の大崎というところに、今のことばでいう赤線があった。やはり十代の向こうっ気から、一応見物でもしようというので、町の中をウロついていたら、「おしるこや」という看板が目についたので中に入った。てっきり汁粉屋と思ったのである。ところが、中に入ってみたら広い部屋にほかにお客もいないし、はなやかな鏡台が置いてあったので、これは少し変だぞ、という気がした。女将に「汁粉をください」と言ったら、「おしるこちゃんはみなおふろに行きましたよ」という返事だった。

こういうこともあるにはあったが、中学時代にこれといって取り立てるほどのエピソードはない。今、手もとには、中学時代の写真すら一枚もないのである。六十年後に、こうして「私の履歴書」なるものを書くことがわかっていたら、もう少し話の種も作っておき、写真も何枚か撮っておくんだった、と思う。

蕎麦屋のほかに、土曜日ともなれば足しげく通ったところが、目白にあるイチゴ畑だった。十銭も出せば、皿いっぱいのイチゴにミルクと砂糖をたっぷりかけてくれたが、今はそのイチゴ畑も、坪百万円もする準都心地になってしまった。

三年生のころからは、詩人川路柳虹[3]のところによく出かけた。日本語で詩を書いて行けば、手を入れてくれた。同人詩誌「曙」を出しながら、学生たちも指導してくれるというので訪ねたのであるが、日本人学生も五、六人通っていた。

「曙」が資金難に陥った時、柳虹は、私が朝鮮から留学に来た金持ちの御曹子とでも勘違いしたのか、何百円かの出資をしないか、と申し入れてきたこともあった。

後ほど、私が東亜日報に勤めていた時分、柳虹はモスクワに行くといってソウルに立ち寄ったので、久し振りに再会したこともある。

私の書いた「観燈会」(注＝旧暦の四月八日、釈迦牟尼の誕生を祝って、仏家や民家で燈をつける行事)がわが国では現代的な散文詩としては初めてのものといわれているが、日本語ではそれ以前に発表したものがある。「曙」にも載ったし、「秀才文壇」という雑誌に当選したこともある。「秀才文壇」というのは、純粋に投稿だけで制作する文学雑誌であった。

文芸誌「創造」

日本人では藤原義江[4]が同じクラスであった。五年生の時、英会話の時間にあったことである。アメリカ人の女の先生が生徒たちに背を向けて黒板に何か書いていた時、藤原が教卓の上に何かをソッと置いて席にもどった。教卓の前にもどった先生は、初めのうちはそれが何であるか、すぐには気がつかなかったようであるが、やがて顔を真っ赤に染めて「これ以上授業はできない」と、教室を出て行ってしまった。教卓の上に置いたのは、木彫りの男の性器だったのである。このことで藤原は退学処分にあった。退学されたのち、浅草の劇場に出演しているという噂が耳に入ったが、とうとう日本では最初の本格的なオペラ団を創団した。

日本語を通じて世界の文学作品を読み、また、日本語で書いた詩が「曙」や「秀才文壇」に発表されたりしたが、五年生のころから懐疑にとらわれはじめ、韓国語で詩を書くようになった。上述したように、「観燈会」がわが国最初の文芸誌「創造」の創刊号に載ったため、最初の現代散文詩といっているようだが、実は、「創造」創刊の前の年に発表した作品がある。

「幼い妹たちに」という副題をつけた散文詩「おまえの話」と、「泉は独りで[5]」「春の夢は速い」「翁草」「小川」「桃の花が咲けば」などが、五年生の末期と卒業直後の一九一八年に発表されたものである。主として、京都留学生たちの出した「学友」に発表した。

しかし、そのくらいでは満足できなかったので、卒業直前から金東仁と純文芸誌の創刊を計画した。金東仁が親もとから二百円だったかを工面してきた。校誌の編集経験があるので、私が原稿の督促から編集、校正、整版までいっさいを受け持った。

そのころ、金東仁はどこから手に入れて来たのか、ビールびん大のびんに詰めた黒い液体に熱い湯を入れて、「これを飲んだら眠気が吹っ飛ぶので、小説がよく書ける」と言って飲んでいた。濃縮コーヒーだった。しかし、計画が受胎して「創造」が誕生するまでには、人間一人が産まれるのと同じくらいの時間がかかった。資金の工面だけにも数カ月がかかった。原稿集めにはもっ

と時間がかかった。ハングルの活字がなかったので、あっちこっち駆けずり回って、横浜の福音印刷所というところでハングルのバイブルと賛美歌が発行されたことを耳にし、印刷は横浜でやった。表紙は、わが国西洋画の草分けである金瓚泳（ママ）が描いた。

金東仁が「弱者の悲しみ」という短編を書き、私が「観燈会」と「編集後記」を、東京朝鮮人ＹＭＣＡ総務だった崔承萬が随筆を書いた。崔承萬は北極の熊という意味で「極熊」というペンネームを使った。金億、呉天錫らも一緒だったが、[6]創刊号に何か書いたかどうかははっきりしない。[7]金煥という金持ちの家の息子が、作品は書かなかったが、だれよりも熱心に参与した。

最近、文学思想社が一九二四年に朝鮮文壇社が出した私の詩集「美しい暁」の影印本を出してくれたが、「観燈会」は「一九一九年一月三日」になっている。詩を書いた日付けなのか、「創造」創刊号が出た日なのかはっきりしない。「観燈会」は幼いころ、四月八日の釈迦牟尼誕生日に大同江でみた観燈会、平壌の人たちが春ともなれば登る西山、東山と、普通江対岸の西将台からながめた光景の記憶をたどって書いた詩である。

ああ、日が暮れる。西の空に、侘（わび）しい川の面（も）に、消えつつある紅（くれない）の夕焼け……ああ、日が暮れれば日が暮れれば、日ごと杏（あんず）の木陰で独り泣く夜がまたやって来るものを、今日は四月の八日、大通りを埋めて行き交う人びとの声は、聞くだに楽しげなのに、なぜわたし独り泣きをこらえられないのか。ああ、踊るよ踊る、真っ赤な火の玉が踊るよ。……

七十年前のことを詩に書いた六十年前のことがなつかしく思いだされたので、少しばかり引用してみた。

準備が遅れて、印刷に入ったのは冬であった。ハングルを知らない日本人印刷工が形を見ただけでよくも活字を拾っていた光景が、今でも鮮やかに浮かんでくる。

金東仁の書いた短編が検閲に引っかかって問題になった。トルストイの「復活」の一場面を翻案したのが、「剽窃（ひょうせつ）」ならぬ「猥褻（わいせつ）」として引っかかったのである。ネフリュートフが下女の体を奪う場面であるが、「いや、いや」と言いながらも脚は男を迎え入れるくだりを、朝鮮人である作中の登場人物が再演したのが問題になったのである。結局、そう多い部数を印刷する本でもないし、朝鮮に持って行って売る文学作品ということから、ようやく検閲が通った。

こうして、「創造」創刊号は、一九一九年の「二・八宣言（注＝ソウルでの独立宣言、すなわち三・一運動の前に、二月八日、東京留学生たちが起こした独立宣言事件）」の少し前に二千部を発行した。高敬相氏の経営していたソウル仁寺洞の海東書館に発送、販売したと記憶

している。高敬相氏は、のち金東仁に、金が切れたとき、第七号と八号の資金を出してやった文学理解者であった。

「廃墟」「白潮」「金星」などが三・一運動後、朝鮮総督府の政策が「武断政治」からいわゆる「文化政治」に切り替えられた後に創刊されたが、私たち文学少年の手でつくられた「創造」は、それなりに開拓者としての役割を果たしたことになる。

一高入学

一九一八年三月、中学を出たのちの数ヵ月間は、「創造」の創刊作業と併行して高等学校受験勉強をやった。当時、高等学校は九月入学、入試は七月に行なわれた。官立高等学校は全国的に統一試験を行ない、成績順に第一、第二志望校への合格いかんが決まるのであるが、私は第一高等学校を志願した。一高を志望した明治学院出身は、浪人組を合わせて約八十人だった。

官報に合格者名簿が発表される日であった。朝、顔を洗っていると、手紙が一通舞い込んで来た。某洋服店からの手紙で、「一高合格おめでとう。制服の誂(あつら)えは是非弊店で」という内容だった。おそらく、官報の印刷段階で合格者の名簿と住所を手に入れたのだろう。

朝食後、一緒に受験した親しい日本人級友数人が官報を見に行こうと、小石川の私の下宿にやって来た。彼らの口ぶりから見て、洋服店からの手紙を受け取っていないらしい。そこで、知らん顔をして近くのミルク・ホールに行った。みな額を集めて官報をのぞき込んだが、私はそんなのには興味がないといったふうにミルクを飲んでいた。明治学院では私一人しか合格しなかったのを知った級友たちはいっせいに「偉いなあ」と祝ってくれた。朝日新聞の記者が下宿に訪ねて来て、私のことが新聞に載った。朝鮮人で一高に合格したのは、私が初めてだったからである。ずっと前に劉鈿博士が通ったことがあるが、そのときは、韓国政府の留学生として無試験であった。新聞を読んでお祝いに駆けつけてくれたのが金俊淵氏（政治家）だった。彼は、三高だか四高を出て、東京大学に入ることになっていた。

父は、飯を食うのに困らないだろうというので、医師か建築家になるよう勧めてくれたが、私は詩に心酔していた時分だったので、途中でだめなら弁護士をやってでも飯は食っていけると思ったので、法科五類、すなわち仏法科を選んだ。一週に仏語が二十七時間であった。

一高は全寮制だった。新入生たちは、金ピカの徽章とボタンを取って塩水に漬け、中古品にしてしまった。真新しい帽子も、下水か何かに浸したり、ポマードを塗りたくったうえで机か廊下にこすりつけてカンロクをつけた。

夜、熟睡していたら、急に額が熱いので飛び起きたこ

とがある。有名なファイア・ストームだった。上級生たちが寝ている下級生にロウソクを垂らす行事である。あわてて飛び起きたら、「一杯飲め」といって酒をつき出した。熟睡中をたたき起こされても、上級生にたてつくことはできない。「鉄拳制裁」というものがあるからだ。秋になってからだったと思うが、野外演習（教練）を終えてから、初めて上級生と喧嘩をやる権利が与えられる。エリートたちが浩然の気を養う必須過程というので、日本人は高等学生たちのバンカラにきわめて寛大であった。

高げたに汚れた手拭いを腰にぶら下げて街をかっ歩しながら放歌高吟しても、「うちの息子もうんと勉強してああなってくれたら……」という、羨望と愛情のまなざしで見てくれる日本人であった。最近、夜の通りを歌いながら歩いた大学生に、夜回りが「こういう国家非常時に何たることか」と言ってなぐりつけるのを目撃した大学教授の話を聞いたが、もし、当時の日本でこういうことがあったとしたら、内務大臣のクビが飛ぶほど、世論の攻撃の的になったはずである。門限の十時に遅れて、寮の塀を乗り越えようとしたら、巡査が肩を貸してくれたものである。私は、中学時代の四年間をはじめ、一高と上海の滬江大学を通じてほぼ十年間を寄宿舎で送ったが、学生時代の寄宿舎生活は、教育的な面で大きな効果があると思っている。生活習慣にも影響がある。八十に手の届く私が、今でも身の回りの整頓を自分でやる習慣がついたのも、寄宿舎生活のおかげである。

寄宿舎では、まず自治というものを学ぶ。運営委員も裁判官も、みな学生たちが選挙で選んだ。一高の寮の自治会では、学生たちが酒場に入るのは認めたが、女、つまり女給や酌婦のいる店に行くのは禁じた。もし見つかれば、容赦のない鉄拳制裁の雨が降った。寮の食堂では、一つのテーブルに六人が座ることになっていたが、あるとき、一人の学生がテーブルをひっくりかえしたことがある。こういうときには、裁判官が真相を調査したうえで、妥当な理由がないと判定されれば、学生が損害を賠償しなければならないし、たとえば、汁の中に虫が入っていたとか、おかずの中にマッチの軸が混ざっていたりして、「ひっくりかえすだけの十分な理由あり」と認められた場合には、食堂側が特別食を提供して謝った。

寮祭のときに、パートナーの入場を認めるかどうかも、サークル別に投票で決めた。

このようにみながうらやむ一高の生活も、一九一九年の「二・八宣言」と「三・一運動」で、半年もつづかなかった。春園・李光洙が筆を執った「二・八宣言[8]」を朗読した時、私は学校の用事のために参席しなかったが、朗読の現場に居合わせた金東仁が、間もなく釈放されはしたものの、逮捕されて行ったことから、大きなショッ

クを受けた。だから、二月中に発行することに予定していた「創造」第二号の編集には、非常な覚悟で臨んだ。学校をやめて、どこかへ逃げてしまいたいという考えが芽ばえはじめていたのである。

上海へ

「三・一運動」がぼっ発したため、その間準備して置いた「創造」第二号は、鎮南浦出身の金煥が原稿をソウルに持ち帰って発行した。

挙族的な「三・一運動」が無残に弾圧され、知っている人であると知らない人であるとを問わず、やたらと警察や憲兵に引っ張られる情景に、憤怒、悲哀、虚脱、葛藤をおぼえた私は、はっきりした目当てもなしに、編集後記に「私は行く。どこへ行くかはわからない。しかし、どこへか、私は行くだろう」と、勇ましいところを見せた。しかし、毎月毎月の学費を親からの仕送りでまかなっている学生の身の上で、いったいどこへ行けるだろうか。平壌行きの切符を切った。三月十日ごろのことであった。ソウルでいったん降りて知り合いの人に会ったところ、「話にならないんだ、みんなつかまってしまった」という。当時、抑圧された憤怒は、日帝とともに李完用、宋秉畯ら合邦の立役者どもに向けられた。公衆便所の落書のほとんどは、この二人に対する悪口であった。私の入った公衆便所には、悪口雑言とともに「李完用の別荘」というのがあった。

金東仁と弟の煥燮が先に帰省していた。耀燮は「無窮花少年会」というものを組織、謄写版刷りを毎戸に配っていた。

その中に、「民族自決を主張するウィルソンアメリカ大統領が来る」というのがあったので、「そんな根も葉もないことを書いたら、それが事実でないことがわかった時、かえって逆効果を招きかねない」と諭したことが思い出される。日本は第一次世界大戦に勝った連合国だった。ウィルソンが民族自決を主張したとはいえ、同じ連合国である日本に「朝鮮を独立させろ」とは言わないだろう、ということくらいは知っていたのである。

煥燮と無窮花少年会員たちは、私が帰省した十日ほど後に、全員逮捕された。煥燮は一年の懲役を済ませた。煥燮がつかまったのち、中村という巡査が毎日のようにやって来て、「学校にもどれ」と言う。監視を兼ねて恩に着せようとしたのだろう。

耀燮の逮捕にショックを受けた父も、「せめておまえ一人だけでも、まともに勉強をつづけろ」と諭すので、三月末ごろ、私は東京に舞いもどった。

東京にもどりはしたものの、勉強は全然手につかなかった。ある日、青年会館に立ち寄ったところ、総務の崔承萬がサンフランシスコで発行される「新韓日報」を見せてくれた。「上海で臨時政府が樹立された」という

記事が目についた。この記事を読んだ瞬間、私の心は決まった。崔承萬も「ぜひそうしろ」と、積極的に賛成してくれた。

上海には、玄正柱が先に行っているのも力になった。玄正柱の父君は、旧韓国の外交官としてペテルスブルク（今のレニングラード）に在勤中、上海に行っていたのである。

父には手紙で事後了解を得るつもりで、上海行きの切符を切ったのが、五月中旬であった。鉄道便で神戸まで行き、日本郵船の船に乗った。しかし、船が門司に寄港した時、警察につかまって下船した。何も私が大がかりな独立運動をやって指名手配されたわけではなかったが、上海行きの船に、しかも夏休みでもないのに朝鮮人の学生が乗り込んでいたので、不審訊問をしたのだろう。

「私に何の罪があるというのか。もう船が出るころだから行かせてくれ」と抗議したが、警官は「照会をしなければならない」といって釈放してくれなかった。船が出発してしまってから、ようやく「今晩は旅館に泊まって、明日東京に帰れ」と釈放してくれた。

旅館の主（あるじ）に船の切符を見せて五円を握らせ、「何とか方法がないだろうか」と相談してみた。五円のクスリが、効いたのか、主（あるじ）は「今夜、急行で長崎に行き、私の紹介する旅館を訪ねれば船に乗れるはず」と言う。

長崎行きの急行に乗ったら、今度は列車ボーイがやって来てあなたに会いたいという人がいると言うので、ついて行ったところ、福岡県学務部長という人が「学校にもどれ」と言う。「もう一ヵ月以上も休んだから、いまさら学校にはもどれない」と答えたところ、「一高というすばらしい学校を途中でやめるなんて、バカもいい加減にしろ。校長が私の同窓だから、私が復校の責任をもってやる。さあ、早くもどれ」と、繰り返し繰り返し勧誘する。

「ありがとうございます。しかし、どうせかなり長い間休んでしまったし、無理して切符も買ったことだから、いったん上海まで行って、来年の新学期からやり直したいと思います。休学の手続きを引き受けてくださいませんか」おそらく、こういうやり取りで片がついたと記憶している。

翌日、長崎の旅館を訪ねて五円をやったら、言うとおりにすればよい、ということだった。「小舟で船に乗せてやるから、あなたは荷物のあるところで壁に向かって寝ていなさい。船が港を出るまでは、そうしていなさい。もし船が違うと言われたら、『同じ日本郵船の船じゃないか』と突っぱねなさい。いったん港を出た船は絶対にもどりませんから……」ということだった。

こうして、私は密航ならぬ密航で日本を脱出した。夕日に映える長崎の港が、この上なく美しかった。

上海臨時政府

上海に着いたのは五月の中旬、だから、「三・一運動」のぼっ発した日からほぼ一ヵ月半が過ぎたころであった。

広大な揚子江の悠々たる流れ、林のようにそびえた高層ビル、数え切れないほどの人力車の洪水――そのいずれも、私の精神的視野を広めてくれるかのようであった。

一方、そのころ中国でも、「五・四運動」という文化革命運動が北京大学を中心に起こって全国に広がり、同時に、排日運動も広がりつつあった。

私は、日本で着ていた学生服をそのまま着ていたが、「早く背広に着替えないと、日本人と見られてなぐられるかもしれんぞ」と、友人たちが忠告してくれた。

服を着替えるのは問題なかったが、坊主刈りにしていた髪を伸ばすためには、かなり長い間イガ栗頭で通さなければならなかったので、ずいぶん冷やかされたものである。

中国の「五・四運動」が、わが国の「三・一運動」の影響によるものであることは、ほぼ間違いないと思われた。翌年（一九二〇年）、インドのガンジーがはじめた排英運動、すなわち「サティア・グラハ」という真理把持運動も、わが国の独立運動に刺激されたものではなかったかと思う。その運動の行動綱領の一つである非暴力、非協力の原則は、わが国の独立宣言書の末尾にある非暴力原則と合致している。

つまり、「三・一運動」は、全アジアの民族運動の先駆者だったのである。

はるか時代が下がって、一九六〇年の四・一九学生決起で李承晩政府が倒れた翌年、トルコで学生運動が起こって腐敗政権を倒したのも、決して偶然なことではないと思っている。

玄正柱くんの道案内でフランス租界に行って、同胞青年たちの活動ぶりを見た。白南七という青年がリーダーになって、英文で独立運動消息を刷り、外国の通信社あてに発送したり、「われわれの消息」という謄写版刷りの新聞も発行していた。

私は、「創造」の編集をやったという経歴から、「われわれの消息」の編集を任され、それが縁で、やがて「独立」という臨時政府機関紙（週刊）の編集にもたずさわることになったのである。

ある日、それら青年たちが、中国人学校の「南陽大学」と野球の親善試合をやるというので見物に行き、そこで、春園・李光洙先生と初めて顔を合わせた。

春園の初印象は、目玉が黄色く、肌色が白く、顔も体つきも大きいので、白人との混血児ではないかと思われるほどだった。

試合が終わったのち、茶菓会が開かれたが、わが方を

代表して春園が英語で演説をやった。英語の実力にも驚いたが、その内容にはもっと感嘆した。

「今日、われわれは白いボールを投げ合ったが、将来は、われわれ両国の青年たちが力を合わせて、日本に向けて銃弾を投げることになるだろう」というもので、拍手喝采を受けた。

五月下旬ごろ、島山・安昌浩[9]先生が米国から上海に到着した。

北京路という通りにある中国人礼拝堂を借りて、島山先生の最初の演説会が開かれたが、元来が雄弁家として名高い島山先生だったから、当時上海にいた同胞のほとんど全員が集まった。

噂のとおり、彼の演説は満場の聴衆を興奮させ、深い感銘を与えた。「聞け、大韓の男子たちよ、大韓の女子たちよ！きみたちは今日、大韓のために何をやっているのか――」という切り出しで、静かな、それでいて胸に響く声の、派手なゼスチュアも使わない彼の演説は、まるでチェロを奏でるように聴衆を魅了した。

私は年二十にして初めての感激であった。島山はすでに十年も前から演説のうまい青年として本国でも有名だったが、そのころ、私はまだ十になったばかりの少年だったから、彼の演説を直接聞いたことがなかったのである。

これより先、上海で発表された「大韓民国臨時政府」閣僚名簿には、国務総理李承晩、内務総長安昌浩、財務総長李始栄、法務総長申奎植、臨時議政院長李東寧らが名を連ねていた。しかし、李承晩総理はアメリカにいたので、安昌浩が内務総長として国務総理の職権を代行しながら、海外独立運動の総指揮を取るものと期待されていた。

上海に集まっていた志士と若い青年たちは、今や海外で組織された独立運動が活発に推進されるだろうと確信し、勇気百倍したのであった。

しかし、島山は内務総長就任を頑として拒んだ。その理由は、当時、臨時政府の名簿が少なくとも三つが発表されていたからである。すなわち、上海臨時政府のほかにも、北満とシベリアにいた志士たちは「国民議会」を組織して内閣名簿を公表し、ソウルでも十三道の代表が極秘のうちに会合して「漢城政府」というものを組織していたのである。

これら三つの政府を組織した人たちが一堂に会して、統一した臨時政府を樹立する前に、自分が「上海政府」の閣員として就任するということは、かえって紛争の火種を播き、「統一」を不可能にする恐れがある、というのであった。

上海の追憶

本国の津々浦々で独立万歳を叫び、日本警察の手を避

けて上海に集まってくる青年の数は、日増しに増えていった。

鴨緑江の対岸、安東県の英国人ショー氏の経営する「二隆洋行」という商店が、連絡事務所兼隠れ場所になっていた。アイルランド出身で、韓国に同情しているショー氏は、自己所有の船を無料で提供、韓国の青年たちを上海まで運んでくれた。その他の青年たちは、西海岸の小さな港から中国人のジャンクに乗って脱出したりした。

本国の愛国婦人たちがわれ先にと抜いて献納した金の簪（かんざし）と指輪をたずさえて来て、臨時政府に伝達する人もいた。

これら亡命客と青年たちの世論は、島山の内務総長就任を強要した。「統一」計画は、内務総長の資格で推進する方がより効果的ではないか、という世論の圧力に抗し切れず、島山もとうとう就任を承諾し、米州の国民会が募金して送ってくれた資金でフランス租界に家を借り、「政府」の看板を掲げ、各部次長の任命と国務院秘書室の設置を終えて、いよいよ「政務」に着手したのは、五月末ごろのことであったと記憶している。

上海の南方、杭州地方に滞留していた李東寧、李始栄、申奎植ら元老にも人を遣して上海に迎え、それぞれ閣員として就任するようにし、独立運動に関する「歴史編纂会」も設置するほか、「独立運動方略」の起草を推進した。

「青年団」「愛国婦人会」「大韓赤十字」なども誕生した。「連通制」という機関を設立して本国に密使を派遣、情報交換、地下運動の支援、資金調達などの任務を組織化した。

最も急を要する「統一」事業を推進するため昔の「新民会」の同士である安泰国氏を満州から呼び寄せ、特使として「国民議会」に派遣しようとしたが、不幸にも安氏は腸チフスで急死した。

それより先、島山は「禁煙」を宣言したことがあるが、安氏に先立たれた悲しみに耐え切れず、旅館に休みに行く時、私も随行したが、島山はボーイにたばこを持って来させ、五十本入りの両切りたばこ一缶を一晩のうちにすっかり空にしたのを目撃したこともあった。

「統一」事業はその後もつづけられた結果、ついに「国民議会」の閣員として統一することに合意し、「臨時議政院」を召集して内閣改造に成功した。

ところが、「国民議会」が突然「法統論」を持ち出して、かえって紛糾が大きくなってしまった。「国民議会」の主張は、上海の「臨時議政院」が内閣を改造したのは過ちであり、「上海内閣」を取り消して「国民議会」の内閣を承認、法統を正せ、というものであった。

青年たちは、このような封建的法統論に反発し、年寄りたちの展開する「承認」「改造」の喧嘩が果てしなく

つづくのに大いに失望した。二十の若僧であった私も、心よからず思っていた。

そのような泥試合が、われわれ若い層の胸に、初めて海外独立運動の前進に対する憂慮と失望を植え付けたのは事実である。

「われわれの消息」という謄写版刷り新聞が、「独立」という週刊誌に発展したのは、同年の八月のことであった。李光洙氏が社長、私が編集記者に任命されたが、中国人の印刷所には漢字の活字はあっても、ハングルの活字は求めることができなかった。

一人の亡命客が持っていた四号活字のハングル版バイブルをばらして、文字を拾って写真版にし、さらにそれで字母をつくった。

私は、外回りの取材記者、編集記者、校正記者といった一人三役を兼ね、趙某という人と一緒に、中国人印刷所で創刊号を出したのが八月末のひどく蒸しかえす明け方の三時であった。こうして、タブロイド版四ページの臨時政府機関紙が誕生したのである。

趙氏と私は、この世にも珍しい新聞を手にして印刷所を飛び出し、同胞の金氏の経営する洋菓店でアイスクリームで祝杯を上げた記憶が、今でも鮮やかに目の前に映ってくる。

この新聞を発行していたおよそ一年間、私は、春園先生と文選室の裏部屋で同じベッドを使い、くつの底に穴があいて雨水が入ってくるのに、それを修繕する金がないので、そのままはきとおしたものである。

春園先生がカバンの中から婦人用の寝間着を出して見せながら、それが愛人の許英粛さん（後の春園夫人）の寝間着だと教えてくれたのも、そのころのことであった。

大人たちの「政治遊び」には初めから目をかぶり、「独立新聞」が鴨緑江を越えて、ソウルはいうに及ばず、遠く全羅道地方まで、「連通制」を通じて配布されているということに生きがいをおぼえながら、およそ一年間を、昼夜の区別なしに駈けずり回ったものである。

編注

（1）朱耀翰の父、朱孔三は長老派の牧師。東京の長監連合教会設立の経緯については**資料7**の92ページ～94ページ参照のこと。なお朱耀翰の弟・朱耀燮は小説家である。

（2）海軍基地　海軍墓地の誤りであろう。

（3）川路柳虹（一八八八～一九五九）詩人、美術評論家。一九〇七年に口語体自由詩「塵溜」を発表し、一九一〇年に処女詩集『路傍の花』を出版。一九一八年には曙光詩社を設立した。

（4）藤原義江（一八九八～一九七六）オペラ歌手、声楽家（テナー）。一九三四年に藤原歌劇団を創

設。

(5) 詩「泉は独りで」は161ページ参照のこと。

(6) 金億、呉天錫らが『創造』同人に加わった経緯については**資料11**の173ページ～175ページ参照のこと。

(7) 『創造』創刊号の内容は次の通り。

火遊び（観燈会）　朱耀翰
黄　昏　崔承萬
神秘の幕　金　煥
恵善の死　田栄沢
弱き者の悲しみ　金東仁
日本近代詩抄　朱耀翰

(8) 二・八宣言については**資料7**の105ページ～111ページ参照のこと。

(9) 島山・安昌浩については、李光洙『至誠、天を動かす―大韓民国独立運動の父 島山安昌浩の思想と生涯』（具末謨訳、現代書林、一九九一年）参照のこと。

（資料9）

五十年の今

朱　耀　翰
（韓国支部長）

五十年振りに訪れた母校は、形の上ではほとんど昔のおもかげを残して居らなかったが、学院の精神の流れは少しもかわって居ないことを見出した。

あの時分神学部であった今の記念館、それと昔ながらのチャペルが昔のすがたを残して居るだけで、一番大きかったイチョウの木は切られて居るし、五年間住みなれた木造二階の寄宿舎ヘボン館は跡もなく、九十年史に写真も残ってない。

しかし鷲山先生の白髪のすがたと輝く眼は、あの地震でよくゆれた寄宿舎生活の思い出を呼返すのに充分であった。同行の崔栄奎氏は、今の高等学校校舎に学んだと云うので、なつかしげに廊下や教室を踏んで居た。

『人の世の若きいのちのあさぼらけ……』記憶によみがえる校歌のメロディと共に、学院の精神、単にキリストの教えだけでなく更に、言葉で云い現わすことの出来ない自由主義的な伝統が、今も白金の丘に根深く生きて居るという感じは、どこからとなく胸をつよく打って来るのであった。

韓国からの留学生で既に世を去った先輩達、李光洙、白南勲、呉渼泳、其他いまでも韓国の国造りに身をささげて居る同窓達の身がまえには、謙虚と真剣を兼ねた、明治学院だけが持って居る伝統が光って居ると私は思う。

ある時期に母校が潜ってきた苦しみの経験は、韓国出身の同窓達が苦しみをうけた時分のすがたと一脈通じた所があると思う。それが九十年を貫く伝統のまことであるかも知れない。いかなる環境に面しても捨てることの出来ない一つの原則、一つの生き方――それが母校の精神のなやみであり且つ誇りであろう。

ホーム・カミングで昔の同宿生に鷲山先生の外は、再会出来なかったのは残念であったが、旅費まで出して招待して下さった院長先生や、温かく歓迎して下さった皆様に深く御礼を申しあげ、特に韓国同窓会の面倒を色色見ておられる遠藤（沼津支部長）さんに感謝する次第である。

「新しき時代」を迎えた母校の発展振りに感激すると共に、百周年記念式にも必ず生長らえて参列したいと今から楽しみにしたい。この度記念館の横に植えさせて戴いた韓国同窓のマテバシイの記念樹が、十年の後どれくらい大きくなって居るだろうか。

（大正七、中）

（資料10）

朱耀翰日本語作品集

＜詩＞

五月雨の朝

五月雨の朝
風は雨を吹きて
墓場の木々は
おもしろげに踊る。

雨のしづくははた〳〵と
しげれる葉に音して落ち、
濃き緑り、
ちら〳〵ひるがへって
白く光る。

再び空はしづまりて
しづかに立ちのぼる
しろき烟り。

すべてやすらかに
息つくさやかさ、
ゆたかに生の気の
たゞよふ。

されど
いかにせむ
沈みゆく我が霊。
春をたごりて
涙は流る。

（『文藝雑誌』一巻四号、一九一六年十月）

狂人

神は告げたまひき
「もろ〳〵の栄えと
もろ〳〵の喜びは
ことゞく汝にそゝがる
あゝ往け大なる使よ」と
彼は黙想の森の中の
蜘蛛の糸のまどろみの内に
確に彼は神を聞けり。

目ざす所のエルサレム
お、果てしなき砂漠を打ち越えて
目ざす所のエルサレム
心の沸騰と喜びの破裂に
彼の目は血走り、唇は慓え
癲狂院の花園の芝の上に
彼はエルサレムの宝玉を摘み取りき
しかして白衣纏へる天使に捧げつ
み使ひは軽く笑ませたまふ。

（『文藝雑誌』一巻五号、一九一六年十一月）

をもひで

幼き昔

まろぶは我身か、
小川の流れは
キラ〳〵光り、
魚らはとび上りて
流れゆく。
めつぶれば
雲雀の鳴聲すなり。
春はまつわりて
いと深し。
去年（こぞ）の枯草。

山に沸く雲の姿、眺むれば
牡牛等の静々と歩み居り。
かくて我時は過ぎ去りし。

白おう

さ迷ひの群

夜は未だ明けざるに
沼地にさ迷ふ小鳥の群、
沼にさゝやきあり。

水は夜の底の荒き面を
うねり〳〵
そが上を鳥ら浮ぶ見ゆ。

さらば輝もせず鳥の翼
小鳥の飛び立たん時の水の波紋を
あゝ洩るゝ光もなければいかにせむ。

草の一葉
うかびて流れゆく、
小鳥の胸の羽毛、つめたく濡れ居り。
何地ゆくか、幼き雁たちよ！

野菊

むかし、
アゼンスの町の海辺に
さみどりの草々のその中に
一本のかよはき野菊ありき。

多島海の小波は
アジアの岸より送る
柑欖の匂の風に立ち、
小紋の美しく染めある
白帆のたち列ぶ時、
人人はオリムピアの祭に
酔ひてしアゼンスの町。

月桂冠を戴く
名誉の詩人が
車のわだちに
あはれ倒れぬ野菊の一花、
花弁は土にまみれてぞある。

はてしのなき
海の水平線のかなた
もく〳〵と乾き心の
真白雲沸き立ちて、
美はしのお祭の夢
さめぬるその日より、
何処よりか来し
風のはげしき音づれ。
きらめく小砂の上の
車の轍、うづもらせつゝ
大空と水面の境ひ目に
風はヒュー〳〵と吸ひ込まれぬ。

叢がる草々のざわめきに
いらたつ風のすれ往く時、
野菊はハラ〳〵と唇ふるはせて
よろめく四肢をだき起こし
幽に踊りぬ、ヒシ〳〵と。

あさまだき

あさまだき、
沖に白帆の
白帆にうつるや紅の色、
紅、あざやか
泡沫の音す。
渡がくる、
ゆら〳〵と
水脈(みを)をたどりてせめよせる。
波が真白く砕くれば
砂のあぜ、
砂のあぜ。

砂にまじりて
白き貝がら残り居り。
水成岩のきり岸
青みにうつる
底深さ。
波が岸にしぶき上げ
貝が光る、
貝がきらめく。

朝ゆえに、
くん〳〵と水蒸気たちのぼり、
崩るゝ砂の冷たさ。
まこと朝ゆえに
心爽やかなり。

友よ

私が枯れ掛った草に座って居る時、お前は大海原の岸の砂科に遊んで居る。私がひからびた土に転ぶとき、お前は匂ひ深き刈り立ての稲の上に仰むけになる。

なつかしき若き日の思ひ出、春の小川のさゞめくが如き思ひ出。

あこがれと遣瀬なさの思ひ出、真夏のそよかぜに頬ずる若草の加き思ひ出。

悩みと苦しみの思ひ出、秋の永日のあまだれに似たる思ひ出。

清らかな私等の思ひ出、雪に輝く厳冬の稍の思ひ出。

我等の尊き日の思ひ出の為に、此の一篇を以って君に捧ぐなり。

（『白金学報』第四十号、一九一六年）

お春

雪の国に住む娘なりき。
落葉松の深林にひそまり照らす
黄ばむ冬日に、淡き雪はつもり——
機織る娘は歌ふなり、涙の歌。

金の十字の菜の花の乱れ咲く頃、
さみだれは夢のしらべにおとなふ日——
彼女は高原の家に生れ出でぬ。
「お春よ」と父は朝な夕な汝が名を呼ぶ。

さはあれ春はゆきへかり、いつか五たび
幻しの運命ぞ母を奪ひし、
影さむしき秋の日のにほひに
はた織る娘は歌ふなり、涙の歌。

たゞひとりの父こそ汝が友なれ
高原の巌にふたり起き伏し——
娘の手握りしめ——娘ゆゑ
「お春よ」と父は朝な夕な汝が名を呼ぶ。

山の斜面は夕べ近く
牝鹿の歌はもつれゆく。
あゝお春も女にてありし、その血潮——
燃えつゝ、轟きつゝ流れゆく。

求むる心の燃ゆれども
めじかの鳴く音は止む日なく、
父をし思へば胸血しづめて
機をる娘は歌ふなり、涙の歌。

（『伴奏』第二号、一九一七年一月）

冬

冬の日の梢に
風もなければ
にらみ心の
空はひっそり
何物にかおぢけたるその胸の
たえず戦きつゝ
幽かに息を吐く。

土は力をなげうち、

やつれし胸、さらけ出すなり。
骨より骨に伝ふるもの憂き唸きは
枯れし草々の訴への声と
母なる土のすゝり泣ける音となり。

やがて淡青き
あかつきの夢の如くにも
けぶりは森をつゝみてひろがり、
透き通れる藍色の空に
夜の幻は恐れつゝかへりゆき
凍えたる足並にわが夢はよろめく、
アカシアの葉面に
はた小径のほとりに。

あゝ冬の日の
悲しきけむりに
消えはてん心いだきて……

（『伴奏』第三号、一九一七年四月）

欲求

わがなげき
あめつちをふるはす……
くらきたにそこのいはやに
ひとげなきもりかげに、むらさきのみづうみに
わがなげきはながれてやまず
そのほのほ、みづからをもえつくし
そのくちびる、ゆめにうゑて
のみほすは——ひたすらにわかきをんなのつみの
くちびる

（『伴奏』第三号、一九一七年四月）

葡萄の花

葡萄の花は白く
聖き恋のさゝやき……
群がる蕾のかげに
赤き血潮は充ちたり。
はてなき夢の足跡をしたふ心にか
その花弁は地に落ちて静かにひるがへる。
あゝ果樹園のほの暗き蔭に
はかなき恋はあり、真白き葡萄の花……

（『伴奏』第四号、一九一七年七月）

眠れる嬰児

しづやかに眠れ、いとしごの日に
黒き夜は深くも閉し、淡き灯
又はみどり色の夜着の上に
再び来らざる平和と夢の伴奏を……
あゝしづやかに眠れ、をさなごの日に。
透明の影にうつし出されし唇
かすかに洩るゝ息の音に目は安らけし。
夢は襲ひ来り、又うすれ往きぬ。
再び来らざる幸福と平和の日を
あゝしづやかにも眠れ、眠れ、汝の日に。

（『伴奏』第四号、一九一七年七月）

ふるさと

はゝのやまひ
今稍に
軽くこそなりたれど……
あゝ旅寝の空に
再び思ひぬ——ふるさと、
あゝ水清き大同の流れ。
かたことまじりの
弟の筆をしのび
春の日暮に
再び思ひぬ——ふるさと。

（『伴奏』第四号、一九一七年七月）

失なはれし者

やみぢをたどる
幻想と孤独の境に
たへずまさぐる指先。
あゝ我はた何をうれひてか
なにを悲しみてか、
生命なき笑ひに沈めるぞ……。
常に遠きに有る物等よ
しばし走りと踊りを止めて
再び我が胸に涙のたぎるを待てかし。

（『伴奏』第四号、一九一七年七月）

地の愛

われら生き又死するうれしさよ
神の愛は「生」
神の秘密は「死」
まこと生は路傍にさく花
墓に向ってひらける一つの花のみ……
かの不可思議のひゞきもて飾りし大空よ、
あゝその下に生きその下に死する嬉しさよ。
君よたゞわがまづしき接吻を受けたまへ
我は愛のさゝやきの内に生れし故
又あたゝかき永遠の懐(ふところ)に帰りゆくのみ
人々よ地につける愛をのみ愛せよ。

（『伴奏』第五号、一九一七年十一月）

かゞやく太陽

長篇「晝と夜の祈祷」の内より（その三）

人知れぬ夢の街道は純白(まっしろ)に烟って
太陽は空の高みで白く燃えて居る。
家(いへ)の白壁と窓椽が鋭く反射する。
その時衰へ果てた心は
巧緻な線から逃れて窓を開き
たゞ一面の海を見付けた。
海よ、お前の名を俺は思ひ起す
「大いなる輪舞」よと。

おゝ太陽は白くもえる
その強いきらめきや反射が
波から飛んで来て目を射る。
しかし我等の心に築く
不思議の銀塔のかげは水に落ちて
海と共に踊るよ。踊るよ。
人魚は退窟さに泣けば
海はひねもす荒れる。
そして恐しく長い間を通して
太陽は白く乾いて来る。

あゝしかし今こそ海よ静もれかし
美しさよ、汝の一極の色彩に照りはえよ、
もはや我等は叫ばないだらう
もはや我等は燥らないだらう
併したゞ一つの意志が残って居る。
見よ、日の歩みの強き足跡を、

この明るい日のかゞやかしい太陽を。

日は落ちた、
白いひからびた路を紅に染めて。
たゞ一面の朱の海！
見渡する海、海、
あゝ美はしい終結よ。華やかな果しよ、我等に
あゝ我等に告げよ。（夢は醒め往くを）
我は知る——帰らざる生命なし
これこそ運命の境界であった。
これこそが海の則であった。
否、否、夢は決して目醒めない
願はくば弱りゆく祈りをして
歌と讃美に代らしめよ。
俺等は息もつかず歌ひ続けよう、
清きに帰った唇と心とを以て。

乙女等よ乙女等よ
さはれ我が破れし壺の悲しみは強く
去り往く時の嘆の逃れ堅くば
拾はずや夢のかけらも
あゝ太陽の往く道——
まぶしさを忍びて

俺はかく歌ふ、俺の別れの歌を。

俺はこの疲れた眼をつぶって
新しい路をよく見守らねばならん。
そして歌ふ——
あゝ太陽の往く道——
まぶしさを忍びて……。

（『白金学報』第四十三号、一九一七年）

春たつ日の歌

蒲団の中で小さく
且悲しい、眠りから醒めて
時の静けさを驚く
ものういやうな朝を
紅く差し込む光線を
又それの数へ切れない舞踊を——我は驚く

浮いたり沈んだりする塵に混って
遠い思ひは消せ
安らかな息音が去らうとする
そして春が来る

なめらかな皮膚の色
眺め入る光の分子に

まぶしさに恐れる瞳を見張って
我等は速やかに過ぎ去る矢を追ふ
淡く染った空に
フックラした窓のガラスを通して
幼い恋心を仄(ほの)かにうつし
また五月の空のうつくしい羽がひらめく

あゝしかし我我は益もなく昔を追ふ
疲れ果て寂しく残された心よ
力なくも嘆き交し、この日の悲しさをさゝやき――
また光の中で身慄ひする若い心よ

しばし眼を閉ぢよ
うす絹で蔽はれた寝台に顔伏せて
猶ほも育って往く若いシーズンに
願くばやすらかな朝の接吻を送り交さん。

（『白金学報』第四十三号、一九一七年）

晝と夜の祈祷（2）

おそろしい侵入の巷
不可思議を秘密に充ちたその叫喚(さけびごえ)、
わたしの心に暗い夜が忍び来る。
そしてその黒いキャップが心の心を曇らせる。

何んと云ふ悲しい月の夜であらうか。
失はれた天の河が悲しげにすゝり泣けば、
雲の上で心の奥ですゝり泣けば、
青い銅錆の色に雨が降る。

おり〳〵に敷きつめた心の憂よ。
沈み切った月光の曲は逃げ失せ
鉛色した盲目の雨が広い世界に荒れて居る。
そして一寸した間隙(すきま)から生の大波(おほなみ)、その長い〳〵韻律(リヴム)が聞える
様だ。

あゝわが憎みかつ愛する生！
こぼつために築き、きづくために壊つ、とこしへの大波、
すべてを呑みものみなを含みてあき足らず荒れ狂ふ
そして猶ほも貧しきわが胸にさへ溢れ充ち来るか。

おゝ避け難き悩みの人生を
強き願望の上に生き更らしめよ。
俺等の警鐘はどこに往った　赤い色の旗は？
我かく呼ばん「止めなく流れ去れ。呼び起された意志よ」と

聞けよ、疲れし魂の所有者は——
常に甘んずる謙譲か、絶へず受け忍ぶ苦しみか

「生活」の涙に差す光である、道程である。
黄に染める川岸のけぶりの心さへ、あゝ躍る、躍る躍る。

はげしい回転よ！疾走よ皆どうなって往くのだらうか。
敗れた戦線に復た立って見た。
たゞ熱情をのみぞ、我等の憂ひと悩みをおほい尽さん。
おゝたゞ熱情をのみぞ、疲れし魂よ！待ちのぞめ。

されば凡てから逃れ出づる事の貴さよ。
雨から夜から盲目の恐れから——そは怪しい理智の夢に過ぎぬ。
ひたすらに守れ、泉を、
なみ〳〵と溢るゝ胸を育み忘れざれ。

季節はかはるとも汝が心絶えず揺れ動くとき
汝の祈りはかくあらまほし
「常に愛せよ。喜べよ。躍れよ。受け入れよ。止めなく流れよ」と
かくてこは、奇しき大波の韻律の永劫に壊たるゝ事無からん為なり。

（『現代詩歌』一巻一号、一九一八年二月）

春立つ日の歌

蒲団の中で小さく
そして悲しい、眠から醒めては
時の静けさを驚く
ものういやうな朝の
紅くさしこむ光線を
又それの数へ切れない舞踊を——驚く

浮いたり沈んだりする塵に混って
遠い思ひは消え失せ
安らかな息吹が去らうとする
そして春が来る
なめらかな皮膚の色
眺め入る光の分子に。

まぶしさに恐れる瞳を見張って
我等は速やかに過ぎ去る矢を追ふ
淡く染った空に
ふッくらした窓のガラスを通して
幼い恋心を仄かにうつし
また五月の空のうつくしい羽がひらめく。

あゝしかし我等はあてもなく昔を追ふ
疲れ果て寂しく残された心よ
力なくも嘆き交し、この日の悲しさをさゝやく——
また光の中で身慄ひする若い心よ。

しばし眼を閉ぢよ
うす絹で蔽はれた寝台に顔伏せて
猶ほも育って往く若い心の季節に
願くばやすらかな朝の接吻をおくり交はさん。

（『現代詩歌』一巻二号、一九一八年三月）

あくる朝

とう〳〵日がのぼった
それで草原が
めまぐるしい程きらめく
根こぎにされて
倒れた木の葉っぱが
何時の間にか萎れかけて居ながら
それでも風と一緒に
踊って居る
そして皆が、屋根も、窓も黄ろい壁までもいかにも喜んで
気嫌よく挨拶をして居る

日はぐん〳〵と匍ひ昇る
何事も忘れた様に
雀めどもがペチャクチャと饒舌り出した
下には、蹂み躙られた草が
小さくなって慄えて居る
乾きかけた石ころは
皆白い半身を上に向けて——はては笑ふ、そして語るらく
「俺等の上を風はたゞ足を滑らしたゞけさ」

しかし息もたえ〴〵の折れた木々は
白い傷口を慄はせながら
過ぎた恐ろしい暴風を
まだしもさゝやき合ふ

鐘がせはしげに鳴り響く……

（『現代詩歌』一巻三号、一九一八年四月）

朝

かぜがゆく、朝を迎へに
墓石の上に砂が踊る。
だんまりやの夜は
力かぎり足をふんばって
新しい謀叛人を押へやうとしはするが
長い間の衰へが身にしむ。
風は中空と墓場に乱れゆく、
羽ある馬車を駆るために。

春の中空、春のまっくらな空
掠奪の雲が笑ふ春、怒る春
その中空に朝が訪れやう……。
たゞ下界では遅鈍な都会が
つかれ切った灯で夜と闘ひながら
わづかにかほそい息を連ぐ。
森は差し込む薄明の穂先に驚いて
弱々しい胸をなびかせ、
刻々に増し来る眩しさのために
夢を追ひはらふ事も出来ず
やたらに虚空を蹴散して居る。

噴き初めた間欠泉の苦しい息が聞える。
ど、ど、どと血潮のやうにせき上げる
正体しれぬ不思議の力が地をつたふ。
小さく武装した光の先駆は
何も知らない地面を忍び足……
甃石や甍のすきま〳〵に
かげと云ふかげ、骨と云ふ骨の間に隠れる。
怪異の夢はことさらに
大地の眠りを引っぱって往く、
その夢のおかしさを
睡むさうな北極星が眺めて居る。

（『現代詩歌』一巻三号、一九一八年四月）

夜、寝る時

寝る時が静かに来る。
電燈の光は青くかゞやいて
酒場の二階に人があつまり初める。

ふとんを敷けば
ふるへる音、うごく影
うすら冷い空気
笑ひたいけれども誰も笑はない、
そのうす暗い眠りが
あんまりさびしいから。

あらしは募って
町々の高い窓からは
紅くのぼせた光が慄へながら投げ出される。
しかしこゝに安らかな眠りは
各々さびしい心を抱く弱い人々の上に
静かにおほひかゝる。
ときどき、窓がきしんで
夢を驚かせる。
姉と弟はふとんの中で、
小さい手と手とを握り合せて――さゝやく、
「おっ母さん、今夜
風は壁の隙間から洩れて来ます……」と。

母上は
青い蔽ひで光を隠しながら
きづかはしげに
窓ガラスを見つめる。

時はうつり、
半透明な仮装をした
黒い行列が
たへず家の圍りを錬り歩く……

（『現代詩歌』一巻四号、一九一八年五月）

晝と夜の祈祷（4）

陰鬱の冬から
大地の饗宴を一度にわきかへらせ、
日ごとに燃えさかる凱歌を以て
人間の頭をかざる苦熱の太陽よ、
今にして何をわが前に求めやうとするのか。
見よ、陶酔の胸はきしみ、痛み、すゝりなけり。

ああ、恐懼の月日、痛ましい日よ！
憤満と寂莫の、予定せられた年よ！
光に壓しつけられた肉
肉にはびこる憎悪の焔
燃えつくすことのない焔よ、

しかも引き裂かれ、ひきむしられ――光の前にあまりに弱き一
つの魂。
あゝ寂しげに、堪へがたげに
又ひきづらるゝまゝに泣き伏する重い心臓、
悒鬱の、悲痛の、癒えがたい厄病の、
苦い涙は何を語るか――

太陽よ、汝の怒り、又汝の盃はあまりに強い、
汝の踊りは乱れがちだ。
おゝ、この寂しき日に汝の祈りはあまりに油ぎって居る。
いかなれば汝のさかもりはかくも烈しき……
汝の色彩はかくも複雑、かくも奇怪なる……
あゝ汝の設けた日はかくも淋しくまたかくも燃え上りたる……
おゝ苦熱の太陽よ！しかし又汝の執著はいかでかくもねばり強
いのか？

聞け、まちしのべ！
常に敗れたわが心臓よ、
泥まみれの心臓よ、
涙こそたゞ一つの命を知る。
あゝわが貧しい指を一杯にせよ、
新しい花嫁を迎へるために、
勇ましい未来の生誕の床を祝ふために。

ねがはくば心こめた金色の笑ひで
この喜ばしい期待の時を歌はしめよ。

（『現代詩歌』一巻四号、一九一八年五月）

夕暮の誘惑

雲と雲とを引き千切って――それから接ぎ合してしっかりした
壁を築いて呉れ。
さうでないと
にがくて黄色い夕暮が
私の透明な眼球に
盗人の様に忍び込んで傷けるだらう。

汚れた涙をたゝへて
顔一面に真紅に染めた仮面を被って
夕暮の光りが騒しく奏でて居る。

……
瀕死の金切声……やゝあって急にせはしくなる呼吸、それから
雑音にまぎれたべらぼうに大きい単音、心臓を切り裂く汽笛の
ようなフヰー……
（それでお仕舞！）

血の外套の夕暮は
微笑しながら俺等を睡眠させやうとする。

やがて無数の魔法の指が
スースー舞ひ下りる――目のまわりに集って来る。

お、、お、、あの紅い誘惑から
早くこの目を連れて往ってお呉れ！

（『現代詩歌』一巻五号、一九一八年六月）

卓上の静物

紫のインクから
恐しいさゝやきの湯気……
さびしい本、筆、筆さし
その間に老衰した時計が呟いて居る。
すゞり箱の上に（ねむたさうな四角形の箱）
なりを鎮めて慄く塵、
刃の欠けた小刀（ナイフ）――ガクリと頭をたれて
もの凄い笑ひを浮べた表情――
なんの、そんな笑ひが怖いものか！
さて夕暮れのうす暗があたりを取り巻くとき
卓（つくゑ）の上は森のやうに森閑とする。

（『現代詩歌』一巻五号、一九一八年六月）

女

女が窓の外を向いて立って居る。
涙のやうな夜景
白粉を取った後の皮膚――
肩と頸が反射する、
真白な曲線！

わづかにそれと感じられるだけの頬――見えはしないが燃える
唇……呼吸……

（ゆれる電燈）
あらはな肩から耳底まで
真白な曲線！真白な曲線！

女がふいと振り向く……
脂ぎった豊かさ、もう沢山！
その白い鼻に
「夜」がひょいと笑ふ。

（『現代詩歌』一巻五号、一九一八年六月）

芝清正公

うれしいものは――
アセチリンの匂ひにつれて
ほのかに香る
チウリップ。ヒヤシンス――。

かなしいものは――
金魚鉢のにぎやかさ、
路次から洩れるヴァイオリン、さては
オモチャ売の鼻歌……。

（『現代詩歌』一巻六号、一九一八年七月）

まどろむ女

青葉に朝の風まばゆく渡り
（夜通し唄ひ明し、今）
まどろむ白い女、
おゝまどろむ女の健かさ。

むすめらしく匂やかに
栗の実の頬は充ち溢れ
はな筋より唇へ
幽かに漂ふ艶かさ、
目じり小じはにふるへて
追ひ散らせども追ひちらせども
すばしこく瞼を刺す蜂の眠り……
愛くるしい鼻は波立ち
整った線の美しさ
まどろむ女の健かさ。

風が軽く肩をたゝけば
いきいきと醒めくる黒曜石のひとみに
人よぶ声のさはやかさ、
またしても溺れゆく夢の快さ、
みだれない線のうつくしさ、
まどろむ女の健かさ。

かゝる時
ねむりは踊る――白い踊り
猫の毛の如くしろい踊りを、
華奢（きゃしゃ）な指のあひだと柔かいハンカチの襞とに。

（『現代詩歌』一巻六号、一九一八年七月）

嵐（晝と夜の祈祷）（5）

お、日をこめて荒れ狂ふ風の群、
無限際の暴力をもって
お前はすべてを打ち壊す、
お前は残忍な雲を驅って
わが悩みの上に快い雨を降らす。
お前は剥ぎとるもの、虐げるもの、
あゝお前の短い爪はたゞ
傷かぬ女の白い乳房を苛むに役だつだけだ。
お前は荒らすもの根こぎにするもの、
おゝお前はさながらに不可抗のうづまきを以って
すべてを一つの糸に一つの力に巻き込んでゆく。
おゝ今、わが生活を打てよ、
俺の姿を有りのまゝの醜さにまでもぎ取れよ。
さうだ俺は不思議にも勝利者の心で
みぢんに打ちのめされるのを待って居るのだ。

さうだ俺はその時から、
俺の心の柔かい腕に仕込んでやる、
あらゆる「運命」の劇しさをも
力強い「生」への建設として組み立て得る。
あゝ俺は醜い温室の花に
苦い争闘の味をそゝぎ込んでやる。
俺はわが朝あけの食卓を
新鮮な爽かな思想で調へるのだ。
その上のあらゆる食器を洗ひとり
若い女の敏感な官能でかざるのだ。

あゝ俺はあらゆる狂気の「破壊」を冷やかに見送る。
俺の初心なしかし雄々しい意志が
お前の不可抗力と一致した時、
一つの呼吸になって仕舞ったとき
それが人間の勝利だ。
おゝ俺はたゞ讃美すればいゝのだ、
不可思議のいのちと運命と、
そこに必然に起る争闘をさへ。
おゝ俺はそのために
俺の喉に鮮血のあざやかさを与へる。
俺は一つの響だ。一つの管弦楽だまた細い草笛だ
そしてあらゆる熱情と巧緻とを織り込んで居ながら
永劫の単純をみがくあの透き通った海の声だ

（『現代詩歌』一巻六号、一九一八年七月）

自画像

うす紫の景色をもった
夏過ぎの原っぱ、
夜明や晴れた晝間の
銀の笑ひにつれて
糸のやうに細くなるお前の目。
それだのに、いつかの夜、お前は
窓からさしこむ月に照らされて
物も言はずに泣いて居た、泣いて居た。

（『現代詩歌』一巻七号、一九一八年八月）

星

ほのぼの明けそむる暁の
雲なき空に浮ぶとて
何の妬みを持つらん、独り明るけき暁の星
なみだながらの夕暮の
きえゆく空にかゝるとて
何の悲しさのありてならん、蒼白きわが心の星

（『現代詩歌』一巻七号、一九一八年八月）

七月の夜

月のない窓をしづかに引き開けよ、
ほのかに光る草原を「夜」が素足で通るとき、
木の葉の来てさゝやく小窓を引開けよ、
汗ばんだ七月の夜が素肌で進み行くとき。

おゝもの静かな「夜」、愛人の髪を思はする七月の夜、
彼女の白い二つの肩の上に、二つの「夢幻」が物思ひに耽り、
彼女の真圓い踝（くるぶし）には、そこはかとなく香気にみちた霧が縺れ
踊る。
あゝ「夜」は聞き取れない雙笛を鳴らしながら美しい木立の間
に身を進める……。

いづこよりか差しくる満潮に、彼女は躇らふ、
かたく垂れた黒髪に暗の草、咲き出でゝ、
熱病みの如くほてる頬、あらゆる血管に血は充ちて
青いまで膨れた彼女の肉体——
あゝ又しても濡るゝ肌、むらがる欲念、沸騰する潮……。
又しても不思議な足音、さしくる微光……。
あゝ「夜」は聴取れない雙笛を鳴らしながら、
ひたすらに重い憧憬の身体を進める。

お、蠱惑に充ちた女性の「夜」、
はるかに澱(よど)み渡る大気の底に、熱情ある哀調を奏でる七月の
夜、あつ苦しい祈念に悶える「夜」……。
かくて今、雨は樹皮を洗ひ、彼女の黒い髪と匂ふ肌とを洗ふ。
かくて今、笛はやみ、星ない空に、
輝く女体の「夜」は進みゆく。

あゝ私は彼女の鼓動を聞く、はっきりと
私は感ずる、彼女の熱い乳房のわが心に揺れ動くを、
その熱気のふるへのわが身体に移り来るを、
彼女の敏感な触手のわが触手に触るるを、
彼女の痛ましい声の慄きつゝ我が声と響き合ふを……。
かくて今、雨はやみ、星ない空に、
思ひに充ちた素肌の女進みゆく、ひたすらに、
ほのかに匂ひそめる朝の方へ——海の彼方から。

（『現代詩歌』一巻八号、一九一八年九月）

微光

あゝ誰が知らう？聖らかに光を湛へたこの夜——ほんのりと空
に浮ぶ憧憬の海に、音なく走る幻の船を、又其処にて我が心無
言にその櫂を操れるを、わが胸はいとも静やかに靡き、そこは
かと蹲る黒い夜を揺り起すを、わが幼い両手のすばしこく動く
に連れてゆるやかに遠のく天鵞絨の波紋を。又我が頭上にて愛
らしい小唄を歌って聞かす私の星を。

我が船は行く、人知れぬ境にわが狂喜の地を求めて。
聞けよ、霧深き彼方の岸にかそけく木霊するわが臆病勝ちな祈
りを。きけよ、強き楽の音を、ときたま起るすゝり泣きを、
又、水底より匂ひ送る、苦くして快よい情欲の匂ひと、不思議
な真実の上に花咲くわが感覚とを。

あゝ今匂ひ深い沈黙の影に混って、何処からか恐怖と悒鬱の声
音が忍び寄って来る……。併し私の身体は星で一杯——私は
たゞ私の輝かしい青い太陽を自分の目の中に見付けませう、
あゝ私の船が軋む、喜ばしげに。

今、差し昇る大地の微光に照らされた静謐の時は、夜を込めて
降り積むほの暗い睡蓮の花弁の重みに圧されてか、十月の雨の
如く幽かに幽かに慄きながら音もなく我が心に溢れそゝぐ、
……おゝ尊い無言よ！あらゆる情熱の上に踰び越えるあはれ青
白い無言の花よ！……リリ、リリ、何処からとなく虫の鳴く音
がする、あゝ私の船が軋む……心の奥で、喜ばしげに、喜ばし
げに軋む……。

（『現代詩歌』一巻九号、一九一八年十月）

あけぼの

サッと流れ込む風、縺れて靡く髪、明けゆく空の匂はしさ。
青葉が薄明と反射する——そのきらめき
しっとり冷たい石の楷段、
つと、立ち出でる女。
足裏から秋が伝はり
汗ばんだ乳房を新しい曙が触れてゆく。
露を蹈めば……サッと浸み渡る戦慄。ひや〳〵と足を洗ふ芝生
——その快さ！
クッキリと浮ぶ横顔——乳色の空に……
胸一杯に吸ひ込んだ霧の刺戟。
やがて夜は
楽しげにひらめく薄い裳のかげに消え失せ
香(かんば)しい誕生の叫び、彼方の空に起るとき——
私は衰へゆく夏の日の
ほの暗い木蔭の道に佇み、
かの女の柔く冷い唇と
沸き出る泉に似た黒髪の感触とを
息苦しくほてる頸筋に感じて喜ぶ……。

（『現代詩歌』一巻九号、一九一八年十月）

暗黒

冬だ、風に曝された傷口が痛ましく凍る冬だ！
嵐が俺たちをねぢ倒す、
日が刃の上に悩ましい光を添へる。
むごたらしい獣性の声が、無数の刃をつき立て、居る——
かゞやく大地、みなぎる樹木の上に。
おゝ、閉された戸口、しゃがれた、咳(しはぶき)の切れ〴〵な反響、
うめく霊、寒さ、血！
——お前を産んだ胎を咀へ！
冬だ、押隠せぬ冬だ。松火(たいまつ)の火が血に餓えた獣のやうに燃える。

さては又夜、怪しげな夜の影、
気味の悪い弦月が、埋れた山道の古木の醜い根を、
夜すがら照して居れば、山の斜面に眠る雪の肌は何時ともなしに穢され……。
……ツンランラ、ツンランラ、懶(ものう)い叫喚が窪地の底を、蝕(むしば)んだ頭脳の底を伝ってゆく、おろ〳〵した絶叫、
《俺達は待って居る、戸口の開かれるのを、
俺達はまって居る、暗夜と暴風を通り越して——
俺達は待ってゐる、奇蹟のやうに突然と——

おゝ俺達は待ってゐる、恐しく長い間を待って居る
まぶしい朝の戸口の開かれるのを、》
だらけた皮膚の上にしみ〴〵と冷い風が侵み込み、
めぐる雨、騒ぐ川波、
あらゆる酸たる夢の、その定めない影の下に、せゝら笑ひが起る。
おゝその声の——何時かの寒い夜、真暗な空に怯えてギリギリと軋んだ窓枠の痛みか。

曇った天気、物凄いガランとした庭園、圧し付ける黒雲、寂しい山合から流れ込んだ紫の空気、どこかのうすら冷い隅に、時々動く人影。……息を潜めて雪が降る。
ポツリ、ポツリと雨まじりに降る、涙まじりに雪が降る。
もはや戸口は消えた、秋の夕方、カザ〳〵した枯葉を吹いてた苦い風が視神経を疲らせる。
暗黒が崩れ打つ。
（肌にしみる苔と死骸の匂ひ）
おゝ、痛ましい暗黒！（たゞ幻影のみが真実だ！）
——それは果しもない平行線の彼方
空虚の刃の鳴り渡る彼方…入日にむせぶ壮厳の都、
まだ蹈み馴らされない荒誕な金色の街道……。
（お前は信じないのか？）
冬だ！冬だ！運命づけられた季だ。
流血と酸鼻の日が俺等の呼吸を閉ぢ込める冬だ。
《俺達は待って居る、戸口の開かれるのを》
おゝ、幻は消えるのだ、咀はれた民！しかも猶……
《俺達は待って居る、美しい淡青の曙を
俺達は待って居る、まって居る、まって居る……》

（『現代詩歌』一巻十号、一九一八年十一月）

食卓

花一つ挿してない殺風景なテエブル、
ひっそりとしなやかな黒い曲線だけが
雪白のテエブルクロスに浮んで居る。
しかし金属性の音する磁器皿の上には
幽かに触れ往く指先からでも崩れさうな
人の運命のやうに真黄色なクリームを盛りませう。
さうして、開け放した窓の明るみへ
青葉の風の匂ふ景色の中へ出して置かう。
いや、まだそれに
貝殻の薄さ、堅さ、白さ、淡い影がふちとる木の匙を
添へねばなるまい。
それから私は身軽に寝床をはなれ、
この美しい、黒い曲線と、皿と、クリームと

して又、こんなに白い木の匙とに
よく似合ふ一人の乙女を捜しに出掛けませう。
あゝその時、こひゞとよ、おんみの恋が
この不思議な畫面を完成さすまで
私を残して置くであらう——私の空想を、
触れば鳴る、かゝる微妙な線のまゝに。

（『現代詩歌』一巻十一号、一九一八年十二月）

月光

黒い冷たい大理石の夜、
玄武岩の滑らかな断面の夜、
そして鉛を削った月の光りが
白い風に乗って滑り、
重油のやうに滑り、
人間の眠い頭の中へ、
つかのまの接吻（くちづけ）の中へ——。
そして氷った黒百合の唇から
ねむたい羽毛が雪と散り敷く——。
水銀の花が雪と散り敷く——。
そして死のやうな黙った夜は
生きて居る——。

（『現代詩歌』一巻十一号、一九一八年十二月）

朝鮮歌曲鈔

今度は少しばかり朝鮮の民謡を紹介しやうと思った所が今手元に材料がないので、古来から多く智識階級に行はれた「時調」なるものを二三訳して見た。これはやゝ一定した形式をもった（勿論時代によって少しばかり違ふが）恰も日本の和歌に似たものであると思へばいゝ。いつ頃初まったものかは分らない。三国時代（即、日本で云ふ三韓時代）及新羅統一時代には相当の発達を遂げたらしいが今日に残ってるのは極わづかである。その上に儒学が行はれ出してから純粋な朝鮮語で歌ったものは多く散逸してたゞ漢文的色彩を帯びたもののみが伝はって居るのは遺憾である。勿論これらは皆吟詠せらるべきものであって今日に於ても技生達によって歌はれる。「歌曲」の名はそこから起ったのである。なほ今日の表準格調は三四三四、三四三四、三五四三の三行をもって成る。もとより調子本位だから音数の制限はさほど厳密でない。たゞ如何なる程度に於て変格を許すかは朗詠上のデリケートな問題であるらしい。

今その中の恋愛をとり扱ったものゝ一二を紹介しやう。原作者の名前はあげる必要もないし又うるさいからあげない。

×

恋をからみ上げ縛り上げ、肩にして
大山、たか峯、はるゞと上りゆけば
故しらぬ友等は捨てゝゆけと云ふけれど
たとへ途につぶれて死ぬるとも私は捨てずにゆかうと思ふ。

×

主も来ぬのにはや月は落ち有明の星が出た
誰を怨まうか、だました主をか、待ってた私をか
こののちはたとへ来るとても二度とは信じまいものを。

×

この心を砕いてあの月にしてみたい
九萬里のそらに明るく懸って居て
可愛い、君のいます所に照ってもみたい。

×

雷と轟く君をば電の早さに出喰し
雨のごと行来して雲とばかり散り去れば
胸には風に似た嘆息が霧のよう……。

×

かうとて如何があらん、さりとて如何があらん
万寿の山の山かづら、縺れたとて如何があらん
われらもかく縺れ合って百年をも永らへむ。

×

馬はゆくとて嘶き、主は抑へて離さない
夕日は峰にかくれ、ゆくては千里のみち
きみよ、ゆく私を捉へずに、落ちる日を捉へよ。

×

冬の日は暖かい光を君に照さう
はるは肥え茂る菜畑を君に捧げやう。
君に足らぬものとて無いけれどたゞ私の心がすまぬゆえ。

（『現代詩歌』二巻一号、一九一九年一月）

霧と太陽（断片）

×

美しいものは、麻糸模様の素朴さ
あらゆる仮面と虚飾の群
草原や川原の蘆の間に朽ち果てる
あらゆる仮面と虚飾の群
心は微笑する、その寂しいかげに隠れて。

×

焔は掌に生れる
焔は掌にわきのぼる
白熱の季節
新しい火の匂ひ
重く透明な湖水、灼けさかる金鉛
明るい自然の衝動から

お前の瞳から、額から
焔をして、火花をして、力をして、欲念をして
叫びながら、我を包ましめよ、われに充たしめよ、
栄えゆく「驚異」の上に、その額をかざす嬰児のやうに。

×

色彩は音響を生む、
胸の倦怠を吸ふ情欲のわなゝきに
はだかの肉体は啓示にかゞやく。
おゝ健康！
たへがたい苦痛からほとばしる血潮は、花ひらく音響は
心を洗ひ、
魔女の指先に色彩は音響となる！

×

早くも喇叭の音にめざめくる青宝石、
夜は血紅色の朝へと踊り出て
魚の心は木立や都市の上をひた奔り
のみほす苦熱の厚さ、しづけさ、
あたへよ！われに
疾風の早さを鐵の心をもった触手を
おゝめざめ来る青宝石
晝は夜の前に、血染みながら……。

（『現代詩歌』二巻二号、一九一九年二月）

＜俳句＞

山腹の牛なく春や水の音

（『文藝雑誌』一巻四号、一九一六年十月）

馬去りて飛び立ちにけり秋の蝶

（『文藝雑誌』一巻五号、一九一六年十一月）

山をつゝむ夕靄に稲の香が軽し

（『文章世界』十一巻十一号、一九一六年十一月）

月淡く地に落ちぬ今朝の秋

（『文藝雑誌』二巻一号、一九一七年三月）

霜踏みて旅立つ今朝の寒さ哉

（『文藝雑誌』二巻一号、一九一七年三月）

＜作文など＞

霜の朝

第一年級甲組　朱　耀　翰

朝早く起き出でて、戸を排して見れば、満庭の霜白妙に、さながら雪の如し、朝の空気新鮮にして、涼風顔に中る、前面の小陵、露、防ぎて見る能はず、早暁のさびしさに門を出でて見れば裏の通、夜明けつつあり、空に孤雁の啼声、聞ゆ、東の空に紅色の雲を溶かしてゐる、小川の橋上、行人稀に江水ひとり潺々として流る、耳を傾くれば颯然として水上に声あるが如し、暫く散歩して、露を突破し、霜を踏みつつ家に帰れば時既に六時を過ぎたりき。

（『白金学報』第三十一号、一九一三年十二月）

反省獨語

第一年級甲組　朱　耀　翰

二月三日　晴、風

学校でインキをこぼした人が居たから雑巾で丁寧にふいてやった。

二月六日　小雪

講堂のテーブルの下に本が落ちて有ったから其上に上げて置いた。

二月十日　晴

二月廿日　細雨

電車の中にて切符を落した人があるので拾ってやった。

二月廿三日　雨

雪道が悪くて困ると友達が云ったからあしだを貸してやった。

二月廿三日　雪、

電車路に大きな石が転がってあるかは除（ママ）けといた。

二月廿四日　晴、

道に雪の溶けた水がたまって居る、よく流れる様にした。

（『白金学報』第三十二号、一九一四年三月）

含満ヶ淵に迷ふ

三年　朱　耀　翰

我々数人は、一行に稍々先だちて、右方に当れる道を撰び、往くこと数町にして怒涛のさかまく音を聞く。これ大谷川の勢を集めし所、名づけて含満ヶ淵といふ。道に沿うて、石地蔵の列べるあり。これを、俗に化地蔵と云ふ。その数多くして、数ふる能はざるよりて、その名あり、今や、大部分は、先年の大

洪水によりて押し流され、十数個を残せるのみ。その像は鼻かけ落ち、或は首転り、或は、泥土に身体を埋められて大災難の迹歴々たり。

岩上にて昼食を済まし、起って、あたりの景を眺むれば、山あり、川あり、岩あり、橋あり、畑・藪・小屋・地蔵など、一として奇ならざるはなく、実に名の如く満を含まざるなし。

清水を掬びて進む。俄に、身の軽きを覚えぬ。路の終はる所に藪ありて通ること能はざれば、岩間に降り、危きを冒して進む。進むに従ひ、岩ます〳〵屹立し、崖ます〳〵急なり。橋ある所に至れば、断崖、水に接して往く能ず。戻るも残念なり。さりとて、崖を仰げば、雑草茫々として生ひ茂り、傾斜の急なること屏風を立てたるが如し。されど、なほ、勇気を振ひ起してこれに攀づ。蘚滑なり。加ふるに手には荷あり。雑草、多くは棘ありて握ること能はず。顔は、草に擦られて、痛さ、堪うべくもあらず。辛うじて攀ぢ登れば、葛蔦相絡みて、容易に踏み入るべからざれど、くゞり抜けて、頂上に達し漸く、胸撫で下せり。橋を渡れば、小さき御堂あり通行人に聞きて、大日堂なるを知る。

右側に林あり。一径その間に通ず。進み行けば行くほどに林は、密となりて聞ゆるは、たゞ水の音のみ、径は、曲り〳〵てつくる所をしらず。あゝ我々は迷ひたるにあらずやとの疑念、胸にせまりて、鳥の啼く声も、風の吹きすさぶ音もどんよりとしたる空色も、徒に、孤独の悲しさを増さしむるのみ。果して迷ひつらんには、同行の憂や、如何ばかりならむ。今夜は野宿せざるべからざるかなど思ひつづくれば、実に、『夕日はかくれて道ははるけし』の感に堪へざりき。さるに、雨さへぽつり〳〵と降り出して、ます〳〵心細くなりぬ。同行の者、いづれもかゝる思に耽りけん、一人として沈黙を破るものなく、ひたすらに急ぎ進むのみ。

（『白金学報』第三十七号、一九一五年十二月）

秋の日を

自熱に燃ゆる太陽が、日に日に赤光に変じて行くそして昼間でさへ白い灰の壁が淡黄色に反射するやうになる。

遂に秋が来たのだ。

野原を横切る風が、さゞめく小流れをそよぎ過ぎて、稲の穂の白っぽい面をうねりゆく。黄金色のうねりの上にかゞやく入日が、しづ〳〵とゆらめく。

豊熟の秋がそろ〳〵やって来たのだ。

水田の角に、蛙の飛び込む音が漸くと絶えて来るそして百姓たちが汗みどろになって水を田から流して仕舞ふ事に熱中する様になると、彼等の家では妻と子とで、隣の人も助け合って、すっかり、収穫の仕度が出来上がっちまふ。

こちらの田にもあの人の田にも同じやうに、美しい黄金の花

が咲いた。で、夏中、日に焼けた彼等の顔々に喜びがあふれて見える。

静けさの原を風がうねり往く。

山の角から出で来る汽車のおだやかなうねり、原を横切って沈黙の波が横はる。

そして秋の日が暮れて往く。

山が、周りの山々が三重に疊なって見える。胸を現はして息らふ肌の色に、赤い土が現はれて黒く立ってる近い山、そしてやゝ遠く、ぼんやりと青色にそびゆる山、一番終りに白く幽かに浮ぶ山々、その間から押し流さるゝ雲、その雲の流れがうす黄く、赤くそまり初めた。

「おや何時おかへりだへ、まあ、お上り」

やっと汗を拭くとお伯父さんが叫び出す。

「大きくなったね」

従弟を見ると私の口がツイすべる。

犢が鳴いた。

モー。

どっこい、と縁側へ腰を下して原ぱを見下すと、そこの細い道が目に付く。そしてそこを、一年振におばの家をたづねに来る自分の姿が浮ぶ。

モー。

何んとうるさい犢だらう。

たった五年であんなに高くなった白揚の高さを、勘定しながら私は息を吹いてる。

さうおばさん一時にしゃべられちゃまごついて仕舞ひます。

でも、話を聞けば可愛相な犢ね。

昨日、母を離されたんですって。

「栗が沢山落ちてるよ。拾ひに往かない」

おゝ、可愛いゝ子よ。

もうね、兄さんはね、そんな年ぢゃないのよ。

もう、五年経ったんだよ。

いや、その内にお前たちもさうなるんだ。

今の内ぢゃ、今の内ぢゃ。

思ひ切って泣いとるがいゝ。あの犢の様に。

ほら、雲が美しいですね、日が隠れるんです。

えゝ、秋の一日が暮れて往くんです。

全く消えるとね、今日と云ふ一日が往っちまふんですよ。

そして何時の間にか彼の犢のなき声が、大きい親牛の叫びに変って往きます。

そして、栗のとげに刺されたきずあとがね、あなた方の——えっお前ではない、あなた方の手の上に思ひ出として残る様になります。

私が目をつむって、手を握り締めて、斯うして悲しい思ひに

心を浸す間、やっぱり、犢は叫び続けてる。太陽は惜しげなく隠れちまふ。空腹が襲ふて来る。

時は過ぎゆく。時は絶えず過ぎゆく。されど、されど、私はそれを喜んでいゝやら又悲しんで宜いのやら。

あゝ本当に分らん事だ。でも、やっぱり、秋の一日は暮れて往く、いと静に。

（『文章世界』十一巻十一号、一九一六年）

編輯だより　第三信

若い方からさきに失敬して何とか云へとの事何のかんのんて〆切期日がとうの昔しに過ぎても編輯を初められずに試験まっ最中に校正室で汗を滴すほどなさけない事はない。

試験で焦るのもあと三日しかない。この雑誌が一人前の人間になる時分は已に国に帰って居るであらう。立派な若者のやうな姿になって三百里の旅を経て私の手に入る雑誌を思ふと今でも嬉しいやら何やら……暑いのでこれで御免（朱）

（『白金学報』第四十二号、一九一七年七月）

あれから

五B　朱　耀　翰

H君

お互ひに早や卒業だね。（かう書いて居ても君が読んで呉れる機会がありさうもないが――）ともかく早いもんだよ――これだけは僕の本然から出た言葉だ。

一年乙組と云ふグループの中で、僕の見出した君は、勿論今の君とは違って居るだらう。あれからもう五年たったんだよ。今頃、君は僕を思ひ出して呉れる事があるかしらん。君は何んと云う元気な青年だったらう。僕は、何時か電車の中で一緒になった時の君の印象をまだ忘れずに居るよ。君はあたりかまはず大きな声を出したね。そして又僕等は何んと云ふ茶目だったらう。併し今よりはずーっと純朴だったらしいねえ。

僕はあの山陽線の午後を未だに忘れないで居る。あの時だって君の成長の恐しく早いのに驚かざるを得なかった。一年級時分と全く別人になって居たんだからね。今頃道ばたでヒョッリ出くわしたとて、君も僕もどうせお互に分らないに定って居る。

下らんことを書いて来た。過ぎた五年をかへり見れば、ずゐぶん馬鹿げた事や、詰らん事が多くていやになって仕舞ふ。揚句の揚句が、僕なぞはとう〳〵学院有数の茶目坊と見做れて仕

舞った。僕等の組は三年時分まで校内の模範クラスだったんだからねえ。所が四年になるとどうした者かガラリと変って、学校中の悪党化して仕舞ったよ。五年になってからも相変らず茶目式――いやもっと不良少年的で評判を上げて来たものさ。

併し君、安心したまへ、不良少年不良少年と云ふけれども、それも僅か一部分に過ぎないんだから。勿論、今の学院の風気は疑問だ。併し、その中にも又侵すべからざる確りした所もあることを僕は断言する。だから安心したまへ――と言ふのだ。

先生も変ったが生徒も変ったね。この間、居たもの会を開いたら一年からズーッと居たものが僅か十一人しか居なかったよ。その内にも僕等乙組の連中は、大方僕一人だったらう。あとの十人がその時分の甲組なんだ。何んとなく寂しかったねえ。こんな事、どうでもいゝんだけれども。

兎も角も僕等は成長したね。僕はこれが嬉しい。運命が僕等の周囲から取り去った幾たりの友、また何時の間にか僕等のそばに近く持ち来された幾人かの友、皆これから先どうなって行くだらうか。併し僕は嬉しい。心配したり憂へたりするのは老人の仕事だ。僕等はまだ若い。もっともっと大きくならなくちゃならん。悲しかった事、楽しかった事、この学院に永遠に残して往かなければならぬ色々の思ひ出などは、みんなさいな事に過ぎぬ。僕の動かされ易い胸の中のあるものは、これらの過ぎた幼げな夢を幾度も幾度も顧り見ずには居られない。併し僕等はもっとも健全なる心をもって、雄々しく皆を振り捨てるに躊躇しないだらう。そしてもっともっと力強く、もっともっと青年らしくなった今の心をひそかに喜び、ひそかに祝はうとして居るのだ。そして、一層健全な力を、も一段確りした努力に向って歓声を放って迎へたいのだ。

H君、僕はうれしい。僕等はこの過ぎた五年の間に、少しなりとも力ある成長をした事を喜ぶ。君も喜んで呉れ。そして僕と共に、あらゆる失敗や羞恥の過去を忘れて呉れ！

（『白金学報』第四十四号、一九一八年三月）

解説　朱耀翰（チュヨハン）について

佐藤　飛文

朱耀翰（一九〇〇～一九七九）は朝鮮で初めて近代的な自由詩を取り入れた詩人である。号は頌児。

一九〇〇年、平壌で生まれる。平壌の崇徳小学校を卒業し、一九一二年、在東京朝鮮人留学生宣教牧師だった父親（朱孔三）について渡日。一九一三年に明治学院中学部に入学。明治学院在学中に文学に関心をもち、『伴奏』『現代詩歌』『白金学報』らに日本語の詩を発表する一方、川路柳虹の門下で近代詩を学ぶ。また『白金学報』の編集委員や学生会にも参画した。この同窓会誌編集の経験が後の『創造』発刊につながってゆく。

一九一八年に明治学院中学部卒業後、東京第一高等学校へ進む。一九一九年二月、金東仁らと共に朝鮮最初の純文芸同人誌『創造』を発刊。その第一号に発表した詩「火祭り（観燈会）」が評価を受け文壇に出る。この詩は朝鮮で最初の自由詩であり浪漫詩であると言われている。

一九一九年の三・一運動後に上海に亡命。李光洙が社長兼主筆となった大韓民国臨時政府の機関紙『独立』（のちの『独立新聞』）の出版部長となる。一九二〇年、安昌浩の指導する興士団に入団。上海の滬江大学卒業後に帰国し、東亜日報、朝鮮日報の編集局長をつとめる。一九二四年には詩集『美しい暁』（朝鮮文壇社）が出版された。

一九三六年、興士団事件により逮捕・投獄される。その後、「松村紘一」と創氏改名し、一九四三年に朝鮮文人報国会支部会長となり、一九四五年には朝鮮言論報国会へ参加するなど、親日文筆活動を行う。

光復（植民地支配からの解放）後は政界にも進出。国会議員を経て四・一九革命後の張勉内閣の復興部長官、商工部長官を歴任。五・一六軍事政変後は経済科学審議会委員、大韓海運公社社長などをつとめた。

明治学院の先輩であり、「独立新聞」「朝鮮日報」「東亜日報」で共に働いた李光洙は、朱耀翰のことを次のように紹介している。

「朱耀翰は、一高に学んだこともあり、川路柳虹に認められたこともある人で『うるはしの曙』、『寶仙花』等の詩集を出した。彼は、クリスチャンで、職業は新聞記者であるが、その頭脳の明晳、感情の鋭敏、良心の明瞭さを以って特色として居り、彼の詩は誠に、明るい、飾り気のない、若い朝鮮の心の歌である。」

（李光洙「朝鮮の文学」『改造』一九三二年六月号より）

なお、岩波文庫の『朝鮮詩集』（金素雲・訳）に朱耀翰の詩四編が収録されている。

資料8は、朱耀翰が日本語で書いた自伝の一部である。『アジア公論』一九七六年十月号から一九七七年二月号にかけて連載された。本資料集には、明治学院中学部時代から一高入学、『創造』誌の発刊、上海での李光洙との出会いと大韓民国臨時政府での働きなどについて書かれた部分を掲載した。

資料9は、朱耀翰が明治学院同窓会報第二十号（一九六八年一月発行）に寄稿した文章である。朱耀翰は明治学院同窓会の韓国支部長として一九六七年に来日し、明治学院九十周年記念式典に参加し、記念植樹も行っている。

資料10は、朱耀翰が明治学院中学部時代から一高時代に日本語で書いた詩や俳句、作文などである。川路柳虹の評価を紹介したい。

「朱耀翰君の詩も実に独特の味ひがある。氏は明治学院に在学中の朝鮮国人である。わが親しき隣邦の青年にしてこれ丈けの詩をかき得るとは甚頼もしい。朱耀翰君は後来朝鮮国の詩壇を興さんことを目的としている。私は同君の不断の努力を甚だ壮とし多としている。」

（川路柳虹「食後の卓」『伴奏』一九一七年七月号より）

なお、これらの日本語作品は、大村益夫・布

釜山鎮区 釜岩三洞にある朱耀翰の詩碑
「泉は独りで」

泉は独りで

朱耀翰

泉は独りで
踊りながら流れ行く
谷間の岩陰を

泉は独りで
笑いながら流れ行く
険しい山道、花の間を

空は晴れ渡り
楽しき　その音
山や野原に鳴り響く

（日本語訳：佐藤飛文）

袋敏博編『近代朝鮮文学日本語作品集（一九〇八～一九四五）』（緑蔭書房）に収録されている。転載を許可して下さった緑蔭書房編集部代表の南里氏に感謝する。

雨の音

朱 耀 翰

雨が降ります
夜は静かに羽を広げて
雨は庭先でささやきます
そっとさえずるひな鳥のように

欠けた月が糸くずのようで
星からも春が流れるように
あたたかい風が吹くと
今日はこの暗い夜を雨が降ります

雨が降ります
なつかしい来客のように雨が降ります
窓を開けて迎えようにも
見えないように、ささやきながら雨が
降ります

雨が降ります
庭先に　窓辺に　屋根の上に
誰も知らない嬉しい便りを
私の心に知らせる雨が降ります

（日本語訳：佐藤飛文）

ソウル・世宗路公園にある
朱耀翰の詩碑「雨の音」

（資料11）

文壇三十年の足跡

金東仁（キム ドンイン）

同人誌の発刊

一九一八年十二月二十五日の晩だった。

日本の東京（本郷）にある私の下宿に私と朱耀翰とが火鉢を囲んで向き合って座り、話をしていた。パウリスタのコーヒーシロップを濃く入れて飲みながら、その日の晩（一、二時間前）に東京留学生青年会館でクラス祝賀会という名目で開かれた留学生集会での突発的な出来事のために生じた興奮がまだ生々しく残っており、その話題を中心に話の花が咲いた。

韓国が日本に併合されてやっと八、九年、まだその日の悔しさと憤怒が国民に生々しく残っていた時代で、その中でも先覚者・指導者として自覚していた留学生達の心には愛国志士的気分が激しく燃えており、「韓国の独立は私達の手で」という抱負が留学生達の心に深く刻み込まれていた時代だった。

そのような時に欧州大戦が終わり、アメリカの大統領ウィルソンが人類に民族自決主義ということを提唱した。一民族の運命はその民族の自由意志で決定されるという思想だ。ある強力な国家の実力で一民族の運命を左右すべきではない。ある国家の実力が不足しているからといって他の強国に飲み込まれてしまうことがあったとしたら、そのような無理な実力主義は排除して、その民族の自由意志でその運命を決定するべきだという主張だった。

実力不足で日本に併合された韓国は、この機会にウィルソン大統領の提唱に添って、当然その国権を回復しなければならないという声が（先覚者と自認する）東京の留学生の間で激しく叫ばれ、その日（一九一八年十二月二十五日）、クリスマス祝賀を口実に青年会館で集会を開き、そこでついに非常に大きな決意がなされたのである。

すなわち、三・一運動の種がその晩に胚胎されたのだ。運動を進める委員を選出し、「独立宣言書」を作成し、内地（日本）と連絡する方法を討議して閉会したのだった。

耀翰と私はそこを出てパウリスタに立ち寄り、お茶を一杯ずつ飲み、コーヒーシロップを一瓶買って、一緒に私の下宿に来たのだった。

最初に私たちは先ほどの集会の話をした。その集会では徐椿が私たち（耀翰と私）に独立宣言文を起草することを頼んだのだが、私たちはその任にあらずと辞退した（後にそれは春園・李光洙が担当した[1]）。辞退はしたものの、下宿で向き合って座ってみると、自然とその話題になった。最初は話題がその方面を徘徊したのだが、耀翰

と私が向かい合って座れば、いつでも話は最終的には「文学談」になってしまう。

「政治運動はその方面の人たちに任せて、僕たちは文学で―」

文学の話に移った。

漠然とした「文学談」「文学討論」よりも具体的に新文学運動を起こそうというのが、耀翰と私が会うたびに出てくる話だった。

この夜も私達はそのことを話した。そして文学運動を立ち上げるために同人制の文学雑誌を始めてみようという所まで私達の話は進展した。

二百円あれば創刊号を出すことができる。そして毎号百円ずつ追加すれば継続して発刊できると耀翰は言うので、それならその資金は私が負担することにして、「資金も資金だが、一緒にやってゆく同人を選ぼう」と言って、長春・田栄沢[2]、白岳・金煥[3]、崔承萬[4]らをまず明日にでも訪ねて同人にならないかと勧誘し、将来的には孤舟・李光洙を引き抜こうと話したのだが、この頃は〔文学の〕土壌が痩せていたからか、これ以上同人になってくれそうな人物を探し出すことは難しかった。

雑誌の名前は『創造』にしようと決め（最初耀翰は『創造』は宗教的な臭いがすると若干反対したのだが）、翌日すぐ平壌の母に電報を打ち、創刊費二百円を請求することにした。二人（耀翰と私）が床についたのは朝五時を過ぎていて、牛乳配達の音が聞こえていた。

ちょっと眼を閉じたがすぐ目が覚めて、耀翰と私は下宿で一緒に早飯を食べ、青山の田栄沢を（同人に誘うために）訪ねに行こうと下宿を出た。

郵便局に寄って「二百円を送ってくれ」という電報を母に打ち、青山の田栄沢を訪ねた。次に一緒に金煥を訪問し、さらに崔承萬を訪ね、みな同人になるという快諾をもらった。耀翰、田栄沢、私の三人はある洋食店に入り、ランチを食べた。私達の歓喜の興奮で騒ぐ異国の言葉の声に他の客達は驚いた眼で私たちを見ていた。

――こうして、この民族に「新文学」という花が、そのつぼみを開き始めたのだった。

昔のことは知らないが、漢文がこの民族の文字として通用され模倣漢文学として民族の文学欲をあれこれ継ぎ接ぎしてきたこの民族に、その「文学渇症」の欲求に対応しようという私達の若い野心は動き始めたのだった。

失われた国権を回復しようという「三・一運動」の端緒が表面化しはじめたのが一九一八年のクリスマスの晩であり、民族四千年来の新文学運動の烽火である『創造』雑誌を発刊しようという決心がされたのも同じ日の晩であった。

そればかりでなく、この『創造』の創刊号が発行された一九一九年二月八日はまた、「三・一運動」の前哨である「東京留学生独立宣言文」が発表された日でもあっ

た。[5]

朝鮮新文学運動の烽火は不思議にも三・一運動と共に進められたのだ。

その時、私の年は十九歳。耀翰も同い年で、私が耀翰よりも一、二ヶ月早生まれであった。

☆

民族の歴史は四千年だが、私達は文学の遺産を継承することができなかった。私達に相続された文学は漢文学だった。前人の遺産がないのに私達が文学を持とうとすれば、純全に新しく作り出すことしかなかった。

文学の中でも私は「小説」を目標とし、耀翰は「新詩」を目標として礎石を置きその席を選んだ。

文学は文章で構成されるものであり、まずその文章から小説なら小説用語、詩なら詩用語から積み重ねてゆかねばならなかった。わずか三十年前のことだが、今日ではもう小説や詩に対してその用語のスタイルや手本が確立されていて、今日小説や詩を書く人はその方面の苦心は免除されているのだが、今振り返ってみると、平凡で当然な「文章」も、最初にそれを書いた時は、言葉に出来ない苦心と躊躇の関門を通過してようやく出来上がったのだ。その一つが文章の口語化だった。

『創造』以前にも小説は大体口語体で書かれていた。しかしその「口語」というのはまだ文語体が少なからず混ざっていて、「～하리라」「하니라」「이러라」「하도다」など〔の文語体語尾〕は口語体と考え、それ以上口語体化することはできないと考えられていた。新文学の開拓者である春園・李光洙の小説を読んでも、『創造』が口語体純化の烽火をあげる前（一九一九年以前）の作品群をみると、『無情』も『開拓者』もやはり「이러라」「하더라」「하노라」が少なからず使われており、それ以上は口語体化出来ないと考えたようだ。

『創造』で初めて小説用語の純口語体が実行されたのだ。

「口語体化」と、動詞に「過去形」を小説用語として採択したのも『創造』だった。全ての事物の形容においてこれを読者の頭に実感的に植えつけるために「現在形」よりも「過去形」がより有効で力強い。「キムソバンは起きる。起きて外に出る」というよりは「キムソバンは起きた。起きて外に出た」とする方がより実感的で有効であり、全ての事物の動作の形容に過去形を採択したのだった。

『創造』を中軸として『創造』以前の小説を見ると、昔の漢文小説は勿論、李人稙[6]や李光洙の小説も全て「現在形」を使用しており、「過去形」を使っていなかった。『創造』創刊号に掲載された私の処女作「弱き者の悲しみ」で初めて徹底した口語体と過去形が使用されたのだった。

また、朝鮮語にはないHeとSheが大きな難関だった。

小説を書く場合、小説に出てくる人物をたびたび金某なら金某、崔某なら崔某と名前を書くことは面倒であり、わずらわしいので、適当な語彙があれば使いたいのだが、不幸にも朝鮮語にはHeやSheにあたる適当な語彙がなかったのだ。HeとSheを一括して（性的な区別なく）「유（その人）」という語彙に代用すること、「유」が普遍化し常識化した今日では、別に新奇で不思議なことではなくなったが、これを初めて使った時には、莫大な躊躇と勇断と苦心があったのだ。

日本語の「違ヒナカッタ」を直訳して「틀림（トウルリム）없다（オプタ）」「다름（タルム）없다（オプタ）」などと初めて使った時のそのぎこちなさも、まだ記憶に生々しい。

「느껐다（ヌッキョッタ）」「깨달았다（ケダラッタ）」などの形容詞を本詞のような意義と全然違う方面に活用し在来の朝鮮語が表現できない特殊な気分を表現する時に使った。今では「느껐다（ヌッキョッタ）」や「깨달았다（ケダラッタ）」などは小説用語としては普遍化したが、最初にこの語彙を使った時には全然型に合っておらず自ら不安で不満を感じながら（つまりこの「느낀다（ヌッキンダ）」は形容詞なので）使ったのであった。

今小説や詩を書く後輩たちでこのような方面の苦心をするものがいるだろうか？　太古から朝鮮語にこのような小説用語があっただろうかと考えながら作り生み出した我々の小説用語―それは他人には察することのできない苦心と躊躇があり、それを断行する果断性と蛮勇があり、その蛮勇によって建築されたのだ。

二十歳の血気―しかも自分が先覚者だという愚かな蛮勇―このようなものがあったからこそ、朝鮮小説界に礎石が敷かれたのであった、その蛮勇がなければ小説界に礎石を強く敷くことは出来ず、三・一転換期を過ぎ群雄乱立の世と直面し、小説用語は混乱状態に陥っていただろう。三・一はわが民族の大きな転換期だ。三・一の時に既成の人は「既成人」として、三・一後の人は「後人」として、「既成人」は「後人」に対して指導権を奪ってはいけない。三・一の時の「小説用語」に「既成スタイル」がなかったのならば、三・一後に群雄が乱生し各自が自説を主張して千態萬様の小説用語スタイルが生まれていたことだろう。HeとSheについても、三・一後にある人は「저（チョ）（あの人）」「저 여자（チョ ヨジャ）（あの女）」を主張し、ある人は「궐（クォル）（その者）」「궐녀（クォルニョ）（その女）」を主張し、一時期私の主張と対立したが、「유（ユ）」という用語が先に生まれていたので結局「유（ユ）」として確定されたのだ。

今思えば「궐（クォル）」「궐녀（クォルニョ）」としたほうが良かったかとも思うのだが、「궐（クォル）」という用語が思い浮かばなかったので「유（ユ）」となったのである。

☆

『創造』創刊号に私は「弱き者の悲しみ」という小説を書き、朱耀翰は「火遊び」[7]という詩を書いた。その前

年（一九一八年）四月に私は結婚をした。新暦四月に結婚したのだが、その陰暦四月八日の釈迦の誕生日に平壌で数十年ぶりに大きな観燈会をした。

数十年出来なかったものだから豪華で広壮に行われた。

結婚をして新婚旅行で金剛山へ行き、家に帰るとその観燈会だった。妻の家では婿へのお祝いを兼ねて大きな船を一隻用意し、船の中で祝宴を開き、観燈船に混ざって愉快な一夜をすごした。

新婚、祝宴、観燈―心楽しくその観燈会の広壮で立派だったことを耀翰に話したところ、そこから名篇「火遊び」の歌が生まれたのだった。『創造』創刊号には耀翰の詩「火遊び」と田栄沢の小説、崔承萬の戯曲、私の小説などを載せ、印刷は横浜にある「福音印刷所」に頼んだ。「福音印刷所」は朝鮮語の聖書を印刷していた所だ。ハングルの活字は十分あったが、職工がハングルを知らない日本人だったので、文字の模様を見て文選をするため、「号」の字と「못」字、「外」字と「깨」字などを混同し、「설」「성」などの字は十分あったのだが「깔」「생」などは不足していて大変不便した。

自分の文章を活字化することも新奇で不思議なことだったが、それを自分の手で校正までするのだから、心の愉快満足は言うまでもない。自分の文章が活字化され、その活字化された文章を読者の手に渡る前に校正をしながら、直したい所は直す、本当に愉快なことだった。「弱き者の悲しみ」の原稿（印刷所に渡し印刷して戻ってきたもの）は三十年経った今も所々シミが食ったままで私の手に保管されている。

第二号の原稿が印刷所に渡る時、創刊号の見本が先に来た。そして二月八日、その一千部が横浜から東京に鉄道で届くことになった。前日の七日は興奮して、早く明日が来るのを待ちながら床についた。

八日は二つのことがあった。一つはもちろん横浜から本社（金煥の下宿）に到着する雑誌を見に本社に行くことであり、もう一つはこの日に留学生の集会が青年会館で開かれるのでそこに行くことであった。こうして八日は早起きして早飯を催促し、それを食べてすぐに出かけたのだが、左手をつかまれた。

慇懃に渡された名刺を見ると、若松警察署の巡査だった。

雪がしんしんと降る早朝の道を巡査と同伴して若松警察署へ行った。

その日、朝鮮人女性も一人若松警察署に呼ばれ取り調べを受けていた。金マリア[8]か黄愛徳[9]、あるいは黄信徳か、朝鮮学生集会で時々見た顔だった。

その女性が何の取り調べを受けたかわからないが、私は要するに『創造』創刊費用として送金してもらった二百円の使い道を取り調べられた。学生の新聞を作るた

めの大金なのか、何に使ったのかを尋問された。

雑誌の創刊費用として使ったということが確実に判明したので、一日で無事に釈放された。警察署から無事に出て、青山の本社へ行き、そこで初めて留学生独立宣言発表の顛末を聞いた。

東京留学生と日本警察の闘争の幕がついに開かれたのだ。それから留学生たちは青年会館や日比谷公園に集合し、日本警察に対して連日のように闘争をした。

ある日[10]、日比谷公園で集会をしたのだが警察に解散させられ、何人かは警視庁に連行されたのだが、他の十数人の学生はすぐに釈放され、私と李達という学生が一晩拘束された。

その事件が大阪朝日新聞と東京日日新聞に報道され、家族はとても驚いて「ハハキトクスグカヘレ」という電報を私に打った。

その電報が嘘であることを知る由もない私は、とても驚き、朱耀翰を訪ねて『創造』の引き継ぎを頼み、その日の晩の汽車で東京を発った。三月一日のことだった。汽車が大阪を過ぎた時に新聞を買って読むと、朝鮮では何か事件が勃発しているようだった。

しかし大きな事件だとはわからなかった。その間の十年にわたる寺内〔正毅〕と長谷川〔好道〕の武断統治下では、何か大きな事件が起きるということは想像もできなかった。東京でも、一度に数百人が集まってひそひそと話しているだけで解散させられたので、そのような事件があったのではと推測された。

下関からの連絡船に乗船する時と釜山での下船時に警戒が強いことは感じたが、三・一のような大きく雄大で爽快な事件が勃発したようには思えなかった。

汽車の中でようやく事件の輪郭が見えてきた。そればかりでなく、以前なら日本人の汽車事務車掌におどおどと震えていたであろう田舎の老人が汽車事務車掌に何か声をかけている光景を見て、

「ああ、民族は生きていたのだな。寺内の銃口でも民族の魂は殺すことが出来なかったのだな！」

と、つい涙がこぼれた。

汽車がソウルを通り、王の葬儀を見物し三・一を経験して帰って行く人たちから比較的正確に三・一の雄大なメロディーを聞くことが出来た。

汽車で聞いた感激のニュースに陶酔しながら平壌に到着し、家に帰った。

私は十五歳までの少年期を平壌で過ごしたが、親友のいない人間だ。もともと交際的でない上に、「悪い子と付き合ってはいけません」という教育方針の下で育ったので、小学校の同窓生はいるのだが互いの家を行き来するほどの親交はなかった。

三・一の国民自粛によって街も寂しく親友もおらず、家で本を読むことぐらいしかなかった。

その時に私の弟が友達と謄写版で檄文を刷って毎晩市内に貼りに行っていたのだが、その檄文の原稿を一つ起草してくれというので書いてやったら、そのために三月二十六日に警察に捕まってしまった。警察と監獄でちょうど三ヶ月過ごし、六月二十六日「懲役六ヶ月、執行猶予二年」という判決をうけ、再び娑婆に出てみると、印刷所に渡しておいたままその後関わることが出来なかった『創造』第二号は、もちろん印刷はされていたが、激変の世相がどうなるか予測することが出来ず、本社に行ってみると、本社には金煥一人が留宿していた。田栄沢も帰国しており、朱耀翰も帰国し、私の妻と協力して何か檄文を一つ書いて、耀翰は上海へ亡命していた。まさに立ち上がろうとしていた朝鮮新文学は、三・一運動に直面して行き詰まってしまった。

文学運動は三・一運動に直面して同人は四方に散らばり行き詰まってしまったが、市民生活は三・一以前へ復帰して、嫁入りするものは嫁入りし、婿入りするものは婿入りし、再び平穏な現状に戻った。

日本政府は朝鮮の三・一事件は結局寺内総督の武断統治に対する反抗であるとして、海軍大将の斎藤実を朝鮮総督に送り、朝鮮は文化統治に変えるということを宣布した。

この斎藤実の文化政治の船に便乗し朝鮮でも何冊かの雑誌と民間新聞が発刊された。そして出版を目標にする会社も生まれた。

〔中略〕

文学と私

私はどのようにしてこの世の中にたくさんある学問の中から文学―文学の中でも小説を目指す道を選んだのか。

そしてまたどんな道を歩んで一九一九年（雑誌『創造』発刊）の金東仁にまで至ったのか。

父[11]が私を日本の東京への留学に送り出すときには、今の世の普通の父が子供に嘱望するのと同じように将来は弁護士か医者になることを望んでいた。「理論を掘り下げ道理をよく調べ、腕のよい弁護士になるんだよ」、「小さな頃から化学や物理の実験に長けていたから、その手腕を発揮して将来は医学者になるんだよ」などと医者や弁護士になるのを期待していた。十五歳の若さで青雲の志を持ち万里の外の外国へ勉強しに出かける私も将来の目標を医学か法律においていた。

東京には朱耀翰が私より先に来ていた。耀翰は彼の父[12]が東京の朝鮮人留学生宣教牧師として東京に駐在することになった関係で、父について私より一年前に東京に来ていたのだ。

本国でも同じ小学校[13]（中等学校の前身のキリスト教小学校）に通っていた。

東京で耀翰と会い、耀翰が言うには、「自分は将来『文学』を専攻したい」とのことだった。

法律学は明らかに弁護士や検察官になるための学問だ。医学は明らかに医者になるための学問だ。しかし文学は将来何になり何をする学問なのか、どのようにして生まれた学問なのか、その輪郭も概念すらも想像することのできない私は、朱耀翰が私よりも先を行っているなと思った。少年の自尊心は耀翰より自分が遅れているということが不快で恥ずかしく、学校に入学する際も「明治学院」を避けて「東京学院[14]」に入った。耀翰は一年前に学校に入ったのだが、その時はすでに明治学院中学部二年生だった。私は新たに入学しようとすると一年生に入ることになるので、一年遅れてしまう。同じ明治学院で耀翰よりも下級生になってしまうのが嫌で、東京学院一年生に入学したのだった。ところが翌年東京学院はなぜか閉鎖されてしまい、在学生は明治学院と青山学院とに分かれて転学することになり、私はひとりでに明治学院へ割り当てられ、耀翰が三年生の時に私は明治学院二年生になった。

ところで、その東京学院時代、つまりまだ中学一年生の頃に、英作文の時間に宿題で、一年生レベルの英作文を一編ずつ書いてくるのが課題だった。私はその当時英語にとても関心があったので、私の知っている英語の知識を駆使して英語の歌を一つ作った。今となってはその内容もスペルも忘れてしまったが、辞書と参考書を片手に「Twinkle, Twinkle, Little Star」で始まる数行の歌を作って提出した。それを読んだ先生が「君が書いたのか」と尋ねたので、「僕が書きました」と答えると、「君は将来立派な文学者になれるよ」と賞賛してくれた。

私は先生の賞賛を聞いて、こんなものが文学なのかと思い、文学の輪郭がわかってきたという自信を持った。

しかし文学者がどんなものなのか、文学者とは何をするのか全くわからなかった私は、やはり将来の目標は弁護士か医者であった。

「東京学院」は市谷の陸軍士官学校の近くにあった。下校するときに小さなカバンをかついだ学生（私は十五歳まではとても小柄だった）は、わざわざ歩いて青山練兵場の後ろを回り、練兵場の奥にある茶店でモチ（または焼き芋）を二銭で買って、それを食べながらのんびり中渋谷の下宿まで帰って行った。日曜日には必ず浅草に映画を観に行った。その頃は第一次欧州戦争が始まった年で、アメリカ映画が次第にフランスやイタリアの映画を圧倒し勢力を持ち始めた初期で、探偵活劇が映画界の主潮であり、数十巻もの連続大長編が登場しようという頃であり、チャップリンの一巻二巻の爆笑喜劇が映画界にデビューした頃であり、日本は大正爛熟期の花開く時代だった。

ある小さな名もなき朝鮮青年は日曜日ごとに浅草の映

画館（帝国館、電気館などの洋画専門館にばかり通い日本映画は観なかった。日本映画はまだ舞台劇の旧式のまま尾上松之助の独壇場の時代であり、まだ女俳優というのが日本にはいなかった太古時代だった）でチャップリンに笑い転げ、またはハリ・ハッチューに拍手を送り、そして帰る時は仲見世の裏で十銭の天丼に舌を鳴らし…。

映画の探偵劇に共鳴と蠱惑を感じた少年は、しだいに探偵小説を読み始めた。

ところが、ある時「少年文学文庫」の『秘密の地下室』という本が目にとまり、その題名が探偵小説のようだったので買って読んでみた。

探偵小説ではなかった。コロレンコだったか誰だったか忘れたが、ロシアのある大家の小説を翻訳したものだった。

探偵小説ではなく、内容がそんなに猟奇的で惹かれる場面はないのだが、その作品の全体にあらわれている、耐えがたい味と重みと力は、明らかに幼い私の心を動かした。探偵小説でなくても、その作品に惹かれたのだ。「少年文学文庫」全七巻をすべて買って読んだ。

探偵小説でなくても心惹かれる小説があるのだな、と初めて小説に興味と関心を持つようになった。まだ恋愛だとか男女関係には興味のない少年だったが、探偵の話でなく恋愛の話でなくても、人間の心を打つ話があるのだということは、幼い私には大きな新しい知識だった。それが「文学」だということも、いつの間にか知った。――こうして次第に文学というものをわかり始めたのだった。

下の学年にいるのが嫌で疎遠になっていた耀翰と再び親しくなり、文学を討論し、しだいに文学への情熱が高くなって行った。

☆

東京の「明治学院」という学校は、朝鮮人とはとても縁の深い学校だ。明治学院朝鮮学生同窓会の名簿を見ると、朴泳孝、金玉均[15]などがその最初に書かれており、私がその学校に在学している間にも白南薫が五年生に在学しておられ、文一平、チョングァンス[16]も明治学院出身であり、書伯の金観鎬[17]の絵が私の在学中もその学校の壁に飾られており（金観鎬も明治学院出身だ）、現在の朝鮮を背負っている多くの働き人が明治学院を経て社会に出た。

日本でも島崎藤村をはじめ多くの文学者が明治学院出身であり、したがって文学の風が伝統的に学生たちの間に吹いていた（その学校の自慢の校歌は島崎の書いたものだ）。そのため、三、四年ごろからその学年だけの回覧雑誌が刊行されていた。三年生の時に私も三年生の回覧雑誌に小説を一編書いた。今はただ書いたという記憶しかなく、どんなことを書いたのか全く思い出せないが、

この日本文で書いた小説こそが私の真正な処女作だ。

陰気で社交性がないので、「君は日本語がわかるのか」、「教師の話がわかっているか」という注意までされた少年が、日本文で小説まで書いたのかと（日本人の）同窓たちは〔驚き〕、「これまで君に対して持っていた考えを改めるから、一緒に文学について話そう」と下宿にやってくるクラスメイトもずいぶん多く出来た。そして少年らしい情熱と希望を持って「君は将来朝鮮の小説家になれ。僕は日本の小説家になるから。そして朝鮮と日本が互いに文学で交流し、最後まで文学で交際しよう」と、堅く手を握った友も少なくなかった。

今となっては名前まで忘れてしまったその時の仲間たち—果たして彼らはあの時の希望通りに文学で世に出ることができたのだろうか？　当時は日本も有島武郎や菊池寛、芥川龍之介などがあらわれる前であり、菊池の師である夏目漱石らの時代だった。

私はその時、少年らしい野心に満ちていた時期であり、その上私の父が私を育てる時に唯我独尊の思想を私の幼い頭に深く植え付けたように、日本文学などは最初から見下しており、「ヴィクトル・ユーゴー」までも通俗作家だと軽蔑するくらい唯我独尊の時代だった。だから日本のクラスメイトたちと文学談をしながらも、君たちのような島国の人種に偉大な文学者など出るだろうかという考えをいつも心の中に抱いていた。

レオ・トルストイは自分が敬慕してやまない作家だった。「戦争と平和」や「アンナ・カレリナ」などに出てくるその亡霊のとどろく奇妙な事実描写だけでなく、「トルストイの全て」を敬慕していた。『創造』の何号かにそのような文章も書いた[18]のだが、当時の私の文学観ないし芸術観はだいたいこのようなものだった。

『創造』に書いた私の芸術観の大意—

「—だいたい人という動物は神様の作った世界に満足しなかった。自然界に美しく立派な『花』というものがあるにもかかわらず、自分の手先や自分の才幹で花を模倣して絵や彫刻を作り（だから自然界の花と違って色彩の美しさも不足し、香りもなく）、このみすぼらしい複製品を好む。優秀な『自然品』よりも……。

自分の手で作ったものは自然界のものよりもどんなに汚くみすぼらしくても、自然界だけに満足することが出来ず自分の手で複製しそれを好むことは人間の心情だ。

これがすなわち芸術だ。自然界を模倣して音響で複製したのが音楽であり、絵や彫刻などで複製したものが文学だ。言い換えれば『自己が創造した世界』——これが芸術だ。

このような観点でロシアの二人の偉大な作家（トルストイとドストエフスキー）を比較してみると「愛の天使」とか聖者という尊敬を万人から受けているドストエ

フスキーよりも、人道主義の強売者・暴君という評価を受けているトルストイの方がずっと『内的世界』を明瞭に創造してその『自己の世界』を思い通りに操縦していた。

このような意味でドストエフスキーよりもトルストイの方が芸術家として、より勝っている……」

このような意味でまずトルストイを芸術家として敬慕し、枝葉的には彼の繊細で逼真な事実描写と小説の技術的手腕に敬慕した。

私の作風がトルストイを模倣したりとかトルストイの影響を受けたということはないが、それは民族性であったり環境や故郷の違いのためであり、トルストイという人格は私に大きな影響を与えたのである。

文学出発

〔省略〕

『創造』と『廃墟』

『創造』創刊号を発行し、第二号の校正をようやく終え、万歳事件が勃発し、私は帰国してしまった。

さらに警察と監獄で三ヶ月間世間と離れていたが、再び広明な天地に出ると、世の中は昔のままに戻っていて、実家と本家を行き来して、十銭・二十銭の金を争い…。

『創造』発刊で芽生えた朝鮮新文学は、万歳事件で同人達が散り散りになり、停止状態に陥った。私が監獄生活を終えて出てくると、金煥と崔承萬は東京にいて、田栄沢はその間に帰国し結婚し、朱耀翰は上海に亡命していた。

印刷だけして積まれていた『創造』第二号を発行させて、同人達に連絡し第三号の原稿集めに着手した。

その時、李一と呉天錫が『創造』同人になりたいと言ってきたので、ちょうど同人の仲間が五人だけだと原稿難を感じていたので、上海の朱耀翰に手紙で交渉し、同じように上海に亡命していた李光洙も〔同人に〕引き抜き、李一と呉天錫を新たに同人に加えることにした。

その頃、日本政府では朝鮮の万歳事件は、寺内（と長谷川）総督の武断統治に対する反抗行動であるとして斎藤実を朝鮮総督として派遣し文化統治をすると宣布した。

その文化統治のおかげで民間新聞が出てきて、言論もある程度の自由の道が開けた。

こうして過去には厳封されていた言論と出版などに若干の緩和が生じると、この地にはなぜ文学者がこんなに多いのか、君も小説私も小説、君も詩私も詩と、詩人・小説家の山があふれ出てきた。

そしてその多くの文学者達の多くの作品を消化するた

めに四方から雑誌社や出版社が生まれた。文をとぎれとぎれに切って書けばそれが詩であり、男女が恋愛する話を書けばそれが小説だということを知った模様だった。

しかし我々は寂しかった。この多くの「文を書く人」の中から嘱望する作家は現われず、したがって『創造』同人という一グループの他には「文壇」というものが形成されず、無限荒野に一人きりでさまよっているようで、孤独で寂しさを感じずにはいられなかった。

そのような時、同人制の文学雑誌『廃墟』が創刊された。その同人には黄錫禹、呉相淳、廉尚燮、閔泰瑗、金萬壽、南宮檍、金明淳、卞榮魯、金億[19]、金瓚永[20]などがいた。

しかし『廃墟』には新文学を代表する小説作家がいなかった。通俗作家の閔泰瑗が『廃墟』の小説を代表していた。

ところが、『廃墟』創刊号が発刊されると、『廃墟』の重要同人である岸曙（金億）、金瓚永、金明淳の三人が『廃墟』を脱退し、『創造』へ移って来たのだった。

金明淳は金弾実という名で以前『青春』雑誌の懸賞小説で当選しその文名が輝いていた存在だった。

金瓚永は平壌の伝説的富豪の名門家の子息で、東京美術学校出身で、多方面（絵と文章）に素養がある人だった。

金岸曙は万歳事件以前からの詩人で、「하여라（ハヨラ）」、「하였서라（ハヨッソラ）」の表現を始め、詩に独特な地盤を積み上げてきた人だ。その頃ソウルに帰っていた金煥から、「金瓚永、金億、金弾実が『創造』に来たいと言っているがどうだ」という手紙があり、それは良いと答えて『創造』に来ることになった。

なぜ『廃墟』を脱退して『創造』に来たのかは尋ねたことがないのでわからないが、おそらく推量するに、『廃墟』の退廃的、廃墟的、ボヘミアン的な傾向によるルンペン的気分が精神的に合わず、生気溌剌な『創造』へ移って来たのだろう。このようなわけで、『廃墟』は完全に廃墟色だけを帯びるようになった。『廃墟』の同人の中でも少しは明るかった二、三人が『創造』に移って来たので、沈鬱さだけが充溢してしまった。

これに反し『創造』は金瓚永の図案が雑誌の表紙を飾り、金岸曙の詩が内容を装飾した。

新詩は耀翰が代表した。耀翰の始めた口語体の新詩は朝鮮の新詩の標準形となった。

この口語体新詩に対抗する岸曙は、「하여라（ハヨラ）」、「하였서라（ハヨッソラ）」の一節を案出し、「하였서라（ハヨッソラ）」の後を追う後輩も少なくなかった。

そのまま粘り強く発展させていれば、あるいは新詩の一つの型になっていたかもしれないのだが、岸曙自身が途中でこれを放り出し、いわゆる純口語体の「新民謡」へ転向してしまい、せっかく発展させてきた「型」を自

らなくしたのだった。

ところで、この三人の金が『創造』へ移ってきたことは、別の側面から見れば、三人がみな平安道出身であり、地方性で解釈する人もあらわれ、誤解する人もいた。

今では誰も金東仁は平安道の作家で廉尚燮は京畿道の作家だと区別して論じたりはしないが、当時の朝鮮にはまだそのような風が吹いていたのだった。

〔以下略〕

訳注

(1) 李光洙の起草した二・八独立宣言については**資料7**の105～111ページを参照のこと。

(2) 長春・田栄沢（一八九四～一九六八）牧師・小説家。『創造』創刊時は青山学院神学部に通っていた。

(3) 白岳・金煥　『創造』創刊時は東洋美術学校に通っていた。

(4) 崔承萬　東京外国語学校ロシア語科で文学を学ぶ。『学之光』編集委員。一九二三年より東京朝鮮基督教青年会の第三代総務をつとめる。

(5) 『創造』第一号の発売日は一九一九年二月一日と印刷されている。

(6) 李人稙（一八六二～一九一六）小説家。一九〇六年に新小説『血と涙』を発表した。

(7) 朱耀翰の「火遊び（観燈会）」については**資料8**の119ページを参照のこと。

(8) 金マリア　女子学院生。二・八独立宣言後に帰国し、三・一独立運動に参加。

(9) 黄愛徳　金愛施徳。東京女子医学専門学校生で、金マリアと共に大韓民国愛国婦人会を結成した。

(10) ある日　一九一九年二月十二日。

(11) 金東仁の父　金大潤。平壌の大地主であり、教会の長老であった。

(12) 朱耀翰の父　朱孔三。長監連合教会設立の経緯については**資料7**の92ページ～94ページを参照のこと。

(13) 同じ小学校　平壌の崇徳小学校。

(14) 東京学院　アメリカ北部バプテストが設立した男子校で、関東学院の源流の一つ。

(15) 朴泳孝と明治学院の関係については**資料7**の87ページと111ページの注（11）参照。なお金玉均が明治学院に在籍していたという資料は現在のところ見つかっていない。

(16) チョングァンス　李光洙（イグァンス）の誤りか？（金東仁は李光洙をライバル視していたので、わざと間違えたのかも知れない）

(17) 金観鎬（一八九一～一九五九）西洋画家。

一九〇九年にソウルの中学校を卒業し明治学院普通学部に入学。一九一六年に東京美術学校西洋画科を首席（最優等賞）で卒業。卒業制作の「日暮れどき」は第十回文展で特選を果たした。同年朝鮮の洋画家では初めての油絵個展を平壌で開く。のちに『創造』同人となる。一九二五年に朔星絵画研究所を設立し洋画を指導。

(18) 『創造』第七号（一九二〇年七月発行）に掲載された「自己の創造した世界」。

(19) 金億（一八九六～?）詩人。号は岸曙。思春期の情緒をやさしいリズムに乗せて歌い上げ近代詩発展の礎的役割をつとめる。

(20) 金瓚永（一八九三～一九六〇）西洋画家。明治学院普通学部在学中に**資料6**の『新韓自由鐘』の編集にも関わる。一九一七年に東京美術学校西洋画科を卒業。『廃墟』から『創造』の同人となる。

（資料12）

女人

金東仁（キム ドンイン）

一．メリー

一九一五年の秋だった。明治学院中学部二年生、十六歳の少年金東仁は、東京芝区白金台町のある家に引越しをした。[1] その頃の私は十六歳といってもとても小さい方で、その前の年、十五歳の時に東京に行く時に、何も言われずに〔子ども料金で〕汽車の半額券が買えたことからも、私がどれだけ小さかったかが推察できることだろう。

目黒行きの電車を白金台町で降りて、右側の聖心女学院へ行く坂道を半分ほど下り、右側にある楼閣が、私が新しく住むことになった下宿だった。

当時の白金台町一帯はまだ新開地で、私の新しい家の東側と北側は人家と接していたが、南側には道を渡って数千坪の空き地があり、西側もやはり三、四百坪の空き地の向こうに家があった。

その下宿に一緒に住むことになったRと一緒に夕食を食べた後、引っ越して来た家の地理を知るために散歩に出ようというRの誘いを断り、私は一人で二階に上がった。教科書を開いても復習することもなく、私は部屋から廊下を渡った西側にある「物干し場」に出た。

月のない暗い夜だった。しかし、その物干し場に出ると、その暗い夜を無視するような明るく光っている所が目に映った。それは、私のいる所から二十間ほど離れたところにある家の二階の窓だった。日本式の二階建ての家には障子が取り外され、その代わりにガラスの窓を取り付けた後にペンキを塗った、言わば洋式のメッキをした日本家屋だった。

私が「彼女」を初めて見たのはその時だった。ガラス窓の向こうには（おそらく）百燭光の電球が輝いており、センターテーブルの真ん中に、西洋人の家族五人、夫妻と二人の息子と一人の娘が何か喋りながら笑っていた。

少年時代の好奇心は旺盛だ。私は自分の部屋にもどって望遠鏡を持ってきて、息をこらして再び見た。私の望遠鏡は、（私には）側面に座っている金髪の少女にしか向かなかった。

十三、四歳だろうか。楕円形の顔が笑うたびに頬に笑窪ができ、下半身は見えないが、おてんばな脚の持ち主であることは、その子の身振りから十分にわかった。

詩人に言わせれば、そのような景色は春がふさわしいと言うかもしれない。しかし感傷的な少年には秋だとしても関係がない。暗い夜と明るいガラス窓、団欒する家族、金髪の少女。ミレーが見たら一枚の絵が描けたかも

しれない。ゲーテが見たら数行の詩を詠んだかもしれない。少年金東仁は一つの方向だけをただ見つめていた。長い髪、頬、まだ骨がつき上がっていない肩、腕白少女の微笑をふりまいている瞳だけが幻燈のようなその景色の唯一の存在だった。

二日後に、私は彼女の顔の全面を初めて見た。放課後家に帰ってきて、さあ早く夜になれと待ちながら、二階の自分の部屋から落ち着きなく道を見下ろしている時に、視界の隅に洋装をした少女の姿があらわれた。私はびっくりして、障子を閉めて飛び上がり、足を机にぶつけて再び飛び上がり、戸の隙間から見下ろした。両手をスカートの前ポケットに入れ、道ばたにある小石をあちこち蹴飛ばしながら、坂道を下りていく少女は、二日前の幻燈のような景色のその少女に間違いなかった。

春には花を、夏には緑陰を、秋には落葉を、冬には雪を—それ以外のものは何も愛することが出来なかった、言葉もなく陰気な少年の心にも、ついに天使の矢が突き刺さったのだ。

私はそれから、晩には就寝前に深呼吸を口実に物干し場に出て、彼女の家の雨戸が閉まるまで、その家の二階を眺めていて、朝目覚めると顔を洗う前にバーベルを持って物干し場に出て、心の中で彼女に朝の挨拶をした。

私達の下宿から道を越えた南側にある数千坪の空き地を、私達（Rと私とその他二、三人）は野球の練習場として使っていた。

ある日、「彼女」の家を背にしてキャッチボールをしていた私は、強烈なボールを捕り損ねてしまった。そのボールは道を越え、空き地も越えて「彼女」の家の垣根の下まで行ってしまった。私は頭を下に傾けてボールを捕ろうとした。

「アーサー（Arthur）」

それは垣根の向こうから母が子どもを捜す声だった。同時に和やかな返事も聞こえた。

私はボールを拾って空き地に思いっきり投げた後、自分の部屋に戻った。

アーサー、もちろん忘れる名前ではなかった。当時私たちはアーサー王の話を学んでいたので、決して忘れる心配のない名前だった。しかし、私にはその名前を一度忘れてしまうと、二度と思い出せそうになかったので、すぐメモ帳にArthurという名前を書いた。

アーサーという名前は私には楽しく、また夢のような美しい名前のように思えた。アーサー王の伝記のいくつかが私の机を飾った。アーサー王が馬に乗った絵が壁に飾られた。私の教科書やノートのページごとにアーサーという文字がたくさん書かれて行った。無意識に空を見上げていると、空の果てにArthurという字を発見できるほど、その名前は私の心を打った。アーサーという名

前は、まるでその当時の私にはなくてはならない精神的な支えであった。

ある日、やはり野球の練習をしていた私は、後ろの方から少女の英語の声を聴いた。それに気を奪われた瞬間、飛んできたボールをそのまま落としてしまった。振り返ると、「彼女」がそのボールを受け取り、どこに投げようか迷っていた。私は本能的に手を前に出したが、眼を遠くにそむけてしまった。彼女が声をかけてボールを投げたことは意識していたが、私は眼を遠くにそむけてしまっていたので、ボールがどの方向から来るのか確認することができなかった。ボールは私の顔にぶつかって、落ちた。グローブを外し、両手で顔を覆い隠したが、ポタポタと鼻血が手の平ににじんできた。

「あら、ごめんなさい」

走ってくる足音と共に美しい声が聞こえた。私はわけもなく彼女の手を振り払い、二階の自分の部屋へ駆け上った。涙！こんなにたくさんの涙を流したのは初めてだった。

どんな種類の涙か。私はそれを説明することができない。感激？喜び？悲しみ？恥じらい？　その中のどの種類にも属さない涙だったのと同時に、それらのいくつかが合わさった感情があふれたものだとも言える。少年には大人の脳では解析できない微妙な感情がある。少年時代を歩まずに育った大人はいないだろうが、少年という「感情の天国」はいったん大人になった後では再び戻ることのできない夢の時代であると同時に、忘却のベールに隠れた華麗な花園なのだ。

ああ、その時の私の夢はどんなに美しかったことか。少年時代に頭に描いていた未来は、青年時代のそれとは全然違う。それは円満な家庭だとしても、かわいい子息だとしても、実際問題は完全になく、老年だとか中年だとか言う時期は、完全に無視されてしまう。当時の私は他の科目は放っておき、英語をどんなに一生懸命学んだことだろう。美しい金髪の乙女とともに（私が東京に来る時に乗ってきた高麗丸よりも何十倍も大きい）船に乗って大西洋を渡る夢はどんなに私の心を惹いたことだろう。バシャバシャという波の音と無縁な海、月夜、〔船の〕汽缶の音！　ああ、こんな美しい音楽がどこにあるだろうか。アメリカ？　そんな歴史のない国は呪われてしまえ。ローマの郊外か由緒ある英国の田舎道を彼女と手をつないで歩き回るその美しい夢！　ヘルメットに白い手巾を巻いて、旅行服をすらりと整え、片手には写真機、もう一つの手で彼女の手を握り、エジプトの古跡を訪ね歩く幻想を空に描き、一人で顔を赤らめたことが何度あっただろうか。

ある日（はっきりとは覚えていないが日曜日だったか祭日だったか、とにかく学校が休みの日）私は二階の敷居に腰掛けて、やはり先ほどのような夢を描いていた時

に、ふと（このごろ寝ても覚めてもいつも聞こえてくる）歓声が、今度は人の肉声で聞こえた―。

「アーサー（Arthur）」

私は驚いて頭を声のする方へ向けた。

？

道を通っていたのは、「彼女」の兄と「彼女」の母の二人だけだった。「アーサー」というのは息子を呼ぶ母の声だった。

そうだ。アーサーというのは勿論男の名前だったのだ。私が今まで「彼女」の名前であると勘違いして一人で喜びながら、この世で二つとない美しい名前だと思っていた「アーサー」は、他でもない、「彼女」の兄の名前だったのだ。

子どもには子どもの感情と空想が別にあるように、また大人が推測できない子どもの自尊心がある。神聖さを蹂躙された怒りは激しく私の心に燃え上がった。

翌日学校に登校するときには、すでに私の教科書は昨晩新しく買った本だけになっていた。古い本はすべて燃やしてしまった。それほど自尊心を踏みにじられた「アーサー」という名前がページごとに書いてある教科書を持って通うことはどうしてもできなかったからだ。

その後、少年の自尊心が許す範囲の中で色々と調べた結果、彼女の父は日本人祖父と西洋人祖母の間で生まれた混血で、彼女の母はイギリス人であることと、彼女の兄弟は、一人はアーサー（Arthur）でもう一人はトミー（Tommy）であり、その発音は日本語では「浅」「富」に近いので、兄の日本名は浅太郎、弟は富次郎であること、「彼女」の名前はメリー（Mary）であることがわかった。

その後、私は新しい教科書のページごとにMaryという字が、以前のArthurよりもさらに多く書き込まれたことは、言うまでもない。Mkairmyという、ある字引を探してみても発見することができないスペルは、本の前後の扉に火刑文字で装飾した。M字とK字を読んで作った色々な図案が腹案された。いや、それだけではなかった。M，A，R，Yの四字は、その四字をあわせて作られた単語だけではなく、その単字個々でも私には感慨深い文字のように思えた。字引をめくりながらM字の部から、またはA字、またはR字、またはY字の部から不愉快な単語を見つければ、私はそのような神聖な字の部にそのような不愉快な単語を押し込んだ英語を呪うようにその四字一つ一つを神聖視した。

冬になると、私たちは野球の練習をしなくなった。その代わり、私は深呼吸とバーベル運動をする回数が増えた。

そうしてクリスマスが近づいたある朝、バーベル運動に出た私は（いつもだったらもう開いているはずの）彼女の家の二階の雨戸が、まだ開けられていないのが見え

た。深呼吸、次にバーベル、次に深呼吸、何度も繰り返したが堅く閉ざされたその雨戸は開かなかった。

朝ごはんを食べ、再び上がって見たが、雨戸は閉まったままだった。学校の試験も心もとなく終わらせ、すぐ家へ帰って見たが、雨戸は閉まったままだった。

雨戸は次の日も開いていなかった。

晩ご飯の時に、それとなく（だと思うが、顔色も変わらず声も震えていなかったかどうかはわからない）大家の老婆に、その家の雨戸が開いていないが何かあったのだろうかと聞くと、老婆はこう答えた。

「たぶん、避寒にでも行ったんじゃないかい」

簡単な結論だった。しかしまた、もっともらしい結論だった。私はとにかく、そのような簡単な結論を導けなかったのだ。

冬休みと新年で小遣いが増えたりして、留学生達は皆、うれしく跳ね上がる時だ。しかし愛する彼女の行方を見失った孤独な少年は、ますます陰鬱な表情になり、彼らとは離れて一人で遊んだ。

第三学期！　私はどれだけそれを待ち望んでいたことか。それは決して勉強への興味が強かったのではなく、メリーの兄弟たちが学生だったら新学期には帰ってくるだろうという希望からであった。

しかし、新学期になっても、彼らは帰ってこなかった。ちょっと遅れているのかなと自分を慰めてみたが、二月中旬になっても帰ってきていないので、ついにあきらめようとした。

しかし決心はしても、あきらめることが出来ず、その後三年生の教科書にもあらゆる場所にメリーの名前を書き込んでいった。漢文の教科書に書かれている「断（あきら）めやうか」の一語は、愛する彼女の行方を見失った少年のつらい心をあらわすのに十分だった。一時間の遅刻でも恥ずかしいと思う真面目な学生となり、「無遅刻無欠席」記録が身分不相応に増えたこともこれを物語っている。

「愛は怪物だ」という言葉がある。誰の言葉なのかは知らないが、その怪物に蹂躙された少年の心は、確かにつらかった。大人の愛には報酬を要求するという交換条件があるが、この少年にはそのような心はなかった。自分が愛したいから愛するのであって、相手の心は念頭においていなかった。仮にメリーが他の人を愛していたとしても、私の幼い心にもさすがに嫉妬の不吉な炎が燃え上がっただろうが、その時の素直で幼い心には「片想い」に対してはちっとも不満もなかった。時々眺めて、そんなに遠くない所に住んでさえいれば、それ以外の望みはなかった。互いに話をしたり交際したりすることは考えたこともなかった。むしろ、そんな機会があったとしても、恥ずかしくて身を隠してしまい、ただメリーを眺めるだけで満足だったろう。

私はその後、再び彼女を見ることはなかった。彼女の

消息すら聞くことはなかった。

その年の秋、その頃にはもう三年生になり、首を傾げて背負っていた学生かばんを左肩にかけて、学校から帰ってきた私は、向こう側から来る（洋装した少女の乗った）人力車を見た。

私は一瞬気を失いそうになり、何も見えなくなってしまった。しかしその人力車が私の近くに来る前に視覚を回復した私は、その少女がメリーではないことがわかり、（思わず）ため息をついた。これが私と彼女（？）の表面的な終わりだった。

夢のような愛だった。

メリー（彼女がまだ生きているとしたら、もう二十七、八歳の女人になっていることだ）。彼女はもちろん自分の少女時代に、ある朝鮮の少年が自分をそんなにまでも愛していたということは夢にも思わなかったことだろう。しかし私のその時の夢が、どんなにか美しくいじらしかったことか。そしてその夢を失った後の傷がどんなに痛かったことか。

少年の夢は無残にも砕かれてしまった。そして、その受けた傷は大きかった。あれから十数年、多くの女人と出会い、恋愛の機会も多くあったが、（ただ一度の例外を除いて）遊戯気分が混じった眼で彼女達を眺めてしまうのは、全てがその時のその影響の持続だった。言葉もなく陰鬱だった少年が、死ぬ気で自分の性格を快活でのん気な青年に変格したのも、その時のその傷の痛みを再現する機会をなくすためだったのだ。

このように、私の人生に非常に大きな影響を与えた、輝く金髪と透き通った皮膚の所有者メリーは、私の生涯には永久に忘れることが出来ない夢のようなシンボルなのだ。

二．中島芳江

私は彼女が美人なのかどうかわからない。私が彼女に爪の半月程度でも愛を持っていたのか、それすら疑問だ。

私は彼女の顔も忘れた。姿かたちも忘れた。声も忘れた。ただ私の記憶にまだ残っているのは、朱色の生地に赤と緑の唐草模様の柄をした彼女の羽織（日本の服の上に着る短い上着）と青白い顔色と、丸くて平べったい輪郭と―そして最後に一九一六年七月一六日に白金台町の電車停車場で見た彼女の二つの瞳だった。

×

少年の水のように澄んだ心にメリーというブロンドの美しい点（コンマ）が刻まれ始めた時から、私の同居者Rは、私たちの下宿のそばに住んでいる、ある日本人の少女に好奇心を持ち始めた。私は十六歳で、Rは私より一、二歳年上だった。

その少女―小林君子はまだ尋常小学校に通う十三、四

で、庶民の中によくいる可憐な美しさを兼ね備えている少女だった。唇は見えない位薄く、笑うと目が半円形の線になり、笑い声はしゃがれたソプラノで、汚い小川の岸辺に密かに咲いて散る小さな花のような印象を与える少女だった。

「金さん、あの娘はかわいいよねぇ」

君子が友人たちと一緒に私たちの下宿の前で鞠などで遊んでいるのを戸の隙間から見て、Rは身体を煩ったように震えながら、時々このように哀訴した。しかしメリーという美しい対象を持っていた私には、そのような言葉は何の意味もない言葉だった。「うん、かわいいね」そんな返事をするだけで、その後には目の前にメリーの姿を思い描いて一人にっこり笑っていた。

愛する少年は小心だった。その少女たちが私たちの家の前で遊んでいる時は、Rは眺めることはあったが、門の外には出ることが出来なかった。やむなく出かける用ができた時は、彼は玄関の内側でしばらくぶつぶつと無駄口をたたきながら門を開けると駆け足で出て行った。

しかし、その少女にもその友だちにも少しも関心がなかった私には、ただ単に道端や草むらへ通り過ぎることが出来なかった。しかもメリーというかけがえのない貴い宝を心の中に持っていた私には、他の少女たちはみな「人」であり、「異性」として意識したことはなかった。

「君ちゃん、おはよう」

「君ちゃん、こんにちは」

ためらわず快活な挨拶が君子と会うたびに私の口から出た。このようなことすべてがRにとっては不快なようだった。私が君子やその友達と一緒にカルタをしたり、または絵本を読んだりして遊んでいる時にも、小心なRは遠くに離れて読んでもいない本をめくっていた。

しかし、「愛」というものは人をして理性を暗くさせると同時に、またその「道」には意外にも知恵を生ませるものだ。

君子には満子という八、九歳の妹がいた。Rはある日色鉛筆一セットを買って満子にあげた。三、四日後にはノート数冊を買ってあげた。その日の晩、君子はあらためてその色鉛筆とノートの感謝の言葉をRにかけた。こうしてRと君子の間で初めての会話がなされた。

その晩、Rは興奮して眠れないようだった。ごろごろと横たわって、うわごとをつぶやき、君子がさっきかくかくしかじかで、とてもかわいいと言って胸を何度もたたいていた。

今思えば、それは美しい世界の絵画であった。まだ愛とは何かを知らない少女と、愛どころか性に対してもいくらか目が開いた少年Rとの交際は、この世の奇妙な美しい悲劇だった。しかもその社会を完全に超越したように中立している少年金東仁がいた。メリーに対する断腸の思いの愛を胸の中に深く潜め、目をつぶればメリーを

想い、目を開けばRと君子の愛（？）を冷ややかな目で見ている私も、その美しい悲劇を舞台裏で装飾する一人の役者だったのだ。

実際、その時のRの煩悶は大きかった。まだ愛というものに目覚めていない君子のRに対する態度は、Rをますます煩悶させた。Rが何かプレゼントを買ってやると、君子はか細い目を見開いてありがとうと挨拶をするが—あるいは気をきかせてRとも楽しく遊ぶのだが、わざわざRをたずねに来ることは一度もなく、しかも自分が友達と楽しく遊んでいるときにRがそのそばを通っても無視してしまうどころか、冷遇しているような態度に見えた。このようなすべてのことが、Rには煩悶の材料だった。時々女の子たちが道で遊んでいるのをRは門の隙間から眺めながら、転ぶように胸をしきりに打っていた。「金さん、日本人の妻をもらったら周囲から悪口を言われないかなあ」といった心配までした。このような態度を見て幼い言葉を聞くたびに、私は心の中でメリーのことを思い、また私のメリーに対する愛がRの君子に対する愛より薄いのだろうかと、うらやみながら一人くやしがったことも一、二度ではなかった。

その君子と一緒に遊ぶ友達の中に、中島芳江がいた。朱色の生地に唐草模様の柄をした羽織の袖からいつも手を突き出し、青白く丸くて平べったい表情の持ち主であり、学校が終わるといつも君子と一緒に私の家の前の道で遊んでいた。

ある日、Rは突然、

「金さん、芳ちゃんを金さんの恋人にしなよ」

という提案をした。私は「うん、そうしようか」と言いながらも、心の中でメリーのことを想い密かにため息をついた。そうしてRは芳江を私の恋人と決めてしまった。

そうしているうちに、冬が来てメリーの行方がわからなくなってしまった。眠れない夜ごとに、人知れず布団の中で幼い東仁がついていたため息がどれだけ大きかったことか。中島芳江？　そんな女を百万人集めたとしてもメリーの髪の毛一本にも及ばないと思うのだった。夜ごと昼ごと、メリーのいた家を眺め、開かれることのない雨戸が開けられるのを待ちながら彼女のことを想い続けていた私はついに病床に倒れてしまった。

「金さん、恋人が家の前で遊んでいるけど、僕が連れてきてやろうか？」　Rは私を慰労しようと時々幼いことを言った。お茶を持って芳江を私の部屋に送ってくれたこともあった。しかし、幼い心に燃え上がった炎を少しでも消すことはできなかった。芳江の黄色い髪（彼女は髪がかなり黄色かった）を眺めながら、君がメリーだったらどんなに嬉しいことだろうと一人ため息をついていた。

一ヶ月ほど経って、私の病気も治った。

晩春のある日、私はメリーの住んでいた家の近所を一人で散歩していた。そうすると、かたく閉ざされた雨戸に怨望の目を投じた後、聖心女学院の方角へ行ったときに、ある大きな邸宅の玄関で、その家から出てきた芳江と出くわした。

君の家はここなのかと尋ねると、彼女は顔を真っ赤にして息をあえぎながら、そうだと言い、家に入って遊ぼうと私を誘った。表札を見ると、大きな大理石で「中島×××」という表札がかかっていた。私はありがとうとだけ言って、そのまま散歩を続けた。彼女のさびしい目が私の背中を追ってくるのをはっきりと意識しながら……。

その後のある日、Rと一緒に夜市見物に行って帰ってくる道中のことだった。帰り道に芳町という小さな路地があったのだが、その路地を行けば近道になるので、私はその芳町を通って行こうと提案した。するとRは真顔になって、

「金さんは芳江の恋人だから芳町を通って行きな。君子は大路行[2]だから、僕は大きな道を通って行くよ」

と言って、別の道を使って帰って来た。その後から、私は君子を大路行と呼んだ。

「大路行さん」

「いやよ！」

「大路行！大路行！」

「あたし、朝鮮の川じゃないわ」

なるほど、君子は大路行を大同江と聞き間違えて、自分を大同江と呼ばれたのだと思ったようだ。私が君子を大路行と呼ぶ度に、Rも一緒にそう呼びながら、不快そうに顔をしかめていた。

春が過ぎ、夏休みが近づいた期末試験の頃だった。

その日、Rは頭が痛いと言って学校に行かずに病床に臥していた。私は学校を終えてすぐ帰宅したのだが、大家の老婆が荒い息遣いで私を迎え入れた。

「大変なことになった。やぎさん（大家はRをこう呼んでいた）が首を締めた」

何だって？　家に走って入って見ると、Rは充血した目を狂人のようにぐるぐるぱちぱちさせながら、寝込んでいた。

幼な心に過度な愛は、彼の精神に異常を生じさせたのだった。Rはその日、早稲田にいる兄のところへ行った。

期末試験も終わり、待ちに待った帰国する日が来た。一九一六年七月十六日。

荷物をみなまとめ、荷車で停車場まで送り、私は大家と別れの挨拶をして、電車の停車場へ向かった。少し行くと、私を呼ぶ声がしたので、振り向くと、夏服を着た芳江が息を切らすように追って来た。

「今日帰国します」

「今さっき聞きました」

こう話しただけで、言葉もなく停車場まで来た。彼女は言葉もなく私の後ろについて、じっと立っていた。電車が来た。「帰国」に喜ぶ少年は、「さようなら」とひと言口にして、元気よく電車に飛び乗った。

「秋にね」

わずかにひと言、小さな声が彼女の唇から流れた。チンチン、という音とともに電車は出て行った。彼女は目を大きく開いて、動き出す電車を見つめていた。少し涙ぐんでいるような彼女の目は、まるで真珠のように優雅だった。距離が遠くなるにつれて、次第に彼女の影は小さくなってゆくが、彼女の二つの瞳だけは、まるで暗夜の海の灯台のようにはっきりと彼女の体を抜け出して、電車の後を追いかけてきた。

あれから十数年、多くの瞳を見、多くの別れを見てきたが、今でもなお、あのような澄んだ美しい、憂いで満ちた瞳を見たことはない。

私は彼女を愛したことはない。彼女が私のそばにいることを愉快だと思ったことすらなかった。しかし、あの日の彼女の二つの瞳だけは、私の人生の中で、最も美しい記憶の一つなのだ。

訳注

(1) 一九一五年、金東仁は東京学院から明治学院に編入した。そのため、明治学院の近くに引越しをしたのであろう。金東仁の下宿先については、波田野節子「金東仁の文学に見る日本との関連様相―『女人』について」(『近代朝鮮文学における日本との関連様相』一九九八年一月)を参照のこと。

(2) 君子大路行　君子(くんし)は隠れて陰謀を図ったり恥ずかしいことをせず、正しく堂々と行動するという意。

解説　金東仁（キム ドンイン）について

佐藤　飛文

金東仁（一九〇〇～一九五一）は小説家。号は琴童。一九〇〇年、平壌の大地主で、長老派教会の長老である金大潤の次男として生まれる。

一九一二年に崇徳小学校を卒業。朱耀翰とは同窓生であった。

一九一四年に渡日し、東京学院に通うが、東京学院の閉鎖のため一九一五年明治学院中学部二年に編入。朱耀翰の影響で文学に興味を持つようになり、三年生の回覧雑誌に初めて小説を日本語で書く。中学部を中退して美術を学ぼうとするが、挫折。一九一九年に朱耀翰らと共に朝鮮最初の文芸同人誌である『創造』を東京で発刊。帰国後、三・一運動の檄文を書き出版法違反で逮捕、投獄された。

一九一九年に『創造』第一号～二号に発表した初短編小説「弱き者の悲しみ」は、朝鮮最初の自然主義作品として知られている。主な代表作は「いも（馬鈴薯）」「足の指が似ている」「明文」「赤い山」「狂炎ソナタ」などがある。金東仁の短編小説のいくつかは日本語にも翻訳・出版されており、長璋吉訳『金東仁短編集』（高麗書林、一九七五年）や『そばの花の咲く頃―日帝時代民族文学対訳選』（新幹社、一九九五年）などに収録されている。

明治学院の先輩であり、『創造』の同人にもなった李光洙は、金東仁のことを次のように紹介している。

「金東仁は、此等作家の中で、最も優れた手腕を持った作家だ。彼は多くは、短篇を書いたのであるが、『馬鈴薯』、『足の指が似ている』等は、最も優れて居ると云はれて居り、『馬鈴薯』は、数年前、新潮に訳載されたことがある。此の作者は、観察が奇警で、ウィットとユーモアに富んで居り、因襲とか、道徳とか、世評とか、そんなものに、一切お構ひなしで、自由自在に、自分の思ふ儘のことを書くので、読者の脳を、スーッとさせる點がある。」

（李光洙「朝鮮の文学」『改造』一九三二年六月号より）

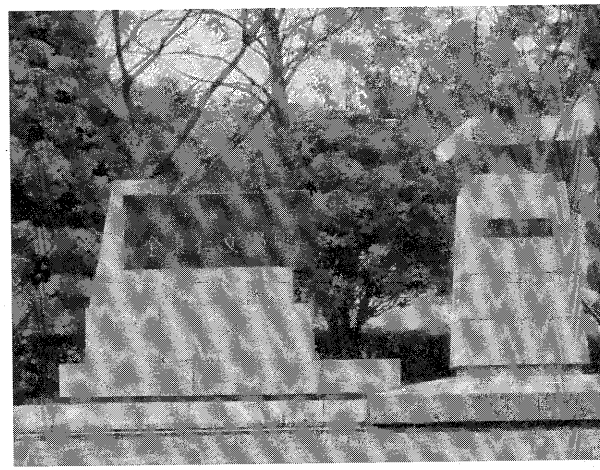
没後、彼の文学的業績を称えて一九五五年に「東仁文学賞」が制定された。韓国文学界において最も優れた作家に授与される、権威ある文学賞である。

資料11は、雑誌『新天地』一九四八年三月号から一九四九年八月号にかけて連載された金東仁の自伝「文壇三十年の足跡」の抜粋である。明治学院での文学との出会いや、『創造』創刊のいきさつ、新文学を生み出す苦労などについて書かれている。『創造』の同人には金東仁、朱耀翰、李光洙、金観鎬、金瓚永と明治学院出身

者が五人もいる点に注目したい。

資料12は、金東仁の自伝的小説「女人」の第一章と第二章の翻訳である。「女人」は一九二九年から一九三一年にかけて雑誌『別乾坤』と『彗星』に連載された作品であり、第一章と第二章は『別乾坤』一九二九年十二月号に掲載された。白金台町に住む明治学院中学部二年生の少年・金東仁のメリーへの初恋と、友人Rの君子への恋、そして君子の友人・中島芳江の金東仁への恋が描かれている。

下の写真は、ソウルの子ども大公園にある金東仁文学碑である。東仁文学賞の主催である朝鮮日報社が一九八八年に建立したものである。碑文には「明治学院と川端美術学校で文学と美術を学び、一九歳の若さで処女作を発表、三・一運動にも加わり、春園・李光洙と双璧をなし……」という文言が刻まれている。

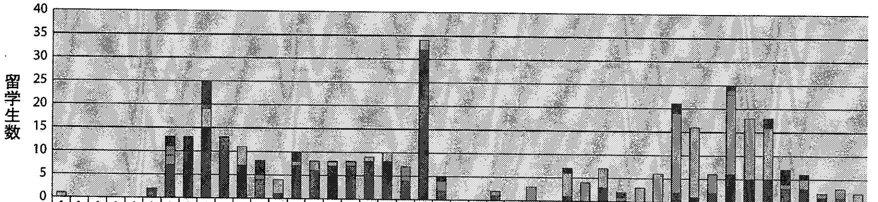


ソウル・子ども大公園にある金東仁文学碑

からの留学生が多いという実感はあった。同志社の留学事情も念頭にあったため、前掲の阪口氏に倣って、年度および国別入学者数の推移を【グラフ】にしたところ、明治学院特有と思われる留学事情が浮き彫りになった。ここでは細かく触れないが、当時の日本の留学事情は、朝鮮半島および台湾出身の留学生は、関東大震災直後に一時的に激減するも、1940年頃まで全国的に年々増加する傾向があった。しかし明治学院においては、留学生数のピークが二期に分けられること、留学生の出身地が、前半は朝鮮半島出身者が大半を占めているのに対し、後半は台湾出身の留学生が主流であることが判明した。これらの要因を研究することは、明治学院の留学事情にとどまらず教育事情研究の発展につながるだろう。

また、この調査で新たに判明した事実があった。1935年前後の台湾留学生の大半は、台湾のキリスト教学校である長老教中学（現・長栄高級中学）からの留学生であるという点である。戦後、両校の関係は全くなく、互いにこの事実を知らずに過ごしてきていた。だが、これほどの人数を短期間に受け入れるには、何か親密な繋がりがあったと考えるのが妥当であろう。戦前、両校にどのような繋がりが存在し、どのような関係があったのか、そして戦後その関係が失われてしまったのはなぜなのか。これらの課題を、『明治学院百五十年史』で大きな研究成果につなげていきたいと考えている。

【グラフ】東アジア圏留学生数の推移（普通学部・中学部）



西暦	1900	1901	1902	1903	1904	1905	1906	1907	1908	1909	1910	1911	1912	1913	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920	1921	1922
■不明							2	3	5			3		2								1	
■中国							2		1											2			
■台湾	1						2		4		4	1	3	1	2	1	1	1	2	1	2	2	
■朝鮮						2	7	10	15	13	7	4	1	7	6	7	7	8	8	4	32	2	

西暦	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1944
■不明						1			1			2			1		2	3	1			
■中国									1						1							
■台湾		1		3		5	4	4		3	6	17	15	4	17	13	11	1	2	1	2	2
■朝鮮		1				1		3				2	1	2	6	5	5	3	3	1	1	

東アジア圏留学生名簿　解説

岡村　淑美

この東アジア圏留学生名簿は、『明治学院百五十年史』編纂の資料収集の一環として作成した資料である。

2008年に編纂作業を開始した際、高等学校の小林敏校長（当時）より、明治学院の卒業生に著名な韓国人留学生が多数いるため、彼らについて調べるようにとご教示いただき、まずは留学生に関する基礎データを収集することからはじめた。明治学院には、歴史資料館に神学部と明治大正初期の普通学部・中学部の学籍簿、高等学校に大正以降の中学部の学籍簿と明治期の成績一覧表および入試結果が現存している。その学籍簿から名簿を作成したが、収集した項目は、名前、本籍（出身地）、居住所、入学年、卒退年、前学校名、進学先、父母名、保証人名である。学籍簿で未記入等で不明な箇所は、学籍簿の整理番号や成績一覧表を元に推測した部分もある。現代において、個人情報であるこのような名簿を公表することは問題もあるが、明治学院の留学事情の事実の提示と、さらなる歴史研究の発展に寄与するという学術的意義を持つものと確信し、最低限の項目を公表することにした。なお、戦前の高等学部に関しては、中学部や神学部と同一の内容で資料収集が出来なかったため、今回は見送った。

名簿作成にあたり、同窓会名簿ではなく学籍簿を用いたのには、以下のような理由がある。一つ目は、同窓会名簿には出身地がなく名前から国籍または出身地の判断が難しい点、二つ目は、当時は中途入学・退学がともに頻繁で、金觀鎬のように明治学院で学んだと言われながら同窓会名簿では在籍の事実を提示出来ない点、三つ目は、戦前の留学生の先行研究として『戦前同志社の台湾留学生』（阪口直樹著／白帝社／2002）があり、これに準ずる形で調査資料を作成し、比較検討しやすくする点である。なお、この名簿での「留学生」の定義であるが、国籍（出身地）や名前だけでは、本来意味する留学生と在日外国人の区別は難しい。日本統治下では「日本人」とされていた時代的な背景もある。そのため、姓名と出身地が日本以外と判断した方々をすべて「留学生」とした。

この名簿作成により、興味深い課題がさらに生まれた。調査中から、東アジア圏

	氏名	出身地	入学年		卒退年		別名・別表記	索引
			西暦	和号	西暦	和号		
4	郭馬西	台湾	1918/4/1	大正7年	1921/3/31	大正10年		
5	徐相賢	朝鮮	1918/4/1	大正7年	1921/3/31	大正10年		
6	張明道	台湾	1918/4/1	大正7年	1921/3/31	大正10年		
7	李歪頭	台湾	1919/4/8	大正8年	1921/3/31	大正10年		
8	李鍵	朝鮮	1922/4/8	大正11年	1922/5/31	大正11年		
9	呉光濂	朝鮮			1923/？/？	大正12年		
10	姜擇模	朝鮮	1922/4/8	大正11年		大正14年		
11	金相敦	朝鮮	1922/4/8	大正11年		大正14年		114, 116
12	朴仲漢	朝鮮	1922/4/8	大正11年				
13	李炳善	朝鮮	1922/4/8	大正11年				
14	鄭相勲	朝鮮	1922/4/9	大正11年				
15	高徳	台湾	1922/9/8	大正11年			高徳章	
16	劉振芳	台湾	1924/4/1	大正13年		昭和2年		
17	呉天命	台湾	1925/4/1	大正14年		昭和3年		
18	周天来	台湾	1925/4/13	大正14年				
19	許元勲	朝鮮	1925/9/10	大正14年				
20	尹仁駒					昭和4年		
21	高徳章					昭和3年	高徳	
22	郭相勲	台湾				昭和4年		

［註］

？　学籍簿以外の資料による推測

＊　『近代東アジア美術留学生の研究』（吉田千鶴子／ゆまに書房／2009）による

［その他］

過去の資料は誤字・誤植が激しく、同一人物だと思われるが表記が違うものは、日本名とともに「別名・別表記」欄に記した。

	氏名	出身地	入学年		卒退年		別名・別表記	索引
			西暦	和号	西暦	和号		
355	蔡朝炘	台湾	1939/4/4	昭和14年	1944/3/4	昭和19年		
356	金星熙	朝鮮	1939/9/1	昭和14年	1942/3/14	昭和17年	金安星熙	
357	金栄國	朝鮮	1939/9/1	昭和14年	1942/3/14	昭和17年	桃源栄國	
358	頼威楊	台湾	1939/9/1	昭和14年	1942/3/14	昭和17年		
359	政喜照		1939/9/2	昭和14年	1942/3/14	昭和17年		
360	文成熙		1939/9/2	昭和14年	1942/8/31	昭和17年		
361	楊廷椅	台湾	1939/4/4	昭和14年	1944/3/4	昭和19年		
362	陳英誠	台湾	1939/4/1	昭和14年	1944/3/4	昭和19年	橋本英世	
363	蔡玉柱	台湾	1939/4/1	昭和14年	1944/3/4	昭和19年		
364	林魔弓	台湾？						
365	鄭載玩				1944/3/4	昭和19年		
366	姜炫達		1940/4/1？	昭和15年？	1941/3/31	昭和16年		
367	蔡維彰		1940/4/1？	昭和15年？	1941/8/31	昭和16年		
368	大徳尊	台湾	1940/4/1？	昭和15年？	1943/3/31	昭和18年		
369	徐東奎	朝鮮	1940/4/1	昭和15年	1940/8/21	昭和15年		
370	旅抗兒		1940/4/1？	昭和15年？	1943/3/31	昭和18年		
371	黄懐義	朝鮮？	1940/4/1	昭和15年	1943/3/31	昭和18年	廣田孝義	
372	李東旭	朝鮮	1940/4/4	昭和15年	1943/3/31	昭和18年		
373	金玉來	朝鮮？	1941/4/1？	昭和16年	1941/10/14	昭和16年		
374	鄭彰雄	台湾	1941/4/1	昭和16年	1945/3/31	昭和20年		
375	頼木材		1942/8/30	昭和16年				
376	平本賛淑	朝鮮	1941/4/1	昭和16年	1945/3/31	昭和20年		
377	権田奎三	朝鮮	1941/4/1	昭和16年	1945/3/31	昭和20年		
378	楊人鋸	台湾	1941/4/5	昭和16年	1945/3/31	昭和20年	柳田日出雄	
379	高正一	朝鮮	1942/4/1	昭和17年	1944/3/4	昭和19年	高松正毅	
380	大垣昭信	台湾	1942/4/1	昭和17年	1945/3/31	昭和20年		
381	菁川載訖	朝鮮	1943/4/1	昭和18年				
382	林文薄	台湾？	1944/1/1	昭和19年	1945/3/31	昭和20年	林文華	
383	楊水松	台湾？	1944/1/1？	昭和19年？	1945/3/31	昭和20年		

◆神学部（1890 ～ 1930）

	氏名	出身地	入学年		卒退年		別名・別表記	索引
			西暦	和号	西暦	和号		
1	韓石淸	朝鮮	1913/1/28	大正2年	1913/3/31			
2	李應泳	朝鮮	1918/10/8	大正7年	1918/11/30	大正7年		
3	朴春根	朝鮮	1918/9/23	大正7年	1919/12/31	大正8年		

	氏名	出身地	入学年		卒退年		別名・別表記	索引
			西暦	和号	西暦	和号		
319	林桁圖	台湾	1937/9/1	昭和12年	1942/3/14	昭和17年		
320	黄賢秀	朝鮮	1937/9/1	昭和12年	1942/3/14	昭和17年	黄原賢秀	
321	鄭致甲	朝鮮	1937/9/1	昭和12年	1942/3/14	昭和17年	大星致甲	
322	張春雄	台湾	1937/9/1	昭和12年	1942/3/14	昭和17年		
323	劉清道	台湾	1937/9/1	昭和12年	1943/3/31	昭和18年		
324	劉福栄	台湾	1937/9/6	昭和12年	1939/3/21	昭和14年		
325	劉君雄	台湾	1937/9/6	昭和12年	1940/3/31	昭和15年		
326	衣斐義昌	台湾	1937/9/6	昭和12年				
327	貴山識	中国	1937/9/6	昭和12年				
328	楊人澄	台湾	1938/4/1	昭和13年	1938/10/10	昭和13年		
329	郭來春	台湾	1938/4/1	昭和13年	1941/3/7	昭和16年		
330	李春雄	台湾	1938/4/1	昭和13年	1941/3/7	昭和16年		
331	盧道成	台湾	1938/4/1	昭和13年	1941/3/7	昭和16年		
332	李泰榮	朝鮮	1938/4/1？	昭和13年？	1941/3/7	昭和16年		
333	呉瑺財	台湾	1938/4/1	昭和13年	1941/3/7	昭和16年		
334	洪性傑	朝鮮	1938/4/1	昭和13年	1941/3/7	昭和16年	聖山性傑	
335	鄭泰山	台湾	1938/4/1	昭和13年	1941/3/7	昭和16年		
336	郭龍俊	台湾？	1938/4/1？	昭和13年？	1941/6/19	昭和16年		
337	郭柏樻	台湾	1938/4/4	昭和13年	1943/3/31	昭和18年	広沢重道	
338	李三悦	朝鮮	1938/6/1	昭和13年	1939/2/28	昭和14年		
339	呉萬植	朝鮮	1938/6/1	昭和13年	1943/3/31	昭和18年		
340	郭文博	台湾	1938/9/1	昭和13年	1941/3/7	昭和16年		
341	李松田	台湾	1938/9/1	昭和13年	1941/3/7	昭和16年		
342	劉主輝	台湾	1938/9/1	昭和13年	1941/3/7	昭和16年		
343	郭紹六	台湾	1938/9/1	昭和13年	1941/3/7	昭和16年	郭紹六郎	
344	高燿明	台湾	1938/9/1	昭和13年	1942/3/14	昭和17年		
345	金泳天	朝鮮	1938/9/1	昭和13年	1943/3/31	昭和18年	金山繁雄	
346	林大専	台湾	1939/1/1	昭和14年	1942/3/14	昭和17年		
347	崔慶善	朝鮮	1939/4/1	昭和14年	1941/3/7	昭和16年		
348	李寿祚	朝鮮	1939/4/1	昭和14年	1941/3/7	昭和16年	李屋壽長	
349	陳錫析	台湾	1939/4/1	昭和14年	1942/3/14	昭和17年		
350	陳天燦	台湾	1939/4/1	昭和14年	1942/3/14	昭和17年		
351	許德順	台湾	1939/4/1	昭和14年	1942/3/14	昭和17年		
352	謝煥如	台湾	1939/4/1	昭和14年	1944/3/4	昭和19年		
353	韓容煥	朝鮮	1939/4/4	昭和14年	1944/3/4	昭和19年		
354	呉德光	台湾	1939/4/4	昭和14年	1944/3/4	昭和19年		

	氏名	出身地	入学年		卒退年		別名・別表記	索引
			西暦	和号	西暦	和号		
282	崔仁鎔	朝鮮	1935/4/1	昭和10年	1936/7/6	昭和11年		
283	黄国鎮	台湾	1935/4/1	昭和10年	1937/3/30	昭和12年		
284	周長瑞	台湾	1935/4/1	昭和10年	1937/3/30	昭和12年		
285	黄永足	台湾	1935/4/1	昭和10年	1937/3/30	昭和12年		
286	黄琨生	台湾	1935/4/1	昭和10年	1937/3/30	昭和12年	黄混生	
287	郭成琛	台湾	1935/4/1	昭和10年	1937/3/30	昭和12年		
288	李慶義	台湾	1935/4/1	昭和10年	1937/3/30	昭和12年		
289	陳世冬	台湾？	1935/9/1	昭和10年	1935/9/25	昭和10年		
290	曽申甫	台湾	1935/9/1	昭和10年	1936/4/16	昭和11年		
291	何錫善	台湾	1935/9/1	昭和10年	1937/3/30	昭和12年		
292	呉春竹	台湾	1935/9/1	昭和10年	1937/3/30	昭和12年		
293	劉志光	台湾	1935/9/1	昭和10年	1937/3/30	昭和12年	森本恒吉	
294	張忠全	台湾	1935/9/1	昭和10年	1938/3/31	昭和13年		
295	深山謙	台湾	1935/9/1	昭和10年				
296	潘省身	台湾	1936/3/31	昭和11年	1939/3/31	昭和14年		
297	呉在璟	朝鮮	1936/4/1	昭和11年	1936/4/18	昭和11年		
298	劉朝本	台湾	1936/4/1	昭和11年	1937/3/30	昭和12年		
299	黄金盛	台湾	1936/4/4	昭和11年	1938/3/31	昭和13年		
300	郭鴻文	台湾	1936/4/4	昭和11年	1938/3/31	昭和13年		
301	朴天圭	朝鮮	1936/9/18	昭和11年	1943/3/31	昭和18年	村木義男	
302	王文吉	台湾	1937/4/1	昭和12年	1938/3/30	昭和3年		
303	朴南圭	朝鮮？	1937/4/1？	昭和12年？	1938/3/31	昭和13年		
304	張道昭	台湾	1937/4/1	昭和12年	1938/4/25	昭和13年		
305	韓一溶	朝鮮	1937/4/1	昭和12年	1939/3/31	昭和14年		
306	李銀煇	台湾	1937/4/1？	昭和12年？	1940/3/31	昭和15年		
307	劉瑞謄	台湾	1937/4/1	昭和12年	1940/3/31	昭和15年		
308	黄微輝	朝鮮？	1937/4/1？	昭和12年？	1940/3/31	昭和15年	和田恵三郎	
309	除兆祥	台湾	1937/4/1	昭和12年	1940/3/31	昭和15年		
310	李珧香		1937/4/1？	昭和12年？	1940/3/31	昭和15年	瀧西馨	
311	段壽仁	台湾	1937/4/1	昭和12年	1940/3/31	昭和15年	殷寿仁	
312	黄微輝	台湾	1937/4/1？	昭和12年？	1940/3/31	昭和15年		
313	林源吉	台湾	1937/4/1？	昭和12年？	1940/3/31	昭和15年		
314	黄聖秀	朝鮮			1940/3/31	昭和15年		116
315	王慶麟	台湾	1937/4/1	昭和12年	1941/3/7	昭和16年		
316	金在析	朝鮮	1937/4/1	昭和12年	1942/3/14	昭和17年	金田光永	
317	洪金埤	台湾	1937/4/1	昭和12年	1942/3/14	昭和17年		
318	劉紹香	台湾	1937/9/1	昭和12年	1942/3/14	昭和17年		

	氏名	出身地	入学年		卒退年		別名・別表記	索引
			西暦	和号	西暦	和号		
245	金文基	朝鮮	1930/4/1	昭和5年	1933/3/31	昭和8年		
246	郭肯來	台湾	1930/9/10	昭和5年	1932/3/31	昭和7年		
247	高大鉉	朝鮮	1930/9/10	昭和5年	1934/3/31	昭和9年	高山大吉	
248	載逢祈		1931/4/1？	昭和6年？	1934/3/31	昭和9年		
249	朱慶富	中国	1931/4/1	昭和6年	1936/3/31	昭和11年	土田慶富	
250	方国銓	台湾	1932/1/8	昭和7年	1934/3/31	昭和9年		
251	陳祥麟	台湾	1932/3/28	昭和7年	1935/3/31	昭和10年		
252	陳拱北	台湾	1932/4/1	昭和7年	1936/3/31	昭和11年		
253	楊陵祥	台湾	1933/4/1	昭和8年	1935/3/31	昭和10年		
254	陳金山	台湾	1933/4/1	昭和8年	1935/3/31	昭和10年		
255	簡崑田	台湾	1933/4/1	昭和8年	1935/3/31	昭和10年		
256	陳茂棠	台湾	1933/4/4	昭和8年	1938/3/31	昭和13年		
257	羅茂松	台湾	1933/4/7	昭和8年	1935/3/31	昭和10年		
258	洪明祿	台湾	1933/9/1	昭和8年	1936/3/31	昭和11年		
259	陳栄乾	台湾	1934/3/27	昭和9年	1936/3/31	昭和11年		
260	徐富與	台湾	1934/3/27	昭和9年	1936/3/31	昭和11年	東富三郎	
261	楊啓發	台湾	1934/3/27	昭和9年	1936/3/31	昭和11年		
262	李珍淳	朝鮮	1934/3/27	昭和9年	1936/3/31	昭和11年	西本珍淳	
263	呉信榆		1934/4/1	昭和9年	1934/4/1	昭和9年		
264	蘇註	台湾？	1934/4/1	昭和9年	1934/4/1	昭和9年		
265	陳益鑫	台湾	1934/4/1	昭和9年	1934/9/29	昭和9年		
266	蔡再生	台湾	1934/4/1	昭和9年	1935/3/31	昭和10年		
267	鄭癸采	台湾	1934/4/1	昭和9年	1935/3/31	昭和10年		
268	黄長安	台湾	1934/4/1	昭和9年	1935/3/31	昭和10年		
269	黄仁宗	台湾	1934/4/1	昭和9年	1935/3/31	昭和10年		
270	蔡春護	台湾	1934/4/1	昭和9年	1935/9/25	昭和10年		
271	李揆載		1934/4/1	昭和9年	1935/10/10	昭和10年		
272	蔡天送	台湾	1934/4/1	昭和9年	1935/11/14	昭和10年		
273	偕林波士	台湾	1934/4/1	昭和9年	1936/3/31	昭和11年		
274	王金河	台湾	1934/4/1	昭和9年	1936/3/31	昭和11年		
275	黄正己	台湾	1934/4/1	昭和9年	1936/3/31	昭和11年		
276	馮永春	台湾	1934/4/1	昭和9年	1937/3/30	昭和12年	馬永春	
277	林鐘英	台湾	1934/4/1	昭和9年	1937/3/30	昭和12年		
278	楊人明	台湾	1934/4/1	昭和9年	1939/3/31	昭和14年		
279	石橋茂伴	朝鮮	1934/4/1	昭和9年	1939/3/31	昭和14年		
280	陳錫祿	台湾？	1935/4/1	昭和10年	1935/5/9	昭和10年		
281	徐福圳	台湾？	1935/4/1	昭和10年	1935/9/25	昭和10年		

	氏名	出身地	入学年		卒退年		別名・別表記	索引
			西暦	和号	西暦	和号		
208	金敦枰	朝鮮	1920/4/5	大正9年	1922/5/22	大正11年		
209	韓南壽	朝鮮	1920/4/5	大正9年	1923/11/19	大正12年		
210	金準秤	朝鮮	1920/4/5	大正9年	1922/4/？	大正11年		
211	韓南植	朝鮮	1920/4/18	大正9年	1925/3/31	大正14年		
212	金慶學	朝鮮	1920/4/21	大正9年				
213	韓彖一	朝鮮	1920/4/30	大正9年	1921/5/13	大正10年		
214	鄭文基	朝鮮	1920/5/7	大正9年	1921/4/13	大正10年		
215	趙容億	朝鮮	1920/9/9	大正9年	1920/10/30	大正9年		
216	呉鐘鉉	朝鮮	1920/9/10	大正9年	1922/3/27	大正11年		
217	尹仁駒	朝鮮	1920/9/13	大正9年	1923/3/31	大正12年		
218	林我潤	台湾	1920/9/20	大正9年				
219	陳朝景	台湾	1920/10/12	大正9年	1922/4/26	大正11年		
220	朴相学	朝鮮	1921/4/4	大正10年	1921/9/28	大正10年		
221	杜新春	台湾	1921/4/4	大正10年	1923/4/25	大正12年		
222	陳天道	台湾	1921/5/22	大正10年	1923/10/？	大正12年		
223	呉昌煥	朝鮮	1921/9/10	大正10年	1923/4/19	大正12年		
224	梁源振		1921/9/10？	大正10年？				
225	黄朝君	台湾	1924/9/9	大正13年	1925/11/2	大正14年		
226	崔栄奎	朝鮮	1924/9/9	大正13年	1928/3/30	昭和3年	山岡重信	
227	江炳焜	台湾	1926/4/1	大正15年	1929/3/31	昭和4年	江崎炳焜	
228	黄永昌	台湾	1926/4/1	大正15年	1929/3/31	昭和4年		
229	呉振坤	台湾	1926/4/1	大正15年	1931/3/31	昭和6年	呉振昆	
230	朱義均		1928/4/1	昭和3年	1929/1/16	昭和4年		
231	張宝文	台湾	1928/4/1	昭和3年	1930/3/31	昭和5年		
232	陳文蘭	台湾	1928/4/1	昭和3年	1930/3/31	昭和5年		
233	陳仲忽	台湾	1928/4/1	昭和3年	1930/3/31	昭和5年		
234	石慶成	台湾	1928/4/1	昭和3年	1930/3/31	昭和5年		
235	劉發清	台湾	1928/4/1	昭和3年	1931/3/31	昭和6年	本宮雅之	
236	張充哲	朝鮮	1928/9/1	昭和3年	1930/3/31	昭和5年	張本充哲	
237	朱增文	台湾	1929/4/1	昭和4年	1931/3/31	昭和6年		
238	陳玉財	台湾	1929/4/1	昭和4年	1934/3/31	昭和9年		
239	鄭満松	台湾	1929/4/1	昭和4年	1934/3/31	昭和9年		
240	張英	台湾	1929/4/9	昭和4年	1932/3/31	昭和7年	張炎	
241	薛金沢	台湾	1930/4/1	昭和5年	1932/3/31	昭和7年		
242	楊添財	台湾	1930/4/1	昭和5年	1932/3/31	昭和7年		
243	劉申期	台湾	1930/4/1	昭和5年	1933/3/31	昭和8年		
244	金大吉	朝鮮	1930/4/1	昭和5年	1933/3/31	昭和8年		

	氏名	出身地	入学年		卒退年		別名・別表記	索引
			西暦	和号	西暦	和号		
172	張汶根	朝鮮	1918/4/1	大正7年				
173	丁來東	朝鮮	1918/4/1	大正7年				
174	朴明國	朝鮮	1918/4/1	大正7年				
175	柳淳台	朝鮮	1918/4/1	大正7年				
176	張明色	台湾	1918/4/15	大正7年	1921/4/9	大正10年		
177	金建享	朝鮮	1918/9/6	大正7年				
178	呉丕松	台湾	1918/10/7	大正7年	1920/10/1	大正9年		
179	郭朝鳳	台湾	1919/4/1	大正8年				
180	鄭湘先	福建省	1919/4/1	大正8年				
181	鄭漢先	福建省	1919/4/1	大正8年				
182	具沅會	朝鮮	1919/4/4	大正8年				
183	金舜圭	朝鮮	1919/9/10	大正8年	1923/4/2	大正12年		
184	金敏圭	朝鮮	1917/4/10, 1919/9/17	大正6, 8年	1921/4/19	大正10年		
185	李冕雨	朝鮮	1919/10/21	大正8年				
186	金東杓	朝鮮	1920/4/1	大正9年	1920/9/30	大正9年		
187	金永基	朝鮮	1920/4/1	大正9年	1920/11/10	大正9年		
188	金然石	朝鮮	1920/4/1	大正9年	1921/4/9	大正10年		
189	趙漢鍾	朝鮮	1920/4/1	大正9年	1921/11/7	大正10年		
190	咸元英	朝鮮	1920/4/1	大正9年	1922/3/25	大正11年		
191	金重亮	朝鮮	1920/4/1	大正9年	1922/4/1	大正11年		
192	安承満	朝鮮	1920/4/1	大正9年	1922/4/15	大正11年		
193	金萬植	朝鮮	1920/4/1	大正9年	1923/12/24	大正12年		
194	金庸壮	朝鮮	1920/4/1	大正9年	1921/9/？	大正10年		
195	孫仁順	朝鮮	1920/4/1	大正9年				
196	張学均	朝鮮	1920/4/1	大正9年				
197	朴泰鎬	朝鮮	1920/4/1	大正9年				
198	李廷求	朝鮮	1920/4/1	大正9年				
199	柳春燮	朝鮮	1920/4/1	大正9年				
200	李圭煥	朝鮮	1920/4/1	大正9年				
201	鄭善奎	朝鮮	1920/4/2	大正9年	1921/4/9	大正10年		
202	徐漢柱	朝鮮	1920/4/3	大正9年	1923/3/23	大正12年		
203	朴渭根	朝鮮	1920/4/3	大正9年				
204	林八龍	朝鮮	1920/4/5	大正9年	1920/11/9	大正9年		
205	韓鼎三	朝鮮	1920/4/5	大正9年	1921/2/1	大正10年		
206	鄭光鉉	朝鮮	1920/4/5	大正9年	1921/4/10	大正10年		
207	朴漢磬	朝鮮	1920/4/5	大正9年	1921/4/16	大正10年		

	氏名	出身地	入学年		卒退年		別名・別表記	索引
			西暦	和号	西暦	和号		
136	丁栄泰	朝鮮	1916/4/1	大正5年				
137	宗在亀	朝鮮	1916/4/10	大正5年	1917/12/7	大正6年		
138	金容瓚	朝鮮	1916/4/10	大正5年				
139	呉漢泳	朝鮮	1916/4/10	大正5年	1919/3/31	大正8年		116, 129
140	徐立興	台湾	1916/9/10	大正5年	1917/9/10	大正6年		
141	李冕雨	朝鮮	1916/9/13	大正5年	1918/11/4	大正7年		
142	頓紋							
143	白奎復							
144	鮑文耀	台湾？						
145	方鏞柱	台湾？						
146	朴徐均	朝鮮？						
147	鮑大	台湾？						
148	朴珽一	朝鮮？						
149	朴準熙	朝鮮？						
150	朴鳳英	朝鮮？						
151	朴彭緒	朝鮮？						
152	丁栄泰	朝鮮	1917/3/30	大正6年				
153	金百烱	朝鮮？	1917/4/1	大正6年				
154	玄正柱	朝鮮	1917/4/1	大正6年				116, 123, 124
155	安鍾聲	朝鮮	1917/4/1	大正6年				
156	金敏圭	朝鮮	1917/4/10	大正6年				
157	梁源佖	台湾？	1917/9/1	大正6年				
158	高互明	朝鮮	1917/9/16	大正6年	1918/5/12	大正7年		
159	金英培	朝鮮	1917/4/31	大正6年				
160	李東肅							
161	李奎鏞							
162	李延彬	台湾						
163	李延栄	台湾						
164	劉演相	台湾？						
165	李弘範							
166	盧文燦							
167	梁鐘旭							
168	梁源佖							
169	金昌圭	朝鮮	1918/4/1	大正7年	1918/11/4	大正7年		
170	金漢錡	朝鮮	1918/4/1	大正7年				
171	金泳均	朝鮮	1918/4/1	大正7年				

	氏名	出身地	入学年		卒退年		別名・別表記	索引
			西暦	和号	西暦	和号		
100	孔聖求	中国？						
101	高允和	朝鮮？						
102	呉鉉玉							
103	呉永守							
104	金琪千	朝鮮？						
105	金成日	朝鮮？						
106	黄阿徳	台湾	1912/9/1	大正元年	1915/3/31	大正4年		
107	金順淇	朝鮮？	1912/9/1	大正元年				
108	楊丙炎	台湾？	1912/9/1	大正元年				
109	安徳應	朝鮮	1913/4/1	大正2年	1913/10/30	大正2年		
110	金石根	朝鮮？	1913/4/1	大正2年	1916/3/31	大正5年		
111	高志英	朝鮮	1913/4/1	大正2年	1916/3/31	大正5年	高志栄	96～98
112	梁源容	朝鮮	1913/4/1	大正2年	1916/3/31	大正5年		
113	丁來吉	朝鮮	1913/4/1	大正2年	1917/3/31	大正6年		
114	表永鐸		1913/4/1	大正2年				
115	劉汶相	台湾？	1913/4/1	大正2年				
116	安泰應	朝鮮	1913/4/7	大正2年	1913/11/30	大正2年		
117	朱耀翰	朝鮮	1913/4/10	大正2年	1918/3/26	大正7年		31, 32, 94, 115～176, 187
118	張錫燦	朝鮮	1913/4/16	大正2年	1914/10/30	大正3年		
119	金得龍	朝鮮？	1914/4/1	大正3年				
120	金台炫	朝鮮？	1914/4/1	大正3年				
121	蘇双有	台湾	1914/4/10	大正3年	1914/9/20	大正3年		
122	荘盛七	台湾	1914/4/10	大正3年	1915/2/2	大正4年		
123	鄭準謨	朝鮮	1914/4/11	大正3年	1914/9/30	大正3年		
124	金官泫	朝鮮？	1914/9/1	大正3年				
125	韓相億	朝鮮	1914/9/9	大正3年				
126	韓弼済	朝鮮	1914/9/10	大正3年	1919/3/31	大正8年		84, 93, 116
127	金汶基	朝鮮？	1915/4/1	大正4年				
128	金東仁	朝鮮	1915/4/1	大正4年				115～122, 160, 163～188
129	朴士洪	朝鮮？	1915/4/1	大正4年				
130	劉載洙	台湾？	1915/4/1	大正4年				
131	崔應天	朝鮮	1915/4/8	大正4年	1915/11/3	大正4年		
132	鄭必源	朝鮮	1915/4/9	大正4年				
133	丁來熊	朝鮮	1915/9/10	大正4年				
134	金鎮兌	朝鮮	1916/4/1	大正5年	1918/3/31	大正7年		
135	金箕東	朝鮮？	1916/4/1	大正5年				

	氏名	出身地	入学年		卒退年		別名・別表記	索引
			西暦	和号	西暦	和号		
64	趙允泳	朝鮮	1909/4/7	明治42年	1909/7/3	明治42年		
65	申鳳燮	朝鮮	1909/4/8	明治42年	1909/6/19	明治42年		
66	張膺萬	朝鮮	1909/4/11	明治42年	1909/7/3	明治42年		
67	金有雨	朝鮮？	1910/3/31	明治43年	1912/3/31	明治45年		
68	李圭延	朝鮮	1910/3/31	明治43年	1912/3/31	明治45年		73, 78
69	呉鴻基	台湾	1910/3/31	明治43年				
70	白南薫	朝鮮	1909/4/30？	明治42年？	1913/3/31	大正2年		77, 79～114, 117, 129, 171
71	林炳白	朝鮮	1908/9/1？	明治41年？	1913/3/31	大正2年		86
72	金真泳	朝鮮？	1910/4/1？	明治43年？	1913/3/31	大正2年		
73	鮑博公	台湾	1910/4/1？	明治43年？	1913/3/31	大正2年		
74	金永淳	朝鮮？	1910/4/1	明治43年				
75	元楨玉	台湾？	1910/4/1	明治43年				
76	潘道栄	台湾？	1910/4/1	明治43年				
77	李源觀	朝鮮？	1910/9/1	明治43年				
78	鄭振煥	朝鮮	1910/9/12	明治43年	1911/10/16	明治44年		
79	兪元英		1911/4/1	明治44年				
80	呂柏齢		1911/4/1	明治44年				
81	柳盛鐸	朝鮮？	1911/4/1	明治44年				
82	荊氏雄		1911/4/1	明治44年？				
83	尹桓	朝鮮	1911/4/8	明治44年	1911/11/17	明治44年		
84	孫汶岐	朝鮮	1911/4/10	明治44年	1912/5/27	明治45年		
85	孫炳鉉	朝鮮	1911/4/10	明治44年	1912/5/27	明治45年		
86	張炎煌	台湾	1911/9/11	明治44年	1913/3/22	大正2年		
87	談嘉恩	台湾	1912/4/8	明治45年	1912/9/29	明治45年		
88	韓泰淇	朝鮮？						
89	金昌燮	朝鮮	1910/9/1	明治43年*	1911/3/31	明治44年*		
90	金鉉載	朝鮮						
91	金錫晋	朝鮮						74, 93～96
92	金基重	朝鮮？						
93	金鍾九	朝鮮？						
94	金琪淵	朝鮮？						
95	龔家瑾							
96	金宗朱	朝鮮？						
97	龔同揆							
98	金商壎	朝鮮？						
99	呉尚殷							

	氏名	出身地	入学年		卒退年		別名・別表記	索引
			西暦	和号	西暦	和号		
29	呉彰雄		1908/1/1	明治41年				
30	陳啓裕	台湾	1908/1/20	明治41年	1909/7/30	明治42年		
31	金洛泳	朝鮮	1908/3/31	明治41年	1910/3/31	明治43年		2, 6, 10, 22, 86, 104, 111, 112, 114
32	朴相洛	朝鮮？	1908/3/31	明治41年	1911/3/31	明治44年		
33	金壽哲	朝鮮？	1908/3/31	明治41年				
34	呉舜烟	朝鮮？	1908/3/31	明治41年			呉舜烱 呉舜炯	79, 82, 86, 93, 111, 113
35	廖三重	台湾	1908/3/31	明治41年	1910/3/31	明治43年		
36	郭延雪	台湾	1908/4/1	明治41年？	1911/3/31	明治44年		
37	洪性郁			明治40年？				
38	金鎮植			明治40年？				
39	朴永淳			明治40年？				
40	崔時俊			明治41年？				
41	白澤元			明治41年？				
42	趙奎亨	朝鮮？	1908/4/8	明治41年	1908/5/2	明治41年		
43	申相悦	朝鮮	1908/4/10	明治41年	1909/5/26	明治42年	申相烱	
44	鄭斗鉉	朝鮮	1908/4/10	明治41年	1910/3/26	明治43年	鄭斗鏑	2
45	湯肇殷	清国	1908/4/12	明治41年	1911/11/30	明治44年		
46	鮮于全	朝鮮	1908/4/29	明治41年	1911/3/25	明治44年	鮮于擾	
47	金觀鎬	朝鮮	1908/9/1	明治41年	1910/3/31*	明治43年*		78, 171, 175, 176, 187
48	金淵祐	朝鮮？	1908/9/1	明治41年				
49	蔡乗喆	朝鮮	1908/9/1	明治41年				
50	鮑籍霊	台湾？	1908/9/1	明治41年				
51	柳種洙		1908/9/1	明治41年				
52	鄭奎鉉	朝鮮	1908/9/9	明治41年	1911/3/25	明治44年		8
53	趙彦章	朝鮮	1908/9/10	明治41年	1909/7/3	明治42年		
54	蔣舜鳳	朝鮮	1908/9/11	明治41年	1908/10/30	明治41年		
55	金一	朝鮮	1909/3/1	明治42年	1912/3/31	明治45年		37, 72, 73, 75, 77, 78
56	李顯基	朝鮮	1909/3/1	明治42年	1912/3/31	明治45年	李顕奎	98, 104
57	崔允徳	朝鮮？	1909/3/1	明治42年				
58	李始馥	朝鮮	1909/3/1	明治42年				
59	咸錫殷	朝鮮	1909/4/1	明治42年	1913/3/31	大正2年		86
60	金在漉	朝鮮	1909/4/1	明治42年				
61	朴泰殷	朝鮮	1909/4/1	明治42年				
62	車命鎬	朝鮮	1909/4/8	明治42年	1909/7/3	明治42年		
63	尹宇植	朝鮮	1909/4/6	明治42年	1910/7/3	明治43年		

東アジア圏留学生名簿

◆普通学部（1887 ～ 1915）・中学部（1915 ～ 1946）

	氏名	出身地	入学年		卒退年		別名・別表記	索引
			西暦	和号	西暦	和号		
1	朴泳孝	朝鮮			1886/3/31	明治22年	山崎永春	79, 87, 112, 171, 175
2	李延禧	台湾	1900/4/1	明治33年	1905/3/31	明治38年		
3	金鉉軾	朝鮮	1906/4/5	明治39年	1909/3/31	明治42年		
4	郭龍周	朝鮮	1905/9/1？	明治38年？				
5	朴永魯	朝鮮？	1905/9/1？	明治38年？				
6	金鴻亮	朝鮮	1906/4/1？	明治39年？	1909/3/31	明治42年		2, 4, 10, 22, 82, 85 ～ 89, 111, 112, 114
7	劉泰魯	朝鮮	1906/9/1？	明治39年？	1909/3/31	明治42年		2, 7
8	呉鴻恩	台湾	1906/4/1	明治39年	1912/3/31	明治45年		
9	白成鳳	朝鮮？	1906/4/1	明治39年				
10	李埤		1906/4/1？	明治39年？				
11	李森		1906/4/1？	明治39年？				
12	金弦俊	朝鮮？	1906/9/1？	明治39年？				
13	李寅彰	朝鮮	1906/4/6	明治39年	1910/3/31	明治43年		2, 7, 19, 22, 23, 72, 86, 114
14	謝清月	台湾	1906/4/10	明治39年	1908/11/26	明治41年		
15	趙士倫	清国	1906/4/10	明治39年	1911/3/30	明治44年		
16	趙士安	清国	1906/4/10	明治39年	1911/3/31	明治44年		
17	朴仁植	朝鮮	1906/9/8	明治39年				
18	金啓昌	朝鮮？	1907/4/1	明治40年				
19	朴義植	朝鮮？	1907/4/1	明治40年				
20	郭漢七	朝鮮？	1907/4/1	明治40年？				
21	朴寅喜	朝鮮？	1907/4/1	明治40年				
22	韓益燮	朝鮮？	1907/9/1	明治40年				
23	金裕鳳	朝鮮？	1907/9/1	明治40年				
24	金瓚永	朝鮮	1907/9/1	明治40年	1910/3/31*	明治43年*		37, 59 ～ 61, 72 ～ 78, 119, 174, 176, 187
25	文一平	朝鮮	1907/9/1	明治40年	1910/3/31	明治43年		1 ～ 12, 18, 20, 23, 171
26	李光洙	朝鮮	1907/9/10	明治40年	1910/3/31	明治43年	李宝鐘（鏡）香山光郎・春園	2, 3, 6, 7, 11, 12, 13 ～ 32, 35, 50 ～ 56, 66 ～ 78, 100, 109, 114, 116, 121, 124 ～ 129, 160, 161, 163 ～ 165, 173, 175, 187, 188
27	鄭世胤	朝鮮	1907/10/28	明治40年	1910/3/26	明治43年		2, 7, 99, 112
28	孔廉卿		1908/1/1	明治41年				

二〇一一年三月二十五日　印刷
二〇一一年三月三十一日　発行

明治学院歴史資料館資料集【第八集】
―朝鮮半島出身留学生から見た日本と明治学院―

編集代表　東京都港区白金台一ノ二ノ三七　辻　泰一郎

発行者　東京都港区白金台一ノ二ノ三七　久　世　了

発行所　東京都港区白金台一ノ二ノ三七　明治学院歴史資料館
電話　〇三（五四二一）五一七〇

印刷所　東京都豊島区東池袋五ノ四九ノ六　株式会社　白峰社
電話　〇三（三九八三）二三一一